

# 政治体制移行期前後のモンゴル国都市家族の変容

---

2015年7月22日

島根県立大学大学院北東アジア開発研究科北東アジア専攻博士後期課程

烏日麗格 (Urlag、オルラグ)

指導教員 井上治

## 目次

序章.....	1
第一節 問題提起と研究目的.....	3
第二節 先行研究の検討.....	4
1. 資本主義的近代化における近代家族に関する先行研究.....	4
2. 社会主義的近代化における近代家族についての研究.....	7
3. 家族の個人化理論についての先行研究.....	9
4. 社会主義時代のモンゴル国の家族を対象とした研究.....	12
5. 民主主義時代のモンゴル家族を対象とした研究.....	14
第三節 研究方法、論文構成.....	17
1. 研究方法.....	17
2. 仮説モデル.....	19
3. 論文構成.....	19
4. 論文の意義.....	20
第四節 調査地域と調査の概況.....	21
1. 調査地域ウランバートル市の概況.....	21
2. 研究対象者をウランバートルに絞った理由.....	22
3. フィールドワークの概観.....	23
3-1. アンケート調査.....	23
3-2. 聞き取り調査.....	26
3-3. 文献資料調査.....	32
第一章 家内領域と公共領域は分離したのか.....	33
第一節 社会主義時代の家内領域と公共領域.....	34
1. 住居空間の構造.....	34
2. 国家に所属する家族.....	37
第二節 民主主義時代の家内領域と公共領域.....	39
1. 住居空間の構造.....	39
2. 家族に所属する家族.....	43
第三節 「家内領域」と「公共領域」の分離の変容とその後の行方.....	45
1. 住居空間の構造の変容.....	45
2. 「公」「私」分離の変容.....	46
第二章 夫は公共領域・妻は家内領域という性別役割分業であるかどうか.....	48
第一節 社会主義社会における夫婦役割分業.....	50
1. 夫婦役割分業の理想像.....	50
2. 夫婦役割分業の実態.....	51

2-1. 男女の労働力率 .....	51
2-2. アンケート調査による夫婦の役割分業の実態と役割分業観 .....	53
2-2-1. 家事における夫婦の役割分業 .....	53
2-2-2. 育児参加における役割分業 .....	55
2-2-3. 性別役割分業観に関する考え .....	56
2-3. 聞き取り調査の結果の分析 .....	57
2-3-1. 家族の中の役割分業 .....	58
2-3-2. 育児における役割分業 .....	60
第二節 民主主義国家時代における夫婦役割分業 .....	62
1. 夫婦の役割関係に対する国家政策の変化 .....	63
2. 夫婦役割関係の実態 .....	63
2-1. 男女の労働力率 .....	63
2-2. アンケート調査による夫婦役割分業と役割分業観 .....	64
2-2-1. 掃除・洗濯と炊事の頻度 .....	64
2-2-2. 育児における役割分業 .....	66
2-2-3. 性別役割分業観に関する考え .....	67
2-3. 聞き取り調査の結果の分析 .....	68
2-3-1. 家事における役割分担 .....	68
2-3-2. 育児における役割分業 .....	71
2-3-3. 「性別役割分業」に対する考え方 .....	73
第三節 夫婦の役割分業の変容 .....	76
1. 夫婦の役割分業のパターン .....	76
1-1. 家事における夫婦の役割分業のパターン .....	76
1-2. 育児における役割分業のパターン .....	77
2. 夫婦の役割分業の多様化とそれをもたらした原因 .....	77
2-1. 遊牧生活由来の役割分業 .....	77
2-2. 社会主義型役割分業 .....	78
2-3. 脱社会主義型役割分業 .....	80
第四節 本章のまとめ .....	81
第三章 家族成員間は強い情緒的關係で結ばれているのか .....	83
第一節 社会主義時代 .....	84
1. 社会主義社会における結婚に関する法律の変容 .....	84
2. 結婚に関する実態 .....	86
2-1. 結婚相手と知り合ったきっかけ .....	86
2-2. 結婚するきっかけ .....	87
2-3. 家族にとって大事なことに関する意識 .....	88

3. 結婚観.....	91
4. 本節のまとめ.....	93
第二節 民主主義時代.....	94
1. 民主主義時代の法律改正.....	94
2. 結婚に関する実態.....	95
2-1. 結婚相手と知り合うきっかけ.....	95
2-2. 結婚したきっかけ.....	95
2-3. 家族にとって大事なことに関する意識.....	97
3. 結婚観.....	99
4. 本節のまとめ.....	102
第三節 社会主義時代から民主主義時代への変容.....	103
1. 結婚に関する法律の変容.....	103
2. 結婚の実態と結婚観の変化.....	104
2-1. 結婚の実態の変化.....	104
2-2. 結婚観の変化.....	104
第四節 本章のまとめ.....	107
第四章 子ども中心主義であるのか.....	108
第一節 社会主義時代.....	110
1. 子どもの数、理想の子ども数.....	110
1-1. 統計でみる出生率の変化.....	110
1-2. アンケート調査でみる子どもの数と理想とされる子どもの数.....	111
1-3. 聞き取り調査でみる子どもの数、理想の子ども数.....	112
1-4. 避妊や人工妊娠中絶について.....	115
2. 人口増加政策と育児支援政策.....	117
3. 子ども観.....	120
3-1. アンケート調査で見る子ども観.....	120
3-2. 子ども中心主義であったかどうか.....	121
4. 本節のまとめ.....	123
第二節 民主主義時代.....	124
1. 子どもの数、理想の子ども数.....	124
1-1. 統計でみる出生率の変化.....	124
1-2. アンケート調査でみる子どもの数、理想の子ども数.....	125
1-3. 聞き取り調査でみる子どもの数、理想の子ども数.....	126
1-4. 避妊や人工妊娠中絶について.....	128
2. 民主主義時代の人口政策.....	130
3. 子ども観.....	131

3-1. アンケート調査で見る子ども観 .....	131
3-2. 子ども中心主義であるかどうか .....	132
4. 本節のまとめ .....	132
第三節 社会主義時代から民主主義時代にかけての出生率の変化 .....	133
第四節 本章のまとめ .....	136
第五章 社会的ネットワーク .....	139
第一節 社会主義時代の社会的ネットワーク .....	140
1. 非親族の排除 .....	140
2. 親族ネットワーク .....	141
2-1. 親子関係 .....	141
2-2. 親族関係 .....	150
3. 近隣ネットワーク .....	151
4. 本節のまとめ .....	154
5. 仮説の検証 .....	154
第二節 民主主義時代における社会ネットワーク .....	155
1. 親族ネットワーク .....	155
1-1. 親子関係 .....	155
1-2. 親族関係 .....	163
2. 近隣ネットワーク .....	166
4. 本節のまとめ .....	167
第三節 社会ネットワークの変容 .....	168
1. 親と同居する意識 .....	168
2. 親族関係 .....	169
3. 近隣ネットワークの変容の原因 .....	172
第四節 本章のまとめ .....	175
第六章 家族の集団性は強いのか .....	177
第一節 社会主義時代の家族の集団性 .....	177
1. 家族に対する考え .....	177
2. 家族行動 .....	181
3. 夫婦の情緒的サポート .....	184
4. 本節のまとめ .....	187
第二節 民主主義時代の家族の集団性 .....	187
1. 家族に対する考え方 .....	187
2. 家族行動 .....	191
3. 夫婦の情緒的サポート .....	195
4. 本節のまとめ .....	197

第三節 家族の集団性と集団性のゆらぎについての議論 .....	198
第七章 社会主義時代と民主主義時代の家族の特徴および今後の行方 .....	202
第一節 社会主義時代家族の特徴 .....	202
1. 仮説検証 .....	202
1-1. 家内領域と公共領域は分離したのか .....	202
1-2. 夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業であるかどうか .....	203
1-3. 家族成員間は強い情緒的關係で結ばれているのか .....	204
1-4. 子ども中心主義であるのか .....	204
1-5. 非親族を排除したのか .....	205
1-6. 社交が衰退し、プライバシーが成立したのか .....	206
1-7. 家族の集団性が強化されたのか .....	206
1-8. 核家族であるかどうか .....	207
2. 社会主義時代家族の特徴 .....	208
第二節 民主主義時代における家族の特徴 .....	208
1. 仮説検証 .....	208
1-1. 家内領域と公共領域は分離したのか .....	208
1-2. 夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業であるかどうか .....	209
1-3. 家族成員間は強い情緒的關係でむすばれているのか .....	210
1-4. 子ども中心主義であるのか .....	211
1-5. 非親族を排除したのか .....	212
1-6. 社交が衰退し、プライバシーが成立したのか .....	212
1-7. 家族の集団性が強化されたのか .....	212
1-8. 核家族であるかどうか .....	212
2. 民主主義時代家族の特徴 .....	213
第三節 理論的再検討 .....	213
1. モンゴルの都市家族は近代家族である .....	213
1-1. 仮説検証の結果 .....	213
1-2. 社会主義時代、民主主義時代に形成した家族の特徴 .....	215
1-3. モンゴルの都市家族は近代家族である。 .....	215
2. モンゴル国の都市家族の今後の行方は個人化へ進まない .....	216
3. 民主主義時代におけるモンゴル国の都市家族の生成要因と家族の今後の行方 .....	219
3-1. 社会主義時代でも民主主義時代でも成立した特徴および今後の行方 .....	219
3-2. 民主主義時代のみ仮説が成立した諸特徴の生成要因および今後の行方 .....	220
3-3. 社会主義的近代家族より強まった民主主義的近代家族の特徴の生成要因および今後の行方 .....	220
3-4. いずれの時代の近代家族においても仮説が成り立たない項目の生成要因および今	

後の行方 .....	221
4. モンゴルの 21 世紀家族の特徴 .....	221
結論.....	223
添付資料 2 アンケート調査質問用紙の日本語訳.....	233
添付資料 3 聞き取り調査の質問項目の翻訳.....	241
I 2012 年聞き取り調査.....	241
II 2013 年の聞き取り調査 .....	241
III 2014 年の聞き取り調査 .....	242
添付資料 4 地図.....	243

## 序章

モンゴル国はユーラシア大陸の東にあり、ロシアと中華人民共和国に挟まれる内陸国である。「草原の国」と呼ばれるように、国土の大部分は広い草原であり、西部にアルタイ山脈が走り、南部にはゴビ砂漠が広がっている。冬と夏の温度差が70度ぐらいある極端な大陸型気候である。

国民の9割以上がモンゴル民族であり、最西部に最大の少数民族であるカザフ人が住んでいる。主要な言語はモンゴル語（ハルハ方言）であり、主な宗教はチベット仏教、また伝統的信仰としてシャーマニズムがある。

チンギス・ハーンとして知られるようになるテムジン（チンギス・ハーン）は1206年にすべてのモンゴル部落を統一して、大モンゴル国を建設した。その後、チンギス・ハーンの子孫はユーラシア大陸を征服し、大陸各地に4つの帝国を築いた。そのうち、チンギス・ハーンの孫であるフビライ・ハーンは宋を征服し、1271年に現在の北京に都を定めて、国号を「大元」と定めた。1368年に南京で成立した明に迫られて、当時の皇帝であるトゴンテムル・ハーンは北京を放棄し、モンゴル草原に戻った。現在は、その後のモンゴルを「北元」と呼んで元朝と区別している。17世紀末、モンゴルは満洲民族の立てた清王朝の一部となり、清朝はモンゴル人を「内モンゴル」と「外モンゴル」の二つに分けて管理、統治した。「外モンゴル」は1911年の清朝が崩壊する時に、ソ連の支持により独立を宣言して、モンゴルにおけるチベット仏教の最高権威者である活仏ジェブツンダンバ・ホトクト8世（ボグド・ハーン）をモンゴルのハーンとして推戴し、「共戴モンゴル国」政権を樹立した。1921年7月にソ連の援助でモンゴル人民党（後のモンゴル人民革命党）がモンゴルで社会主義革命を成就させてモンゴル人民政府を樹立した。1924年にジェブツンダンバ・ホトクト8世が死去したその年に、初の社会主義憲法が發布されてモンゴル人民共和国が成立した。1925年以後、本格的にソ連型の社会主義による国家建設が始まり、経済体制もソ連にしたがって社会主義体制をとった。モンゴル人民共和国では70年間にわたってソ連または東ヨーロッパの援助により、政治・経済システム、社会のあらゆる面で社会主義改革が進んだ。そのため、社会主義建設の名目で従来の伝統的文化、価値観、生活習慣が否定されて、代わりにマルクス主義イデオロギーが喧伝され、「社会主義的生活様式」が人々の準ずる生活規範となった。モンゴルの社会主義建設は、まず集団化、工業化、都市化から始まった。1920年代、1930年代に集団化政策に着手したものの失敗に終わり、1956年から1959年にかけて周到な戦略を用意して、家畜の大半を集団所有とすることに成功した。遊牧民は協同組合（ネグデル）から賃金を得る労働者となった。同時にソ連の強力な支援を受けて、政府は工業化の推進と都市開発に力を入れた（ロッサビ2007:65）。伝統的遊牧経済から社会主義の計画経済へと変化する過程において、ソ連の援助により都市では工業化が進み、ウランバートル、ダルハン、エルデネトの三つの都市で産業化が推進された。産業化と都市開発が推



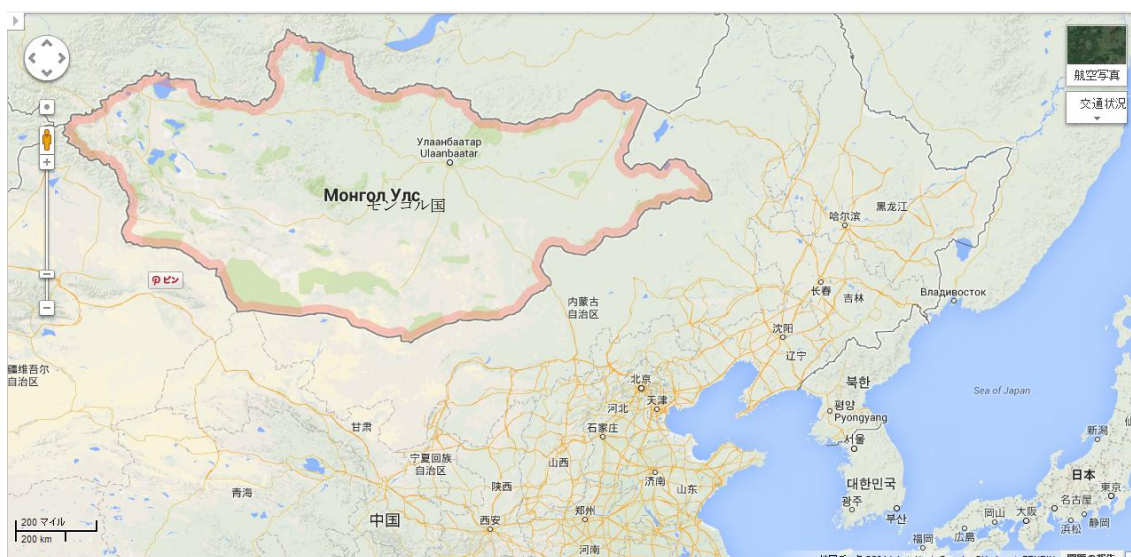
進されるにつれて、政府は労働力を確保しようと、地方から都市部への移住を奨励せざるを得なかった（ロッサビ 2007：66）。1989年、ソ連のペレストロイカの影響を受けてモンゴル人民共和国でも民主化運動が活発になり、1990年にはモンゴル人民革命党による一党独裁体制が崩れて、民主的選挙が実施された。1992年に新憲法が公布され、社会主義を放棄して国名を「モンゴル国」と定め、民主制を導入した。

より厳密に書くと、1924年から1990年まではモンゴル人民革命党の一党独裁による社会主義を経験した。1990年には人民革命党が一党独裁を放棄し、自由選挙を実施してから1992年に民主主義憲法が制定されて社会主義を完全に放棄して民主主義国家であるモンゴル国が成立するまで政治体制の移行期を経験した。

社会主義国家・計画経済から民主主義国家・市場経済への転換ににあたっては、IMF 主導による「ショック療法」によって急激にその移行が行われた。その結果、国民の生活は極端な混乱に陥り（ロッサビ 2007：84～87）、インフレの進行は激しく、貧富の差が非常に大きくなった。社会主義化と民主化という二度の政治体制転換に伴い、政治、経済、社会の各方面で変化が発生しつつあるが、2007年2月27日にモンゴル元大統領ナムバリン・エンフバヤルが日本の国会演説で初めて移行期の終了を宣言した。2010年には当時のスフバートル・バトbold首相は移行期が完了したとモンゴル国会で宣言した。今後は、国内に豊富に埋蔵されている石炭、鉱山など地下資源による経済の高度成長が期待されている。

現在モンゴルでは、人口の6割以上が首都ウランバートルに集まっているといわれるほど極端な一都市への人口集中と、地方からの人口流出による過疎化が進んでいる。

### 図序-1 東アジアに位置するモンゴル国



出所) 筆者がグーグルマップをもとに作成。(アクセス：2014年7月8日)

## 第一節 問題提起と研究目的

本研究を始めた最初のきっかけは、大学時代にモンゴル国の人々と交流を始めた時、知り合った人の中に、大学生時代に結婚して、子どもを持ち、後に離婚、再婚を経験した人がいたことだった。またモンゴル国では、年の差が大きな結婚、婚外子が多く見られ、婚姻や産児に対する彼らの意識は、同じモンゴル民族であっても筆者のような内モンゴル人とは違うと強く感じた。2008年に初めてモンゴルに行った時も、町の中に大学生のような若者が妊娠している、あるいは幼い子どもを連れてくるのをよく見かけた。モンゴルから帰国しても「なぜモンゴル国のモンゴル人が子どもを産むかどうかは結婚しているかどうかと関係がないのだろう」、「なぜ大学生なのに、子どもを持っているがこんなに多いのか」などのことを疑問に思っていた矢先、留学のチャンスがあったので、このことをテーマにして本格的に研究してみたいと考えたのだった。

現在のモンゴル国は、前世紀初頭から一世紀にも満たない間に、イデオロギーを異にする三つの国家を経験してきている。第一に1911年に清朝の支配を脱しモンゴル仏教の最高権威者である高僧が国家元首の座についた君主制国家の「共戴モンゴル国」である。第二に、1924年に社会主義革命が成功して成立し1992年まで続いた「モンゴル人民共和国」である。第三に、1992年に民主憲法が制定されて社会主義を完全に放棄して成立した民主主義国家である「モンゴル国」である。この社会主義から民主主義への体制転換は、今から約20年前に起こったことであり、当事者・直接経験者の多くが今も暮らしている。この直近の体制転換によりもたらされた、産業の変化、政治イデオロギーの変化、歴史解釈の変化、文化の変化は、モンゴル人の生活、特にその家族生活にどのような影響を与えたのか。以前の社会主義時代と現在の民主主義時代の家族にはどのような特徴が見られるのか。かつての遊牧生活は都市市民の家族生活にどのような影響をあたえたのか。市民が余儀なくされた国営企業の私有化により生活はどう変わったのか。現在のモンゴル国に現れている家族生活をめぐる諸現象が同じくモンゴル人であるが違う国に属している筆者の経験と異なることを、国家体制が変化した背景に照らして考えると、以上のような問題点や興味が浮かび上がってくる。

そこで、本論文の目的として、政治経済体制の移行を切り口に、次の三点を明らかにする。第一に、体制移行前後の家族の変容に関する家族社会学的研究として、1921年に始まった70年間の社会主義時代、1989年のソ連崩壊にともなう民主化への移行、1992年に始まる民主主義時代、これら時代を経験して形成された都市家族に着目し、モンゴルの社会主義時代と民主主義時代の家族の特徴、ならびにその生成要因を明らかにする。第二に、日本とは異なる牧畜・遊牧という生業形態を持ち、社会主義国家・計画経済から民主主義国家・市場経済への移行という異なるイデオロギーと経済システムを経験した北東アジア国家の都市家族の変容理論を構築する。第三に、「近代家族」とそれに次いで現れるとされる「個人化する家族」への傾向を参考にしながら、かつて遊牧社会の中で作られた家族が、社会主義時代を経て、民主主義と資本主義という新しい主義・体制の中に生きる者として

の21世紀における家族のあり方を展望して、北東アジアにおける家族変動を貫く理論を探求しようとする。

モンゴル国が属する北東アジア地域には、同じく体制移行を経験した大国ロシアや今なお社会主義国家ではあるが市場経済に移行した中国が存在する。体制移行国家の家族論は北東アジア地域においてこそ論じられるべきである。本論文では、人口が集中する都市に着目し、体制移行を経験した国家の都市家族における家族論を構築するための手掛かりを提示した。

## 第二節 先行研究の検討

本論文においては、上記の問題意識に基づき、社会主義時代および民主主義時代におけるモンゴル家族の特徴を明らかにするため、「近代家族」を作業モデルとして用いる。そして、モンゴルの家族の行方を探るために、「家族の個人化」理論にもとづき考察を行う。以下では、本論文の中心的な概念となる「近代家族」と家族の個人化理論をとりあげて、検討する。

### 1. 資本主義的近代化における近代家族に関する先行研究

近代化は技術と経済の近代化、政治の近代化、社会の近代化、文化の近代化など四つの領域が相互に依存し合い影響を与えあいながら、進行するものである。①技術的経済的側面は、技術の近代化に関わる要素（産業化）と経済の近代化にかかわる要素（資本主義化）を含む。②政治的側面は、法の近代化に関わる要素と封建制から近代国民国家へ移行する政治の側面を含む。③社会的側面は、家族の変化や都市化、公教育の普及や自由・平等・社会移動を含む。④文化的近代化には科学革命、宗教改革や啓蒙主義が該当する（富永2003：32~35）。ここで述べている近代化は普遍的と思われる近代化である。この下の部分で論じられている近代家族論はこの普遍的と思われる近代化における家族のことについての議論である。しかし、本論文のもう一つの柱として存在している社会主義近代化と並べるために「資本主義的」という形容詞をあえて使いたい。

資本主義的近代化における近代家族の特徴について、これまでに数多くの研究が現れているが、日本における「近代家族論」はアリエス（2003）、ショーター（1987）などの家族社会史研究の影響を受けたものである。

エドワード・ショーター『近代家族の形成』は、近代家族の要件として、感情を家族の変化をもたらす決定的な要因とし、近代家族への変化を男女関係、母子関係、家族と周囲の共同体との間の境界線の三つの面から考察し、以下の三点を典型として挙げている。①男女関係（ロマンス革命、つまり多くの人々が強烈な性抑圧から解放されて、男女の関係では感情を重視されるようになった）、②母子関係（母子の情緒的絆、母が子どもの幸福が何事にもまして大切に考えられるようになった）、③世帯の自律性（プライバシーと親密性、

家族をお互いに結びつける絆が強められる)。ショーターは近代家族を促進した最も重要な要因は感情的な要因であると考えている。この3つの感情革命の「近代化」(ショーター1987:6)が資本主義の発達により推進されている(ショーター1987:295)と資本主義を中世の家族が近代家族への変化要因として重視している。

落合恵美子は、家族の社会史的研究から生まれた近代家族論という理論枠組みで、欧米型の家族変動論を用いて、日本の家族変動論を構築しようとした。近代家族とは歴史的なひとつの類型(落合2000:18)であり、近代という時代的限定をつけて呼ばれるべき存在であると主張した(落合2008:iv)。落合は人口学的条件に注目し、日本の「20世紀近代家族」とは多産多死から少産少死への人口転換(落合2008:236)とともに成立した家族体制である(落合2008:254)、として、人口の変動が家族の変容をもたらしたとみている。さらに落合は、この近代家族の理念的な特徴は、①家内領域と公共領域の分離、②家族構成員相互の強い情緒的關係、③子ども中心主義、④男は公共領域・女は家内領域という性別役割分業、⑤家族の集団性の強化、⑥社交の衰退とプライバシーの成立、⑦非親族の排除、⑧核家族(落合2000:18、2008:103)とした。ここで述べた「近代家族」の特徴は、フランス、ドイツなど西ヨーロッパの18世紀から20世紀までの中産階級に対する研究から導いたものである。落合は、日本では明治の家制度とは異なる近代家族は戦前に中産階層のサラリーマン世帯に始まり、戦後は女性の主婦化・再生産平等主義・人口学的移行期世代<sup>1</sup>が担い手という家族の戦後体制により普遍化したものとして、日本では近代家族が成立すると論じている。そして、経済、制度による妻の専業主婦離れ、女性の自立による公共領域への進出などにより家内領域と公共領域の分離がなくなり、家族内部の集団性が弱まる上、離婚、同棲、婚外子出生、出生率のさらなる低下など「第二次の人口転換」(落合2008:236)により「20世紀近代家族」の体制が崩れて元に戻ることはなく(落合2008:256)、21世紀は「個人を単位とする社会」になる(落合2008:256)と予測している。このように日本では「近代家族」が終焉しつつあり「21世紀家族」が幕を開けているとの落合の見解を容れて、モンゴルの社会主義時代の家族に「近代家族」の特徴がみられるのか、もし「近代家族」の諸特徴がモンゴルの社会主義時代の家族に見られるとするなら、民主主義時代にはその特徴にどのような変化が起きたのか、民主主義が終わった時のモンゴルの都市家族がどのような姿で現れるのかなどは、本論文で検証する価値が十分にある。

山田昌弘は、近代家族を「『近代社会』の成立とともに現れる『家族』のあり方」(山田1994:29)と定義して、近代家族の基本性格は、外の世界から隔離された私的領域であり、家族内部領域は、①お互いの一定の生活水準の確保、および労働力の再生産に責任を負う(自助原則)、すなわち「衣食住など日常生活の維持、及び、子どもを育てる・教育費を負担するなど、労働力の『再生産』に関わる責任が課されている」(山田1994:44)、②お互いの感情マネージの責任を負う(愛情原則)、すなわち「家族において情緒的満足を得るこ

---

<sup>1</sup> 「移行期世代は1925-50年生まれ、すなわち昭和ヒトケタから戦後の団塊の世代までと云います」。(落合2008:87)

と」、という二つの原則をめぐって展開すると述べている（山田 1994：46～48）。②愛情原則には家族愛イデオロギー、母性愛イデオロギー、近代的恋愛イデオロギーが含まれている。そして、①の労働力の再生産の責任を負うことから②の愛情を感じると分析して、①と②を結びつけた。山田は、家事労働と恋愛結婚の成立が近代家族が形成される条件であり（山田 1994：90～167）、落合の提示した八つの特徴の中の①家内領域と公共領域の分離と家族と市場の分離（落合 2000：18）を近代家族の基本性格とみている。山田の提示する家族内部領域の原則の①「再生産原則」は落合の③と④、山田の原則②「愛情原則」は落合の②、ショーターの提示した3つの要件と関連がある。

西川祐子は上の落合の八項目を理念型とした上で、さらに、⑨この家族の統括者は夫である、⑩この家族は近代国家の単位とされる、という二項目を追加した。そして、第九項目については、近代家族の一般的特徴は父より夫として家長の統括権を持っているのが近代国家の一般の特徴であるとし、第十項目については、集団としての家族は近代国家という上位集団に包まれていることを問題にしようとした、と述べている（西川 1991：15）。さらに、第十項目を近代家族の定義として、残りの9項目を近代家族のメルクマールとして定義すべきだと提案して、近代国家の制度として扱うのであれば、国民国家の時代以前に「家」家族と「家庭」家族という二重家族制度があって、極めて近代的な家族（都市部で形成する夫婦と子どもによりなる「家庭」家族一筆者補）は存在するが、近代家族そのものが存在しないことになると主張した（西川 1991：15～16）。西川は近代家族を近代化の政治的な側面から国民国家の基礎単位として構築された装置と定義し（西川 1991：16）、近代家族を基礎単位として構成される家族国家<sup>2</sup>は制度であり、この制度が支配する時代にははじまりも終わりもあるということが目に見えるようになった（西川 1991：62）、と近代家族が歴史的なものであることを述べる。また家族と住宅の変化、法制度、学校教育など他の社会システムと関連つけて論じた。これは上に述べた近代化の、②政治的側面と③社会的側面に当たるものである。

千田有紀は、「近代に入ってから国民国家によって作りだされた『家族』のことを、それ以前のものとは区別して、『近代家族』という」（千田 2011：10）、と述べて、西川の定義を認めた。また、家族は家族以外の教育システム、市場システム、国家システムと密接な関連を持つものと分析し、近代家族とは「政治的・経済的単位である私的領域であり、夫が稼ぎ手であり妻が家事に責任を持つという性別役割分業が成立しており、あるある種の規範のセット（『ロマンティック・ラブ』『母性愛』『家庭』イデオロギー）を伴う」と（千田 2011：63）と定義した。また近代家族は、研究者によって操作的に作り上げられた分析概念で、この概念をつくりだしたことは同時期のさまざまな国の近代家族の比較研究を可能にした（千田 2011：70～71）。千田は西川と同じように近代化の政治的側面と社会システ

---

<sup>2</sup> 西川は、家族は国民国家の基礎単位であった。家族イメージはまた国民統合のためにも用いられた。したがって戦前の日本だけでなく、すべての国民国家は家族国家であった、と定義した（西川 1991：1）。

ムを結び付けて近代家族の研究を展開するとともに、ショーターの提出した近代家族の 3 つの感情的要件を近代家族の規範としてその変遷を分析した。

以上のように資本主義的近代化における近代家族についての先行研究を通覧した結果、筆者は、西川と千田が示している近代家族を近代国民国家の基礎単位と考える観点は本論文にはふさわしくないと考えている。モンゴルは 1911 年に清朝の統制を覆して、ボグド・ハンの「共戴モンゴル国」政権の時から国民国家の形成過程に入った。本研究の研究対象である社会主義時代のモンゴル人民共和国から民主主義時代のモンゴル国へと移行する際に国民国家が再編成されたが、どちらも近代国民国家である。本研究ではこのような国民国家が再編成される際に家族がどのように変容したかを探ろうとしており、来たるべきモンゴルの 21 世紀に国民国家が解体するかどうかは議論の対象外である。このため、西川と千田が論じたような、近代家族を「近代国民国家の基礎単位である」と位置づけ、近代家族が解体することによって「近代国民国家」が解体するという議論には立ち入らず、家族自体の特徴の変容に注目しようとしている。筆者は、家族の変容を検討する際、落合の提示した近代家族の八つのモデルがショーターと山田の提示した情緒性を含んでいて、西川と千田の近代国民国家の基礎単位という定義を含んでいないことに鑑み、本研究における作業モデルとしてふさわしいと考えている。本研究では、落合の近代家族論で提示された近代家族の特徴を、筆者が行うアンケート調査の仮説とし、このアンケートの結果により落合の掲げる近代家族の特徴を検証する。

## 2. 社会主義的近代化における近代家族についての研究

社会主義的近代化という術語を用いている小長谷は、これについて、近代化の前に社会主義的という形容詞をつけていることで、「私たちが経験した『普通（であろうはず）の近代化』と区別していることが明確となる」（小長谷 2011 : 8）とし、「理論的には、資本主義社会では競争によって経済格差が生まれ、それを福祉政策によって是正するのに対して、あらかじめ格差が生じないように経済を推進するのが社会主義社会である」と述べて、近代的社会制度には資本主義と社会主義という二つの制度があり、「『近代化の二卵性双生児』たち」（小長谷 2011 : 9）と称する考え方を示した。過去に社会主義的近代化を実施した国々にモンゴルが入っている（小長谷 2011 : 10）。以上を踏まえて、本研究では、社会主義近代化がモンゴルの経験した近代化であるとの見解に立つことにする。

社会主義社会の近代家族について、北村達は一応近代社会といっても資本主義社会と社会主義社会では大きな差異があり、今まで近代家族は両社会組織に対応せる近代家族も異なる点がある（北村 2008 : 138～139）と見ている。そして、社会主義社会で形成された近代家族について、①社会主義社会における婚姻は男女の自由恋愛のみを基礎とするが、離婚は制限されている、②妻は経済的に独立し得る傾向にある、③夫婦は産児制限に対し消極的である、④子は画一的に養育され、非個性的な子となりやすい（北村 2008 : 139～153）などと述べた。この部分は主にソ連の家族について、その特徴をまとめたものである。北



村の「近代家族」理論は1955年に執筆されており、北村の述べる近代家族は落合の言う「近代家族」と異なる文脈のものである。北村の「近代家族」は前近代的・封建的家族から発展してきた家族であり、この「近代家族」と対立するのが前近代家族であり、「近代家族の考察に当つても、前近代家族と比較対照の上論ずる」（北村2008：4～5）としてまとめたのが上の四点の特徴である。北村は社会主義的近代社会の下での「近代家族」の特性を研究した。

野々山久也編『論点ハンドブック家族社会学』の「近代家族の特性」には、社会主義時代のハンガリーの家族について論じた部分がある。その中で「核家族化や小家族化の現象は、社会主義諸国においても指摘されているが、資本主義近代とことなる最も明確な側面は、男女平等を主要なイデオロギーとする社会主義思想のもとで、女性は男性と同様に働かざるを得ないということである」（野々山2009：93）と述べられている。また、またハンガリーの家族を指導する「家族関係の民主化」というプログラムで資本主義近代家族の特性である「母性」は強調するものではなくて、母子関係は資本主義家族とは異なる形をとっていると指摘した（野々山2009：93）。野々山は近代家族の枠組みの中で社会主義近代化における家族の特性を研究している。

社会主義家族を研究の対象としたもう一人の学者は瀬地山角である。瀬地山によれば、社会主義というのは、現実には、資本主義と並ぶような意味での産業化の一つのパターンであり、産業化の下位類型として資本主義と社会主義がある（瀬地山1996：78）とも述べている。社会主義は夫婦二人で働かないと生活できない就労システムを作り、女性解放の名の下に共働きをさせる一方で、育児に関する整備を整えた（瀬地山1996：79）。瀬地山は、社会主義のプロセスを二段階に分け、「一つは最初の社会主義化というモーメントが非常に強く出ている時期です。生産手段の私有をなくして共同化していくという方向性が非常に強く出て、家族規範に対しても社会主義の新しい規範を非常に強く押しつけてくる傾向が見られます。典型的には離婚法制にこれは現れてきて、典型的には社会主義初期には非常に離婚しやすい時期があります。…その後に“家族は社会主義の細胞である”という議論の下で国家の基礎として家族を保護するという方向が出てきて、離婚法制が方向を転換し始めます。…典型的には経済面での市場原理導入です。ソ連のペレストロイカ、中国の改革開放路線がその例です」と述べている（瀬地山1996：81）。また、この時に「女性を労働市場に押し出していくような事態とそれからもう一度家庭へと戻そうと圧力がかかる事態とが見られる」と指摘した（瀬地山1996：81）。瀬地山は、社会主義社会の第一段階で利潤追求が行われていく時には女性の労働力化という方向へ政策を作る。第二段階では、また利潤を追求するために女性を家族へ戻し、女性の主婦化が起こるようになる、と結論する。瀬地山はソ連、中国を例として社会主義社会における家族について分析し、このような結論を出した。しかし、モンゴルの事情は異なっている。モンゴルは1924年から1960年の間は社会主義への過渡期であって、家族法は1952年に初めて定められた。当時は社会主義初期、つまり社会主義への過渡期は離婚について法制的な管理がなかった。そもそも当時

は家族登録制度もなかったほどである。また市場経済へ移行する事は経済面で市場原理を導入するのではなく、民主主義体制へ転換することとともに移行したのである。このようにモンゴルと中国、ソ連とは背景が違いため、モンゴルの社会主義家族の特徴も違う結果に行きつくと考えられる。

以上の資本主義近代化と社会主義近代化における家族についての研究を見てみると、二つの流れを確認できる。一つは、北村が「前近代家族と比較対照の上論ずる」とした（北村 2008：4~5）「近代家族」である。北村は、家族の歴史の流れから近代化以降の家族のことを「近代家族」と称し、近代家族と対立するのが前近代家族である、とする。彼は、社会主義社会の家族を論じる際、近代社会の二つの体制として資本主義家族と社会主義家族と比較して、社会主義社会の家族の特徴を導いたのである。もう一つは落合らを代表とする「近代家族論」研究である。これはヨーロッパの社会史的な研究から、私たちが当たり前と思う家族は、歴史的なもので一時期のものであるという見解を持っている。この近代家族が見せた特徴は歴史的にある時代に形成され、資本主義の高度成長を支えたが、この近代家族が永遠に存在するものではなく、揺らいでいる時代が来る。この近代家族論のアプローチにおいては、産業社会の近代化一つの体制である資本主義近代化における家族について研究がなされたが、社会主義時代を経験して、民主主義・市場経済時代を経験している家族については研究されていない。

モンゴルの近代化は、社会主義的近代化から始まり、1990年に社会主義の崩壊によって市場経済と出会い、1992年から民主主義時代を歩んできた。今後、モンゴルでは資本主義が盛んとなっていく。このようなモンゴルでは家族はどのような特徴を持っているのか、どのような変化があったのかを、社会主義時代の家族を民主主義時代の家族と比較して明らかにするため、本論文では、社会主義時代の家族の特徴を研究する際には、落合にまとめられた8つの特徴からの仮説を立てて研究を展開する。

### 3. 家族の個人化理論についての先行研究

先行研究では、近代家族の次に来るのが家族の個人化とされている。ベックの個人化論は、1986年に出版された『危険社会』によって広く知られるようになり、その後近代家族以降の家族の行方を分析する時の一つの説明変数になった。ベックは、「個人化」とは「人間の人生があらかじめ決められた状態から解き放たれたことを意味している。・・・生活状況と人生の経過の個人化は次のようなことを意味する。人生が『自己内省的に』なっていることを。そして社会的にあらかじめ与えられた人生が、自分で作っていく、そして作っていない人生へと変換されていることを」意味すると述べている（ベック 1998：266~267）。産業社会において、家族と生産の分離とともに不平等の状況が生じて、家族の中では「性による宿命」が家族の中での不平等であり、それは産業社会が発生するときから備わっていた（ベック 1998：218~219）。産業社会の近代化が不平等化をもたらし、個人化をもたらしたとみている（ベック 1998：4、15）。ベックによれば、戦後の福祉国家



による近代化の中、人間が生きる上での集合的意味供給源を構成していた階級、階層、家族、男女の性差状況がますます枯渇すると同時に、個人の私的生活において貴重な意味の源泉であった結婚や家族もその有効性を失っていく（ベック1998：138）。女性は、平均余命の変化、家事労働の構造の変化、避妊や人工妊娠中絶の法的可能性、離婚の増加、教育の機会の均等などの五つの条件で解放され、それとともに、個人化の螺旋状進行過程が広まった（ベック1998：222~225）。「男性も女性も、個人自身が、生活世界における社会的なもの再生産の単位になるのである」（ベック1998：258）と論じている。ベックの理論は日本では家族研究者に受け入れられ、日本の近代家族の次に来るのが個人化であると結論する家族社会学者がいる。

目黒依子は、個人化する家族という概念を初めて使った研究者である。目黒は、社会構造の変化との関わりで女性の変化を位置付け、性役割及び性役割観の変化、それにとまなう家族及び家族観の変化（目黒1987：59）の末、家族は、「家族という集団としてではなく、ある時期に、ある個人と個人の組み合わせによって作られるものとなる」（目黒1987：iii）と述べている。目黒は、個人化する家族が成立するために、特に①女性の経済的地位の確保、②社会的支援サービスの充実、二点が必要であるという。「個人化」を支えるために、個人への社会的サポート制度の確立が目指される事になる（目黒1987：102~103、121~141）。目黒は、女性に視点を向け、個人化する家族について、離婚の増加、小家族化と核家族化、高齢化、女性と労働関係の変化、または性別役割分担、女性の労働、離婚観の変化などをその内容として分析し、現存の家族システムが女性の就労に支障となる、これからの家族が個人のニーズによる選択により作られ、社会の中での個人の存在証明を求める個人の生き方を支援する身近なシステムとなるだろう（目黒1987：62~81）と予測した。目黒は家族の変動の過程を研究する際、「家族変動の指標として女性に着目し」（目黒1987：203）、ジェンダー論、女性のライフコースの視点で、女性の役割の変化、女性の地位の変化と女性のライフサイクルを分析し、家族が女性解放にとっての拘束要因であり、性別役割の固定化を解消する事が女性解放の支援要因になるという考えを示した（目黒1987：119~121）。目黒は、女性を研究対象とし、女性の性役割と女性の地位を研究したが、本研究では、家族全体を研究対象としている。この点で、目黒の使っているネットワーク論を用いることができないのである。

山田昌弘はベックの研究を参考とし、「家族の危機の基準に、二つのレベルがあることに気づく。一つは、家族が消滅してしまうのではないかという危機意識で、もう一つは、家族が家族らしくなくなってしまうのではないかという危機意識のレベルである」（山田2004b：33）と述べた。そして、個人化を「社会的現実に対する選択可能性（解消可能性も含む）の増大」と定義した（山田2004a：342）。また山田は、家族の個人化には大きく分けて二つのレベルがあると言う（山田2004a：341）。一つは家族の枠内における個人化である。もう一つは個人を前提とした選択可能な関係を作ろうとする「家族の本質的個人化」である。家族の枠内の個人化は、ある家族の存在を前提として、その家族の回りの社会（国家、

地域社会、近隣、親族など)からの「期待」(広い意味での規範)の拘束性の低下によってもたらされる。もう一つは家族の内部での行動の自由の増大である。それは家族成員間の「期待」の拘束性の低下による選択肢の増大である(山田2004a:345)。家族の本質の個人化とは、家族であること、解消する自由を含んだ個人化である。家族の本質的個人化とは、家族であることを選択する自由、家族であることを解消する自由を含んだ個人化である。この状況は近代社会における家族の本来の特徴であった、選択不可能性、解消困難性が崩れるということである(山田2004a:346)。「別の側面から見れば、家族の範囲を自由に設定する自由」(山田2004a:348)ということになる。本質的個人化の進行につれて、近代家族における夫婦間の情緒的關係、所謂結婚を目的で恋愛をして、結婚してから性交渉するロマンティック・ラブ・イデオロギーから恋愛と結婚が分離して、結婚が選択可能になり、「恋愛感情を感じても結婚しなくてよいし、恋愛感情なくても結婚できるという意識の普及が夫婦關係の本質的個人化をもたらしたのである」(山田2004a:348)。この二つのレベルは質的に異なる個人化であるが、「家族枠内の個人化」が家族關係の解消できる「家族の本質的個人化」へ進むと指摘する(山田2004a:348)。山田は主に家族機能論的アプローチから日本家族の変容を分析し、国家が家族に介入することの中の一番大きな介入が福祉政策(山田2004b:231)であり、国家が家族に介入すればするほど家族の危機的傾向を深化させてしまう(山田2004b:236)と指摘した。

落合は「20世紀近代家族」とは、「人口転換<sup>3</sup>とともに成立した家族体制だった」(落合2001:254)という。20世紀は「家族の時代」であり、21世紀には家族の時代が終わり、家族を単位とする社会から個人を単位とする社会へ変化すると論じている。戦後から現在までの離婚・同棲・婚外子出生・出生率などの歴史的データを用いて、夫婦の役割分担の再編成と離婚の増加、婚姻率の減少、未婚同棲の増加と婚外子の出産、出生率の低下などという「第二次人口転換」を根拠として21世紀は個人を単位とする社会が形成されるという研究結果を出した。(落合2008:230~241)。

富永健一は、近代化が家族にもたらした影響として核家族化が一般化されたことを挙げた。核家族は家父長制家族と違って離婚が簡単になること、女性の職場進出により離婚しても困らなくなると家族が危機に直面するにいたること、核家族はすでに最小の家族なので、それが解体すればそのあとは個人化の時代になるしかないことを論じた(富永2003:459)。しかし、機能主義的に考えれば、家族という集団に育児機能と緊張解消機能という重要な機能があるため、結婚という形態を残しながら今までより緩やかなものにして、家族の解体(結婚しない人が増える)から個人主義化された家族(いままでより緩やかな家族をつくる)までの幅をもって、ポスト核家族の時代になることが可能であろうと主張した(富永2003:459~460)。

以上の先行研究の共通の特徴は家族の行方は個人化へと変化することである。簡単に言

---

<sup>3</sup> 人口転換とは「高出生率・高い死亡率の社会から低出生率・低死亡率の社会への不可逆的転換である」(落合2011:106)。

例えば、家族の構成員の選択肢が増えて、家族ではなく、個人が社会の単位になることである。家族の個人化が成り立つ条件として、ベック、目黒がともに福祉機能の充実化、山田、富永は福祉国家化（富永 2003 : 335）を必要としている。落合は主に人口学的条件が家族変動の原因と考えている。本研究ではモンゴル国の 21 世紀の家族の行方を探る際に、落合が指摘した近代家族の次に来るのが家族の個人化であるという仮説を持ち、以上に紹介した先行諸研究で述べられた個人化をもたらす原因、条件を参考して個人化へ進むかどうかを検討する。

#### 4. 社会主義時代のモンゴル国の家族を対象とした研究

鯉淵信一はモンゴルの家族について取り上げた研究者である。「モンゴルの社会主義下における伝統家族の変容」という論文では、伝統的な遊牧社会における家族の形態、社会主義体制下の家族関係について分析した。まず、モンゴル人は寒冷な自然の中で遊牧するために、ホト・アイル<sup>4</sup>という血縁・地縁共同体組織が存在し、個別家族の生業を支えてきた。モンゴルの家族の形態は家父長制であり、「男が家族集団の責任者として采配をふるう地位にあり、妻は家長たる夫に従う立場にあった」（鯉淵 2005 : 41）。「夫が家畜財産の所有者である。…馬群の管理、すべての家畜の屠殺、去勢といった遊牧の基本にかかわる部分は男性の役割でとなっており、女性が関わることはない」（鯉淵 2005 : 41）。男性が放牧で留守の間に女性は、「家事一切、家まわりのことはもとより、乳搾り、乳製品の加工、燃料の畜フン拾い、家畜の分娩、子家畜の世話、羊の毛刈り、子ども養育等々、宿营地内のことはすべて責任を負っていた」（鯉淵 2005 : 43）。婚姻制度は族外婚の通婚習慣を持っていた。また「掠奪婚」、「誘拐婚」といわれる習慣が広く存在した（鯉淵 2005 : 44）。一夫多妻制であり、相続にあたっては、末子相続を基本としてきた。子どもは結婚する際、親から家畜の分配を受け、新たなゲルを立ててもらい分家していく。娘には家畜、家財道具を持たせる。最後まで両親と暮らした末子が、親のゲルとその家畜など財産のすべてを引き継ぐ（鯉淵 2005 : 45~47）。鯉淵は、憲法・民法による女性の権利の確立、識字教育の普及、家庭保護を目的とした政策による女性の地位の向上、家族形態の変化と家父長制と一夫多妻制の崩壊、夫婦の平等の点から社会主義時代の家族について分析した。鯉淵は、社会主義時代の以前の家族の形態を『モンゴル秘史』や宣教師カルピニヤルブルクの著した旅行記（カルピニ、ルブルク 1989）などの古典文献に基づいてまとめ、社会主義時代の家族については、『憲法』や『家族法』などにより作られたモンゴル家族の理念についてまとめた。しかし、この論文では、家族社会学の理論や分析方法は全く用いられていないため、筆者の考えるモンゴルの都市家族に関する家族社会学的研究とは方向が異なっている。

---

<sup>4</sup> ホト・アイルとは遊牧民の社会生活、経済活動の基礎的単位である（鯉淵 2003 : 60）。遊牧民が 5 つの家畜（ウマ、ウシ、ラクダ、ヒツジ、ヤギ—筆者補）を保有し管理するために、3 家族くらいが連なってホト・アイルを組んで生活するのが普通である（島崎、長沢 1999 : 14）。

トゥルムフ・オドントヤの『社会主義社会の経験—モンゴル人女性たちの語りから』は人類学の視点でモンゴルの社会主義時代の女性の役割分業の側面から女性たちの生き方、文化的社会的経験を取り上げて検討したものである。この論文は社会主義前期に発行された『婦人たちの意見』、『女性たちの権利』、『勤勉な女性』、『労働者女性』、『牧民婦人たち』など5つの雑誌の19誌の表紙の写真や絵、社会主義後期に発行した『モンゴルの婦人たち』の94誌の表紙とそれに関連する記事、または社会主義を経験した18人の女性を分析対象とした。オドントヤは、モンゴル、ロシア、日本で研究された社会主義以前のモンゴル社会における男女役割分業を居住空間、生産業、社会関係、役割分業の変化などについて再考察を行い、伝統的なモンゴル社会では男性優位の上下関係が保たれながら、女性が家庭における役割を積極的に行い、家庭経営、社会関係などに意思決定権を持っており、その意味で男女は同等な立場にいたと主張した（オドントヤ 2014 : 40~41）。また社会主義時代に建てられた生産小隊<sup>5</sup>をホト・アイルと比較して、ホト・アイルが生産小隊に編成されたことによって牧民の役割分業が、①大型家畜を男性が管理し、小型家畜を女性が管理するという役割分業があったホト・アイルから家畜の性と年齢ごとに分ける生産小隊への変化、②結成世帯間の親族関係を中心とするホト・アイルから職種で仕分けた生産小隊への変化、③男女の役割分業で家畜の世話をしていたホト・アイルから男女共働きのイデオロギーによってどの家畜の Kategorie であっても男女平等に世話をする生産小隊への変化、この三つの変化が起こったとまとめた（オドントヤ 2014 : 64~65）。また社会主義時代に女性向けに発行された雑誌を資料に、社会主義モンゴルにおける理想的な女性への要求を検討した。社会主義前期（1925~1960）には、女性は、革命運動家、啓蒙者であり、社会で働く労働者であることを要求していた。社会主義後期（1960~1989）には、勤労者、作業ノルマの超過遂行者、叙勲者、国内外の大会に出席する代表者、優秀業績者かつ子だくさんの名誉母であることが名誉的であった。多くの子どもを産み育てながら、家事、育児、仕事、学習もこなす女性が理想の規範であると宣伝され、家事・育児が女性の責任であることを前提に、社会労働にも積極的に参加することが期待された。現実的に女性たちもそれに従って、仕事と子育てを両立して、一生懸命働いていた、仕事の負担が大きかった経験に「今なお高く評価」いる（オドントヤ 2014 : 132）。また「私生活に費やす時間と空間が制限されていた一方、共働きをしない限り生計が困難であった経済的理由」があると分析した（オドントヤ 2014 : 132）。多産奨励政策は男女労働者の労働力を評価する手段とされていたが、結果的には女性の身体性を評価することとなった。これに対して抵抗感を持つ女性も存在していた。妊娠出産の選択は個人の選択ではなく、半ば行政的に妊娠し出産を促進させられた（オドントヤ 2014 : 166）。国は勲章と名誉を与えて多産を勧めていたが、

<sup>5</sup> 生産小隊はまたバグ、組とも言う。「牧畜生産の初級段階の組織体であり、労働組織の基本形式となるものは組である。組を家畜の種類・年齢・性の区別によって作る」（坂本 1969 : 188）。

育児と社会労働の両立に現実には苦しんでいた。出産後に社会復帰する要因は、収入を得ることと職業ポストを確保することであった。多産を奨励されていた時代、育児面で年長の兄弟<sup>6</sup>の協力を得られたことは女性の社会労働を維持できる環境とつながっていた（オドントヤ 2014 : 167）。オドントヤはこのように社会主義時代の人口増加政策、育児と仕事の関係、育児の形態を総括した。

#### 5. 民主主義時代のモンゴル家族を対象とした研究

モリス・ロッサビは『現代モンゴル』で、モンゴル国の移行期 1989 年末の民主化運動から 2004 年に至るまでのモンゴルの政治、経済、社会、外交の諸局面の変遷をまとめた。この本はモンゴル国の大統領から遊牧民まで各階層の関係者、西側のアドバイザーへの聞き取り調査と現地観察調査のもとに完成したものである。スムーズに民主化へ移行した政治面を詳しく解説し、市場経済推進派によって実施された急激な経済改革を批判し、市場経済移行政策に伴った政治経済的混乱、社会、文化等の個別問題を記述した。とくに人口の 3 割に達する貧困層が形成されていったことに注意を促し、年金、女性の地位、教育などにおいて不平等が顕在化したと述べている（ロッサビ 2007 : 178~200）。女性問題については、社会主義時代の女性に対する職業、教育、健康福祉政策を肯定し、高い出産率を望むため妊娠中絶が違法とされたことを批判した（ロッサビ 2007 : 186）。また、社会主義崩壊以後、女性の生活が混乱に陥った現状、たとえば医療サービス削減や閉鎖による出産時の死亡率と乳児死亡率の上昇、托児所数の減少、年金制度の縮小などがあったことを指摘した（ロッサビ 2007 : 186~187）。さらに失業率の高さが女性の直面した経済的困難の一因と考え、失業した夫が家庭内暴力、アルコール中毒、犯罪に走り、女性が離婚や別居を迫って苦勞するなどのことも頻繁に発生したと述べた（ロッサビ 2007 : 188）。

長沢孝司「モンゴル都市民の家族生活史」はウランバートルの家族（父親、本人世代、その子ども世代という三世代）を対象として、ウランバートル市の形成・発展過程を実際に担った人々の具体的な生活と人生を聞き取り、遊牧社会との連続性、不連続性と社会主義との連続性と不連続性という二つの視角で家族生活史の分析を行った。モンゴルの社会主義時代には、出会いと結婚の際、徹底して本人の意志が尊重されており、個人尊重という本来の社会主義思想が社会主義時代にすっかり定着していた（長沢 2000 : 23）。市場経済化に伴う地域社会の後退や崩壊は、個別家族の生活を孤立させ圧迫し、委縮させるものである（長沢 2000 : 31）地域社会の相互援助が低下している中、親族ネットワークが緊密になって、個別家族にとって重要な意味を持つといえる。これは遊牧社会に独特の緊密な親子関係と分割相続、ホト・アイルの共同体精神という文化に基づくものといえる（長沢 2000 : 31~32）、と結論づけた。

モンゴル国における家族学研究は 1990 年の民主化の後に独立した研究分野となった。

---

<sup>6</sup> 実際には兄弟姉妹である。

テ・ナムジラ (T・Namjil) の *Mongol ba züün hoit aziin ger büil* (モンゴルと北東アジアの家族)、*Mongol ger büil sudlalyn onol arga züi* (モンゴル家族研究の理論・方法論)、*Mongol örh ger büliin tüüh* (モンゴルの家族の歴史) などでは、家族の歴史、家族の伝統の研究、家族内教育研究、家系図研究を中心として、モンゴルの家族の形成過程、家族の変遷過程が研究されている。家族の変容についての研究では以下のような研究結果を出した。「近代のモンゴル家族に現れている根本的な変化は、家族に自由な選択をする可能性が増えた、出生率が減って、平均寿命が延び、人々の道徳に変化があった」(Namjil2008:102) としている。ナムジラによれば、自由な選択をする可能性とは、未婚同棲、離婚、子どもの数などを家族成員が自由に選択する事が出来るという意味である (Namjil2008:103)。モンゴルが市場経済へ移行することによって、家族に新たな形態が現れ、電気製品、自動車、テクノロジーが生活に求められるようになった (Namjil2008 : 87)。地方から都市に移入する人が増え、都市の家族には次のような特徴が見えるようになったとナムジラは述べる。すなわち、①都市にいる若者家族と地方にいる親世代との関係が弱くなった。②都市の世帯数は増えたが、世帯の平均人数が減って、主な家族形態は二世帯で形成されている。③子どもの人数が少なく、外部から隔絶された環境で育てられている。④近隣住宅との距離は縮まったが、近隣同士の関係は弱くなった。(Namjil2008 : 87~88)

デ・トンガラグ (D・Tongalag) は家族倫理、家族観について研究している。モンゴルの家族の変容については、定住生活の様式が定着し、精神的な面では伝統がある程度残されたが、物質的な面では新しい時代の条件に適合して、新しい時代の様式がモンゴルの家族生活に現れている (Tungalag2010 : 158)、という。新しい時代に現れた家族の変化とは、①家族の中での役割分業が変化して、男女ともに家族と社会活動に参加するようになったが、社会の負の影響で女性が世帯主の役割を果たすような現象もある。②夫婦の勢力関係は、夫が主な決定者であった状態から、男女の収入が同じようになるにつれ、夫婦ともに決定する状態に変化した。家族の内部ではお互いを尊重する雰囲気形成された。③家族の中の財産の所属関係が変化して、平等化が進んだ (Tungalag2010 : 158~169)、という三点を挙げている。さらにトンガラグは、社会主義時代に家族関係は平等的な権利をもつようになったが、この時代から家族の内部に矛盾が発生して、市場経済への移行がもたらした社会の危機が家族関係に影響を与えて、夫婦の対立が深まった (Tungalag2000 : 82)、と述べ、その具体的な現象として、市場経済の時代に入ってから、家族内部の矛盾、離婚、家族成員間の冷淡な関係が増え、女性世帯主が増え、飲んだくれが増え、孤児の数が増えたことを挙げている (Tungalag2000 : 82~83)。また、家族の趨勢については、社会の危機が家族生活に影響を与える。「これをヨーロッパの学者が『家族の崩壊』と定義している」(Tungalag2000 : 83)。家族が崩壊する事例として、家族成員が自分の役割を果たすことができないことによって、家族の構成が崩壊する形である。たとえば、両親は飲んだくれになり、子どもを育てる能力を失って、貧困により子どもが流浪者になることによって、家族の構成が崩壊し、家族の生活が継続できなくなるという例を挙げている。このような家

族の崩壊は普遍的な現象ではない。しかし、これがあまりにも増えれば個人にも社会にも負の影響を与えることがある（Tungalag2000：82~85）。トンガラグの挙げた例からみると、「家族の崩壊」とは社会の危機により個々の家族の家計が苦しくなって、家族成員が家族の役割を果たせない状態を指すものである。

ドイツの学者、バルクマン（B. Barkmann）は、“Shiljiltiin üyiin mongol ger бүл”（「移行期のモンゴル家族」）で、家族の変化と社会の変遷に関して研究した。この論文は、2000年の国勢調査、2001の『家族関係の諸問題』での調査結果を利用して、研究期間を1999年～2002年に限定した。バルクマンによると、2000年の結婚年齢は1989年より男性2.4歳、女性2.6歳増加しているが、遊牧地域の人々の結婚年齢にははっきりした変化がない、という。ただし、遊牧地域における結婚年齢になぜはっきりとした変化がないのかについては何も述べていない。バルクマンは、結婚について、結婚式を挙げる人の減少と行政機関に結婚を登録する者の数の減少の二つにわけて、その原因を探った。結婚式を挙げる人が減少している原因は、モンゴルでは夫の家族が結婚式の費用を負担するのが通例であるが、モンゴル人はたくさんの親戚がいるので、結婚式に200人から300人来ることもあるために、結婚式にかかる費用が人々の収入をはるかに超えるので、結婚式を挙げるのを遠慮しているためだとする。結婚登録者数が減少した原因は、都市で生活しているため、独立できるまでには、教育を受けて仕事をして住居を確保する必要があるため時間がかかっているためだとする（Barkmann2008：42~43）。90年代に出生率が低下した原因は、1989年に人工妊娠中絶を禁止する法律が改正されて中絶が可能になったことと、5万人のロシア軍人とカザフ人が故郷に戻ったこと以外に、長期にわたる経済的困難により、若者家族が子どもを望まなくなったことによると見ている（Barkmann2008：44~45）。また、モンゴルの家族形態には家父長制の伝統があり、具体的には男を家主とし、家主一人が決定権を持ち、他の人はそれに従うことに現れている。伝統形態を保っている少なくない家族では、妻が仕事をしないで、家事と快適な生活のために尽くしている（Barkmann2008：46）。夫の収入が不足している、あるいは無職である場合には、伝統形態を保っている家族でも妻が賃金労働をする。この場合には、長男・長女が家事、炊事などを手伝い、母親が担っていた家事をやるのが少なくない（Barkmann2008：48）。モンゴル国の移行期において、都市部は遊牧地域よりも大きな影響を受けたが、これは旧東側の諸国の移行期にも現れた現象である。今、モンゴルの家族の中には民族の伝統と習慣を回復する願望があるが、これは国家財政構造の安定と関係がある（Barkmann2008：59~60）。

社会主義時代の家族については、鯉淵が憲法や家族法などにより作られたモンゴル家族の理念についてまとめた。しかし、この論文では家族社会学の理論や分析方法は全く用いられていないため、筆者の考えるモンゴルの都市家族に関する家族社会学的研究とは方向が異なっている。ロッサビは政治体制移行期の女性を注目点の一つとして、文献資料によって実証的に分析し、体制移行による女性の現状を述べた。ナムジラとトンガラグは民主化時代の家族の特徴をまとめ、家族の趨勢について研究してその原因を分析したが、その

特徴をどのような情報に基づいて導き出したのかが不明であり、アンケートや聞き取り調査を実施したのかももちろん分からないため、これを実証的な研究と見なすことには疑問がある。オドントヤは文献調査とインタビュー調査の結果に基づいて、社会主義時代の牧畜集団化、社会主義工業化、男女平等に働く政策、人口増加政策などが女性の役割分業、育児などに与えた影響を分析したことが明確であり、上掲の諸研究よりも実証のレベルが高いと言えるが、筆者は、社会主義時代の女性だけではなく、家族の特徴を明らかにすることを目指している点に研究の到達点の違いがある。バルクマンは移行期の家族の変容について 2000 年の国勢調査と 2001 年の『家族関係の諸問題』から得られた情報にもとづいて分析したが、これら情報はもはや古いものとなっている。このように見ると、以上の諸研究には、目指す研究の方向性、実証レベルの低さ、用いた資料の時期的限定性があるといえる。本研究では、アンケート調査、聞き取り調査の結果、統計データ、文献資料に基づいて、近代家族論と個人化する家族理論を使って、二つの時代のモンゴルの家族の特徴を明らかにし、今後のモンゴル家族の行方について展望することを目指す。

### 第三節 研究方法、論文構成

#### 1. 研究方法

本研究では、歴史社会的アプローチ、その中でも時代の変動による家族の変容をとらえようとする家族変動論、その中の近代家族論の枠組み、個人化する家族理論を用いて分析する。

方法論として、落合のまとめた近代家族の特徴による考察を論文全体に通して徹底する。近代家族の諸特徴が社会主義を経て、資本主義を歩むモンゴル社会に適合するかどうかを統計資料、アンケート調査、聞き取り調査から得た資料、文献資料により実証し、それより得られた結果によって社会主義近代家族と民主主義近代家族の理論モデルを作り、21 世紀の家族の特徴を明らかにする。

落合自身も、現代における近代家族研究は実証を目指す研究に入ったと述べている。『近代家族』とは理念として見るべきなのか実態も扱うのか、地域や文化、時代、階層により『近代家族』の変種が存在したと考えるか、そうだとするなら、各種の『近代家族』に共通した最小限のメルクマールは何なのか（落合恵美子 1995 : 92）と今後の近代家族についての研究を展望した。

モンゴルの社会主義化は社会主義工業化、産業化による近代化の一つのパターンとみなされている。小長谷は『モンゴルの二十世紀』の第一章「社会主義による近代化」において、人口の増加、都市の増加及び都市における工場建設、家畜の産業化、農業の開始などが国家的な規模で産業を作るという近代化の一側面を如実に表しているとして、モンゴルの近代化は社会主義化と同義で進められたと見ている（小長谷 2004 : 14~18）。また、「モンゴルの場合、近代化という時、社会主義を選択したわけです。いろんな近代化の方法が



あったでしょうが、ロシアと中国の間に挟まれたモンゴルは社会主義を選んで近代化の道を歩きました」(小長谷 2005: 20)とも述べており、モンゴルの社会主義時代を近代化とみなしていることが明らかである。モンゴルの近代化は、産業の上で三つの大きな変化、即ち「遊牧民の社会主義的集団化」、「大規模農場の建設」、「首都の建設」をもたらした(小長谷 2004: 18)。つまり経済的面では、自給自足の遊牧状態から第一次産業中心に発展した。政治的面では、憲法により建国を宣言して、社会主義の法制度を確立して、封建的な政権から近代の国民国家へと移行した。社会的側面から言うと、教育が普及し、都市化が進んだ。文化的面からいうとマルクスの社会主義思想と価値観が広められ、宗教や信仰崇拜などが排除されるものとされた。以上の4つの領域から見ると、当時のモンゴル人民共和国という社会主義国家は、社会主義改革に伴って近代化が進んでいたのである。よってここまで述べてきたような「近代家族論」の諸枠組が適用可能なのである。

こうした研究上の背景に冒頭に提起した問題を解明するために、本論文では以下のような方法で検討を進める。

まず、落合が『21世紀家族へ』で示した近代家族の8つの特徴を仮説として、それぞれの仮説を社会主義時代、民主主義時代に分けて検証する。検証にあたっては、筆者独自のアンケート調査、聞き取り調査の結果や観察調査で見た現実、そして収集した資料、統計資料と公式ホームページ上のモンゴル国や国際機関の統計データを用い、遊牧民としての伝統を持ち、かつて社会主義から民主主義への政治体制移行を経験した社会の家族の変容過程を実証研究する。社会主義時代、民主主義時代、および21世紀の家族の特徴のモデルを作る。牧畜・遊牧という基礎的生業形態を持ち、社会主義国家・計画経済を経験して民主主義国家・市場経済へ移行という異なるイデオロギーと歴史的経験を持つ北東アジアの国家と都市家族の諸特徴がどのように作り上げたかを検証して、従来展開されてきた近代家族に関する研究結果が体制移行期国家の家族の変容の過程に適用できるかどうか、もし適用できなければ、モンゴルの都市家族の今後の趨勢が近代家族論にどのような啓示を与えるのかを提示する。

アンケート調査の結果分析に当たっては、研究対象者を20～30代、40～70代と二つに分ける。20～39歳の調査対象者は政治体制移行期の1990年ごろに0～10歳であり、社会主義イデオロギーの影響をあまり受けていないと考えられる。それに対して40～70代は社会主義時代の影響を受けていると考えられる。

現在のモンゴル国は、社会主義国家であったモンゴル人民共和国を70年経験し、経済の復興と発展の時代を迎えている。落合が示した資本主義近代化における近代家族の特徴のモデルがモンゴル国に適用できれば、家族は社会体制、文化、イデオロギーとは関係なく同じ方向へ進むものであることを証明することとなる。欧米と日本の先行研究を参考にしながら、モンゴル国の牧畜・遊牧という基礎的生業形態を持つ家族が欧米諸国や日本のように変化した過程を検討することもできる。もし適用できないなら、家族はイデオロギー、政治経済、文化的要因により作られたことが検証される。

## 2. 仮説モデル

上述したように、本論文では、落合恵美子が示した近代家族の 8 つの特徴を仮説として、それぞれの仮説を検証する。落合恵美子が示した近代家族の 8 つの特徴とは次の通りである。

- ① 家内領域と公共領域との分離
- ② 家族成員相互の強い情緒的關係
- ③ 子ども中心主義
- ④ 男は公共領域・女は家内領域という性別分業
- ⑤ 家族の集団性の強化
- ⑥ 社交の衰退とプライバシーの成立
- ⑦ 非親族の排除
- ⑧ 核家族

ただし、本論文ではモンゴルの実態と合わせて、論証の際に以下のような調整を行う。

項目①から項目⑤については特に調整を要しない。「⑥社交の衰退とプライバシーの成立」は社会ネットワークに属すべき事柄であり、「⑦非親族の排除」と「⑧核家族」は家族をめぐるネットワークに関わる問題である。「非親族の排除」は家族という集団と非親族との関係、「核家族」は家族という集団と親族との関係について論じるので、本研究では社会ネットワークという章を設け、「社交の衰退とプライバシーの成立」、「非親族の排除」、「核家族」を検証する。したがって本研究では、上の 8 つの仮説モデルを検証するために、以下のような 6 つの章に分けて分析を進める。

- ① 家内領域と公共領域が分離されているかどうか
- ② 夫婦の役割分業は男が公共領域、女が家内領域という性別役割分業であるかどうか
- ③ 家族成員間は強い情緒的關係で結ばれているかどうか
- ④ 子ども中心主義であるかどうか
- ⑤ 家族の形態は核家族世帯で、非親族を排除し、社交が衰退しているかどうか
- ⑥ 家族の集団性が強いかどうか

## 3. 論文構成

第一章では、家内領域と公共領域が分離されたかどうかを、住居空間の構造の変化、生業と家庭との分離、国家の管理と家庭生活、この三つの面で社会主義時代と民主主義時代にわけて検討する。主に文献資料を用いて、モンゴル人の伝統的な住まいであるゲルと近代的アパートの住宅の変化と家内領域と公共領域の分離との関係、社会主義工業化による生産・生業の家内領域からの分離、家内領域に属すると認識されている家事・炊事・育児の担当の変化などに着目し、公共領域と家内領域の分離の過程を検証する。

第二章では、男は公共領域、女は家内領域という性別役割分業が形成されたかどうかを検証する。社会主義時代、民主主義時代の家族における役割分業意識を考察し、役割分業の実態を分類して、遊牧生活、社会主義時代の男女平等イデオロギー、民主化による男女平等イデオロギーの崩壊が男女の役割分業に与えた影響を考察する。

第三章は、家族成員間が情緒的關係で結ばれているかどうかについて検証する。社会主義時代と民主主義時代に分け、それぞれ時代の結婚に関する法律の変容、結婚相手と知り合ったきっかけ、家族にとって大事なことに関する意識、結婚と性交渉と子どもの順番に対する意識に分けて、家族成員間の情緒的關係の変容を検証する。

第四章では、子ども中心主義を検証する。理想とする子どもの数の変化、子どもに関する政策の変化による親子間の関係と子どもの役割の変化、子どもの社会化の担い手などの3つの面から、社会主義から民主主義へ変化する過程で親子間に情緒的關係があるかどうか、子どもが家族の中心的な存在であるかどうかを検証する。

第五章では社会的ネットワークの変容について検討する。非親族の排除、核家族、社交の衰退を検証する。まず非親族の排除を検証して、家族と親族、家族と近隣との関係について考察して、モンゴル人の居住習慣、相続制度からモンゴルの都市家族が核家族世帯を志向しているかどうか、時代の変化によって家族と親族、近隣との交流が衰退しているかどうかを検証する。

第六章では、家族の集団性が強化されているかどうかを検証する。家族と言う集団に対する考え、家族とその中の個人に対する考え、家族の集団性の具体的な行動である家族行動、家族成員の情緒的サポートなどを分析して、社会主義時代から民主主義時代への変容過程で家族の集団性が強化しているかどうか、家族の集団性が崩壊して個人化へ進むかどうかを検証する。

第七章では、再び本研究の仮説を社会主義時代、民主主義時代で成立したかどうかと検証をまとめ、社会主義時代、民主主義時代に形成された家族のそれぞれの特徴を明らかにし、家族が個人化へ進むかどうかを再検討する。仮説の中の成り立った項目と成り立たなかった項目に分けて、その生成要因を考察する。そして21世紀の家族の特徴を予測する。

終章では、全論文の内容を総括して、遊牧文化の伝統を持つ社会主義近代化、脱社会主義を経験して、民主主義を歩んでいる都市家族の変動理論を提出する。

#### 4. 論文の意義

牧畜・遊牧という基礎的生業形態を持ち、社会主義から民主主義への移行を経験した社会や国家の家族という課題群は、このような事態が現出してからまだ日が浅く、あらゆる学問分野にとって新しい研究対象である。この研究対象となる問題群は、これまでの家族社会学や家族人類学の主たる対象であった、定住的な農耕を生業としていた社会の上に成り立った家族とは異なり、遊動的な放牧を生業としていた社会の上に成り立った家族を扱ってきている。単なる体制移行を経験した国家や地域の社会変動と家族の変容を広く扱っ

てしまうと考察からこぼれ落ちてしまう可能性のある北東アジア地域の北半に広がる牧畜民・遊牧民（家畜を飼って生計を立てることを牧畜といい、移動しながら牧畜することを遊牧という）に着目しているのである。モンゴルの遊牧民たちは、それまでの封建主義的な生活を 20 世紀初頭の社会主義革命によって打破し、その一部が社会主義建設のために集められて都市民とされ、そして社会主義的近代化を経験させられた。つまりモンゴルの牧民の一部は、資本主義を十分に経験しないままに社会主義に移行し、社会主義のもとで近代の都市住民と化したわけである。しかも彼らは再びの体制移行によって、社会主義を捨て、ある意味ようやく資本主義を経験することになったのであった。このような人類史上稀に見る経験をした人々はこの三十年程度に世の中に登場したのであるから、家族社会学や家族人類学は言うに及ばず、かなり多くの学問分野にとっても新しい研究対象であることは間違いのないところである。したがって、本論文から導き出される結論は、従来の家族社会学や家族人類学がまったく説き及ばなかったものになるはずであり、この点で家族社会学、家族人類学の新たな発展に貢献すると確信する。特に、個人化する家族は、日本では 21 世紀に起きるといわれるが、モンゴルの 21 世紀家族についてまだ実証的な研究がないため、これは「家族の個人化理論」にとって新しい理論的な貢献になると考えられる。

またモンゴル学では、家族社会学は新興の学問なので、まず何よりも実証的な研究により、モンゴル国の家族の特徴をまとめることが必要となっている。さらに、これは同じく伝統文化を持ちながら、同じく社会主義のイデオロギーに影響されたが、中国の伝統イデオロギーにも深く影響され、今も急速な経済発展を経験している内モンゴルにおけるモンゴル人の家族を研究するためにも有益な方法を提示するだろう。

モンゴルが属する北東アジア地域には、同じく体制移行を経験した大国ロシアや、今なお社会主義国家ではあるが市場経済に移行した中国が存在する。体制移行国家の都市家族論は、北東アジア地域においてこそ論じられるべきである。

#### 第四節 調査地域と調査の概況

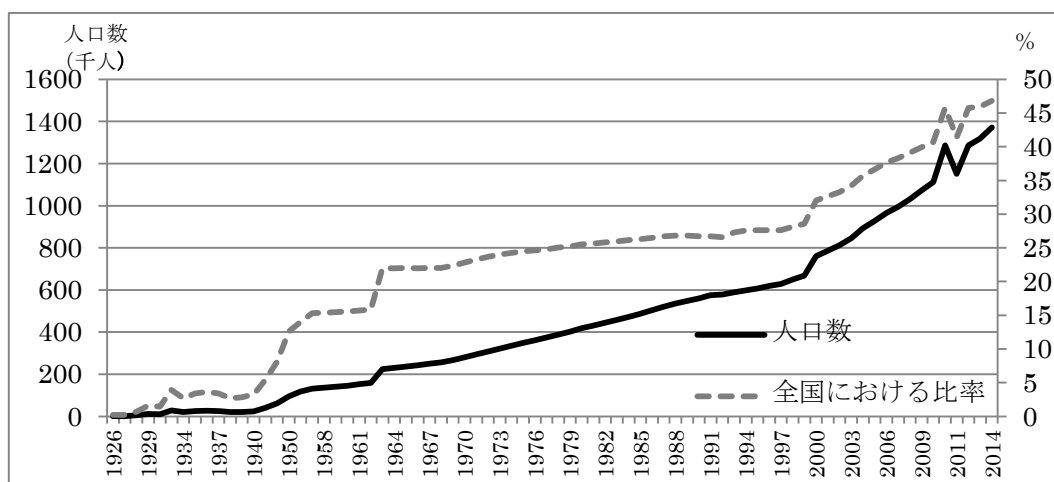
##### 1. 調査地域ウランバートル市の概況

本研究の調査対象はモンゴル国首都ウランバートル市の住民に限定する。ウランバートル市はモンゴル国の政治、経済、文化の中心である。17 世紀にハルハ・モンゴル人に尊敬されるチベット仏教の活仏であるジェプツンダンバ・ホトクトの居住地となり、当時はイフ・フレーと呼ばれていた。イフ・フレーは 1911 年「共戴モンゴル国」の首都として定められ、ニュースレル・フレーと呼ばれるようになった<sup>7</sup>。1924 年にニュースレル・フレーはウランバートル・ホト（赤い英雄の町）と改称されて、モンゴル人民共和国の首都となった。大正 9 年（1920 年）に書かれた『庫倫出張報告書』の記録では、当時の総人口は 64000 人に達するが、主にラマと各国の商売人で形成された人々の集まりだった。人口は合計 64000

<sup>7</sup> 漢字では「庫倫」と表記し、日本ではこれを「クーロン」と読んでいた。

人に達するが、モンゴル人は 32000 人であり、そのうちラマは 15000 人、俗人は 17000 人であった（大島 1920 : 5）。社会主義建設時期になると、ウランバートルの首都としての機能が健全化するとともに、居住人口は急速に増えた。

1990 年代の政治体制移行に伴って、地方<sup>8</sup>では多くの人が失業して、また牧畜協同組合からフリーになった牧民たちが都市へ、特にウランバートル市へ職を求めて移入することが続いた。2014 年現在、戸籍上の人口は 1,362,974 人であり、全国人口の 44.3% を占めている<sup>9</sup>。しかし、ウランバートル市には住民届けのないまま住んでいる人が多く、事実上の人数はこれをはるかに超えているといわれている。



図序 2 ウランバートル市人口数推移 (1926~2014)

出所) ウランバートル市統計データより筆者が作成。

## 2. 研究対象者をウランバートルに絞った理由

社会主義時代に工業化が進んで、民主主義時代に市場経済が浸透したウランバートルと、社会主義時代に集団化され、民主主義時代にネグデルが解散されてから遊牧業に戻った地方とでは、家族の在り方の差異が顕著である。先行研究によると、近代家族は近代化、産業化が進んで都市で形成された家族についての議論である（落合 2008 : 44~45）。モンゴル国の工業化は主にウランバートル、エルデネト、ダルハンの三つの都市で行われた。その中で、ウランバートルは首都として政府各部門、工場、学校などが建てられ、政府は労働力を確保するために地方から労働者を都市へ移入させて、首都の人口は続々と増加し、産業化がもっとも進展した。小長谷は社会主義近代化の中の産業化革命について述べる時、産業化の一つの軸は「草原ではないものが作られたこと。すなわち『首都建設』であり、

<sup>8</sup> モンゴル国では、首都ウランバートル以外の地域を *hödöö oron nutag*、日本語で訳すと「地方」と呼ぶ。本論文においても「地方」はウランバートル以外の地域を表す語として用いる。

<sup>9</sup> モンゴル国統計局ホームページ、「人口数、アイマク、首都別（年末人口数）」[*Hun amiin too aimag ,niislel, bairshlaar (ony etsesiin hun amiin too)*]。

中でも『首都における工場建設』は『工業化革命』である」と評価した（小長谷 2004 : 18）。民主化時代には人口の移動が自由になったため、ウランバートルに人口が続々移入して、全国総人口の半分がウランバートルに集まるようになった。また、生活習慣の変容をもっともよく反映するのは都市家族であるので、本論文もこの点を考慮し、都市家族に焦点を当てることとしたのである。

社会主義以前の時代には現在のウランバートル市にあたる土地には市民がほとんどいなかった。1920年代から人が集まりはじめ、都市建設は社会主義時代から行われた。よってウランバートル市民の家族生活史は、モンゴル国民の社会主義国家から民主主義国家までの歴史の流れを代表するという点も都市家族に焦点を当てる理由として挙げておきたい。

### 3. フィールドワークの概観

本論文で用いるデータは、筆者がモンゴル国の首都ウランバートル市で実施した「ウランバートル市市民の家族に関するアンケート調査」というアンケート調査と、聞き取り調査によって得られたもののうち、20歳から75歳までの男女の回答である。

#### 3-1. アンケート調査

アンケート調査は予備調査と正式調査からなり、2011年7月11日から同年10月18日までの期間に行った。予備調査は2011年7月14日から7月31日までに35問からなる調査票を作成、60部の調査票を配布し、43部を回収した（回収率は71.7%）。予備調査では、一部の調査対象者と直接会い、日本で設計した調査票がモンゴルの事実にあうかどうか、自分の仮説が検証されるかどうか、答えやすさなどの意見を聞いた。その結果、質問項目、回答を微調整して、あいまいな質問項目や答えにくい質問などを書き直して、モンゴルの実態により適合するようにした。ただしこれはあくまで予備的な調査であったので、得られた資料は本論文の分析には利用しなかった。

本調査は2011年8月1日から10月15日までに行った。本調査に用いた調査票も35問からなる。全300部を配布して、239部を回収し、うち有効調査票は237部だった（有効回収率は79.0%）。調査は便宜的抽出法を使った。本人が知人を通じて、職場、学校、自宅を訪問し、自ら配布してその場で回答をもらうとともに、調査協力者に頼み配布して留置調査を実施した。

調査対象は、ウランバートル在住の老若男女とした。何故なら、社会主義時代から民主主義時代の都市家族の変容を考察するために、その時代の経験を持つ人とあまり持たない人それぞれの家族の特徴を把握、比較することができるからである。

調査票の内容は以下のとおりである。

- ② 個人の属性に関する項目（出生年、教育、仕事など）
- ② 家族の特徴に関すること（同別居の状況、日常生活の支援関係など）
- ③ 家族成員の強い情緒的關係に関する項目

- ④ 子ども中心主義に関する項目
- ⑤ 夫婦の性別役割分業に関する項目
- ⑥ 家族の集団性の強化に関する項目
- ⑦ 社交衰退とプライバシーの成立に関する項目
- ⑧ 非親族の排除に関する項目
- ⑨ 核家族に関する項目
- ⑩ 婚姻の実態
- ⑪ 家族の個人化する傾向と関連する項目
- ⑫ 結婚観離婚観に関する項目
- ⑬ 子どもや家族についての意識に関する項目

この質問票を作る際には、大阪商業大学 JGSS 研究センター『データで見る東アジアの家族観』、『人口問題研究所 第 11 回出生行動基本調査』、「家族観について意識調査」などの質問項目を参考にした。以下、表序 1 はアンケート調査による調査対象者の属性を示すものである。

表序 1 アンケート調査による調査対象者の属性

	年齢	20 歳未満	20～29	30～39	40～49	50～60	60 歳以上	総計
男性	度数	3	20	13	7	7	2	52
	比率	60.0%	23.5%	21.0%	14.9%	25.0%	20.0%	21.9%
女性	度数	2	65	49	40	21	8	185
	比率	40.0%	76.5%	79.0%	85.1%	75.0%	80.0%	78.1%
総計	度数	5	85	62	47	28	10	237
	比率	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
婚姻状況								
未婚	度数	3	45	7	0	0	0	55
	比率	60.0%	52.9%	11.3%	0.0%	0.0%	0.0%	23.2%
未婚同棲	度数	2	4	0	0	0	0	6
	比率	40.0%	4.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.5%
初婚	度数	0	35	46	36	19	8	144

	比率	0.0%	41.2%	74.2%	76.6%	67.9%	80.0%	60.8%
再婚	度数	0	1	5	6	2	0	14
	比率	0.0%	1.2%	8.1%	12.8%	7.1%	0.0%	5.9%
離別	度数	0	0	4	2	0	0	6
	比率	0.0%	0.0%	6.5%	4.3%	0.0%	0.0%	2.5%
死別	度数	0	0	0	3	5	4	12
	比率	0.0%	0.0%	0.0%	6.4%	17.9%	40.0%	5.1%
総計	度数	5	85	62	47	28	10	237
	比率	100.0%	100.0%	100.0	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
初婚年齢の平均値								
平均値			21.7	24.4	23.7	22.6	21.3	23.2
学歴								
小学校	度数	0	0	0	1	0	1	2
	比率	0.0%	0.0%	0.0%	2.1%	0.0%	8.3%	0.8%
中学校	度数	0	0	0	0	0	2	2
	比率	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	16.7%	0.8%
高校	度数	3	22	6	5	6	0	42
	比率	60.0%	25.9%	9.7%	10.6%	23.1%	0.0%	17.7%
専門学校	度数	0	2	3	12	6	1	24
	比率	0.0%	2.4%	4.8%	25.5%	23.1%	8.3%	10.1%
大学	度数	2	53	33	16	11	3	118
	比率	40.0%	62.4%	53.2%	34.0%	42.3%	25.0%	49.8%
修士	度数	0	8	18	12	2	4	44
	比率	0.0%	9.4%	29.0%	25.5%	7.7%	33.3%	18.6%
博士	度数	0	0	2	1	1	1	5
	比率	0.0%	0.0%	3.2%	2.1%	3.8%	8.3%	2.1%
総計	度数	5	85	62	47	26	12	237
	比率	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
職業								
自営業	人数	1	1	5	4	1	1	13
	比率	20.0%	1.2%	8.1%	8.5%	3.9%	8.3%	5.5%
国家公務員	人数	0	27	49	35	17	2	130
	比率	0.0%	31.8%	79.0%	74.5%	65.4%	16.7%	54.9%



会 社 員	人数	0	2	2	3	3	0	10
	比率	0.0%	2.4%	3.2%	6.4%	11.5%	0.0%	4.2%
学 生	人数	4	50	3	0	0	0	57
	比率	80.0%	58.8%	4.8%	0.0%	0.0%	0.0%	24.1%
NGO	人数	0	2	1	3	0	0	6
	比率	0.0%	2.4%	1.6%	6.4%	0.0%	0.0%	2.5%
パ ー ト	人数	0	0	1	0	0	0	1
	比率	0.0%	0.0%	1.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.4%
退職	人数	0	1	0	1	5	9	16
	比率	0.0%	1.2%	0.0%	2.1%	19.2%	75.0%	6.8%
そ の 他	人数	0	1	1	0	0	0	2
	比率	0.0%	1.1%	1.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.8%
無 回 答	人数	0	1	0	1	0	0	2
	比率	0.0%	1.2%	0.0%	2.1%	0.0%	0.0%	0.8%
総計	人数	5	85	62	47	26	12	237
	比率	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

出所) 筆者の実施した調査により得られたデータである<sup>10)</sup>。

### 3-2. 聞き取り調査

聞き取り調査は2011年8月から10月、2012年8月から9月、2014年9月の計3回、延べ45人を対象に実施した。

2011年の聞き取り調査は2011年8月～10月の間に、8人の対象者に対して1対1で聴き取りを行った。対象者の自宅で2件、回答者滞施設で1件、対象者職場で3件、戸外で2件である。調査の内容は、社会主義時代と民主主義時代における仕事と生活の状況、近隣関係、親族関係、生活目標の変化などをたずねるものであり、体制移行が市民の日常生活に与えた影響について理解した。当時の状況や回答者の拒否などのため、やりとりの一部のみICレコーダーで録音できた。

2012年8月～9月に二回目の調査を行った。この時の調査では、対象者6人でのグループ聞き取りを一度のみ実施したが、それ以外は個人的に面接調査を実施した。対象者の同意を得てICレコーダーで録音した。聞き取り調査では、あらかじめ決めておいた質問項目に沿って、調査対象者に平均15分程度、自由に話してもらった。調査対象は、便宜抽出法、機縁法、雪だるま方式によって集められた。アンケート調査の際に聞き取り調査にも応じることに同意した人の中から選んだ。対象者の職場(会社、売り場、オフィスなどを含む)

<sup>10)</sup> 以下、出所をつけない図表は本人の調査によるオリジナルなデータによるものである。

で24件、筆者滞在施設で1件、対象者のハシャー<sup>11</sup>で5件、戸外で2件であった。

2014年の9月にはインターネットを通じて追加調査を行い、性別役割分業と性別役割分業観に関連する質問を2012年の調査の調査対象者2人と新たな4人、男女合わせて6人に聞いた。

以上の聞き取り調査対象者の属性をまとめると下の表の通りとなる。表の中でA～AGまでは2012年の調査を受けた対象者で、BA～BHは2013年に調査を受けた対象者で、CA～CDは2014年に調査を受けた対象者である。またYは三年間にわたって調査を受けた。ACは2012年と2014年の調査を受けた。

表序2 聞き取り調査による分析対象者の属性

番号	年齢	性別	出身地	居住状況	婚姻状況	世帯構成	学歴	職業
A	52	男	ウランバートル	集合住宅 <sup>12)</sup>	既婚	4人。本人、妻、子ども2人	高卒	自営業
B	50	女	フブスグル	集合住宅	既婚	2人。夫、本人	高卒	公務員
C	50	女	ウランバートル	集合住宅	死別	4人。本人、子ども3人	高卒	自営業
D	50	女	ウランバートル	ゲル地区 <sup>13)</sup>	既婚	3人。夫、本人、子ども1人	専門学校卒	自営業
E	49	男	ウランバートル	一戸建て	既婚	4人。本人、妻、子ども2人	大卒	自営業
F	48	男	ヘンティ	集合住宅	既婚	4人。本人、妻、子ども2人	大卒	公務員
G	45	女	トブ	ゲル地区	既婚	5人。夫、本人、子ども2人、義父		パート
H	44	女	ジャブハン	ゲル地区	既婚	6人。夫、本		パート

<sup>11</sup> ハシャーとは板で囲った空間である。ウランバートル市のゲル地区住民はゲルあるいは固定家屋を板を並べて囲いで住むのである。

<sup>12</sup> 集合住宅とは、都市中心部に有る近代的なアパートを指す。

<sup>13</sup> ゲル地区とは、モンゴル人の伝統的なテント式住居である「ゲル」あるいはレンガや木材で建てた固定家屋で暮らす人々が集中している、都市中心部の周囲に広がる地区を指す。

						人、子ども 4人		
I	43	男	バヤンホンゴル	ゲル地区	既婚	6人。本人、妻、子ども 4人	高卒	私立大学職員
J	42	女	ヘンティー	ゲル地区	既婚	5人。夫、本人、子ども 2人、姪 1人	中卒	自営業
K	--	-	-----	-----	-----	-----	-----	-----
L	42	女	ウランバートル	ゲル地区	死別	7人。本人、子ども 6人	専門学校卒	自営業
M	42	男	バヤンホンゴル	ゲル地区	既婚	5人。本人、妻、子ども 3人	大卒	公務員
N	41	女	ドンドゴビ	集合住宅	既婚	5人。夫、本人、子ども 3人	大卒	公務員
O	40	男	ウランバートル	集合住宅	既婚	2人。本人、妻	高卒	商売業
P	40	女	ウランバートル	ゲル地区	既婚	4人。夫、本人、子ども 2人	高卒	会社員
Q	39	男	ドロナト、生まれたすぐにウランバートルに戻った。	集合住宅	既婚	4人。本人、妻、子ども 2人	大卒	NGO
R	39	女	ウランバートル	集合住宅	既婚	4人。夫、本人、子ども 2人	高校	販売業
S	39	女	アルハンガイ	ゲル地区	既婚	4人。夫、本人、子ども 2人	専門学校卒	パート
T	38	女	ウランバートル	集合住宅	既婚	4人。夫、本人、子ども 2人	大卒	NGO
U	38	女	ヘンティー	集合住宅	既婚	5人。夫、本	大卒	無職

						人、子ども 3 人		
V	36	女	スヘバートル	ゲル地区	既婚	4 人。夫、本 人、子ども 2 人	大卒	商売業
W	35	女	ウランバートル	集合住宅	既婚	4 人。夫、本 人、子ども 2 人	大卒	商売業
X	31	女	ドロノゴビ	ゲル地区	既婚	4 人。夫、本 人、子ども 2 人	高卒	パート
Y	29	男	バヤンホンゴル	ゲル地区	既婚	4 人。本人、 妻、弟、弟の 彼女（2012 年、2013 年）	博士	公務員
Z	28	女	ウブルハンガイ	ゲル地区	既婚	3 人。夫、本 人、子ども 1 人。	大卒	商売業
AA	27	女	ドンドゴビ	集合住宅	既婚	3 人。夫、本 人、子ども 1 人。	大卒	商売業
AB	27	男	オブソ	ゲル地区	未婚	2 人。本人、 弟	大卒	公務員
AC	27	男	ウランバートル	集合住宅	既婚	3 人。本人、 妻、子ども 1 人。	大卒	会社員
AD	26	女	ジャブハン	ゲル地区	既婚	5 人。夫、本 人、子ども 2 人、夫の弟	大卒	NGO
AE	27	女	バヤンウルガイ	ゲル地区	既婚	4 人。夫、本 人、子ども 2 人、	-----	パート
AF	20	女	ウランバートル	ゲル地区	既婚	5 人。父、母、 夫、本人、弟	高卒。	大学生
AG	20	女	ウランバートル	集合住宅	未婚	6 人。本人、 母、姉 2 人、	高卒	学生

						兄 1 人		
BA	75	女	バヤンホンゴル	ゲル地区	死別	1 人	小学校	退職
BB	73	女	スヘバートル	集合住宅	既婚	3 人。夫、本人、子ども 1 人		退職
BC	73	男	スヘバートル	集合住宅	既婚	3 人。夫、本人、子ども 1 人	大卒	公務員
BD	67	男	ウブルハンガイ	集合住宅	既婚	2 人。本人、妻	大卒	公務員
BE	50 代	女		集合住宅	既婚	2 人。夫、本人	大卒	商売業
BF	47	女	フブスグル	集合住宅	死別	3 人。本人、子ども 2 人	大卒	自営業
BG	40 代	男	ウランバートル	集合住宅	既婚	3 人。本人、妻、子ども 2 人	専門学校	商売業
BH	37	男	フブスグル	ゲル地区	離別	2 人。本人、子ども 1 人	専門学校	商売業
CA	38	女	ドロナド	集合住宅	既婚	4 人。夫、本人、子ども 2 人	大卒	公務員
CB	21	女	ドロナド	集合住宅	未婚	不明	大卒	無職
CC	21	女	ドロナド	集合住宅	既婚	3 人。夫、本人、子ども 1 人	高卒	大学生
CD	20	男	ドロナド	集合住宅	未婚	4 人。父、母、本人、妹	高卒	大学生

本研究では、研究対象をその年齢によって、40歳以上と20～39歳と二つに区切る。40歳以上の方は政治体制移行期の1990年に20歳以上であり、社会主義時代の影響を強く受けた人々と考えられるので、社会主義時代の事例として扱う。20代と30代の回答者は1990年に0歳～10代で、社会主義時代の影響が弱いと考えられるので、民主主義時代の事例として考察を進める。その際、研究の便宜を考慮し、40歳以上の調査対象者のことを社会主義世代、20代と30代を民主主義世代と定義する。



### 3-3. 文献資料調査

現地では、文献資料の収集にも力を入れた。特に、社会主義時代に関わる資料はそもそも社会主義時代には公開されていないものが多く、公開されたとしても数もが少なかつたため、現在ではきわめて手に入りにくい。これらを集めることができようやく社会主義時代のモンゴルの都市家庭に関する研究が可能になった。調査では以下の資料を入手してきた。

- ① 社会主義時代の家族法
- ② モンゴル国の家族学に関する雑誌、本
- ③ 社会主義時代の家族に関する研究
- ④ 社会主義時代から民主主義時代までの統計年鑑
- ⑤ モンゴル国厚生労働省とウランバートル大学が 2009 年に実施した家族の現状の調査

そのほかに、2011 年にモンゴル国でアパートに住む家族で 3 週間、ゲルに住む家族に 1 週間住んで、生活空間の違い、家族のネットワーク関係の差異も体験した。

## 第一章 家内領域と公共領域は分離したのか

「近代家族」において一番の特徴とされているのが、家内領域と公共領域の分離である。日本では、職場と家族の分離は大正時代の大都市郊外における「新中間層」から始まり、彼らの家族は職場と家庭の分離を創出して公私を分離させ、住宅内部の公的空間と家族の日常生活の場である茶の間と居間とが画然と分離されているのが新中間層の住宅様式の特徴である（落合 2008：44～45）。西ヨーロッパでは「18世紀以後、家族は社会とのあいだに距離を持ち始め、絶え間なく拡大していく個人生活の枠外に社会を押し出すようになる。家の構造も、世間に対する防衛という新たな配慮に応じるのである。それはすでに、各室の入り口を廊下に面して設けることで各室の独立性を確保する。また同時に一家団欒、プライベート、孤立も生じたのである」（アリエス 2003：374）。

一方、遊牧社会を基盤とするモンゴルの都市における公共領域と家内領域の変容過程は、農耕生活から資本主義近代化を経験する国のように単純ではない。

『二十世紀のモンゴル』という本に労働英雄として紹介されているミンジュール氏のインタビューでは、

広大な素晴らしい土地の上で数少ない私有財産を有する者たちが召使いを使って生活していたのです。（小長谷 2004：93）

移動の際は召使いもともに移動させます。一緒に連れて行きます。その家庭の家族の人数によって一つのホト・アイルに含まれる家庭の数は異なります（中略）夏の盛りにはホト・アイルはサーハルト<sup>14</sup>同士だけで宿営します。冬は多くの家庭が一緒になり、冬営地に宿営します。冬営地にはたくさんの家庭が宿営するのです。食事を作ってから、冬はよく遊びます（中略）または物語を聞きます（中略）語り部を各家庭が交代で招待し、物語をしてもらい、家に泊まってもらいます（中略）他人の家で食事をします。自宅でも食べていましたが、他人の家に行ってその家の食事を食べることはしょっちゅうでした。（小長谷 2004：103-104）。

と、自身の目で見かけたのモンゴルの牧民社会とその生活を回想している。以上の証言でわかるのは、社会主義時代以前の富裕層には召使いがいたことである。富裕層はその召使とそれぞれゲルに住んでいて一緒に移動した。夏は二、三世帯で移動するが、たくさんの家族で冬を一緒に過ごし、ホト・アイル同士は生活を共にすることが多かった。これらから、昔からの生活様式を空間的にいえば、①ゲルという小さい空間に核家族で住む、②ホト・アイル、サーハルトごとに移動して生業と生活を共にする、③ゲルごとにまとまって住むが、ホト・アイル同士の交流はオープンである、以上のようなことが理解できる。

<sup>14</sup> 近隣の牧畜仲間の家族という意味。



以上を前提知識として、以下では、住居空間の構造、生活の場と職場の関係の二つの方面から公的領域と家内領域の分離について検討する。

## 第一節 社会主義時代の家内領域と公共領域

### 1. 住居空間の構造

社会主義国家モンゴル人民共和国成立後、モンゴル人民革命党はモンゴル人民共和国の労働者階級を代表する政党として政権を握った。人民革命党は遊牧を遅れた生活様式であるとし、近代工業国家を目指して定住化を推進した。ウランバートル市はモンゴル人民共和国の政治、経済、文化の中心都市とされ、工業化により労働者が急激に流入し、首都の機能が充実して、都市化が進行した。1960年代からウランバートル市はソ連の援助で住居用の集合住宅を建設し始め、集合住宅の群れが市の中心部で形成された。

1962年の朝日新聞の記事には以下のように述べている。

ウランバートルはモンゴル語では『赤い英雄』の町を意味するそうだが、旅行者たちは『白い町』だという第一印象をうける。緑の草原の中に立ち並ぶ建物のほとんどが、白か、白に近い明るい壁の色にしてあるからだ。周囲の山腹や近郊の原っぱに散在している白いフェルトのパオ<sup>15</sup>は夏の間は市民のダーチャ（別宅）だそうだが、市街地の目抜きとおりの裏側には、また市民が常住している薄汚いパオの密集地帯があり、板がこいしてある。しかし『ウランバートルの面目は一新した。再来年には市の改名四十周年を迎えるが、それまでに首都はさらに美しい外観と充実した内容を整えるだろう』とルフサンチョインボル市長は語った。同氏によると、昔ウルゴと呼ばれていた時代のこの町は、あちこちに緑と朱塗りのラマ寺が点在するだけで、あとは古ぼけたパオばかりの、まるっきり汚い町だったらしい。これが第一次、第二次五カ年計画と、つづく三カ年計画によって、急速に近代化され、新しい工業地区が出現し、住宅建設が進み、水道、下水、中央暖房、電化施設も整えられてきた。都市計画によると、現在の第二次五カ年計画では、さらに住宅建設のテンポを早めるとともに、学校、幼稚園、商店、劇場、大衆食堂その他の文化、福祉的諸施設を増設することになっている。（（上）首都は急速に近代化\_\_変容するモンゴル『朝日新聞』1962年8月8日、朝刊3頁）

1962年の記事に記録されているのは、当時のウランバートル市は都市建設により街並みができ始め、市街地のゲルは板で囲まれていて、市街地の周囲にはゲルが散在している状態で人々が住んでおり。建物の裏側には板で囲われたゲルの集落があり、ゲルが周囲の山

---

<sup>15</sup> パオまたは包<sup>パオ</sup>とは中国語で、帳幕またはゲルという意味である。

腹まで散在していることである。また、1969年の記事には、

モンゴル人の生活が一変しようとしている。ウランバートル市の住宅建設は、一見したところでも、なかなか大がかりなものだ。私の周囲を取り巻く大きなソ連式のブロックを積み上げた8, 9階建の集合住宅群が、あちこちに並び始めている。最も町のはずれには、大地にはいつくばったような包（パオ）の大集団が見られる。黄塵を巻き上げて襲う風をよけるために、パオの周りをボロ板で囲っているのだが、それが一層みじめで汚らしい。政府も、非衛生的なこのパオを一掃しようと躍起になっている。第四次五カ年計画（1966-70年）では、モンゴル全土で55万～56万平方メートルの住宅を建設することが予定されているほか、個人でも政府住宅資金を借りて、家を建てるのが奨励されている。しかし、モンゴルの工業化とともに、牧畜人口の青年層が、工業労働者として都会に吸収され、パオからアパートに移ってゆく。住居形態の変化はまた生活意識の変革をも招く。アパートをすすめても強硬にパオに残ろうとする老人も多い。（「パオからアパートへー文明開化のモンゴル」、朝日新聞、1969年5月19日、朝刊3頁）

1969年にはソ連式のアパートの群がたくさん建てられていると同時に、個人が家を建てることを支持する政策を取っていたが、ゲルに住む人も少なくないことが記録されている。「東西に通る鉄道に並行した道路に沿って集合住宅を主体とする計画的な市街地が形成され、その北側には幕舎ゲルが立地するゲル地区が形成されていた。伝統的な移動住居であるゲルは社会主義時代、住宅としては認められておらず、ゲル地区は集合住宅に建替えるかあるいは排除されるべき存在とみなされていた」（鳴海 2011：22～23）。この先行研究でもゲル地区を排除して、住民を近代的な住宅に住ませる動きがあったとみている。しかしエンクバヤルは、

モンゴルは、社会主義もしくはトップダウン政権の下で70年間発展してきた。この制度の下、住宅は政府の負担で供与され、国民は各機関を通じて家具付きアパートを与えられたが、その結果、従業員の住宅確保には順番待ちができていた。家具付きアパートの供給数には限りがあったために、多くの住宅はゲル地区におかれた。当時、政府の政策では、ゲル居住地区を町から移転させることを主眼としていたが、その試みはほとんど実行されなかった（エンクバヤル 2011<sup>16</sup>）。

と述べ、人民革命党の指導を受ける政府の政策が実行されず、住民のアパートは政府が供給していたが、多くの人々がゲル地区に居住していたことになっていたことを紹介している。

---

<sup>16</sup> エンクバヤル.Ts. (2010)「モンゴルにおけるコミュニティ主導のゲル地区向上過程の開発」環日本海経済研究所ホームページ。

さらに 1989 年の新聞記事には、

モンゴルの首都ウランバートルの中心部には、政府機関の立派な建築物が立ち並んでいた。市内には五、六階建ての集合住宅も林立していた。しかし、周辺部の丘には、小さなバラック小屋の住宅が軒を寄せ合って、何百軒もひしめいていた。人口の急激な都市集中で、住宅難が深刻らしい（初めての社会主義国―深海流、『朝日新聞』、1989 年 9 月 27 日夕刊 3 頁）。

とあり、ウランバートルの景色を市街地の集合住宅の群と周辺の丘に広がるゲル地区が広がっていると記録している。調査対象者 AC の父は建築家である。彼によると

都市の中心部にあるゲル地区の住民は板でゲルを囲いでハシャーを作って、周囲と区切っていた。都市の中心から離れている住民のゲルは板で囲まれていなかった。

と証言している。つまり、都市中心部のゲル地区の住居は板で囲まれて独立したスペースのあるものだったが、市街地の周縁の山腹に広がるゲルはハシャーがなくて散在していた。言い換えれば、都市中心部におけるゲルはハシャーという板囲いでつくられた空間で外部から切り離れた生活をしていた。

以上の記事と証言からわかるのは、1960 年代から社会主義が崩壊するまで、ゲル地区は集合住宅群の周辺から周辺の丘まで広がっていた。国家は首都の住居形態を改造するために、集合住宅の建設を推進した。住民に国の負担で住宅を供給しても、供給数に限りがあるため、一部の人は住めず、多くの都市民はゲル地区に居住していた。都市民に固定住宅を建てることを勧めて<sup>17</sup>も、人々の住居の習慣によりゲル地区が広がり続けていたことが分かる。このように、モンゴル人民共和国時代のウランバートル市には集合住宅地区とゲル地区が共存していた。

ゲルの内部は何らかの仕切りや壁などで区切られていないため、一つのゲルは料理をする、食事をする、客をもてなす、眠る、育児するなど多目的で使われる。しかし、ゲルには水道が通っておらず、風呂、トイレがない。一方、集合住宅には上下水道が備わり、風呂、トイレなど水道関係の設備が整備されている。家の中にはリビングルーム、寝室、キッチン、トイレなどが区画されている。ゲルに住む家族と集合住宅に住む家族の生活様式には大きな違いがあった。

集合住宅には上下水道、中央暖房、電化施設が整えられていたため、たとえばトイレのために屋外に出るなど外部での行為に頼ることのない快適に過ごせる私的な場所となった。

---

<sup>17</sup> 「勤労者に個人住宅建設のために長期貸付けを与え、建設資材の供給も非常に増加した。この事業のために、1957 年だけでも、勤労者に交付する 1 年～10 年期限の貸付けは 70 万トゥグリクあまりになった」（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988 : 271）。

ゲルに住む人はゲルで炊事し眠るが、空間が狭く、水道やトイレなどのインフラもなく、多くのことをゲルの外で行わなければならなかった。この時代、ゲル地区の住居空間構造は、都市中心部のゲル地区が木の板で囲われて近隣から遮断されたハシャーを単位に生活し、市の周囲にあるゲル地区はハシャーがなくゲルを単位に生活しているという特徴があった。ハシャーを持つ家族はハシャーによって外部から分離しているが、ゲルを単位に生活している家族はハシャーがないため外部から分離していなかった。また、ゲル地区にはインフラ設備がないため、ハシャーのある都市中心部のゲル地区であったも完全に外部から分離できない状態にあった。

## 2. 国家に所属する家族

家内領域と公共領域の分離には、住居空間の構造だけではなく、生業と家庭との分離も含まれる。

モンゴル人の従来の経済基盤は牧畜である。第二次世界大戦後の1947年にモンゴル人民革命党第11回党大会が開かれ、第一次五カ年計画（1948～1952）によって社会主義化を推し進めることを目指した。ソビエト連邦の技術と資金の援助で、都市では工業を発展させ、牧畜地域においては社会主義生産関係を確立するために農牧業協同組合化を進め、労働者と組合員を生産労働へ全面的に参加させるために、「59年末には、牧民経営の99.3%、全家畜の73.8%が集団化された。（中略）58年に一経営あたり平均62頭ほどだった家畜が再度の共有化ののちには14.6ボトすなわち33頭となり、ほぼ半減された」モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988：143）。このように地方では家畜の集団化がすすめられ、第二次五カ年計画の時に「基本的生産手段（土地、天然資源、工業、運輸、銀行、貿易など）が国有化された」（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988：144）。1960年には社会主義的生産関係の完全な勝利を宣言し、さらに1965年に「諸工業の近代化は、基本的に完了した。（中略）第三次五カ年計画で工業面において達成された成果は我が国が農牧業一工業国から工業一農牧業国へと変化する上で重要なステップとなった。（中略）これらの成果と勝利の結果、わが社会と民主主義制度が非常に強化された。社会は労働者階級、協同化した牧民階級、労働インテリゲンチヤという社会主義的階層だけから構成されるようになり、労働者階級と協同化した牧民同盟は新しい質的基盤の上で強化された」（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988：279）。当時国家権利の最高機関大ホラルの代議員であり、大ホラル休会中の常設機関小ホラルのメンバーでもあったツェデンバルは1969年11月に「現在、社会は労働者階級と協同組合牧畜民という二つの友好的階級および人民インテリゲンチヤから成り立っている」（ツェデンバル 1978：370）と書いていた。

このような、計画経済の下での国有化によって、遊牧民が協同組合の労働者になった。一方、「1972年に人民大会の主席の決議案で、初めて都市という概念について定義した。1972年の人民大会の決議で、行政機関があり、工業化が進んで、6000人以上常住して、人口の多数が牧畜業以外の業種で働いている、人口が集中している所を都市と呼ぶと説明した」

(Mongol ulsiin shinjileh uhaanii akademi tuuhiin hureelen2004: 339)。このように都市という概念が規定されて、社会主義建設のために牧地を離れてウランバートルで働いていた人々が都市民となった。都市民は、労働者と労働者の中の知識人として国営の工場、機構で働くようになった。こうして自給自足の牧民のある者は賃金労働者になった。彼らの生業は地方の遊牧地帯では家の内外で行われていた状態から家庭と職場が分離されて公的場所で働くようになった。即ち、公共領域と家内領域が分離した。

1940年に行われたモンゴル人民革命党第10回大会では、「党は、人民の意識、政治知識、文化教育水準をしだいにあげ、マルクス＝レーニン主義イデオロギーの影響範囲をさらに拡大することが最も重要であると見なしていた」(モンゴル科学アカデミー歴史研究所1988: 227)と標榜し、イデオロギー、文化教育面での党の指導的役割を強調した。そして、家族の役割、家族関係などが1952年の初めての家族福祉法、1973年の新しい「家族法」によって規定され規範化された。そして1976年のモンゴル人民革命党第17回大会で「社会主義的生活様式」という生活規範を提出して、これは「民衆が共同に生活するときの最高の形態である。また国民の働き、社会—政治行動、思想、家族、余暇の時間、生活環境など生活の各方面を含める広い範囲に及ぶ問題である」(モンゴル科学アカデミー2004: 320)と指摘し、人民革命党はこれをもって社会生活を規範化し、国民はよりよい社会を建設するために家庭の安定状態を守るべきだと定めた。たとえば、結婚と離婚も職場の党組織の幹部らに認められなければならなかった。当時離婚は許可されない行為であった。聞き取り調査に答えたBBの証言によれば、当時の社会では離婚は許されず、もし浮気した場合には組織の幹部に批判され、もし離婚した場合には職場を解雇されるので、あえて離婚をしなかった、と語った。またQは「離婚すれば、党に追いかけてられます。また昇進もできません。なぜかという、家族が安定していないとの言い回しの言葉がありました。たとえば、就職するとき、あなたは就職できません、なぜならあなたは離婚した人です、といわれます。昇進する時、あなたの家族が安定していないので昇進できない、といわれます。それは党の幹部らによりチェックされています」と語った。「結婚しても子どもが生まれなかったり、いつまでも独身でいると税金をとられる。その額は月給の2.5%であ」った(坂本1961: 108)。離婚、出産など家庭内部の事情と思われることが、社会主義時代には職場によって管理されたり評価されたりした。このことは、以上の証言と文献で十分に証明されている。このことから、社会主義時代には、「家内領域」と「公共領域」の境界が明らかではなかったと言える。

社会主義時代の先行研究によれば、「社会主義的生活様式で生活する例がたくさんのグループに見られる。このようなグループは社会的労働に貢献しているに限らず、浴場、托児所を作って、子どもの教育に注意して、家事労働をできるだけ減らして、余暇をもっと効果的に過ごして、教養を高めている。一人ひとりを労働させて、植樹し、環境を整え、皆の食堂を作り、幼稚園を建て、子どもを気分のいいところで育てている」(Ulaanaa 1980: 79)。「公共炊事、裁縫仕事、洗濯掃除、育児などを各種のサービス業として増やし、家事

に電気製品を導入して、托児所、幼稚園、学校の寮を増やすなどで、その問題を解決しているのは党と国家からの母子に対する愛護の一部分である」(Purevdorj 1981 : 74)。このようなことが社会主義時代のモンゴルでなされたという。国が労働者に対してこのようなさまざまな援助を与え、家事を公共事業の中に包摂することは、モンゴルの遊牧社会では家内領域にあるはずの家事、育児、炊事を公共領域の社会福祉の一環として提供されていることを意味する。社会主義は、人民を帝国主義・植民地主義による抑圧と搾取から解放した功績をアピールするとともに、間接的に家族に介入していた。生活上は家事、育児などが集団的な行為になっていく過程で、「私」が「公」に含まれていくようになり、国家に所属する家族となったのである。

以上をまとめると、社会主義時代の都市家族は、①住居空間の構造は、都市化建設につれて、移動性を持つゲルによって分散して暮らす生活から特定のところに固定されて定住するようになったが、外部から切り離された状態ではなかった。②集合住宅に入った一部の人が、空間的に外部から切り離された生活を営むようになった。③生産、生業は家内領域から切り離され、全員が労働者になって、職場と生活の場が分離された。④国家、政党の統制によって家族に対するイデオロギーの介入、家族への福祉政策を積極的に推進していた。その過程で「私」が「公」に含まれる状態にあった。よって、「家内領域」と「公共領域」は分離されなかった。

## 第二節 民主主義時代の家内領域と公共領域

### 1. 住居空間の構造

社会主義時代のウランバートルは、ソ連の援助により集合住宅群が市の中心部に建てられ、その周りにゲル地区が広がる構造を持つようになった。社会主義崩壊後、地域間の移動が自由になったため、地方で遊牧をしていた人々はウランバートルに移動してきた。そのとき彼らが携えてきたのが、彼ら自身が地方で使っていた(住んでいた)ゲルであった。彼らはゲルを都市の周囲、知人のハシャー内、空き地などあらゆる場所で建てて、そこに居住することとなったのである。

ここで、現在のウランバートルの住居空間構造を説明しておく。単純化すれば、上にも記したように、集合住宅群が市の中心部にあり、その周りにゲル地区が広がっている。これを詳しく述べると次のようになる。すなわち、集合住宅群はウランバートル市街地の中心部と中心部から南のトール川までの空間にある。ウランバートルの市街地の中心部に旧住宅の群があり、新住宅群は中心部から南へ広がっている。ゲル地区は社会主義時代に市街地の中心部に計画された空間にあり、社会主義崩壊後は中心部から周辺への道路沿いを中心に広がり、今は都市周辺の丘状の地域に広がっている。主に西南、西北、北、東北、東方向に広がっている。

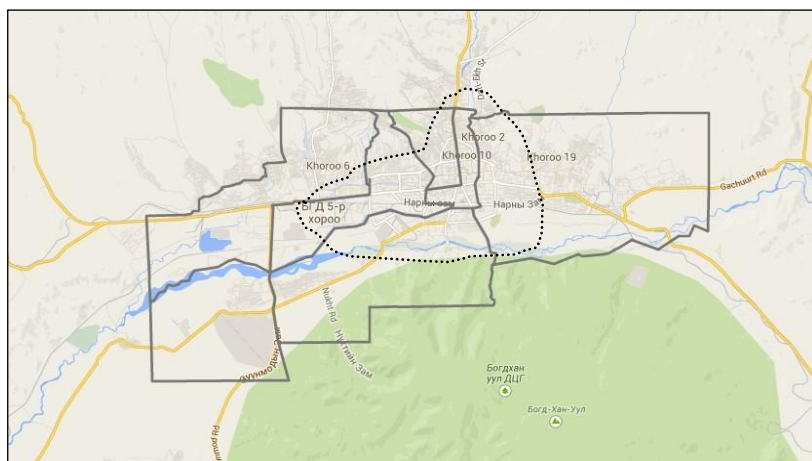


図 1-1 ウランバートル市地図

出所) グーグル地図により筆者が作成した。

図 1-1 はウランバートル市の地図である。実線はウランバートル市内の区境を示す。点線の中のエリアは集合住宅地区であり、その周囲に広がるのがゲル地区である。図 1-2 は 2005 年から 2012 年まで建てられたゲル、個人住宅と集合住宅の軒数である。

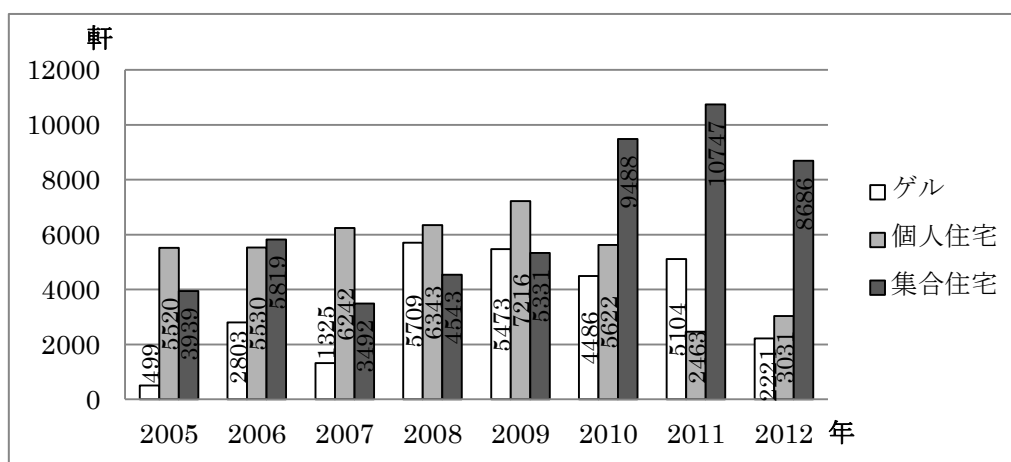


図 1-2 ウランバートル市住宅種類別新たに建てられた住宅数 (軒) (2005~2012 年)

出所) Niislelin hün amiin oron suutsnii hangamj2012、ウランバートル統計局ホームページのデータにより筆者が作成。

図 1-2 から読めるのは、社会主義時代に建設された都市を基盤として成っているウランバートル市では、ゲル、個人住宅と集合住宅ともに増えているが、2010 年から集合住宅の建築スピードが急激に増加して、2009 年に 5331 軒、2010 年に 9488 軒増え、その後の 2012 年に少々落ち 8686 軒増えた。ゲル、個人住宅の数は 2009 年に増加のピークに達したが、その後ともに減少する傾向にあった。

表 1-1 をみると、1995 年に集合住宅居住世帯は全世帯の 53.7%を占めていたが、2012 年になると 40.2%まで減って、ゲル地区に居住する世帯は 1995 年に全世帯の 46.3%だったが、2012 年は 59.8%まで増えた。

表 1-1 ウランバートル市の総世帯数と集合住宅地区居住世帯、ゲル地区居住世帯の比率

年	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002		
総世帯数 (千人)	135.8	139.4	142.3	145.1	160.5	167.2	170.6	177.2		
集合住宅地区居住世帯 (%)	53.7	52.4	51.4	51.6	51.2	50.6	51.0	51.0		
ゲル地区居住世帯 (%)	46.3	47.6	48.6	48.4	48.8	49.4	49.0	49.0		
	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
	192.9	205.5	215.7	226.9	234.7	251.8	273.2	294.4	306.8	317.1
	52.0	41.5	41.4	40.4	39.4	38.6	38.8	39.9	40.0	40.2
	48.0	58.5	58.6	59.6	60.6	61.4	61.2	60.1	60.0	59.8

出所) ウランバートル統計局公式ホームページにより筆者が作成。2010 年 4 月 7 日、2014 年 10 月 25 日アクセス。

図と表を合わせてみると、集合住宅の軒数が増えた一方、ゲル地区に居住する世帯数も増えている。その原因について、ウランバートル統計局は「近年は集合住宅が増え、2009 年に集合住宅地区の住民数が 4 万戸増えたが、地方からの移入者により人口が減らない状態を保っている。2014 年は全世帯の 57.9%がゲル地区、42.1%が集合住宅地区に住んでいる」(Hün amin amidarch bui orchin nöhtsöl2014 : 1) として、ウランバートルの人口が絶えず増えることは地方からの移入者の増加が原因だと分析した。

ゲル地区の人口、世帯が増えるのは二つの形がある。一つは、広がりつつある都市の周縁にゲルを搬入する形であり、もうひとつは、ゲル地区に住む人のハシャーに自らのゲルを搬入する形である。たとえば G は自分の境遇について下のように語っている。

G: 今地方からまた家族が来て、その人に「あなたのハシャーに入らせてもらえますか」と言われたら、「入って、入って」と言い、入らせます。

筆者が観察調査のために住んでいた Y のハシャーの事情をみると、Y は 2001 年に進学するため父と弟とともにウランバートルに移入してきて、シャル・ハドというところにゲルとハシャーを建てて住んだのが初めてであった。その後、父が死に、2004 年から祖母が地方から上京、それに続いておじさん、おばさんが故郷から続々と来て、2012 年には 6 世帯が一つのハシャーに住むようになった。





①ゲル地区の住居



②市街地から遠く離れたキャンプ場

図 1-2 ゲル地区の住宅

出所) 筆者撮影、2008年7月。

図 1-2 はゲル地区の住宅の様子である。その①に見えているように、ゲル地区の住民はゲルだけではなく、煉瓦や木でも個人住宅を作っている。一つのゲルや個人住宅に一つの家族が住むことが多い。住まいの周りを木板で囲い、周囲の市街から切り離された自分たちの空間を作る。これがハシャーの形である。民主主義時代のゲル地区の住民はハシャーに振られた番号を住所として居住している。現在のゲル地区は、都市中心部から都市周縁部、周囲の山々まで広がっている。周囲の山々におけるゲル、夏に住む臨時のキャンプ場もお互い板で囲んで、周囲から区切っている（図 1-2②）。民主主義時代になってゲル地区におけるハシャーは増加し、ゲル地区はこのようにみなハシャーを持つようになった。

ゲル地区の住居の特徴は、第一節でも書いたように、インフラ設備が足りないことである。ここではトイレの整備状況を例に見てみよう。

表 1-2 ウランバートル市の住居の中でのトイレの事情

		比率
トイレ		100.0
<b>住宅の内部にある</b>		<b>38.1</b>
	他の家族と一緒に使う	5.0
	他の家族と一緒に使わない	33.1
<b>住宅の外部にある</b>		<b>60.9</b>
	他の家族と一緒に使う	34.3
	他の家族と一緒に使わない	26.6
<b>固定的な場所がない</b>		<b>0.9</b>

出所) Niicleiin khün amiin oron suutsnii khangamj2012、ウランバートル統計局ホームページ。

表 1-2 には、ウランバートル市に住む全世帯のトイレの事情の割合を示している。全世帯の 38.1%が住宅の中にトイレがあるが、全世帯の 60.9%は住宅の外にトイレが置かれている。他の家族と一緒に使う家族はトイレが住宅の内外にある場合を合わせた全世帯の 39.3%を占める。上にも述べた Y のハジャーには今は 6 世帯が住んでおり、6 世帯は二つの木造トイレを使っている。それは屋外にあり、6 世帯の人々が共同で使っている。

以上をまとめよう。政治体制が社会主義から民主主義へと転換して以降、ウランバートル市の住民の数は集合住宅とゲル地区ともに増加しているが、ゲル地区に住む世帯の比率が多く、ここが地方からの移入人口の主な受け皿となっていることを裏付けている。ゲル地区の住居空間構造の特徴は、住民が木造の板で囲われ近隣からは遮断されているハジャーを単位に生活している、つまりハジャーによって外部から分離された状態にあるということである。ゲル地区にはインフラが完全に整備されていない。このため、生活上欠かせない行為をハジャー外やハジャー内の共有施設で行わなければならないので、公共領域から完全に切り離されている家内領域は成立していない状態にある。

## 2. 家族に所属する家族

1990 年の社会主義崩壊に伴い、大規模の企業が民営化して (ロッサビ 2007 : 84)、政府は社会福祉、保健医療、教育などの公共サービスを切り捨て、小さな政府を目指し、すみやかに経済と社会的サービスへの関与を縮小することが望ましいとされていた (ロッサビ 2007 : 206~207)。そして集団食堂、育児支援キャンプ、学生寮など社会的集団的なサービスが停止された。その客観的な結果として、家事、育児を家族の機能に戻した。これによって、社会主義時代には完全には分離していなかった公共領域と家内領域の分離が実現されたと考えることができる。一方、社会主義政権が崩壊したことの影響の一つは、人民革命党の一党独裁がなくなり、結婚、離婚、そして第四章で述べるように子どもの出産に対する束縛がなくなり、家族成員が自らの意識で家族の成立、家族の人数、家族の終了など

を計画できるようになったのである。こういう意味で公共領域と家内領域が区別されるようになり、家族は国家に所属する家族から家族に所属する家族となった。

家内領域のことに属する「家事」、「炊事」と「子育て」などの事柄が家族から離れているかどうかをたずねてみると、「家事」、「炊事」を社会に任せることはないとの答えが多く聞かれた。聞き取り調査での正式な質問項目とはしなかった「よく外食をしますか」という問いを五人に向けたところ、

G：たまに（外食します一筆者補）、祝日に外食します。

N：私の家族は旅行や外食が好きです。自分たちが休みを作って外で食べます。

U：外食はしなくて、家で食べます。外で食べた料理は料理にならないからです。

AF：少ないです。誰かの誕生日に行くぐらいです。

V：たまに行きます。祝日の時に外食します。

との答えを得た。以上の証言からわかるのは、外食はモンゴルでは普及しておらず、祝日や休みの日でないと家族で外食することはほとんどない。Zのように、家族で外食が好きという人もいるが、夫婦共働き家族にとっては休みを作らないと外食の時間を作れない場合もある。また、「外で食べた料理は料理にならない」という意見には、炊事を社会や市場に任せることはモンゴル人の習慣になりきっていない現状が反映されているといえる。現地調査を行う際に住んでいた Y、CA の家族が外食する、あるいは外から料理を買ってきて食べることは全く観察されなかった、約六カ月の滞在時間の中で、滞在した家族と一緒に外食したことは一度だけで、それは3月8日の婦人の日に CA の夫の親族の5世帯がレストランで集まって、祝日を祝う時だけのことであった。

育児をみると、「首都における去年の状況でみると、小学校入学前の人口数は 89240 人、この中で小学校入学前の教育を受けている児童が 59711 人（国立幼稚園に 50825 人、私立幼稚園に 8886 人）いる。これが 2~5 歳の児童の 66.9%を占めている」<sup>18</sup>。この事例をみると、ウランバートルの児童数の 66.9%が幼稚園に入っているが、残りの 33.1%が幼稚園に入れないのである。幼稚園、托児所のみではなく、公立学校も増えている<sup>19</sup>が、市民の需要に間に合わないため、学校は一日二交代<sup>20</sup>、一日三交代制<sup>21</sup>を取って、児童・生徒たちは一日の午前、午後あるいは夕方だけ学校に通い、多くの時間は家族と一緒に過ごしている。

<sup>18</sup> モンゴル教育文化科学省ホームページ「首都の国立幼稚園に児童 50825 人が入園できる」[niisleiin hemjeend toriin omchiin tsetserlegt 50825 huuهد hamragdna]。

<sup>19</sup> Bolovsroliin Uilchilgee2013 : 3

<sup>20</sup> たとえばウランバートルにある「新モンゴル小・中・高等学校」が二部交代制を実施している（外務省ホームページ「諸外国・地域の学校状況」）。

<sup>21</sup> 情報サイト Montsame、Tuul.B(2015)「首都では 21 校が 3 部交代制で授業をしている」[niisleld 21 surguul 3 eeljeer hicheellej baina]。情報サイト wikimon(2013)「三部交代制で授業をしている児童の両親が失業に瀕している」[gurvan eejeer hicheelleh ni etseg ehchuudiig ajilaa aldahad hurgej baina]。

以上の事例からみると、民主主義時代になってからのウランバートル市では、家事、炊事、育児などは国家が担う社会福祉から家庭に戻り、家事、育児、炊事は家族によって担われることが前の社会主義時代より多くなったのである。

民主主義時代においても、市の中心部に集合住宅群があり、その周りにゲル地区が存在するというウランバートルの住居空間構造には変わりなく、集合住宅は空間的には外部から分離した状態を保っている。一方のゲル地区はみなハシャーを持つようになり、これを単位とするが、インフラの整備が不十分であるため、完全な家内領域は依然として形成されていない状況にある。一方、政治体制移行期の社会と経済の混乱により、国家による福祉サービスがなくなったため、家事、炊事、育児などが家族に戻り、家族の機能が公共領域から分離され家族に戻った。社会主義を標榜する政党による一党独裁が終了することにより、家族内部のことがイデオロギーに管理されなくなり、家族は家族の成員である夫婦により計画できるようになり、家族が公共領域から分離した、つまり、「私」を「公」から分離した結果になった。

### 第三節 「家内領域」と「公共領域」の分離の変容とその後の行方

#### 1. 住居空間の構造の変容

以上、社会主義時代から社会主義崩壊後の民主主義時代の「公共領域」と「家内領域」が分離しているかどうかを分析した。

モンゴルで都市家族が現れたのは社会主義時代からのことである。社会主義時代以前の社会においては、開けた草原でゲルを持ってホト・アイルを組んで移動する生活をしていった。ホト・アイル内でお互い助け合って、冬になるとより多くの家族が集まり、家族と家族の境がはっきりしていなかった。社会主義時代になると、都市に入った人の一部は集合住宅に入居し外部から分離し始めた。ゲルで定住化した人も少なくなかった。市街地において定住したゲルはハシャーで外部から区切られたが、市街地の周縁に散在するゲル地区にはそのような区切りがなかった。

民主主義時代には、集合住宅は国営から個人に属すようになった。集合住宅の数も増えたが、地方からの移入者が多すぎた上、そのような移入者の収入が少ないためもあって、ゲル地区は拡大しつづけた。集合住宅に住む人は家屋によって外部から切り離された状態にあるが、ゲル地区に住む人々はハシャーを生活単位として、ハシャーにより外部から切り離されている状態にある。

ゲルは遊牧社会の伝統的な住宅である。ゲルでの生活は多少不便と思われるが、遊牧民が長年にわたって住み続けてきた住居なので、ゲルやそこでの生活がモンゴル人の中から消滅することは考えにくい。ゲル地区に人口が集中する現象は、地方から都市に移入する人口の増加と彼らの収入不足という原因もあるが、ゲルの移動の便利さ、販売価格の安さ、ウランバートルの不動産物件の値段の高さを考えると、ゲル地区と集合住宅地区が今後ま

すます共存していくことが予想される。地方からウランバートルへの移入が止めどなく続くなれば、ゲル地区の拡大とゲルでの定住は残るであろう。ゲルの空間が狭隘なため、ゲル内へのインフラ導入が制限され、したがってハシヤの共同体から分離するのは難しい。

今後、ゲル地区の住宅環境を整えるために政府がインフラを整備することが期待されている。これがもし成功するならば、現在のゲル地区内にちらほら見えている煉瓦造住居は、外部から切り離されたプライベート空間になるはずである。実際、最近の富裕層は、集合住宅やゲルから去り、水道とトイレが整備された「ハウス」と呼ばれる煉瓦造りの別荘に住むようになってきている。ここで一つの事例を挙げると、アンケート調査対象者である知人は上下水の通った郊外でウランバートル市から電気や暖房の提供を受け、インフラを整えたハウスに住んでいる。その一階には玄関とキッチン、二階にリビングと寝室、三階と四階に寝室が設置され、階ごとにトイレがあるため、生活行為が家屋の中で完成できていた。ハウスを建てられるような経済的に恵まれた者であれば、ゲル地区でのインフラ整備が進んだ段階でハウスを建て、生活行為をハウスの中で完全に行うことができるようになり、外部から切り離された家内領域を形成しうることであろう。現在、ウランバートル市、国際連合人間居住計画、日本の国際協力機構などの国際機構がゲル地区の改造、ゲル地区でのインフラ整備に積極的に取り組んでもいるところであり（国連ハビタットホームページ「『ゲル地区』に住む人々の生活改善を目指して」、日本国国際協力機構ホームページ「ウランバートル市上下水セクター開発計画策定調査」（2014））、富裕層が家内領域を形成するのはそう遠い将来の話でないだろう。しかし、広大なゲル地区の全てにインフラが設備されたとしても、生活行為の全てを家屋の中で行えるようなハウスを建設するのは、経済的に恵まれないゲル住民にとっては難しいことであろう。ゲル地区を含めたウランバートルに住む家族が家内領域を形成するのが普遍化するのはまだ先の話である。

## 2. 「公」「私」分離の変容

近代化以前、職場は家庭内部にあって、職業と家事労働は同じ場所にあった。資本主義下の産業化により、職場は家庭外に移り、家庭・家族はプライベート領域となった。このように「近代家族」と「市場」は近代社会の生み出した「二重規範」である（落合 2002 : 14）。「<近代家族>は近代市場にその参加者である近代的個人（『人間』）を供給する装置である」（落合 2000 : 19）。「市場と家族の分離を保持し、それぞれの機能が十全に遂行されるように規制するのが、近代国家の役割だ」（落合 2000:19）。近代家族は市場に「現在の『成人男性』、将来的には現在の『子ども』を供給する」（落合 2000 : 19）。このような落合の論を別の角度から捉え直せば、育児と家事が近代家族の機能であるということになる。

第一節での分析を踏まえると、近代家族論でいう家庭と職場の分離はすでに社会主義時代のモンゴルの家族に出現していた。社会主義工業化により、近代化建設がはじまるとともに、生産を集団化させ、ホト・アイルで生業を営む遊牧民らは近代化建設に参加する者である個人を社会の労働者の一員とした。職業は公共領域で行って、家庭は私的領域にな

り、職場が家庭から離れた。

女性を職場に行かせるために、家事、炊事、育児などが国家による社会福祉として社会的なサービスになった。社会主義国家が家族の内部まで浸透して、結婚、離婚、出産などの事情に関与して、家族を強くコントロールしていた。このように家族という私的領域の一部が政府の社会福祉の一環として存在していた。社会主義の崩壊によって国家が福祉機能を放棄したため、家事労働、育児が各家族に戻り、「私」が「公」から離れ、家内領域と公共領域の分離が実現した。

以上、住居空間の構造、生活の場と職場の関係の二つの方面から公的領域と家内領域の分離について検討した結果、本章の仮説となる「家内領域と公共領域の分離」は社会主義時代には成立しなかったが、民主主義時代で成立したことが明らかとなった。

## 第二章 夫は公共領域・妻は家内領域という性別役割分業

### であるかどうか

産業革命以前の家族は自給自足の生活であって、職住は近接しており、農作業の合間に子どもに乳を与えたりするなど、家事や育児のために家に帰ることは、比較的に容易であった。男性も女性も生産労働と再生産労働の両方をシェアしていた。ところが産業革命を契機に、人々の家族生活は一変する。多くの賃金労働者が工場などに働きに出るようになり、家庭という生活の場と職場が分離した。距離的な乖離以上に大きな影響を家族生活や男女の性別役割分業にもたらすことになった（野々山 2009:95）。産業化が進むと、経営体としての「家」は衰退し、「『人間』供給のために必要なシャドウ・ワークを遂行する仕組みとして成立したのが、性別役割分業である」（落合 2000:20）。「家内的領域 (domestic sphere) は女、公共的領域 (public sphere) は男が担う」のは近代という時代の産物である（落合 2000:15、2008:iv）。日本においては「第一次大戦後の好況期、産業化の急速な進展により、大組織の管理的労働を担う『俸給生活者』が大量に生み出されました……会社員は教師、官吏などと共に『新中間層』と呼ばれます。彼らは、大都市郊外に新しくひらかれた郊外住宅地に住み、そこからこれまた新しく敷設された市電に乗って職場まで通勤するという、新しい生活様式を創出しました。このような職場と家庭の分離、いいかえれば、公私の分離があつて初めて、妻は夫の留守を守る『おくさん』になったのです」（落合 2008:44～45）。野々山、落合の論述によれば、日本の家族は第一次世界大戦後の産業化により家内領域と公共領域が分離したことが男女の性別役割分業をもたらしたのである。

瀬地山角はかつて社会主義であった東アジアの社会主義圏の近代化における夫婦の役割分業について「しばしば女性は労働力として外にかり出された上に、家事分担も担わなければならないという意味で、典型的な二重負担に苦しむ場合が出てくる。さらにもともと二人で働かなければ生活できないような貧困圧力がかかって、女性が労働市場へと引っぱり出されている面もあるために、既婚女性のなかには、男性の稼ぎが増えれば家庭に入りたいという層もある程度存在する」（瀬地山 1996:81）という。したがって、なんらかの形で脱社会主義化したときに「高収入の層では主婦も誕生する」と主張する（瀬地山 1996:82）。

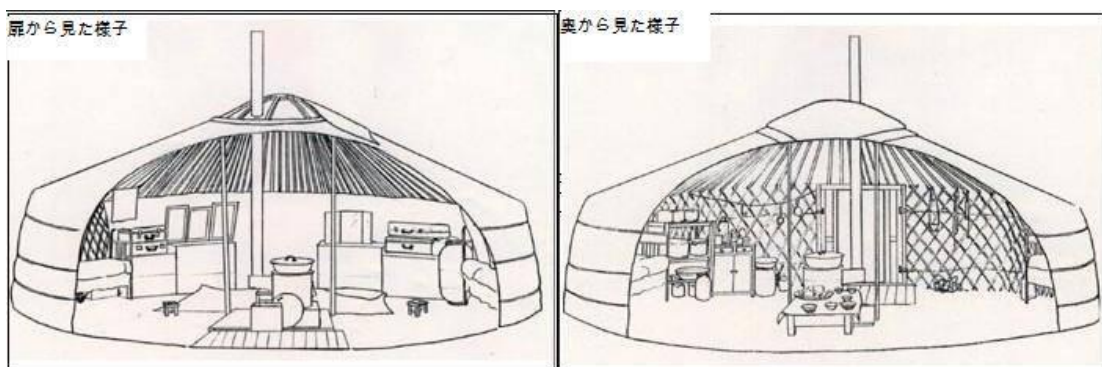


図 2-1 ゲル内部の構造

出所) ウェブサイト谷中自然史博物館。

モンゴル人の夫婦の役割分業はその伝統的住まいであるゲルの中の夫婦の空間分配に示されている。ゲル（図 2-1）は円形で直径 4~6m ほどの居住空間である。ドアは一般に南向きで、伝統的な様式のゲルは右半分が夫の居住空間、左半分が妻と子どもの居住空間である。中央にかまどを置いて、暖をとり、料理をするのに使う。かまどの北側はゲルの上座であり、主人が座るところである。ここには女は近づくことができない。客は右半分に座る。炉は東側を正面にするように置かれており、妻の側から扱いやすいようになっている。妻の座る左半分には炊事の道具、乳製品を作る道具、食材などが置かれ、妻の作業場でもある。

先行研究によれば、遊牧地域におけるモンゴル人は「家庭の筆頭者である夫は、家庭生活と関係する問題を自ら解決し、体力が求められる重労働（家畜の放牧、荷を運んで狩りをする、など）を行っていたのに対し、家庭生活においてはその妻が少なくない義務を果たしていた。ただし、家畜の売買は二人で決めることであった。女性は家事をする、ミルクを用意する、乳製品を作る、家族全員の衣服を縫う、編む、育児する、小家畜（羊、山羊一筆者補）を放牧するなどのことをしていた。もし夫が狩りに行ったら妻が家の内外のすべてのことを担っていた」（Dondog 1977 : 50）とされている。夫婦の空間がこのように分かれているとともに、性別による役割もわかれている。

本章では、落合のいう「近代家族」の諸特徴の中の「男は公共領域、女は家内領域という性別役割分業」がモンゴルの社会主義時代と民主主義時代に現れていたか／現れているかどうか、先行研究によれば遊牧生活では夫婦には性別役割分業があるとされるが、社会主義時代や民主主義時代には夫婦の役割がどのように分けられたか／分けられているか、現在の夫婦の役割分業の実態に遊牧生活と社会主義時代が影響したかどうかを検証する。



## 第一節 社会主義社会における夫婦役割分業

### 1. 夫婦役割分業の理想像

モンゴルでは、社会主義時代に男女平等の法制化や男女が等しく労働することはすでに実現されたことになっている。先行研究によれば「女性自身が収入を得ることで女性の平等意識と自立意識を高めた」（鯉淵 2005 : 54）。社会主義国であったモンゴル人民共和国は、社会主義建設が本格的に始まった時に、夫婦共働きの社会システムを作り、家族に対して社会主義規範を非常に強く押し付けた。1960年の憲法第7章第76条では「モンゴル人民共和国公民は、性別、人種、民族、信仰、社会的出身によって差別されることなく平等の権利を有する」（「モンゴル人民共和国の新憲法」（下）1961 : 25）、第7章第84条では、「モンゴル人民共和国の婦人は、政治・経済・社会・行政管理・文化の全部門において男子と同一の権利を享有する」（「モンゴル人民共和国の新憲法」（下）1961 : 26）など、男女平等が憲法に書かれた。1973年の家族法では、結婚者の義務について15条の第2項に「お互い平等に家事労働に参加し、お互いが教育レベル、技術水準を高め、国民が役割を忠実に果たすために助け合う義務がある」（*Bügd Nairamdah Mongol Ard Ulsyn Ger Büliin huuli*1973:12）と定めた。1976年に党中央が発布した「社会主義的生活様式」には「社会主義的生活習慣、人々の暮らし、家族関係を調整するのに重要な役割がある。家族の結成、離婚は社会主義的生活様式と関連がある。家族が平等的な関係を基盤に、二人で話し合っ決めては社会主義家族のあり方である」（*Ulaanaa* 1980 : 10）、「家族の中で、母、女性を尊重し、家事を全員で協力して行う習慣があるべきだ」（*Ulaanaa* 1980:11）、1988年の家族法の解釈では「家庭、家庭内部関係に残っている時代遅れな風習をなくすことは家族法の一つの目的であると第一章に指示している」（*BNMAUyn Ger Büliin Huuliin Delgerengüi Tailbar* 1988 : 7）とあり、1988年の家族法の解釈では「家庭、家庭内部関係に残っている時代遅れな風習をなくすことは家族法の一つの目的であると第一章に指示している」（*BNMAUyn Ger Büliin Huuliin Delgerengüi Tailbar* 1988 : 7）とあり、「家族の基本についての第三項目、結婚する事をお互いの自由で決めた第九項目、結婚者の平等権についての第五項目、子育て、子どもの教育での父母の平等的な権利と義務があるなどたくさんの項目を例挙できる」（*BNMAUyn Ger Büliin Huuliin Delgerengüi Tailbar* 1988 : 7）と解釈している。このように、男女の社会的な平等、家族内部の家事や育児の平等が法律にも定められ、妻の家事を減少して、家事、育児を夫婦が平等に行うのが義務として提唱された。

国が女性をもっと安心して職場に行かせるため、国が家事を公共サービスに入れ<sup>22</sup>、女性の負担を減らす政策を出す一方、夫の家事参加を呼び掛け続けた。社会主義時代の離婚の原因についての研究では「家族離婚の主な原因は、男性の軽はずみな行為によるものが多くみられるが、25歳以前の女性の軽はずみによる原因も観察されている。夫婦関係の軽はずみによる離婚の原因を詳しく見ると、多くの場合は男性が家事に参加したくない、家事を女性一人に任せること、とくに育児に参加しないことによる場合が多い。その一方、愛情は堅固ではなく、感情が脆いために家族の中で喧嘩することによる離婚もある」

(Püevdorj1981:39) と、夫が家事、育児に参加するかどうか婚姻の存続に関わることであると指摘している。

以上の先行研究からわかるのは、人民革命党により指導されたモンゴル人民共和国政府は男女の平等を法律で定めて、共働きを促進するために、家事の一部を国の福祉サービスに入れて、残った家事を夫婦ともに担うことを提唱していた。

## 2. 夫婦役割分業の実態

### 2-1. 男女の労働力率

男女の社会進出の実態を知るために、まず性別労働者数をみってみる。表2-1は1969年、1979年、1989年に行った国勢調査により統計された労働力者を男女別に示すものである。

表 2-1 国勢調査によるウランバートル市性別労働力者数

年	労働力数		男性		女性	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率
1969年	94678	100.0%	54069	57.1%	40609	42.9%
1979年	146265	100.0%	79108	54.1%	67157	45.9%
1989年	228490	100.0%	117208	51.3%	111282	48.7%

出所) ウランバートル統計局ホームページ、2014年7月8日アクセス。

上記の表から、全労働者の中の女性の比率は1969年に42.9%であったが、1989年に48.7%まで上昇したことが分かる。

<sup>22</sup> 「労働者、公務員、特に母親が働ける条件を保障するために、托児所や幼稚園が建設されはじめた」(モンゴル科学アカデミー歴史研究所1988:261)。「都市居住地の整備、街路や広場の改修、公共サービス機関の建設に国家は膨大な資金を投じている。ナライハ[炭鉱]、織物工場、トルゴイト煉瓦工場、野菜栽培農場などの工業企業に付属して、労働者住宅、学校、病院、幼稚園、商店、食堂、公衆浴場などの公共サービス機関が利用に供された」(モンゴル科学アカデミー歴史研究所1988:271)。「公共炊事、裁縫仕事、洗濯掃除、育児などを各種のサービス業として増やし、家事に電気製品を導入して、托児所、幼稚園、学校の寮を増やすなどで、その問題を解決しているのは党と国家からの母子に対する愛護の一部分である」(Purevdorj1981:74)。

聞き取り調査では、対象者の女性に当時の社会進出の状況について聞きとった。

BA：19歳で結婚して、20歳に子どもを産みました。ネクデル<sup>23</sup>で仕事をしました。銀行の会計、お金を数える仕事を20年やりました。そこから退職しました。その（銀行の会計になる一筆者注）前は商店の店員でした。……ソム<sup>24</sup>の行政機関にいました。ソムにはソム長、ソムの秘書長、代理長三人いました。ソムの秘書長として20、30年働きました。

BB：1962年に食品の工場に入りました。1995年に退職しました。

BE：社会主義時代に夫とモンゴル科学アカデミーで働いていました。

BF：社会主義時代に専門学校で裁縫の技術を勉強しました。卒業後に地元の工場で裁縫していました。

D：国营デパートで働いていました。

C：工場で働いていました。われわれの工場は大きな工場でした。……元々は工場で27年間働きましたよ。

L：私は昔の初等専門学校を卒業しました。教員、看護師など中等技術者を育成する学校です。そこを卒業して、国家機関で2年間働きました。……昔は小学校の先生でした。

CAの母親（69歳）：社会主義時代にドロナド省にいました。ネグデルの食堂でシェフを務め、（CAの一筆者補）父親はソムの会計係でした。

続いて全国規模での女性の就業状況を下の表に見よう。

表 2 - 2 国民経済産業における女性労働者、従業員数

	女性労働者、従業員数(千人)	全労働者、従業員の中の女性の比率(%)
1960年	43.4	30.8
1970年	80.6	40.3
1980年	149.2	46.2
1985年	200.4	51.3

出所) BNMAU-yn uls ardiin aj ahui 65 jild 1986 : 32。

表 2 - 2 はモンゴル人民共和国の国民経済産業における女性労働者、従業員数と全労働者、従業員の中の女性の比率を表すものである。統計データで表わすように女性労働者、従業員

<sup>23</sup> 「ネクデル (negdel)」とは、和訳すれば農牧業協同組合の意味。モンゴル人民共和国では農牧業の集団化を推し進め、1927年にホト・アイルの代わりにネクデルを設立した（モンゴル社会科学アカデミー1988：303）。

<sup>24</sup> 「ソム (sum)」とはモンゴルの行政単位であり、日本の郡にあたる。日本の県に当たるアイマグ (aimag) の下位単位である。

員者の比率が1960年の全労働者、従業員の30.8%を占めていたが、社会主義時代末期の1985年には51.3%にまで増えた。

以上の証言とデータから、調査対象者の女性が社会主義時代に働いていたと証言したものである。社会主義時代には、都市においても遊牧地域においても共働きが普及しており、夫婦ともに就職して、公共領域に進出していたことが明らかである。

## 2-2. アンケート調査による夫婦の役割分業の実態と役割分業観

### 2-2-1. 家事における夫婦の役割分業

以上のような状況を踏まえて、夫婦の役割分業の実態を考察するため、家事労働の中の「掃除と洗濯」と「炊事」の二つの項目を取り上げる。炊事、掃除、洗濯は家事の代表である（山田1994a:143）。炊事は家事の中で最も時間がかかり、掃除・洗濯とは違って毎日行うべき家事である。アンケート調査表では家内領域の役割分業について「掃除と洗濯の頻度」と「夕食を作る頻度」を尋ねた。

被説明変数は、男と女が「洗濯・掃除」、「夕食を作る」を行う頻度である。各項目の行う頻度について、週6~7回=6.5回、週3~5回=4回、週1~2回=1.5回、月1~3回=0.5回、三か月1~2回=0.125回、年に1~3回=0.042、年1回もない=0.00回に換算している<sup>25</sup>。なお本章では、夫婦間の家事における役割分担の実態を考察する際、回答者の内の初婚、再婚を含む既婚者のみを分析対象として扱い、離別、死別した対象者は分析対象から除いた。

表2-3は40代以上の分析対象者の洗濯、掃除を示すものである。「週6~7回」と答えた男性は14.3%（2人）、女性は30.8%（16人）。「週3~5回」実施すると答えた男性は35.7%（5人）、女性は28.8%（15人）、「週1~2回」実施すると答えた男性は28.6%（4人）、女性は26.9%（14人）、そして「月1~3回」と回答した男性は14.3%（2人）を占め、女性は7.7%（4人）を占める。年に1回もしない男性は1人がいて、男性の中の7.1%を占めるが、女性は4人がいて、女性の中の7.7%を占める。男性の平均値は2.857であり、女性の平均値は3.606である。回答者の女性の方が男性より洗濯・掃除を実施する頻度が高いのである。

---

<sup>25</sup> 中央値を取った。

表 2-3 40 代以上の分析対象者の洗濯・掃除実施頻度<sup>26</sup> n=66

性別	男性				女性				総計
	年齢	40-49	50-59	60-69	合計	40-49	50-59	60-69	
週 6-7 回	1	1	0	2	8	5	3	16	18
	14.3%	16.7%	0.0%	14.3%	25.0%	33.3%	60.0%	30.8%	27.3%
週 3-5 回	3	2	0	5	9	6	0	15	20
	42.9%	33.3%	0.0%	35.7%	28.1%	40.0%	0.0%	28.8%	30.3%
週 1-2 回	2	2	0	4	10	3	1	14	18
	28.6%	33.3%	0.0%	28.6%	31.3%	20.0%	20.0%	26.9%	27.3%
月 1-3 回	0	1	1	2	3	1	0	4	6
	0.0%	16.7%	100.0%	14.3%	9.4%	6.7%	0.0%	7.7%	9.1%
全然しない	1	0	0	1	2	0	2	4	5
	14.3%	0.0%	0.0%	7.1%	6.3%	0.0%	40.0%	7.7%	7.6%
合計	<b>7</b>	<b>6</b>	<b>1</b>	<b>14</b>	<b>32</b>	<b>15</b>	<b>5</b>	52	66
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

次に表 2-4 で対象者の夕食を作る頻度を見てみる。男性 15 人中、週に 6~7 回夕食を作る人は 6.7% (1 人)にとどまっているが、女性 49 人中の 42.9% (21 人) が週に 6~7 回夕食を作ると答えた。週に 3~5 回夕食を作る人が男性の中の 33.3% (5 人)、女性の 24.5% (12 人) を占める。週 1~2 回夕食を作ると答えた男性は 46.7% (7 人)、女性は 28.6% (14 人) を占める。表からわかるのは男性の中の週に 1~2 回夕食を作る人が一番多いが、女性の中の週に 6~7 回夕食を作る人が一番多い。夕食を作る頻度は男性の平均値 2.508 が、女性の平均値が 3.826 である。夕食を作る頻度は女性の頻度より高いことが分かる。

<sup>26</sup> 本論文での集計では無回答、非該当を除外して、有効分析対象者のみを入れた。

表 2-4 40 代以上の性別年齢別夕食を作る頻度

n=64

性別		男性				女性				総計
年齢 (歳)		40~49	50~59	60~69	合計	40~49	50~59	60~69	合計	
週 6~7 回	人数	0	1	0	1	11	7	3	21	22
	比率	0.0%	16.7%	0.0%	6.7%	36.7%	46.7%	75.0%	42.9%	34.4%
週 3~5 回	人数	2	3	0	5	8	3	1	12	17
	比率	33.3%	50.0%	0.0%	33.3%	26.7%	20.0%	25.0%	24.5%	26.6%
週 1~2 回	人数	3	2	2	7	10	4	0	14	21
	比率	50.0%	33.3%	66.7%	46.7%	33.3%	26.7%	0.0%	28.6%	32.8%
月 1~3 回	人数	1	0	0	1	1	0	0	1	2
	比率	16.7%	0.0%	0.0%	6.7%	3.3%	0.0%	0.0%	2.0%	3.1%
年に 1~3 回	人数	0	0	1	1	0	0	0	0	1
	比率	0.0%	0.0%	33.3%	6.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.6%
年に一回も ない	人数	0	0	0	0	0	1	0	1	1
	比率	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	6.7%	0.0%	2.0%	1.6%
合計	人数	6	6	3	15	30	15	4	49	64
	比率	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

掃除・洗濯と炊事の頻度についての調査の結果、女性の洗濯・掃除を行う頻度は男性より高いことが分かった。

#### 2-2-2. 育児参加における役割分業

次に、40 代以上の人々のかつての育児参加について分析する。アンケート調査では「子どもの教育に誰が主に担っていますか」について複数回答を求めた。

その結果を表 2-5 に示す。61.8% (27 人) の回答者が子どもの父親、85.5% (28 人) が子どもの母親と答えた。母親の参加が父親より 23.7 ポイント高い。両親以外には 19.7% (15 人) の回答者が先生、11.8% (9 人) は祖父母が育児に協力していると答えている。40 代以上の各年代の回答者が母親の参加が父親より多いと回答している。年代別にみると 60 歳以上のの人の中に両親の助けをもらわなかった人の比率が高いことが分かる。

表 2-5 アンケート調査対象者の育児参加（複数回答）

n=76

年齢（歳）		父親	母親	兄、姉	祖父母	先生	合計
40～49	人数	27	38	8	8	8	44
	比率	61.4%	86.4%	18.2%	18.2%	18.2%	100.0%
50～59	人数	14	18	4	1	5	23
	比率	60.9%	78.3%	17.4%	4.3%	21.7%	100.0%
60 以上	人数	6	9	0	0	2	9
	比率	66.7%	100.0%	0.0%	0.0%	22.2%	100.0%
総計	人数	47	65	12	9	15	76
	比率	61.8%	85.5%	15.8%	11.8%	19.7%	100.0%

さらに夫婦間の育児分業をしてみる（表 2-6）と、有効回答者 76 人の中の 46 人が夫婦で子育てをして、60.5%を占める。3.9%を占める 3 人は夫が一人で育児をし、27.6%を占める 21 人が妻だけが育児をしたと答えた。

表 2-6 夫婦間でみる育児参加 n=76

	夫	妻	夫婦	総計
人数	3	21	46	76
比率	3.9%	27.6%	60.5%	100.0%

育児についての調査結果をまとめると、調査対象者の家庭において、夫婦協力して子育てをしている家族が多い。夫婦間でみると、妻は夫より子育てをよくしている。

### 2-2-3. 性別役割分業観に関する考え

まず、アンケート調査では夫婦の役割分業観を調べるために、「夫は仕事を担って、妻は家事を担うべきである」、「男性もできるだけ家事をするべきである」、という二つの意見に対する賛成の程度を聞いた。

まずは「夫は仕事を担って、妻は家事を担うべきである」という性別役割分業観に対する答えを見てみよう。

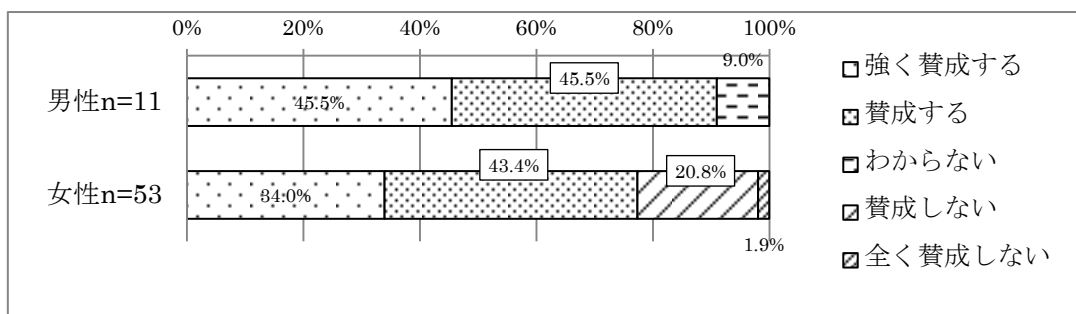


図 2-1 男女別「夫は仕事を担って、妻は家事を担うべきである」に対する賛否 (40歳以上) n = 64

図 2-1 をみてみると、「強く賛成する」と答えた人が男性の 45.5% を占め、女性の 34.0% を占めている。「賛成する」と答えた人が男性の 45.5%、女性の 43.4% を占める。この二つを肯定派としてひとくくりにすると、男性の方が 91.0% を占め、女性の 77.4% を上回っている。そして反対派をみると、男性の中に「賛成しない」と「全く賛成しない」と答えた人がいないが、女性の中の 20.8% が「賛成しない」、1.9% の人が「全く賛成しない」と答えた。

「男性もできるだけ家事をするべきである」という問いは、男性の家事参加についての観点を尋ねる質問項目である。

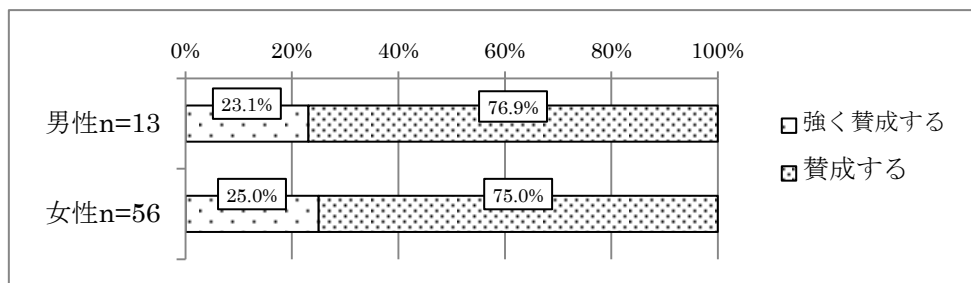


図 2-2 男女別「男性もできるだけ家事をするべきだ」に対する賛否 (40歳以上)

n = 69

図 2-2 に示されているように、40 代以上の調査対象者は 23.1% の男性と 25.0% の女性が「強く賛成」し、76.9% の男性と 75.0% の女性が「賛成」している。男女問わず反対する者がいない。

性別役割分業観に関するアンケート調査の結果をまとめると、男性回答者の 91.0%、女性回答者の 77.4% が、夫は仕事を担って妻は家事を担うべきであるという性別役割分業観に賛成している。男性の家事参加には全員が賛成しているのである。

### 2-3. 聞き取り調査の結果の分析



### 2-3-1. 家族の中の役割分業

聞き取り調査では、「家族の中での夫と妻の役割は何ですか」と質問した。回答者が家事に関して答えなかった場合には、「家事はだれが担っていますか」と重ねて尋ねて回答を求めた。

まずは、主に妻が家事、炊事を担当する家族を見る。

A：妻が家事をします。私は外で働きます。

F：妻が家事をします。私は家事をしません。自分の仕事をして、家に帰ったら休みます。私は商売をして、子どもの教育に使うお金を与えます。子どもの学費を払います。

上の2ケースは妻が家事、炊事を主に担当すると答えたケースである。この2ケースは夫が答えたものである。調査当時には共働き家族であった。回答者は仕事をする、外で働くと自分の役割を主張している。以上の2ケースの対象者の男性には家を養う役割を担っているという認識がある。引き続き次の例を見よう。

N：夫と私はほぼ同じです。私の家族は平等的です。夫が強いか、妻が強いということがありません。（問：家事は誰がしますか。）今は昼に働いていて夜遅く帰るので、息子が料理をして待ってくれています。私は朝に家事をします。家事は私が調整します。夫は家の柱なので、家庭を全体的に把握します。家事はよくはしていません。茶碗なんかは置かれてあればそれを片づけます。

Nは女性で、家事の担い手であり、夫が家事をよくしない理由は一家の柱としての存在であると答えた。夫は家の主だという考え方を持って、家事をよくしなくても我が家は「平等」だという意識を持っている。

B：（問：あなたは家事をしますか。）そうですね。細かいことは私がして、外のことや内のことは夫がします。料理は時間がある人がします。早く帰宅した人がします。

D：（問：ご家族の中での夫と妻の責任は何ですか）妻が家庭の中のことを調整します。夫が家計を管理します。（問：夕食はだれが作りますか。）交代で作ります。（問：家事はだれがしますか。）子どもたちがします。

E：（問：ご家族の中で、どのように役割を分担していますか。）同じ程度です。私が多くやった、おまえは少ない、とか言わないで2人でします。（問：料理はだれがしますか。）2人がします。（問：家事は。）妻がよくします。

P：家事は夫婦間で調整してやります。

G：暇な人が（しませぬ一筆者補）。ある時は夫がして、ある時は妻がします。

O：妻が炊事をして、家事をします。私の役割はビジネスを営むことです。……（問：料理は誰がしますか。）最近、私がやる時が多くなっています。妻は10時まで働いています。私は早く帰ってしてしまいます。

以上は夫婦で調整して炊事、家事をすると答えた5ケースである。Bは50歳で、子育て期を終え、今は夫婦二人で暮らしている。まだ仕事をしていて、家事の中の「細かいこと」を妻がして、それ以外は夫がしていると答えた。また、料理は早く帰宅した人がしているので、夫婦は家事で協力していると言える。Dは「妻は家の中のことを調整する」、夕食は「交代で」やっているというので、決まった担い手がいないようである。Eの家族では夫婦の役割分担は同じぐらいと答え、どちらが多く担っているかは意識しないようである。Pは「夫婦間で調整」と答えた。Gは「暇」な人が家事をすると答えた。Oに、夫婦二人にはどのような役割がありますかと聞いたところ、「妻が炊事をして、家事をします」と答えたが、数問の後に再び料理の担当者を聞いてみると、妻の帰宅する時間が遅いため夫が最近よく炊事をしていると答えた。家事や炊事は妻の役割だという認識はあるが、実際には妻の帰宅時間により調整して行っていることが分かる。

次の2ケースは夫が主に家事を担うケースである。家族の中に役割分業がなく、調整している。

M：私はすべての家事をします。

J：妻は家庭の内部を整える、子どもをしっかり育てる役割があります。（問：家事は誰がしますか）私が常にナラントーラ（市場一筆者補）に行くので、夫は常に家にいます。家で（販売用の服作りを一筆者注）やるので、夫が家事をします。

Mの妻は料理人で、夜10時ごろ帰宅する。学校の先生であるMが家事を担っている。Jは妻が家庭の内部のことを整えるといっても、実際には夫のほうが家にいる時間が長いので、夫が家事をしている。この2ケースでは、妻が仕事で忙しく、夫が家によくいるので家事や炊事を担うことが多いと証言している。そのほか、次のように、子どもが家事を担うと答えた人もいる。

I：（夫婦一筆者補）2人とも仕事があります。子どもが大きくなったので子どもがやっています。

H：今は子どもたちが大きくなったので、子どもがしています。

I、Hは子どもが担っていると答えた。

2012年の調査に応じたA、B、C、D、E、F、G、H、I、J、L、M、N、O、Pの回答から、現在の家内領域の役割分業は次の5つのパターンに集約できることが分かる。

第一は、夫は公共領域を担い、妻は家内領域を担いながら公共領域に進出する、夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割意識を持つパターンである。A、Fはこのパターンに当てはまる。

第二は、夫も妻も公共領域と家内領域を担う、夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業意識を持つパターンである。このパターンはNのみが当てはまる。Nは夫婦が平等であると考えているが、実際には妻は家事の担い手であり、夫の家事参加が少ない。Nは、夫とは一家の家主という意識をもち、夫に対して家事を頻繁にすることに期待していない。

第三は、夫も妻も公共領域と家内領域を担う、平等な役割分業意識を持つパターンである。B、D、E、P、G、Oのケースは夫婦で家内領域のことを担っている。

第四は、夫は公共領域と家内領域を担い、妻は公共領域を担う、夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業意識を持たないパターンである。M、Jが当てはまる。彼らは夫婦の在宅時間により家事を調整している。

第五は、夫も妻も公共領域を担う、夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業意識を持たないパターンである。I、Hが当てはまる。夫婦ともに働いて、大きくなった子どもが家内領域を担っている。

### 2-3-2. 育児における役割分業

40歳以上の対象者に「子どもの教育は誰が主に担っていますか」と尋ねた。下の4人は母親が主に子育てをすると答えた。

A：(子どもの一筆者補) 母親が主に担当しています。

F：(子どもの一筆者補) 母親が主に担当していました。

P：もちろん(子どもの一筆者補) 母親です。

L：(専門学校を) 卒業して2年間働きました。そして、市場経済に移行して職場を離れました。(問：昔は何をしていましたか。) 昔は小学校の先生でした。(問：学校までなくなりましたか。)(移行期には一筆者補) 学校はありました。(問：なぜ職場を離れましたか。) 私も結婚して、たくさんの子どもを産みました。それから子どもの世話をし家において、夫は仕事をするようになりました。当時、給料も少なかったです。なぜかわかりませんが、私も若かったので職場から離れました。給料が少なかったからでしょう。また、今内モンゴルで勉強している娘、その翌年に生まれた息子がいて、その翌年には三つ子を産みました。そして仕事ができなくなってしまって、家で子どもたちの世話をしました。三つ子が少し成長したところで、国の福祉機関に(預けて一筆者補) 世話してもらいました。その時、私は家でちょっと(モンゴル靴を縫う

一筆者補) 仕事をして、夫は自分の仕事をしていました。

この4ケースの中、Pは母親が担当することは「もちろん」なことで、当たり前のことだと思っていることが伺える。Lはウランバートル出身の女性であり、先生として二年働いたが、政治体制の転換とともに職場を離れた。その主な原因は「給料が少なかった」、「子どもがたくさん生まれた」からであり、夫が仕事をして、妻が家で子どもの世話をするようになった。そして、家で仕事をするようになって、個人のビジネスを始めようとしていた。下の4ケースは夫婦で担っていたと証言したものである。

D: 二人で (担っていました一筆者補)。

J: 二人で子育てをしました。子どもが小さい時には、夫が働いて、私が子どもの世話をしていました。(問: 幼稚園に行きましたか。) そうですね。行きました。

M: 二人で (担っていました一筆者補)。

N: 二人で同じくらいの役割を担っています。長男は11年生<sup>27</sup>になります。私の2人の子どもは数学を重点として教える私立学校に入っています。教育の面では、私が子どもの塾の費用を払います。今は英語の塾に通って、今後はTOEFLを受けるつもりです。息子が中学を卒業したら留学させるつもりです。今は(私たちが子どもの一筆者補) 塾の学費を支払っています。後で(アメリカでの一筆者補) 学費を支払うことはしないとすでに約束しました。私の2人の子どもは韓国でも6年間生活しました。(問: 子どもたちは入学前には幼稚園に通いましたか、それとも親に子育てを助けてもらいましたか。) 2人は幼稚園に通っていました。私たちはほとんど両親に助けてもらいませんでした。私には、自分のできることは自分でやる、できないことだけ助けてもらうという考え方があります。両親は私たちを育てる為に本当に疲れました。私たちが全然できない場合には両親に助けてもらいますが、できるだけ自分たちで時間を調整して子どもの世話をします。私たちは幼稚園に預けていました。末っ子は短い期間ですが、二、三カ月間、母親に預けていましたが、今は幼稚園に預けるつもりです。

E: 子どもの教育は母親が主に担当します。私はその辺はあまり気にしません。妻は私より気にします。(問: 子どもは入学前に幼稚園に通っていましたか。) 通いました。私の専門は教師です。だから他の人より子どもをよく理解できます。なぜ宿題ができないのか、なぜ成績が伸びないのかをよく注意していま

---

27 「モンゴルは長い間、北の隣国であったソビエト連邦(現在のロシア)の影響下であったため、学校制度もソ連式の10年制でしたが、最近では、世界の多くの国に合わせて、12年制への移行が進められています」(「世界の学校をみてみよう」(2014)、外務省ホームページ)。「2005年より基礎教育が10年制から11年制へ延長されることとなっていた(2008年より12年制)」(石井、鈴木(2011)「モンゴル国第三次初等教育施設整備計画」)。

した。

Jは子どもが小さいうちは夫側の田舎にいた。Jは妻には「育児する役割がある」と考えて、子どもが小さいときには、夫は経済面で、妻は子どもの世話をしていたと証言している。Nは夫婦で子育てをしていた。親には頼らなかったという。Eの家庭では妻が育児の主な担当者であるという認識があるが、Eは教育の面で子どもをよく注意していると言える。

B：各方面から（子どもの世話をしました一筆者補）。子どもたちが私たち夫婦（の世話をします一筆者補）。私は見守るだけです。（問：子どもは幼稚園に行きましたか）私は幼稚園の先生だから、私の働いている幼稚園にいました。

C：私には5人の子どもがいます。私は（子どもたちを一筆者補）家に置いて出勤します。子どもたちは自分たち自身を（見守ります一筆者補）。年上の子は年下の子の世話をしていました。子どもがたくさんいると、このように（家に一筆者補）置いて行ってしまいます。（問：子どもは幼稚園に行きましたか。）家庭で育てられました。幼稚園に行きませんでした。

Bの家庭では、Bが幼稚園の先生なので、子どもたちを自ら見守っていた。4人の子どもの中の上の子は下の子どもの世話をしていた。Cの家庭では5人の子どものいるが、夫が亡くなったので、上の子が下の子どもの世話をしていたようだ。その理由はこの家庭に「子どもが多い」ことと、自分に「仕事」があることである。

育児における夫婦の役割分業をまとめると、子どもの母親が育児すると答えたのはA、F、P、Lであり、母親が育児するのが当たり前のことだと認識している人がある。Cは各方面から子どもの世話をし、成長した年上の子が弟妹の世話をするようになったが、C自身には自分が子どもをみる人という役割意識があった。以上のケースをパターン①「妻が主に育児する」とまとめよう。また次のようなパターンも見いだせよう。D、J、M、N、Eは夫婦で子育てをしていると答えた。この中のJの家族では夫が経済面で、妻が子どもの世話をする役割分業があった。Eの家族では妻が子どもの日常生活での世話、夫が学校教育面での世話をするなど、育児において家族それぞれの役割分業がある。これをパターン②「夫も妻も育児する」とまとめよう。こうして、育児における役割分業には、①妻が主に育児する（A、F、P、L、C）パターンと、②夫婦二人が育児する（D、J、M、N、E）パターンがあるとまとめることができるのである。

## 第二節 民主主義国家時代における夫婦役割分業

前節で、モンゴルでは社会主義時代に男女平等の法制化や男女が等しく労働することはすでに実現されたとされていることについて言及した。しかし、社会主義の崩壊に伴う政

治、経済と社会の混乱により、社会主義時代の豊富な福祉政策が縮小した。このような激動がウランバートル市に住む家族内部に与えた影響を如実に示すのが、家族内での性別役割関係であると考えられる。

### 1. 夫婦の役割関係に対する国家政策の変化

モンゴル国では 1999 年に民主主義時代の初の家族法が定められた。家族法第三章第一条に「結婚とは、法律に基づき、成人の男女二人が、自分の意志で、自由、平等な権利のもとに、家族になる目的で、法律に従って国家行政機関で登録することである」(Mongol Ulsiin Huuli Ger Büliin Tuhai Huuli1999) と定められている。

民主主義時代においては、家族法に「結婚者は家族に平等な権利と義務がある」(Mongol Ulsiin Huuli Ger Büliin Tuhai Huuli1999)とされているが、社会主義時代のように家事を共同に行うと書かれたような具体的な行動を法律に載せていない。この家族法以外にも家族政策が実施されているが、政策にも家族内部の役割分業について述べていない。つまり、社会主義時代のように家族法や社会主義的生活様式などで家族内部まで規範化することは、民主主義時代にはなくなった。

### 2. 夫婦役割関係の実態

#### 2-1. 男女の労働力率

まずは、モンゴル国の 1990 年、2000 年、そして 2005 年から 2012 年における労働力率の男女比、即ち仕事をしている人や積極的に仕事を探している人を含む労働市場に従事する国の生産年齢人口（15 歳以上）の割合を男性対女性の比率で表したものを図 2-3 で示す。

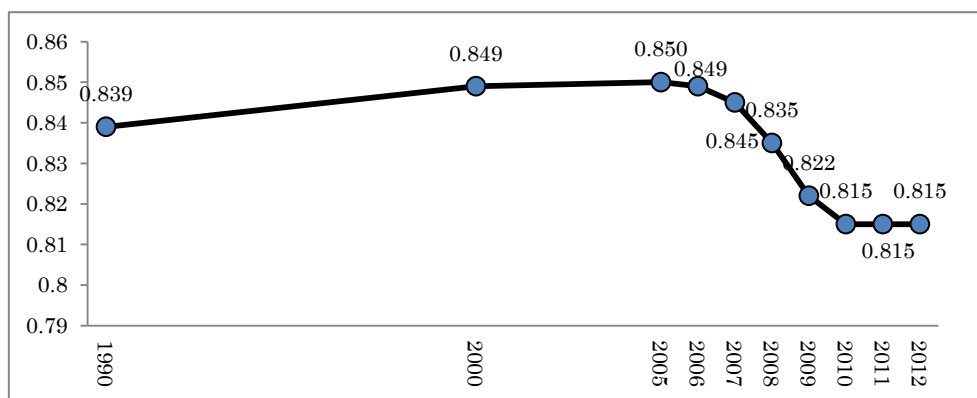


図 2-3 モンゴル国 1990、2000、2005～2012 年の労働力率の男女比（女/男）

出所) 国連開発計画 UNDP の統計データより筆者が作成。

図 2-3 を見るとモンゴルの労働力率の男女比は 1990 年に 0.839 あった。その後ゆっくり

上昇し、2005 年は最高の 0.850 に達したが、その後ゆっくりと下降しながら、2010 年から 2012 年にかけては 0.815 を保っていた。

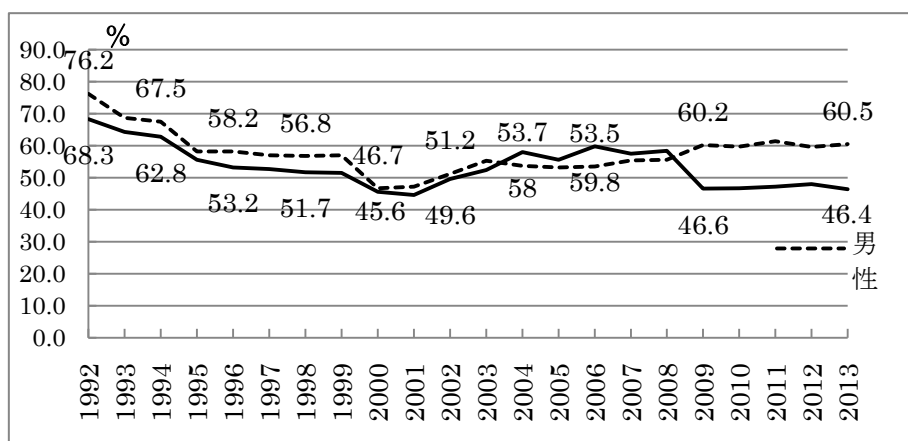


図 2-4 ウランバートル市における男女別労働力率（1992 年～2013 年）

出所）モンゴル国国家統計局ホームページのデータより筆者が作成。

次に、図 2-4 を見よう。これは 1992 年から 2013 年までのウランバートル市の労働力率の推移を男女別で示したものである。1992 年時点でウランバートル市の男性の労働力率は 76.2%、女性の労働力率は 68.3%であった。その後、男女とも労働力率が下降し、2000 年に男性の労働力率は 46.7%、女性の労働力率は 45.6%となった。2002 年からは男女とも労働力率が上昇したが 2003 年までの女性の労働力率は男性よりやや低い状況が続いた。男性の労働力率は 2013 年現在 60.5%まで上がり、女性の労働力率も 2004 年から 2008 年まで上がって男性労働力率を上回ったが、2009 年に急落した。その原因について JICA の報告書では「2009 年の不況以降の女性への雇用の減少及び、女性の就学率の上昇による影響である」（「国別ジェンダー情報整備調査モンゴル国報告書」2013：iii）としている。2013 年現在の女性の労働力率は 46.4%であり、男性より 14.1 ポイント低くなっている。

## 2-2. アンケート調査による夫婦役割分業と役割分業観

以上のような状況を踏まえて、夫婦の役割分担の実態を考察するために、前節と同じく「掃除・洗濯」、「炊事」と「育児」の三つの項目を取り上げる。

### 2-2-1. 掃除・洗濯と炊事の頻度

表 2-7 は 20 代、30 代の対象者の洗濯、掃除実施頻度を表している。「週に 6~7 日」実施と答えた人は、男性は全 17 人の中の 11.8%にあたる 2 人であり、女性は全 63 人の中の 33.3%に当たる 21 人が実施している。「週 3~5 回」実施する人は男性の 41.2%（7 人）を占め、女性は 25.4%（16 人）である。「週 1~2 回」と答えた男性は 23.5%（4 人）であり、

女性は36.5%（23人）である。「月1～3回」と答えた男性は5.9%（1人）、女性は3.2%（2人）、「年1回もしない」人が男性の17.6%（3人）であり、女性の1.6%（1人）である。男性の平均値は2.515であり、女性の平均値は3.596である。つまり、男性よりも女性の方が洗濯・掃除の頻度が高い。

表2-7 20代・30代男女の性別年齢別洗濯・掃除実施頻度 n=80

性別		男性			女性			総計
年齢（歳）		20～29	30～39	合計	20～29	30～39	合計	
週6～7回	人数	2	0	2	8	13	21	23
	比率	22.2%	0.0%	11.8%	30.8%	35.1%	33.3%	28.8%
週3～5回	人数	4	3	7	11	5	16	23
	比率	44.4%	37.5%	41.2%	42.3%	13.5%	25.4%	28.8%
週1～2回	人数	1	3	4	7	16	23	28
	比率	11.1%	37.5%	23.5%	26.9%	43.2%	36.5%	35.0%
月1～3回	人数	0	1	1	0	2	2	3
	比率	0.0%	12.5%	5.9%	0.0%	5.4%	3.2%	3.8%
年1回もない	人数	2	1	3	0	1	1	4
	比率	22.2%	12.5%	17.6%	0.0%	2.7%	1.6%	5.0%
合計	人数	9	8	17	26	37	63	80
	比率	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

次に、表2-8で対象者の夕食を作る頻度を見てみる。60.3%（38人）の女性が週に6～7回であるのに対して、男性は23.5%（4人）に止まっている。週に3～5回炊事する男性は17.6%（3人）であり、女性は22.2%（14人）である。週に1～2回炊事する男性は23.5%（4人）だが、女性は12.7%（8人）である。「月1～3回」と回答した男性は23.5%（4人）であり、女性は4.8%（3人）である。年に1回もしない女性はいないが、男性は11.8%（2人）いる。平均値をみると、男性は2.706であり、女性は5.024である。つまり、女性のほうが男性より頻繁に炊事を行っているといえる。



表 2-8 20代・30代男女の性別年齢別夕食を作る頻度 (度数と比率) n=80

性別		男性			女性			総計
年齢 (歳)		20~29	30~39	合計	20~29	30~39	合計	
週 6~7 回	人数	4	0	4	15	23	38	42
	比率	44.4%	0.0%	23.5%	57.7%	62.2%	60.3%	52.5%
週 3~5 回	人数	1	2	3	7	7	14	17
	比率	11.1%	25.0%	17.6%	26.9%	18.9%	22.2%	21.3%
週 1~2 回	人数	2	2	4	3	5	8	12
	比率	22.2%	25.0%	23.5%	11.5%	13.5%	12.7%	15.0%
月 1~3 回	人数	1	3	4	1	2	3	7
	比率	11.1%	37.5%	23.5%	3.8%	5.4%	4.8%	8.8%
年 1 回もない	人数	1	1	2	0	0	0	2
	比率	11.1%	12.5%	11.8%	0.0%	0.0%	0.0%	2.5%
合計	人数	9	8	17	26	37	63	80
	比率	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

以上から、調査対象者の中の女性の方が男性よりも頻繁に洗濯・掃除を行い、夕食を作っているといえる。

#### 2-2-2. 育児における役割分業

次に、20代、30代の人々の育児参加を分析する。アンケート調査では「育児にだれが主に参加していますか」について複数回答を求めた。その結果を表 2-9 に示す。

回答者の中の 51 人 (58.6%) が夫、70 人 (80.5%) が妻と答えた。妻の参加が夫より 21.9 ポイント高い。夫婦以外は、23 人 (26.4%) は祖父母、20 人 (23.0%) は子どもの先生が子育てに協力していると答えている。表 2-8 からわかるのは、両年代とも母親の育児参加が父親より多く、年代別では 20 代の父親は 30 代父親よりも育児参加が多く、20 代の母親の育児参加は 30 代母親よりも少ないことが分かる。ただし、20 代の父親と母親の育児参加比率が 30 代に比べて近接しているので、若年夫婦は育児で相互に協力するようになっていることもわかる。

表 2-9 アンケート調査対象者の育児参加 (20~39 歳)

n=87

年齢	父親	母親	兄、姉	祖父母	先生	その他	合計
20-29	22	25	4	13	9	1	34
	64.7%	73.5%	11.8%	38.2%	26.5%	2.9%	100.0%
30-39	28	44	4	10	11	2	52
	53.8%	84.6%	7.7%	19.2%	21.2%	3.8%	59.8%
総計	51	70	8	23	20	3	87
	58.6%	80.5%	9.2%	26.4%	23.0%	3.4%	100.0%

さらに表 2-10 で夫婦間の育児分業を見てみると、有効回答者 87 人の中の 55.2% を占める 48 人は夫婦で育児をして、3 人 (3.4%) は父親だけ、18 人 (20.7%) は母親だけが育児をしている、あるいは育児したことが分かる。

表 2-10 夫婦間でみる育児参加 n=87

	夫	妻	夫婦	総計
人数	3	18	48	87
比率	3.4%	20.7%	55.2%	100.0%

育児は、母親が父親よりも多く従事しているが、若年夫婦は育児を夫婦協力して行う傾向にある。

### 2-2-3. 性別役割分業観に関する考え

まず「夫は仕事を担って、妻は家事を担うべきである」という性別役割分業観を問う質問に対する答えを見てみよう。

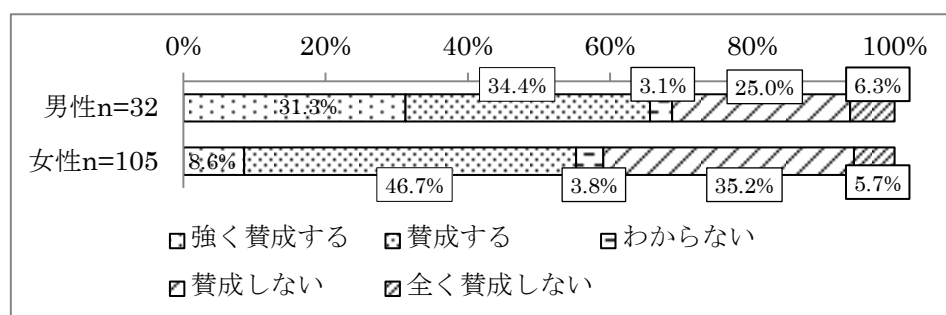


図 2-5 男女別「夫は仕事を担って、妻は家事を担うべきである」に対する賛否

n = 137

図2-5は、上の問いへの回答を性別で分けた結果である。「強く賛成する」を選択した男性が31.3%、女性が8.6%である。「賛成する」を選択したのが男性の34.4%、女性の46.7%である。両方を合わせた肯定派は男性が65.7%、女性が55.3%となり、男女ともに半数を超えているが、男性の方が女性より10.4%多いことがわかる。

次に、「男性もできるだけ家事をするべきである」に対する賛否を尋ねた。

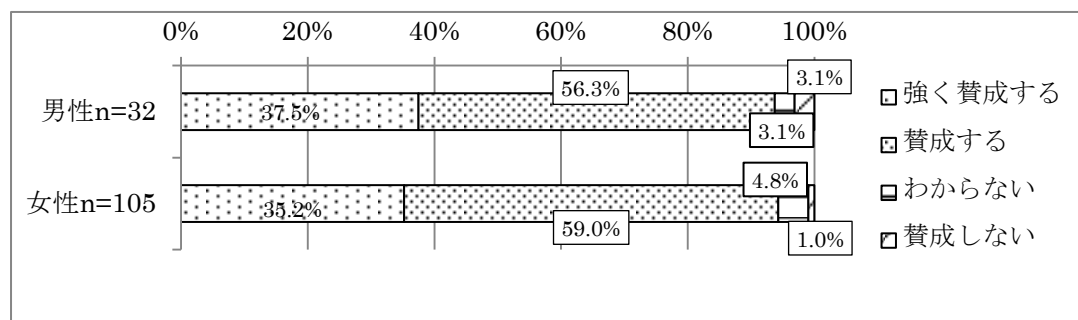


図2-6 男女別「男性もできるだけ家事をするべきである」に対する賛否 n=137

図2-6に示しているように、「強く賛成する」と答えた人は男性の37.5%、女性の35.2%である。「賛成する」と答えた人は男性の56.3%、女性の59.0%である。肯定派は男性の93.8%、女性の94.2%に達しており、女性が男性よりわずかに0.4%多い。

以上、性別役割分業と性別役割分業観に関するアンケート調査の結果をまとめると、掃除・洗濯と炊事などの家事は、妻が夫より担う頻度が高い。そして「夫が仕事を担って、妻は家事を担うべきである」という性別役割分業観には男女とも半数以上の人賛成し、男性の方が女性より賛成する割合が高い。「男性もできる限り家事をするべきである」に賛成する人は男女とも9割を超えている。このことから、対象者たちは、夫が仕事、妻は家事という夫婦の性別役割分業を支持する一方で、男性の家事参加に賛成する考えを持っていることがわかる。

## 2-3. 聞き取り調査の結果の分析

### 2-3-1. 家事における役割分担

「家族の中での妻と夫の役割は何ですか」との質問に対する答えに着目しよう。「家事」に関する回答がなかった場合には「家事は誰が担っているか」と重ねて尋ねた。

R: 私は家事をして、育児をします。… 夫は子どもを養う責任があります。(問: 夕食を誰が作りますか。) いつも私が作ります。夫は(料理を一筆者補)しません。  
(問: 家事は。) 私がします。子どももします。

V: モンゴル人の伝統的な役割分担にしたがって行います。2人で子どもを育てて、生まれた国であるモンゴル国のために奮闘しています。(問: 家事と夕食はだれが

しますか。) 家事は私がすることが多いです。料理は私がします。大きな子どももします。長男は今年12歳です。料理をし、弟を送迎し、家事もします。すべてをしますよ。私たち二人は仕事で忙しいので、子どもに(家事、炊事一筆者補)すべてを教えました。

Z: 今は新しい住宅を買ったので、ローンを背負っています。今はしばらく夫の両親のハシヤーにゲルを建てて住んでいます。夫の給料でローンを払うので、私は家庭のことを担います。私は家事をして、料理もします。

U: 妻の役割は子どもを育てること、夫のことを気遣うこと、家をよくすることなどと思います。夫は仕事をします。最近は妻も仕事をするようになっていきます。私は、子育てをして、夫が安心して仕事ができるようにします。(問: モンゴルには、あなたのように子育てに専念して、仕事をしない人がたくさんいますか。) たくさんいますよ。シングルマザーならよく仕事をしますけれど。(問: なぜ幼稚園に預けないのですか。) この区にきてもう2年になりました。幼稚園に預けようと思ったのですが、幼稚園側が受け入れてくれません。

以上の4人は夫が仕事に専念して、妻が家事を担うと答えたものである。

Rは商売をし、夫は運転手で、2人の子どもがいる。Rは自ら市場で商売をしながら家事、育児、炊事を担うのに対して、夫はお金を儲けて、子どもを養う責任があるが家内領域における家事、炊事に参加しない。Rの家族においては、夫は公共領域を担い、妻は公共領域を担い、さらに家内領域を全部担っている。

Vの家族では、夫婦は商売をしている。夫は単純に商売をするのに対し、妻は商売をし、さらに家内領域の家事、料理の担い手であることが分かる。

Zは調査当時にゲルに住んでいた。夫婦両方が仕事をしており、夫の給料でローンを返済し、妻の給料で生活している。家事、炊事は妻が担っている。夫は家内領域に参加しない。

Uは専業主婦で、夫はウランバートルから800キロメートル離れた炭鉱で働いている。一か月間勤務、半月休暇のシフトで働いている。Uの場合は夫が公共領域、妻は家内領域に位置づけられる。妻は子育てに専念している。

これら4ケースの中のU以外の3ケースは共働き家族である。つまり夫が公共領域を担い、妻は家内領域という性別役割分業があるとともに妻も家計に貢献する人である。

次に、夫婦ともに家事、炊事をすると答えたケースをみてみよう。

AD: 家事は2人でやります。しかし家事は女が多くをやる義務があります。夫は家事もします。何をするかというと、私の家はゲル地区にあるので、水を汲む、燃料を用意する、壊れたものを修理するなどのことをします。たまに炊事をします。私の夫は家の中の家事をすることが好きではないのでたまにしかしません。

Q: 私は寝ます、食べます。壊れたものを修理します。たまに料理を作り、たまに家の

掃除をします。あまりしません。ちょっとだけします。

W:各自の責任を負います。夫はちょっとお金を稼いで、商売をしようと思っています。私は家の中でこまごまとした家事をしたり、(市場で商売して一筆者補)お金を稼いだりしています。(問:料理を誰がしますか。)料理は私だけが作ります。夫は私が留守にする時に子どもたちに料理を作ってあげます。私は家にはいる時には全然作りません。私が遅く帰る時には作ります。

X:生活していく面では夫の役割はより多いです。私は家事などをします。夫は外のことをします……夫はもともと外で働く……夕食は暇な方が作ります。

上の4ケースは共働き家族である。夫婦ともに家事を担っていると言える。

ADは、「家事は2人でやります」と答えながらも「家事は女が多くをやる義務があります」と答えている。ここにADの「女は家事の担い手であるはず」という認識が見える。ADはゲル地区居住者なので、戸外から燃料や水を住居に運び込むなど体力のいる家事は夫が担っている。このように家内と家外で家事を分業している。

Qはアパートに住んでいる。妻は家事を担って、夫は「壊れたものの修理」をし、「たまにご飯を作り」、「たまに掃除」をしている。つまり「たまに」家事をしている。Qも家事をするが参加の頻度は妻より低いことが伺える。すなわちQの妻が家事の担い手である。

Wは「各自の責任を負います」と答え、さらに「私は家の中のこまごまとした家事をする」と証言した。Wの夫はWが不在の時には子どもたちに食事をつくるが、Wが在宅時には料理をしない。Wの家族では夫も家事に参加するが、家事の担い手は妻であるという認識と実態が察せられる。

Xの家庭では、妻は家事を担い、夫は外のことをするという役割分業が定着している。ただ、炊事は暇な方が作るというので、夫も家事に参加しているといえる。

以上は、夫婦ともに仕事をして、家事を担うケースである。共通する特徴は、妻が家事の担い手であるという意識を持っていることである。

次の5つのケースに移ろう。

T:役割をわけていません。早く帰ってきた者がします。夫のほうが早く帰ったら料理を作ってお茶を煮ます。(夫は一筆者補)「Tが帰ってきて私に料理を作るべきだ」と(は思いませんが、夫は私が料理を作るのを一筆者補)待ちません。2人の子どもも作ります。

AA:平等に、早めに帰った者が家事をします。

AC:私の家族は平等な関係を持っていて、ヨーロッパ式です。2人で誰が何をすることを決めたことはありません。妻も自分の生活を持っていますし、私もそれを尊重すべきです。私たちは家事を一緒にして、子どもを一緒に育てます。一緒に物事を決めます。2人は相手に無理強いはしません。

CC：家事は私がします。夫もします。

S：モンゴルの家庭の中では、妻はこれをやる、夫はあれをやるという決まりはないです。暇がある人がします。

Tは「役割をわけていません」、AAは「平等に」、ACは「家族は平等な関係を持っていて」、CCは夫婦ともに家事する、Sはモンゴル人の家庭の中では役割分業に決まりがないと答えている。この5ケースの共通点は、誰かが家事、誰かが仕事という役割分業意識を持っていないことである。つまり、夫は仕事をして、家事もする。同じように妻も仕事と家事を担う。このように役割分業が決められておらず、家事の担い手が明確でない状態を、「平等」と評し、「モンゴル人には役割分業がない」という理由付けする人もいることがわかる。

その他、わずか一例ではあるが、AEが「夫がすべてをします」と答えた例があった。

### 2-3-2. 育児における役割分業

育児についての分業については、「子どもの教育は誰が主に担っていますか」とたずねた。次のような回答が得られた。

Q：母親、（つまり私の一筆者補）妻です。その上、（Q 夫婦の一筆者補）両親もいたので、（子どもの一筆者補）祖父母も面倒を見ていました。（問：ご両親は市内に住んでいましたか）市内に住んでいました。また義父母も市内にいました。両方に面倒を見てもらっていました。

Y：（問：将来子どもの教育を誰が主に担当しますか。）妻です。なぜなら私の妻は幼稚園の先生の専攻を修めて、小学校の先生のための勉強もしたからです。妻が主に担当すると思います。

Z：育児は私がします。昼間には子どもを子どもの祖父母の所に預けて、夜には私が世話をします。入園年齢になったら幼稚園に預けます。

U：（問：どこで仕事をしていますか。）今は5歳の娘の世話をして、家にいます。（問：子どもを幼稚園に預けたことはないですか。）全然ありません。この子は5歳になっています。家で見っていました。（問：なぜ幼稚園に預けないのですか。）この区に移って2年になりました。幼稚園に預けようと思ったのですが、幼稚園側が受け入れてくれません。ここに引っ越してきた手続きを今年の秋に伸ばして住所を変更したとしても、子どもは受け入れないと幼稚園側に言われました。

AD：長男は生後6カ月から祖父母と一緒にいました。（これからは一筆者補）幼稚園に行くので、親（である私たち一筆者補）と一緒にいるということです。だから教育は（私たち一筆者補）2人がします。たとえば、（子どもが一筆者補）本を見る時には私が説明してあげます。夫はインターネットから子どもの番組を

ダウンロードしてあげます。だから子育てでは2人で協力しています。

V：2人で（育てています一筆者補）。（問：幼稚園に通っていましたか。）通っていました。今2人（の子ども一筆者補）は学校に通っています。（問：幼稚園に行く前には誰が世話をしていましたか。）私たちは仕事をしていたので両親に預けていました。

CC：今は私が職場研修をしているため、夫が仕事の休みを取って、家で子どもの面倒を見ています。

X：自分たちで（夫婦で一筆者補）育てます。夏になると子どもは田舎の祖父母の家に行き家事を手伝います。夏は田舎に行き、秋はウランバートルに戻って学校に行きます。

S：（問：子どもは入学前に幼稚園に行きましたか。）私の場合は、2人とも行きませんでした。直接学校に行きました。（問：あなたはなぜ幼稚園に預けませんでしたか）私には面倒をみってくれる人がいるので預けませんでした。（問：誰が面倒をみてくれましたか）暇のある人が面倒を見ていました。少し年上の姉、兄が面倒をみていました……（モンゴルでは一筆者補）普通、ちょっと大きい姉や兄がいるなら、彼らが世話をします。両親は仕事が終わったら、子どもの世話をします。

AA：子どもは1歳6ヶ月です。親戚の子どもに預けていましたが、最近は祖父母が休んでいるので、そこで預かってもらっています。

AE：子どもは1歳9ヶ月になっています。義父母が世話をしています。

W：幼稚園に通っています。

Q、Y、Zの家庭では妻が育児を主に担っている。Qは妻が主に育児をし、双方の両親にも面倒を見てもらったと答えている。Yは妻が幼稚園の先生であるため、妻が主に育児をしている。Zは仕事が終わったら自分が主に担当している。Q、Y、Zのケースをパターン①「妻が主に育児する」とまとめよう。

AD、Vの家庭では夫婦協力している。CCの家族では、妻が大学生で、当時は職場研修をしていたので、夫は妻がいない間に子どもの面倒を見ていたので、育児は一緒に担っていると答える。Sは暇がある人が子どもを見守る。Xは子どもが夏休みには祖父母のところに行くが、普段は「自分たちで」、つまり夫婦で育てるのである。以上のケースをパターン②「夫も妻も育児する」とまとめよう。

Uの夫は実は炭鉱に単身赴任している。このためUは専業主婦として子育てに専念している。Uのケースを、パターン③「妻は専業主婦として育児に専念する」とまとめよう。

以上、育児における夫婦の役割分業には①妻が主に育児する（Q、Y、Z）、②夫も妻も育児する（S、V、X、AD、CC）、③妻は専業主婦として育児に専念する（U）とまとめるこ

とができるのである。

### 2-3-3. 「性別役割分業」に対する考え方

「性別役割分業」に賛成かどうかを聞く際には、「性別役割分業」とは女が仕事をせずに、専業主婦になることであると説明したうえで、「夫一人の給料が一家にとって十分であれば、専業主婦になるか（妻を専業主婦にさせるか）」と聞いた。

Yの妻は幼稚園の先生で、大学院を卒業する時に妊娠していたため、調査当時には就職していなかったが、子どもが1歳3カ月の時に子どもを連れて職場に戻った。夫のYはアンケート調査では、夫婦の役割分業について「強く賛成する」、「夫もできる限り家事をするべきだ」に「強く賛成する」と答えたのだが、実際にどれほど家事をしているのかについては、家事は年に1~3回する程度で家事と料理は妻に任せていると答えた。2012年の調査では、「私はご飯を食べ、……たまに床の掃除をし、食器を洗います。今は料理を作っていません。弟がしています。日曜日は私の当番です」と言った。追加調査の時にはYの妻は就職していた。就職した理由を聞くと「妻が家にいることは気の毒です。発展しません。私はそう思います。子育てをするために妻が家にいる必要はありません。子どもが幼稚園に行けば、もっと早く社会生活に慣れるようになります」と答えた。Yの家庭では、妻が家事と育児の担い手であり、夫であるYは「たまに」家事をするに過ぎないが、妻が就職もせずに専業主婦になることには反対する考えを持っていることがわかる。

ACは次のように答えている。

AC: もし私が十分な給料をもらったら、妻が自分でそうしたいと思って仕事をしたかったらさせるし、したくない、家にいたいと思ったら家にもいいです。その人の自らの気持ちを大事にします。なぜかという、その人が、お金のためよりも自己研鑽やみんなと一緒にいることが大事と思ったら仕事をしてもいいし、もし仕事をしてストレスがたまったら仕事をしなくてもいいです。私は女性が仕事をするかどうかを自ら決めるべきと考えます。

すでに見たように、このACは、家庭内の夫婦役割分業を「平等な関係を持っていて、ヨーロッパ式です」と答えた人物である。そして2014年の追加調査では、上のように妻の意見を尊重する考えを示し、妻が「お金のためよりも自己研鑽やみんなと一緒にいることが大事と思」うなら働いたらよいと述べているところから、ACが妻の意見を尊重する考えを持っていることが明らかである。

CAの長男は高校生、長女は3歳。夫は仕事に専念し、妻のRは昼には仕事し、帰宅して料理を作る。CAの家庭では、妻が家事の担い手であり、夫は家事に参加しない。息子が家事を分担している。夫は毎年3月8日の女性の日に年に一回だけの家事と料理をする。その日、息子は朝から家事をして、夫は料理の準備をしていた。Rは「夫が料理するのはそ



の日だけのことです」と言っていた。CA は、「専業主婦はとても嫌です。私は家にいると気がおかしくなりますよ。販売員でも、清掃員でもします」と語った。

性別役割分業に賛成かどうかについて、その他にも次のような回答があった。

CC：私は大学を卒業したら、家にいて育児するより、社会で自分の名誉、地位を得ることに興味があります。

CD：(問：あなたは家事をしていますか) しています。(問：結婚したら家事をしますか) 家事はしませんよ。妻がしますよ。最初は助けるでしょうが、そのうちに怠けていくでしょう。(問：日本人は夫が働いて、妻が家にいる。あなたはこれについてどう思いますか。)(それは一筆者補)そもそもヨーロッパ式でしょう。私もそのようになると思います。でも妻は何もしないで、家にいても大変でしょう。韓国のように毎日連続ドラマがあれば違うでしょうが、(連続ドラマが放映されていないので一筆者補)つまらないでしょう。主婦になったと文句を言うでしょう。

CB：私は個人という意味で、社会と関わって、自分を発展させるべきだと思います。だから、夫の給料は生活に十分であっても、(私は一筆者補)仕事をして、自分を発展させます。

上でACは、女性が仕事をするかどうかは自らの気持ちを大事にして、女性が「自ら決めるべき」だと答えている。またCDは「(夫が働き、妻が家にいるのは一筆者補)ヨーロッパ式でしょう。私もそのようになると思います」という。これらの回答から、夫が仕事で妻が家事という性別役割分業を受け入れる男性がいることがわかる。一方、Yのように専業主婦を受け入れない人もいる。CA、CC、CBなどの女性は専業主婦になることを受け入れない意識を示している。

専業主婦について、男性のY、AC、CDは、「発展しません」、「お金のためより、自己研鑽やみんなと一緒にいることが大事」、「何もしないで、家にいても大変だ」、「つまらない」などの言葉を使っている。専業主婦は社会と接しない、個人の社会的成長にはよくないと見ている。つまりこの三人の男性にとって、女性が仕事をするとは、社会と接することであり、女性個人が社会化することと理解し、妻が社会と接触し、個人の社会的価値を高め、社会で女性個人として生きようとする生き方を尊重する姿勢が伺える。

一方、CA、CC、CBは「家にいると気がおかしくなる」、「名誉、地位を得ることに興味がある」、「個人という意味で」、「社会と関わる」、「自分を発展させる」などを理由として挙げて、仕事をしたい考えを示している。社会との接点がなくなるので不安である、自己のもつ価値を実現する、社会的地位を得る、これらが専業主婦になりたくない理由である。つまり、女性にとって仕事をするとは、社会と接する、社会的地位を得る、自己の社会的価値を実現することとCA、CC、CBは認識している。

以上の聞き取り調査の結果から、調査対象者の家族の役割分業が五つのパターンに集約できることがわかる。

第一は、夫は公共領域を担って家内領域を担わず、妻は家内領域を担いながら公共領域に進出していて、夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業意識を持つパターンである。

第二は、夫も妻も家内領域と公共領域の両方を担っているが、夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業意識を持つパターンである。

第三は、夫婦間にはっきりとした役割分業がなく、夫も妻も家内領域と公共領域の両方を担っていて、夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業意識を持たないパターンである。

この第二と第三のパターンはともに夫も妻も公共領域、家内領域両方を担うと書いているが、役割分業意識が違う。第二には、妻は家事の担い手であるとの意識があり（AD、Q、W、X のケース）、第三には、平等的であるという意識が存在する（T、AA、AC、CC、S のケース）。AD は「家事は2人でやります」と言い、「家事は女が多くをやる義務がある」と考えているので、実際に AD は家内家事、AD の夫は家外家事を行っている。この AD はゲル地区に住んでいるので、家の中の家事も家の外の「水を汲む」、「燃料を用意する」ことなども家事とみている。Q は家事をするが、「たまにする」ぐらいで、家事参加の頻度が低い。W は家事を「こまごました」ものとみる。X は、夕食は夫婦協力する、夫婦の役割分業では夫の役割のほうが妻よりも多い、妻は家事をする、と答えた。この AD、Q、W、X の4人の共通点といえば、妻が家事の担い手であるとの意識を持っていることである。ところが、T は「役割をわけていません」、AA は「平等に」、AC は「家族は平等な関係を持っている」、CC は夫婦ともに家事する、S はモンゴル人の家庭の中に役割に決まりがないという認識を表しているので、T、AA、AC、CC は役割分業意識を持っていないことが共通している。

第四は、実際の例は少数であったが、夫は公共領域と家内領域を担い、妻は公共領域を担っていて、夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業意識を持たないパターンである。AE の答えにこれが見て取れる。AE の家庭では、妻は家事をしていない。

第五は、夫は公共領域、妻は家内領域を担い、夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業意識を持つパターンである。このパターンに当てはまる U の家族では、夫は仕事に専念して、妻は専業主婦である。

育児における役割分業においては、①妻が主に育児を担当する、②夫婦二人で育児する、③妻が専業主婦として育児に専念する、この3つのパターンに分けられる。

また性別役割分業観については、男性である Q と Y は妻が家内領域を担うことを支持するが、Y は妻が公共領域に出ないことに反対する。AC、CD は、夫は仕事をして妻は家にいることを受け入れる。女性である R、V、Z、U、W、AD、X、CA らは家事を担うことを受け入れるが、専業主婦になるかどうかにかかわらず答えた CA、CB、CC らは専業主婦に反対する意

見を出した。

自分の妻が公共領域に進出することを支持すると述べた男性は、妻が社会と接触し、社会の中で個人として社会的価値を獲得することを重視しているとの考えを示している。専業主婦化に反対する三人の女性 CA、CB、CC は、社会との接触、自己の社会的価値の獲得、自己価値の実現、一人の個人として生きることが重要であるという意識が示されている。

### 第三節 夫婦の役割分業の変容

#### 1. 夫婦の役割分業のパターン

##### 1-1. 家事における夫婦の役割分業のパターン

以上、第一節と第二節では社会主義時代と民主主義時代における夫婦の役割分業についてそれぞれ分析した。

まず、それぞれ時代の夫婦の役割分業のパターンを下のように整理しておく。

社会主義時代における夫婦の役割分業は次の 5 パターンに整理される。

- ①夫は公共領域を担い、妻は家内領域を担いつつ公共領域に進出する。夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業意識を持つ。(A、F)
- ②夫も妻も公共領域と家内領域を担う。夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業意識を持つ。(N)
- ③夫も妻も公共領域と家内領域を担う。夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業意識を持たない。(B、D、E、P、G、O)
- ④夫は公共領域と家内領域を担い、妻は公共領域を担う。夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業意識を持たない。(M、J)
- ⑤夫も妻も公共領域を担う。夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業意識を持たない。(I、H)

民主主義時代における夫婦の役割分業は、次の 5 パターンに整理される。

- ①夫は公共領域を担い、妻は家内領域を担いつつ公共領域に進出する。夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業意識を持つ。(R、V、Z)
- ②夫も妻も公共領域と家内領域を担う。夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業意識を持つ。(Q、W、X、AD)
- ③夫も妻も公共領域と家内領域を担う。夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業意識を持たない。(T、AA、AC、CC、S)
- ④夫は公共領域と家内領域を担い、妻は家内領域を担う。夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業意識を持たない。(AE)
- ⑤夫は公共領域、妻は家内領域を担う。夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業意識を持つ。(U)

## 1-2. 育児における役割分業のパターン

40歳以上の調査対象者の家庭での育児における夫婦の役割分業は次の2パターンに分けられる。

- ① 妻が主に育児を担当する。(A、F、P、L、C)
- ② 夫婦二人で育児する。(D、J、M、N、E)

20代と30代の調査対象者の家庭での育児における夫婦の役割分業は次の3パターンに分けられる。

- ① 妻が主に育児を担当する。(Q、Y、Z)
- ② 夫婦二人で育児する。(S、V、X、AD、CC)
- ③ 妻が専業主婦として育児に専念する。(U)

## 2. 夫婦の役割分業の多様化とそれをもたらした原因

### 2-1 遊牧生活由来の役割分業

この内、社会主義時代の家事における性別役割分業のパターン①と②、同じく社会主義時代の育児における性別役割分業のパターン①、そして民主主義時代のパターン①と②、同じく民主主義時代の育児における性別役割分業のパターン①は、モンゴル人の遊牧生活から由来する役割分業観と結びつけて考えることができる。本章の冒頭でも先行研究から引用して論じたように、遊牧地域におけるモンゴル人の役割分業は、夫は家庭の筆頭者であり、家畜の放牧、荷の運搬、狩猟などに従事、妻は家事、育児、乳製品の加工、小家畜の放牧などに従事するというものであった。聞き取り調査対象者の中のA、F、R、V、Zの家庭内部にははっきりとした役割分業があり、夫は家事と炊事を担っていない。Vは「モンゴル人の伝統的な役割分担にしたがって」と答えた上で、「伝統的な役割」を自ら「家事は私がすることが多いです。料理は私がします」と解釈した。社会主義時代の家事における性別役割パターン②のNのケースをみると、Nは「私の家族では平等的です」と答え、夫は茶碗などを片付けるぐらいの家事をして、夫は「一家の柱」として「全体的に把握」することが役割であるという認識をもつ。民主主義時代の家事における性別役割分業のパターン②のX、ADのケースをみると、Xは「生活していく面では夫の役割はより多いです。私は家事などをします」と答え、ADは「家事は女が多くをやる義務があり」、夫は屋外での体力を要する家事を担うと答えた。以上の証言からは、妻は積極的に家の中の家事を行い、夫については生活上の多くの役割を果たしているとして家事参加を求めない考えを読み取れよう。この中で、生活上に夫の役割が多いと妻が考えているのは遊牧生活に由来する部分であるといえる。

育児における役割分業ではA、F、P、L、C、Q、Y、Zは妻が育児を担うと答えた。妻が幼稚園の先生であるという理由があるY以外の、A、F、P、C、Q、Zには特別な理由がなかった。これらの家族においては妻に育児の役割があるという認識をもっていると言える。また第一節と第二節で書いたように、アンケート調査の結果から、育児における役割

分業では夫より妻の育児参加の割合が大きいことがわかった。社会主義時代を経験したモンゴル国において、女性が育児を主に担当することは、遊牧生活における役割分業の影響で、育児が女性としての当たり前の役割分業であると考えているといえる。

また、40歳以上のアンケート調査対象者の中に性別役割分業に対して反対する男性がならず、女性が77.4%を占めて、39歳以下の調査対象者の場合には男性が65.7%、女性が55.3%を占めることや、女性の方が男性より多く洗濯・掃除と炊事を担っている家庭内部の性別役割分業の実態も、遊牧生活に由来することと考えられる。

## 2-2. 社会主義型役割分業

社会主義時代の家事におけるパターン③、④と⑤、育児におけるパターン②、ならびに民主主義時代のパターン③と④、育児におけるパターン②は、社会主義時代に影響されたパターンであると考えられる。なぜならば、社会主義時代のモンゴル人民共和国においては、1960年の憲法第7章第84条に「モンゴル人民共和国の婦人は、政治・経済・社会行政管理・文化の全部門において男子と同一の権利を享有する」（「モンゴル人民共和国の新憲法」(下) 1961:26)と定め、1973年の家族法には、結婚者の義務について15条の第2項に「お互い平等に家事労働に参加し、教育レベル、技術水準を高め、国民が役割を忠実に果たすためにお互いが助け合う義務がある」(*Bügd Nairamdah Mongol Ard Ulsyn Ger Büliin Huuli* 1973:12)と定め、1976年に党の中央が発布した「社会主義的生活様式」には「家族の中で、母、女性を尊重し、家事を全員で協力して行う習慣があるべきだ」(*Ulaanaa* 1980:11)と説かれ、1988年の家族法の解釈では「家庭、家庭内部の関係に残っている時代遅れな風習をなくすことは家族法の一つの目的であると第一章に指示している」(*BNMAU-yn Ger Büliin Huuliin Delgerengüi Tailbar* 1988:7)とあり、夫婦が平等であることを力説していることが明らかだからである。

このように社会主義時代の政府は、家事における平等、協力を宣伝していた。B、D、E、P、G、O、T、AA、AC、CC、Sのケースでは、家事は夫婦で担っている。40歳以上の回答者は家事の担い手について、Dは「調整します」、Eは「同じ程度」、Pは「調整してやる」、Gは「暇な人が」する、のように答えており、実際に性別役割分業意識があるかどうかは明確になっていないが、要するに夫婦で暇な時間によって家事を調整すると答えている。Bは「細かいことは私が」する、Oは「妻が炊事をして、家事をします」と答え、夫と妻はそれぞれの役割があると認識している。妻は家事をするべきだという遊牧生活由来の性別役割分業の影響もみえるが、現実的には夫婦で協力できる、必ずしもだれかが何をすべきという決まりがないということである。39歳以下の回答者の答えをみると、Tは「役割をわけていません」、AAは「平等に」、ACは「平等な関係」を持つ、CCは夫婦です、Sは役割の「決まりはない」と答えた。これらのケースにおいては、夫は家内領域で妻は公共領域という性別役割分業意識に束縛されず、「役割をわけていません」、「決まりはない」、「平等」という言葉を使っている。Sは役割分業がモンゴル人には存在しないと理解し、T、AA、

AC、CCは自分の家庭では家事の担い手は決めておらず、家事は暇がある人がやると考えている。上に記したように、社会主義時代には平等に家事に参加することを呼びかけていた。20代、30代の回答者の回答に「平等」や「決まりがない」という言葉が出ていることは、若い層が身に着けている家内領域における平等意識と性別役割分業がないという意識は社会主義の時代には存在し、引き継がれていることを示している。夫婦で協力して家事をする、夫婦間は平等的な関係であり、役割が分業されていないと考えているのは社会主義に由来するといえる。また、M、J、AEは、夫が公共領域と家内領域を担って妻が公共領域だけを担うという人々である。M、Jのケースでは、夫は妻より家にいる時間が多いので、夫婦で時間を調整して、家事は夫が担うことが多くなるという。これも家庭内部の役割を分業しない社会主義時代に由来する在り方だと考えられる。

育児における役割分業では、D、J、M、N、E、S、V、X、AD、CCの10ケースが夫婦二人で育児をしていた。この中のJ、E、ADの答えには、夫婦が自ら得意な部分で子育てをしたことが表されている。CCの答えには、夫婦協力して育児をしていることが伺える。アンケート調査の結果では、40歳以上の対象者の家庭においては60.5%が、39歳以下の家庭では55.2%が夫婦で育児をしている。「家族の基本についての第三項目、結婚する事をお互いの自由で決めた第九項目、結婚者の平等権についての第五項目、子育て、子どもの教育での父母の平等的な権利と義務があるなどたくさんの項目を例挙できる」(BNMAUyn Ger Büliin Huuliin Delgerengüi Tailbar 1988 : 7)と書かれているように、社会主義時代の家族法においては、子育てと子どもの教育での父母の平等的な権利と義務があると定めている。よって、上のケースのような、育児に夫婦で協力していることは社会主義時代に由来することだと考えられる。

そして社会主義時代の夫婦役割分業のパターン⑤は、夫婦ともに公共領域に進出して、家内領域のことは子どもたちに任せる場合である。このパターンに当てはまるケースでは、家内領域における夫婦間の役割分業についてははっきりした答えが得られなかったが、夫婦ともに公共領域に進出していることは明らかである。

性別役割分業の社会主義時代のパターン①～⑤と民主主義時代のパターン①～④の共通点は、妻が公共領域に進出することである。妻が公共領域に進出することについて、社会主義時代の女性の就労は「夫の奴隷、家庭のメイド」から救う「生産業に引き出し、経済的に制限されている状況を撲滅する」ためであった(Pürevdorj 1981 : 71)。しかし、社会主義崩壊後、国家が夫婦の共働きを強制しなくなったにもかかわらず夫婦の共働きは継続している。モンゴルは市場経済移行期のショック療法によって経済的困難に直面した。この経済的困難によって家計も強いダメージを受け、支出が収入より多くなり(表2-11)、家庭の負担が大きくなったので、女性が働かざるを得ない状況になったため、女性が労働市場に押し出され、男女共働きが継続しているのである。

表 2 - 11 ウランバートル市毎月一世帯の平均収入支出差（1992～2013 年）

単位：トクリグ

年	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
収入差	-328	-632	-268	2874	2078	4471	1283	-8612	-2896	0	-25763
年	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
収入差	13405	-10959	-27744	-54425	-33166	-38807	-12119	-5580	25019	26010	55342

出所) ウランバートル市統計局ホームページのデータより筆者が作成した。

役割分業観に関する聞き取り調査での回答を分析すると、男女ともに女性の社会との接触と社会的地位の獲得を重視していることがわかった。つまり、移行期の経済と社会の混乱という客観的要因を除けば、女性は主観的にも社会との接触や個人としての自立を目指して公共領域に進出している。妻の公共領域への進出は社会主義時代からのことであるが、政治体制の転換以降に、その本質は、国が男女平等を徹底する政策を取り、女性を社会労働に引き出すことから、経済的困難を克服するため、または社会と接触し社会での地位を得るために女性が働くことへと変容した。

第一節にあげた L の例では、42 歳の L が仕事をやめて育児に専念した原因は、子どもが多い状況に加えて、政治体制が転換してから給料が安くなったという理由があった。これは、政治体制移行期にある現象であり、回答者の E の証言によると、当時は「多くの家庭は貧困に陥り、この国のすべての重荷を背負いました。若者はみんなビジネス（個人の小商売）を始めました」。L の家庭では、三つ子は福祉機関に入ったが、残りの 2 人を育てるために先生の仕事を続けられなくなったのである。L は社会主義が崩壊すると、仕事を辞めるのが可能になり、職場に出て子育てをしながら家庭で個人のビジネスをやり始めた。

### 2 - 3. 脱社会主義型役割分業

民主主義時代の家事における役割分業のパターン⑤、ならびに育児における役割分業のパターン③、つまり U の例のように、夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業に従うことが現れたことは、民主化以降の新しい特徴である。モンゴル国全体の経済状況は 1994 年にプラス成長に転じて以降、2009 年にマイナス成長を経験した以外は順調な発展を継続し<sup>28</sup>、かつての経済的困難を脱した。表 2-11 を見ると一世帯の平均月收入は 2011 年からプラスに転じた。このような経済発展は、女性を労働市場に押し出した状況が好転したということでもあり、論理的に考えれば、これによって労働市場に出て行かない女性が登場すると想定できる。聞き取り調査では、少数ではあったが専業主婦の存在が確認された。第二節にあげた 38 歳の U は専業主婦だった。夫は炭鉱へ出張していた。U の回答はすでに上に示したが、そこにも現れていたように、専業主婦として子育てに専念している原因は、U の子どもが幼稚園に入れなかったことであった。もう一人の専業主婦の例は筆者が

<sup>28</sup> モンゴル基礎データ、日本国外務省ホームページ。

住み込んだゲル地区の Y の家族である。Y の妻、Y の弟とその妻で構成する 4 人家族であった。2012 年の調査当時には弟の妻が妊娠中だったが、彼女はデパートでパートタイムの仕事をしていて、出産後は育児生活をしている。Y に、弟の妻がなぜ就職しないかと聞くと、不動産会社で働いている弟の給料が十分だから妻が働く必要がないと自慢していた。その専業主婦の家庭では、育児するために夫が仕事をして、妻が家内領域に残るといった性別役割分業をしているのである。しかし U は「最近では妻も仕事をするようになってきている」とも答えている。このことから、モンゴル人が遊牧生活で形成してきた「女性は家事を担う」という役割意識は、U に根強く存在しているといえる。これは、瀬地山の言う「社会主義化が交代したときに、家父長制の復活がみられる時期である」（瀬地山 1996 : 81）、そして「高収入層では主婦も誕生する」（瀬地山 1996 : 83）ということと一致している。つまり、民主化以降のモンゴルで男は公共領域で女は家内領域という性別役割分業が出現したことは、家族における脱社会主義である。

したがって、上の U と Y の 2 例はモンゴルの脱社会主義型性別役割分業である。ここで示す性別役割分業は、「近代家族」の特徴の一つである役割分業と同じものである。ただし、専業主婦が普遍化するということではなく、働く女性は当分の間に存在するだろう。なぜなら聞き取り調査から、調査対象となった女性が個人として高い自立意識を持っていて、一方の男性の中にも、妻が専業主婦になることを受け入れるが、妻が専業主婦になるかどうかは自ら決めるべきだという意見があるからである。

「近代家族論」が存在する前提は、資本主義近代という歴史の時代である。21 世紀の家族は個人の選択の自由であり、社会は個人を単位とする社会になると論じ、その変化の要因として、女性の脱主婦化が取り上げられるのであるが（落合 2008 : 230）、モンゴル国が現在歩んでいる民主主義と市場経済の時代に現れた専業主婦は、「近代家族論」で論じられている「性別役割分業」とは一致しない。モンゴルの都市社会に現れた専業主婦は、社会主義時代を経験して、現在の民主主義・市場経済期を歩んでいる国に現れたものである。U と Y の家族に出現した専業主婦は、遊牧生活で形成されて、根強く存在していた「女性は家事を担う」という性別役割分業意識の影響で、家計が許している家庭に限って現れたものである。しかし、L は社会主義が崩壊した後に、決して裕福ではなかったが、家で子どもたちを育てるために仕事を辞めて専業主婦となった。瀬地山は「高収入層では主婦も誕生する」という。確かに U と Y の家族に出現した専業主婦はその例である。しかし、L の例は瀬地山のいうところとは異なり、子どもを大事にする親心により専業主婦を選んだモンゴル人がいたことを示している。

#### 第四節 本章のまとめ

以上をまとめると、モンゴル国の都市家族の性別役割分業は、遊牧生活由来の性別役割



分業、社会主義型夫婦の役割分業、脱社会主義型の性別役割分業に分類できる。

このように、モンゴル国の都市家族には、まだ歴史的な生活と経験、そして牧畜という生業形態から抜け出していない部分があることは明らかである。本章の仮説として用いた近代家族の特徴の一つである、夫が公共領域で妻が家内領域という性別役割分業は、モンゴルの社会主義時代に進んだ近代化の過程では現れなかったが、体制移行によって出現した社会と経済の状況により、一方は専業主婦の登場を許すほどに裕福となった家族に、他方は裕福ではないにもかかわらず子育てを優先したいとする気持ちを持つようになった親が存在する家族に現れた現象である。

このような変容過程を明らかにした以上、少なくともモンゴルの都市家族に限定されてはいるが、夫婦の役割分業は、前近代から近代、ポスト近代というような時代の画期や、都市と地方という空間の違いによって、その特徴が完全に一変するのではなく、前代に形成された社会と経済の事情や非都市空間において培われてきた基底的な生業に由来する特徴を引きずり続けているということを見逃すわけにはいかない。むしろこのような状況が、社会主義成立以前の前近代的状態から、社会主義、そして民主主義へと移行しても継続し、これからもさらに継続すると予想される近代化過程における過渡的な状態を示しているとも考えることができる。もしそうであるとしても、モンゴルの近代化過程における夫婦の役割分業を分析して、その過渡的な状態を明らかにしたことは、従来の「近代家族論」が十分になしえなかったことである。

### 第三章 家族成員間は強い情緒的關係で結ばれているのか

まずは、「近代家族」の特徴の一つ「家族成員間は強い情緒的關係で結ばれている」について、先行研究での議論を確認しよう。

ショーター、アリエスに代表される欧米の社会史・家族史研究では、夫婦、親子の愛情がヨーロッパの近代化の中で構築されたと指摘している。「18世紀末になると、若者たちは結婚相手を選ぶとき、財産や親の意向といった外的な動機よりも、内的な感情を重んじるようになった……かれらは、親がよいと思う相手ではなく、自分の好みの相手を選ぶようになったのである」（ショーター1987：83）。近世では、「子どもにたいしてもたらされた新しい配慮は新しい意識を吹きこみ、新しい感情生活を誕生させ、十七世紀の絵画は執拗なまでに近代の家庭のもつ感情である幸福を表現したのであった」（アリエス2003：385）。

落合はこれらの研究の影響を受けて、近代家族の諸特徴のなかに「家族員相互の強い情緒的關係」をあげた。落合はその中の夫婦間の絆を「ロマンチック・ラブ」と呼んでいる（落合2000：8）。「性と愛が夫婦の特権的な絆であったのは、歴史的にはほんの一時期のことではなかったのである」（落合2000：8）、また「性は第一義的には生殖という目的のための手段だという認識は、かえって自明の常識となった」（落合2000：9）と論じた。すなわち、近代社会になってから、運命の人と恋愛を経験して、その人と愛情を持って結婚して、肉体的に結合して、子どもを産んで、その子どもに愛情を注いで育てることが理想的家族のモデルとされた。落合は『21世紀家族へ』の序文に「近代家族」という概念を「家族愛の絆で結ばれ、プライバシーを重んじ、夫が稼ぎ手で妻は主婦と性別分業し、子どもに対して強い愛情と教育関心を注ぐような家族が『近代家族』（落合2008、iv）だと述べた。

ショーターは感情の高まりにより近代家族が誕生したという。この、感情の高まりには、夫婦愛、母性愛と家庭愛が含まれている（ショーター1987：17）。千田は、近代家族に関する規範をロマンティックラブ・イデオロギー（夫婦の絆の規範）、母性イデオロギー（母子間の絆の規範）と家庭イデオロギー（家族の集団性の規範）に分けた。本章のテーマである家族成員間の強い情緒的關係は千田の定義した近代家族の三つの規範の中の夫婦の絆の規範であるロマンティックラブ・イデオロギーと関わるものである（母子間の絆の規範は第四章、家族の集団性の規範は第六章で議論する）。これを踏まえ、本章では議論のポイントを、夫婦間は強い情緒的關係で結ばれているかどうか絞る。千田は「愛と性と生殖が結婚を媒介として一体化したもの……愛と性と結婚と子どもが一連の過程として考えられているのである」（千田2011：17）。「愛のない結婚、愛のないセックス、結婚につながらない性交渉、結婚していない婚姻外の性、婚姻外で生まれる婚外子、愛している相手の子どもがいないと感じること、結婚しているにもかかわらず子どもをつくらないことなどが、不自然であると考えられ、非難の対象とされて」（千田2011：16）、いずれも規範意識に反

することとされた。

以上の議論を参考に、モンゴル社会の結婚に関する規範の変化、結婚するきっかけ、家族の中の情緒的関係の重要度、結婚、性交渉、子ども間の結びつけに対する意識などを調べて、家族の夫婦間に規範意識が変容したかどうか、夫婦間は強い情緒的関係で結ばれているかどうかを検証する

前近代のモンゴル社会における婚姻制度について先行研究から紹介する。『蒙古社会制度史』では、モンゴルの最も有名な古典である『元朝秘史』を考証して、モンゴル人の婚姻制度について以下のように総括した。すなわち、「11世紀乃至13世紀の蒙古人は、妻を得るために時々非常に遠方まで行き、遠方の氏族中で婚約を結ぶために苦心しなければならなかった。……又昔の記録からも判るやうに、好機ある毎に屢々婦女を誘拐したり、暴力で奪ったりした。又同じ氏族から他の或る氏族が婚約によって嫁を貰ふ習慣も見られた。……時としては、両氏族間に花嫁交換に関する正規の契約が結ばれた。……多妻制は極く普通の現象であった」（ウラヂミルツォフ 1980：106）。鯉淵も『元朝秘史』や「モンゴルオイラート法典」を検証して、モンゴルの婚姻制度について、族外婚の通婚習慣をもって、「この族外婚の嫁娶り形態の象徴として所謂『掠奪婚』、『誘拐婚』といわれる習慣が広く存在していた。少数部族内での近親間結婚を避ける智恵として実際に掠奪が行われたこともあつただろうが、前もって婚姻の約束を取り交わした上で、儀式として略奪、誘拐の方法を取る方法が一般的であつたろう」（鯉淵 2005：44）という結論を得た。また一夫多妻の習慣はモンゴルでも広く行われていたとしている（鯉淵 2005：45）。以上の先行研究から、かつてモンゴルでは親の縁談や誘拐、掠奪で夫婦が結ばれていた、一夫多妻が普遍的な現象であったことがわかる。

本章ではモンゴル社会の結婚に関する規範の変化、結婚するきっかけ、家族成員間の情緒的関係の有無、結婚、性交渉、子ども間の結びつけに対する意識などを調べて、家族成員間は強い情緒的関係で結ばれているかどうかを検証する。

## 第一節 社会主義時代

### 1. 社会主義社会における結婚に関する法律の変容

モンゴル人民共和国の成立とともに、法律の整備が始まった。なかでも婚姻についての法律はいち早く定められた。まず、「1925年に女性を夫に略奪されることを止めさせて、すべての男女は一緒に生活することを双方が自らの意志を尊重の上完成すべきだという政府の決意は家族関係における封建社会の残忍な制度を破壊して、結婚者に平等的な権利を与え、自らの意志で自由に結婚する制度を定めた初めての革命的重大な決定であった」（Dashdondov 1976：29）。1927年に制定された社会主義時代の初めての民法典であるモンゴル人民共和国民法の第3条において「すべての人が夫婦になるときに自らの意志で結婚できるが、もし父母がいるなら、父母の同意を求めべきである。これを解釈すると、夫婦に

なることを彼らの父母、親戚がリードして遂行できるが、各自自分の息子、娘の意志を聞くべきである」(*Mongol Ulsyn Irgenii Huuli Togtoomj* 2012:60)、「夫婦のどちらが家から離れて3年まで戻ってこない場合、他人と夫婦になることができるが、子どもがいる場合はその期限が最低五年になる」(*Mongol Ulsyn Irgenii Huuli Togtoomj* 2012:60)。この、1927年の民法から読めるのは、①夫婦になることが自らの意志で決められる。しかし両親、親戚の意志で遂行できることが民法で認められていた。②家を離れて一定の期間が経ったら、行政機関の許可を得ずに他人と夫婦になれることになっていた。

1956年に施行されたモンゴル人民共和国の婚姻と家族福祉法の第4条に「家族の状態を登録場所で登録しなかった人を結婚しているとは認めないので、彼らの間には合法的な権利と義務が生じない」と書いてある。また同条の説明に「1951年1月1日以前に結婚した国民は、家族の状態を登録所に登録しなくても彼らを法律に準じた結婚者と認める。このような人もいつから同居したことを説明して、婚姻届を出すべきである」(*BNMAU-yn Gerleh Ba Ger Bül, Asramj Tetgemjiin Huuli*1956:3)と書いてある。これより判明することは、モンゴルでは1956年にこの婚姻と家族福祉法が制定されて初めて法律婚が出現したということである。そして、1951年以前に結婚したカップルであっても1956年以降に婚姻届を提出しなければ法律上の夫婦として認めないことになった。その後の1973年の家族法の第1章第4条には「結婚者がもし登録しなかったら、彼らの間にはこの法律に定めた権利と義務が生じない。モンゴル人民共和国の国民の家族の状態を登録機関に登録した婚姻と1951年以前の婚姻は有効と見なす」(*Bügd Nairamdah Mongol Ard Ulsyn Ger Büliin Huuli* 1973 : 9)と定めている。以上の法律からわかるのは、結婚を行政機関に登録する制度、即ち法律婚は1956年の婚姻と家族福祉法からのことであり、1951年以来の事実婚は法律で保護されなかったことである。

1973年制定の家族法の第3条には、家族の基盤について「モンゴル人民共和国における結婚、一緒に生活することとは、結婚している人々がお互いに愛情を持って、お互いを尊敬し、大切に守って、友好的にお互いを助け合い、自分の意思のもとで成立するものである。」(*Bügd Nairamdah Mongol Ard Ulsyn Ger Büliin Huuli* 1973 : 10)と規定した。また「結婚を望む人において結婚を望むことは、他人(具体的にいえば、父母、親戚など)の希望と関係がない。父母、親戚とほかのだれかが他人の結婚を邪魔をすることと結婚を強制することができない」(*BNMAU-yn Ger Büliin Huuliin delgerengui tailbar* 1988 : 11)と規定し、結婚する際に結婚者の意志を尊重するように定められた。以上の法律を見ると、愛情を持つ結婚、そして法律に認められた夫婦のみを結婚したと認めることは、20世紀の半ばからのことであり、社会主義国家モンゴル人民共和国は、家族が愛情の絆で結ばれ、結婚者の意志を尊重することと、結婚について法律的な手続きを取ることを期待していた。

以上をまとめると、社会主義初期の法律制度は前近代的な結婚制度から社会主義的な結婚制度への過渡期であり、正式な結婚登録制度がなく、離婚もしやすかった。当時は結婚者である個人の意志を尊重することを提起した。1956年に結婚登録制度が定められ、婚姻

登録は家族成員間の権利と義務の前提となった。1973年の家族法において結婚は本人同士の愛情の下で、個人の意志で決めるべきことを法律に書いた。

## 2. 結婚に関する実態

### 2-1. 結婚相手と知り合ったきっかけ

まずは、結婚する二人の知り合ったきっかけについて尋ねた結果を見てみる。調査においては以下の質問を聞いた。

あなたが配偶とどのように結婚しましたか。

- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| 1. 自分たちで知り合った | 3. 紹介会社により知り合った |
| 2. 紹介されて知り合った | 4. その他          |

結婚につながる「知り合った」事情について、アンケート調査では上の4つの選択肢を用意したが、「紹介会社により知り合った」と「その他」の2項目を選んだ人はなかった。回答者の73人のうち2人が他人に紹介されて結婚した。50代、60代に1人ずついるが、2人ともウランバートルの出身ではない。

表 3-1 既婚者の結婚相手と知り合ったきっかけ (40歳以上)

n=73

出身地	ウランバートル市出身					
知り合ったきっかけ	自分たちで知り合った		紹介されて知り合った		総計	
年齢(歳)	度数	比率	度数	比率	度数	比率
40~49	14	100.0%	0	0.0%	14	100.0%
50~59	9	100.0%	0	0.0%	9	100.0%
60~69	2	100.0%	0	0.0%	2	100.0%
総計	25	100.0%	0	0.0%	25	100.0%
出身地	ウランバートル市以外の出身					
知り合ったきっかけ	自分たちで知り合った		紹介されて知り合った		総計	
年齢(歳)	度数	比率	度数	比率	度数	比率
40~49	24	100.0%	0	0.0%	24	100.0%
50~59	15	93.8%	1	6.3%	16	100.0%
60~69	7	87.5%	1	12.5%	8	100.0%
総計	46	95.8%	2	4.2%	48	100.0%

## 2-2. 結婚するきっかけ

聞き取り調査では「どのようなきっかけで結婚しましたか」、「前の時代の結婚は今の時代の結婚と違うところがありますか」と聞いた。その結果、以下の答えが出た。

**BD**：妻と結婚して40年にもなっています。大学時代に知り合って、恋愛して結婚しました。

**E**：私の父親時代からは自由であり、愛情を持ってから結婚して、自分の思う通りやりはじめました。自分たちで結婚を決めた後に両親に伝えました。両親より前の時代はよく親の意志により縁談を決めていました。結婚年齢に達した若者の両親は、知り合いの家々の娘は我が家の息子にどうですかとか、そちらのお子さんは家系のいい家族の子だとか、両親の人柄がいいとか、両親が話し合って決めます。それは悪いことではないようですが、自分の希望している通りに結婚できません。

**D**：当時はお互いをよく理解し合って、(結婚し一筆者補) ました。

**B**：(問：結婚する時に家系を考慮しましたか) (私は夫の一筆者補) 両親(の家系一筆者補) を考慮しました。あなたの父母はそのよう(な人だと私が夫に言いました一筆者補)。私たちの場合は、(私たちが一筆者補) 結婚した後にお互いに(家系のことを一筆者補) 聞きました。だから(私たちは、お互いの一筆者補) 家系はどのような人ですか、そのような人ですと(お互いに一筆者補) よく話し合っていました。

**L**：当時は(私たちは一筆者補) そうやって(結婚した一筆者補)。(夫の一筆者補) お父さんは軍人でした。(だから夫は父と一筆者補) あっちこっちに行くのです。そして(夫が一筆者補) 私の故郷に来て、私と知り合って結婚しました。

**O**：新年パーティーで知り合って、お互いを好きになって結婚しました。最初は会うだけでしたが、次第に一緒に暮らすようになりました。

**P**：(問：家系を考慮しましたか) それはまったくわかりません。

**N**：友達として知り合って、どんな人かをわかってしまってから(交際相手として一筆者補) 選びました。

調査対象者のEはBBとBCの息子である。BBとBCは若い時にウランバートルに来てウランバートルで知り合って結婚した。当時、ウランバートルに来た若者は両親と離れて暮らしたので、自分の意思で結婚するようになったと考えられる。BDは大学時代に妻と知り合って、恋愛結婚したと証言している。Dはウランバートル市の出身である。前の時代の結婚は「お互いをよく理解し合って」結婚したと答えた。Bはウランバートルに来てから結婚した。Bは結婚する時ではなく、結婚してから両親のことについて夫と話し合っていたようである。Lの答えでは夫の「お父さんは軍人」だったので、夫の家族はその父と一緒に各

地に転勤して行く際に、どこかで夫と知り合ったが、結婚を決める際の決め手については言及しなかった。O、P、Nの答えをみると、家系などは考慮せず自分の意志で結婚を決めたようである。

下のC、Gの事例は結婚する際に家系を考慮した事例である。

C：(相手の一筆者補) 家系を考慮しました。それが正しいと思います。(問：家系というのはなんですか。)(相手の一筆者補) 父母はどんな人ですか(、ということです一筆者補)。それを知るべきです。

G：当時は父母の教育に従っていました。私の上の世代も同じでした。最初は家柄を考慮します。(問：当時は両親に結婚相手を紹介されましたか。) そうです。両親に、彼は家系がいい家庭の子どもだよ、彼と結婚してくださいと言われてその通りにしました。

そのほかADも自分の両親について「父母は、ほぼ何も知らないうちに結婚して一緒に住んで、たくさん子どもを産んで育てて、いい家族となりました」と証言した。

Cは家系を考慮したと答えた。家系を考慮するというのは、結婚相手の父母のことを知るべきだとCは解釈した。Gは小学生時代にウランバートル市に移入した。Gは結婚する際に両親の意見を聞き、両親に紹介してもらったという。その際に家柄を考慮したと答えた。両親に勧められた家系のいい家庭の子どもと結婚すると答えた。ADの両親はモンゴル国西部ジャブハン県出身で、当時、故郷にいたその両親はほぼお互いを知らないうちに結婚したと回答した。かつての地方部では両親の意思を尊重していたことが伺える。また、親と一緒に都市に移入した人々にとっては、相手の家系、親の意見も結婚に影響を与えていた回答者もいるといえる。

以上のアンケート調査の結果と聞き取り調査からわかるのは、社会主義国家の法律に提唱されていた結婚者個人の意思が尊重される結婚は、ウランバートル市で生活していた調査対象者の中では普遍的な現象である。都市へ移住した若い男女が偶然に結びつく可能性が増加し、配偶者を選ぶ地理的範囲が拡大され、両親による拘束を受けなくなり、個人の自由な意思決定に従って、恋愛結婚が広がったと考えられる。

### 2-3. 家族にとって大事なことに関する意識

社会主義時代のイデオロギーを受けた回答者が婚姻の中に何が大事とみているか、「近代家族」の特徴である「愛情」を重視しているかどうか注目する。

アンケート調査表では家族にとって最も大事なことを複数選んでもらった。その結果を表3-2に示す。回答者が最も重視するとした項目を選択率の高い順に並べた。

表 3-2 「家族にとって一番大事なのは何と思いますか」に対する回答（40歳以上）（複数回答） n=80

男性			女性			合計		
項目	度数	比率	項目	度数	比率	項目	度数	比率
愛情	7	50.0%	生活の知恵を持つ	40	60.6%	愛情	43	53.8%
価値観が同じ	7	50.0%	愛情	36	54.5%	生活の知恵を持つ	43	53.8%
家系	5	35.7%	価値観が同じ	22	33.3%	価値観が同じ	29	36.3%
生活の知恵を持つ	3	21.4%	家系	19	28.8%	家系	24	30.0%
お金を持つこと	2	14.3%	興味が同じ	7	10.6%	お金を持つこと	9	11.3%
興味が同じ	1	7.1%	お金を持つこと	7	10.6%	興味が同じ	8	10.0%
学歴	1	7.1%	学歴	2	3.0%	学歴	3	3.8%
その他	0	0.0%	その他	2	3.0%	その他	2	2.5%
両親の意見	0	0.0%	両親の意見	1	1.5%	両親の意見	1	1.3%
総計	14	100.0%	総計	66	100.0%	総計	80	100.0%

男性がもっとも重視している項目は「価値観が同じ」7人(50.0%)、「愛情」7人(50.0%)であり、次いで「家系」5人(35.7%)という結果になった。女性の答えを見ると、まずは「生活の知恵」を持っていることを40人(60.6%)が重視し、次に「愛情」を持つことを36人(54.5%)が重視し、3位は「価値観が似ている」で、22人(33.3%)が大事と思っている。表3-2に示すように、分析対象者の答えの中では、男女合わせて「愛情」が生活の中でもっとも大事とされている。40～70代の回答者はすでに一定期間の結婚生活を過ごしているので、価値観が一致することの重要性を感じているからだとも思われる。また、男性は女性の家系を重視していることがわかる。グループ聞き取り調査では「家系を考慮するとよくいうが、意味はなんですか」と聞いた。Gは「家系を考慮するというのは、どのような家庭の子どもか、生活はどうか、どのように育てられたか、両親は勤勉な人であるかどうかなどを言います。たとえば怠け者の子どもはどんな人間になるか、飲んだくれの子どもはどんな人間になるか、刑務所に入った人の子どもはどんな人間になるとか(などをいいます—筆者補)」と答えた。家系を考慮するというのは、結婚相手の家庭環境を見る、両親のことを見るという意味で使われている。女性は相手が「生活の知恵」を持つことを非常に重視し、経済力を持っていること（「金を持つこと」）にはこだわっていない。表3-2に見られるもう一つの現象は「父母の意見」と「学歴」を重視することが少ないことである。たとえば父母の意見を重視する人は80人の中の1人（1.3%）、学歴を重視する人も3人（3.8%）、経済力（「お金を持つこと」）が大事だとした人も80人の中の9人（11.3%）に止まっている。これは40～70代の既婚者が結婚した時は社会主義時代または政治体制の移行期であり、国民の生活水準に格差が大きくなかった時代から国民の給料に格差が出た時代に入ったことに起因する可能性がある。BGによると、社会主義時代には「みんなが同じように働いて、給



料をもらいます。みんな給料は同じでした」。BCは「社会主義時代は利益を平等に分配する方針を取っていました。だから貧しい人がいない、お金持ちもいませんでした」と証言した。この証言によると、社会主義時代には所得を平等に分配していたため、当時は世帯間の収入の差が大きくなかった。すべての労働者の収入に差が少なく貧富の差もなかったため、学歴や経済力などが結婚する際には重視されなかったと考えられる。表3-3は、労働者の1985年から1992までの平均月給を表している。これによると、1990年までの労働者の平均月給は524から557トクリグまで上がったが、大きな変化はなかった。1991年、1992年になって、労働者の平均収入が倍ぐらい増えた。一方、月給の分布範囲（最大値－最小値）は、1991年には861、1992年には1328であり（表3-3に示している）、各業界の収入に格差が出た。彼らは社会の変動、家計の変化を経験し、生活の知恵を持つことが家庭にとって大事なことだと理解するようになったものと解釈できよう。

表3-3 労働者の平均月給

単位 トクリグ

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992
労働者、公務員の平均月給	524	526	529	560	539	557	1025	1449
生産部門	544	547	551	593	568	587	974	1449
工業	584	586	586	464	618	622	1424	2169
牧畜産業	423	425	429	585	449	466	563	841
建築業	579	586	607	662	586	602	1110	1755
輸送業	687	689	687	485	653	666	1255	2071
通信業	473	474	469	475	490	477	1146	1568
商業、原材料技術の供給	446	444	449	476	485	533	1143	1692
生産以外の部門	483	483	481	486	491	507	1127	1635
住居、共同経済、サービス業	461	466	461	466	475	471	1141	1656
科学、そのサービス	564	566	555	566	591	667	1411	1701
健康、障害者福祉、社会保険	420	417	416	441	425	434	1023	...
文化、教育、芸術	473	479	481	478	478	498	1087	...

出所) Mongol Ediin Zasag Niigem 1992 Ond : Statistician Emhetgel 1993 : 3。

次に、聞き取り調査における「家族にとって最も大事なことはなんですか」との質問に対する回答を見よう。

- B : よい生活を送って、家族が円満であればいいです。
- O : お互いをよく理解して、お互いを信じることが一番大事と思います。
- D : 暖かい雰囲気があり、お互いをよく理解することです。

J：家族が一番大事なのは暖かい雰囲気です。……いい雰囲気があったらいいです。家族が幸せ、子どもが健康的であることです。

C：私にとっては子どもです。彼らの生活に（私が一筆者補）役に立って、彼らが専門を身に着け、いい人間になったらいいです。これが私の生活の目的です。

L：第一は子どもを正しく育てることです。第二は子どもが両親を愛し、世話をし、気を遣うべきです。私の家族はお互いに仲良しであることを希望しています。

P：平穏無事です。

N：健康、安全、幸福です。一番重要なのは健康です。健康があれば何でもできます。

これら回答者にとって一番大事なこととされた事柄は「円満」、「暖かい雰囲気」、「仲良し」、相互の理解と信頼など家族成員間の情緒的關係に属する事柄や「子ども」、「健康」、「平穏無事」など具体的な事柄が挙げられている。

以上から見ると、回答者の多くは自らの意志で結婚相手を決めたことがわかる。家族にとって最も重要な事柄に選ばれたのは、生活の知恵、愛情、同じ価値観であり、聞き取り調査の中では、「円満」、「暖かい雰囲気」、「友好的」、相互の理解と信任のような情緒的な関係と子ども、健康などであった。

### 3. 結婚観

社会主義時代を経験した人は、結婚を目的としていない同棲をどう見ているかを知るために「結婚するつもりがなくても、男女が同棲するのはかまわない」という考え方への賛否をたずねた。図3-1はその結果である。

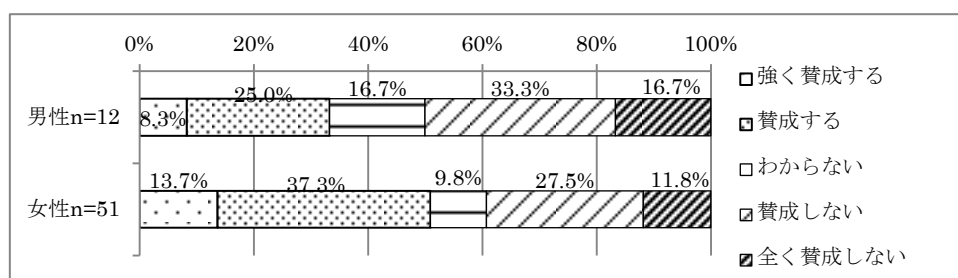


図3-1 男女別「結婚するつもりがなくても、男女が同棲するのはかまわない」に対する賛否 (40歳以上) n=63

男女別にみると、同棲しても結婚にこだわらない女性が男性より多く、「強く賛成する」と「賛成する」は女性ではそれぞれ13.7%、37.3%を占め、男性では8.3%、25.0%を占めている。反対を表明したのは、女性の39.3%（「賛成しない」27.5%、「全く賛成しない」11.8%）、男性の中の50.0%（「賛成しない」33.3%、「全く賛成しない」16.7%）である。この項目からわかるのは、分析対象者の中で事実婚状態を認める立場の人は女性のほうが多く、男性

はより保守的であることだ。

次に、「結婚前の男女でも愛情があるなら性交渉を持ってよい」という考え方への賛否を問うた。図3-2はその結果である。

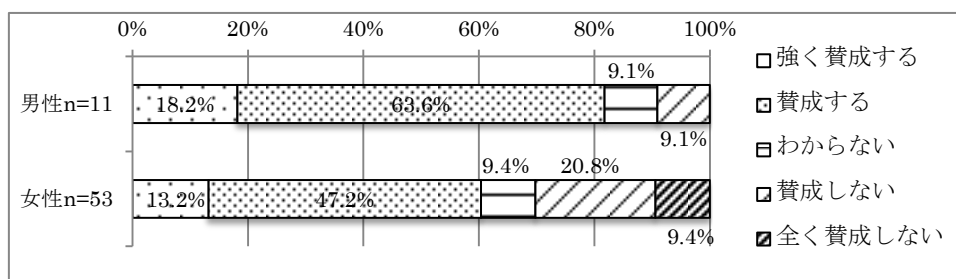


図3-2 男女別「結婚前の男女でも愛情があるなら性交渉を持ってよい」に対する賛否 (40歳以上) n = 64

図3-2より、男性の81.8%が賛成(「強く賛成」18.2%、「賛成」63.6%)、女性の60.4%が賛成している(「強く賛成」13.2%、「賛成」47.2%)。結婚前に性交渉を持ってよいと考えている人の割合は男性のほうが高い。男女ともに婚前性交渉に賛成する人が反対する人を上回る。男性の方が、婚前性交渉に賛成者がやや多く、より寛容な態度を持っている。

非嫡出子についての考え方を聞いた結果を図3-3に示す。

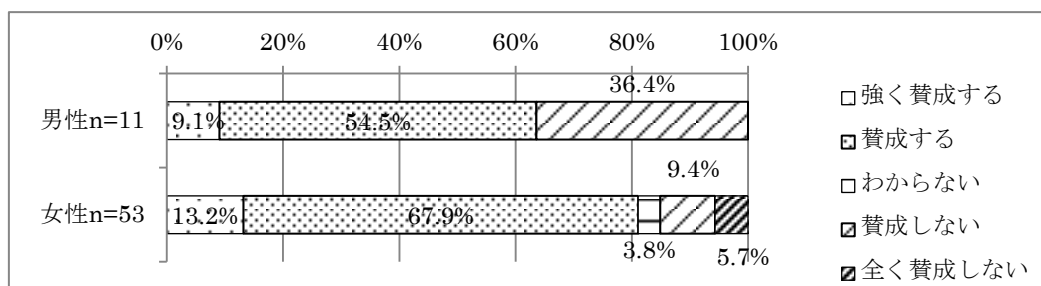


図3-3 男女別「結婚していなくても子どもを持っていい」に対する賛否 (40歳以上) n = 64

「結婚していなくても子どもを持っていい」という考え方への賛否を見ると、男性の9.1%が「強く賛成する」、54.5%が「賛成する」、36.4%が「賛成しない」と答えた。女性の13.2%が「強く賛成する」、67.9%が「賛成する」、「賛成しない」と「全く賛成しない」と答えたのがそれぞれ9.4%と5.7%である。男性の63.4%、女性の71.1%が非嫡出子に対して寛容な態度を持っていて、賛成派が反対派を上回っているが、男性の36.4%の対象者が非嫡出子の出産に反対しており、出産は婚姻の内で行うべきであると保守的に考える割合は女性よりも高いことがわかる。

離婚についての考えを尋ねた結果を図3-4に示す。

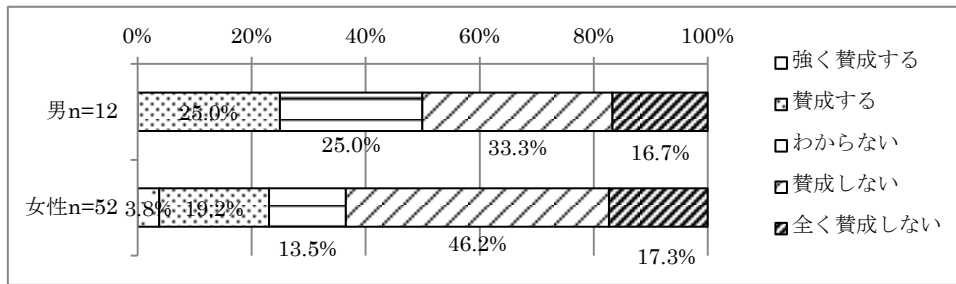


図 3-4 男女別「一旦結婚したら、相手に不満があっても離婚するべきではない」に対する賛否 (40 歳以上) n = 64

図 3-4 に示すように、「一旦結婚したら、相手に不満があっても離婚するべきではない」に対して、「強く賛成する」男性回答者はおらず、「賛成する」と答えた人が 25.0% を占める。女性では 3.8% が「強く賛成する」、19.2% が「賛成する」と答え、賛成派は 23.0% を占める。一方、男性の 50.0%、女性の 63.5% が賛成しないと答えており、男女とも離婚を肯定する考えが否定する考えを上回っている。

生涯独身についての考えを尋ねた結果を図 3-5 に示す。

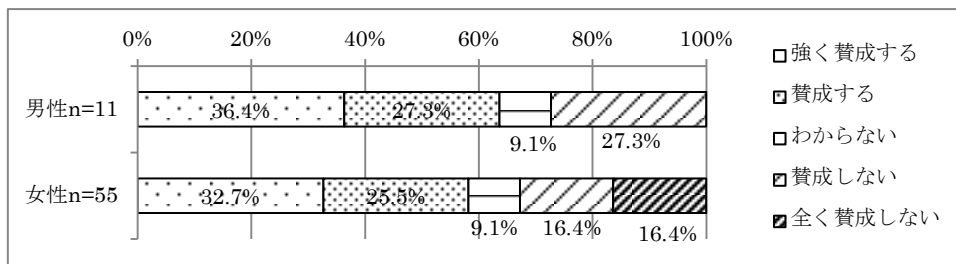


図 3-5 男女別「生涯を独身で過ごすということは、望ましい生き方ではない」に対する賛否 (40 歳以上) n = 66

「生涯を独身で過ごすということは、望ましい生き方ではない」という考え方に対しては、男性回答者の 36.4% が「強く賛成する」、27.3% が「賛成する」と答え、女性回答者の 32.7% が「強く賛成する」、25.5% が「賛成する」と答えた。男女とも、結婚すべきと考える回答者が反対する人より多いのである。

#### 4. 本節のまとめ

以上、第一節の内容をまとめると、1927 年の民法は社会主義への過渡期の法律であり、結婚する二人が自分たちの意志で結婚するしないを決定できるが、親戚の意志で行えることもまた認められていた。1956 年のモンゴル人民共和国の婚姻と家族福祉法から、婚姻を行政機関に登録する制度がはじまった。1973 年の家族法で、個人の意志を尊重して結婚す

ることが定められ、恋愛結婚が家族法で保護された。実際、回答者の回答からも恋愛結婚が普遍的になっていたことが証明される。モンゴルにおける恋愛結婚は社会主義時代の産物である。法律においては、制度的に登録したカップルのみが家族法に定められた権利と義務を持っていたが、結婚とつながらない同棲、婚前性交渉、非嫡出子について、寛容的な態度を持っている調査対象者が半数以上いることがわかった。

モンゴル人民共和国は人口増加政策<sup>29</sup>を実施して、子どもをたくさん持つことを奨励していた。調査対象者の中でも結婚する前に子どもを持つことに寛容的な態度を持つ人が半数以上を占めている。

アンケート調査では、40歳以上の人々は結婚とつながらない同棲や結婚前の性交渉、非嫡出子には寛容な態度を持ち、結婚、性、子どもが必ずしも結びついていないわけではない。近代家族の規範とされている「愛と性と生殖が結婚を媒介とすることによって一体化されたものである」（千田 2011：17）ということは、モンゴルでは求められていなかったことが明らかになった。

## 第二節 民主主義時代

### 1. 民主主義時代の法律改正

1999年にモンゴル国は新しい時代に適合するために家族法を改正した。法律により「結婚とは法律に基づいて成人の男女二人が、自由に、自らの願いにしたがって、平等な権利の下に、家族になる目的で、法律の指示にしたがって、国家行政機関に登録することである」（*Mongol Ulsiin Huuliud*1999:263）と結婚の基本を定めた。つまり、結婚する時には、自らの意志に従うべきである。また、婚姻とは行政機関で登録されてから法律に保護されるものであると定められたのである。

非嫡出子について、改正された家族法の14条には「結婚に登録していない同棲者の子どもが福祉手当を希望する場合、裁判所は家族法の37条に基づいて、子どもの父親を判定してから、手当のことに実現すべきである」<sup>30</sup>と定められている。そして1999年の家族法の21条4項に父母、子ども間の権利と義務が発生することを「子どもの父母は結婚に登録したら結婚証明書、結婚に登録しなかったら法律に基づいて父母だと定めた行政または裁判に基づいた決定をする」、21条5項に「結婚に登録していない人々から生まれた子どもは、結婚に登録してから生まれた子どもと同じ権利を持ち、義務を果たすべきだ」と定めた

（*Mongol Ulsiin Huuliud*1999：270）。この法律改正以降、行政機関に登録した家族を家族として承認し、権利と義務が生じることは社会主義時代と同じだが、制度によって非嫡出子

<sup>29</sup> 第四章第一節の2において論じている。

<sup>30</sup> *Ulsiin deed shuuhiin togtool BNMAU-in ger buliin huuli zarim zaaltig shuuh taslah ajillagaand heregleh tuhai* 1973。

への差別がなくされて、嫡出子と非嫡出子を平等的に扱う方向へ向かっている。

## 2. 結婚に関する実態

### 2-1. 結婚相手と知り合うきっかけ

表3-4は20代、30代の既婚者に「あなたは配偶者とどのように知り合いましたか」という質問に対する回答を表したものである。20代、30代の中の未婚者を除く83人の回答者の中の9人が友達か親友に紹介されたケースである。その中に、ウランバートル出身の30代の調査対象者の3人(18.8%)が誰かに紹介されて知り合ったと答えた。ウランバートル市以外の出身者58人の中の6人は誰かに紹介されて知り合った。「紹介会社を通じて知り合った」と答えた人は1人もいない。モンゴルにはお見合いや結婚相談所はモンゴルでは存在しないようである。

表 3-4 既婚者の結婚相手と知り合ったきっかけ (20~39歳) n=83

出身地	ウランバートル出身					
	自分たちで知り合った		紹介されて知り合った		総計	
年齢(歳)	度数	比率	度数	比率	度数	比率
20~29	9	100.0%	0	0.0%	9	100.0%
30~39	13	81.3%	3	18.8%	16	100.0%
総計	22	88.0%	3	12.0%	25	100.0%
出身地	ウランバートル以外の出身					
	自分たちで知り合った		紹介されて知り合った		総計	
年齢(歳)	度数	比率	度数	比率	度数	比率
20~29	20	83.3%	4	16.7%	24	100.0%
30~39	32	94.1%	2	5.9%	34	100.0%
総計	52	89.7%	6	10.3%	58	100.0%

以上からわかるのは、分析対象者である20代、30代の分析対象者の中の既婚者が結婚相手と知り合ったきっかけの多くは自分たちで知り合うことであり、少数の人が誰かに紹介されて知り合ったことがわかる。

### 2-2. 結婚したきっかけ

20代、30代の若者層が結婚したきっかけについて、聞き取り調査で「なぜこの人と結婚すると決めたか」と聞いた。

V：子どもを産んでから結婚しました。

Z：妊娠して結婚を決めました。その前には三年間付き合いました。

U：私は20代で結婚しました。私は単に愛していました。当時は両親が亡くなったので、好きな人と結婚しました。

W：なぜ結婚したのでしょうかね。よく言い寄られていました。いつの間にか一緒にいました。

V：好きだから（結婚しました一筆者補）。付き合っただけで愛し合ったので結婚しました。

AA：（夫は一筆者補）妻と子どもの世話をする能力を持っています。私を愛してくれて、家族の面倒をみるから（結婚しました一筆者補）。

なおHは、自分の息子について「今は息子がどこかから誰かの娘を連れてきて、一緒に住んでいます。面倒臭いと思って、聞くのをあきらめました。相手の両親のことは全然知りません」と述べた。

以上の答えから見ると、二人の間に子どもがいる、「能力」、「愛」、「好き」、「家系」などが上の回答者たちの結婚を決めた時に考慮する要素となっている。Vは子どもを産んでから結婚した、Zは妊娠して結婚したと答えた。つまり交際を経て結婚した。U、Vは「好き」、Wは「よく言い寄せられた」、AAは夫が「妻と子どもの世話をする能力を持っていて」と「私を愛してくれて」いるので付き合っただけで結婚したと証言している。上の例は全部自分で結婚相手と付き合っただけで結婚した証拠である。またHは自分の息子の彼女について、その両親のことを全然知らないと答えた。これは両親が自分の子どもの結婚相手を選ぶ際の関与が薄くなっている例になっている。

家系に対する考えを次の家系を重視する3つの事例で考察する。

S：最初は家系をみましました。父母は何をしている人だとか（を見ます一筆者補）。

U：相手の家系は全然知りませんでした。今は自分が母になって、やはり家系を重視するようになっています。

Y：家系を考慮してから結婚すると（家族が一筆者補）堅固になるといわれています。今の若者は好きな人を連れてきます。今の若者は遊ぶ感覚で自由に選択した結果、父親不明の子を生んで単に離婚してしまうような大きな問題が生じています。遊ぶ面で家族を理解して、離婚が多くなっていると思います。

上の三つの回答中、Sは家系を考慮したと答えた。Sは「父母は何をしている人」なのかを考慮して結婚したのである。Uは自分が結婚する時には家系を考慮しなかったが、今は大事なことだと認識している。Yは親戚の紹介で妻と知り合っただけで、半年交際して結婚した。Yは家系を考慮して結婚を決めたほうが家族は堅固になると考えている。回答者の中では少ないが、20~39歳の若者層の中でも家系を大事だと考えている人もいる。

以上からわかるのは、この設問への回答者の中には、自ら結婚を決める人が多い、自らの気持ち、恋愛を通じてわかった「能力」、「家系」などで決めたという人がいる。民主主義時代においては、結婚のきっかけは自らの交際を通じて結婚していたが、結婚相手の家

系を見るのが大事なことだと考えて、誰かに紹介されて付き合い合って結婚した回答者もいる。

### 2-3. 家族にとって大事なことに関する意識

以下、20代、30代の既婚者を分析対象として、彼らの家族にとって何が最も重視されているか、「愛情」がどのように位置づけられているかについて検討する。

表3-5は20～39歳の分析対象者が、家族にとって最も大事なことと思う事柄を並べたものである。一番大事とされているのは「愛情」であり、男女ともに4分の3ぐらいの人が「愛情」を選んだ。次いで、全体の65.8%（77人）の人が「生活の知恵を持つ」ことを重視している。「価値観が同じ」と答えた人が男女合わせて43.6%（51人）を占める。性別ごとにみると、男性の求めるのは、「愛情」75.0%（21人）、「生活の知恵を持つ」こと42.9%（12人）、「価値観が同じ」42.9%（12人）、「学歴」39.3%（11人）である。一方、女性が求めるのは、愛情74.2%（66人）、「生活の知恵を持つ」73.0%（65人）、「家系」44.9%（40人）と「価値観が同じ」こと43.8%（39人）である。

民主主義時代になっても「生活の知恵を持つ」ことをお互いに求めており、「学歴」も大事なことと思われるようになったことが男女合わせて40.2%（47人）も存在するようになったことに明らかになっている。また、男性の28.6%（8人）しか家系を重視していないのに対し、女性の44.9%（40人）が家系を大事にと考えている。「両親の意見」を選んだのは男性の7.1%（2人）、女性の5.6%（5人）となっている。

表3-5 男女別家族にとっての大事なこと（20～39歳）（複数回答） n=117

男性			女性			合計		
項目	度数	比率	項目	度数	比率	項目	度数	比率
愛情	21	75.0%	愛情	66	74.2%	愛情	87	74.4%
生活の知恵を持つ	12	42.9%	生活の知恵を持つ	65	73.0%	生活の知恵を持つ	77	65.8%
価値観が同じ	12	42.9%	家系	40	44.9%	価値観が同じ	51	43.6%
学歴	11	39.3%	価値観が同じ	39	43.8%	家系	48	41.0%
お金を持つこと	8	28.6%	学歴	36	40.4%	学歴	47	40.2%
家系	8	28.6%	お金を持つこと	24	27.0%	お金を持つこと	32	27.4%
興味が同じ	5	17.9%	興味が同じ	10	11.2%	興味が同じ	15	12.8%
両親の意見	2	7.1%	両親の意見	5	5.6%	両親の意見	7	6.0%
その他	1	3.6%	その他	3	3.4%	その他	4	3.4%
総計	28	100.0%	総計	89	100.0%	総計	117	100.0%



表 3-5 に見えるように、74.4%の回答者が「愛情」、65.8%の回答者が「生活の知恵を持つ」ことを婚姻の中の大事な事柄だと見ている。このことは、20代30代の回答者の多くが生活の知恵を持つ人生のパートナーと結婚して、お互いを愛することが家族の中の大事なことだと考えていることを示している。

聞き取り調査で「家族にとって最も重要だと思うものは何ですか」に対して、39歳以下の人は以下のように答えた。

S：家族にとって一番大事なことは、(家族成員の間が一筆者補)理解し合い、しっかりと行くことです。

Z：暖かい雰囲気です。

Q：信頼です。

W：お互いを信じて、お互いを愛すればいいと思います。お互いに気を遣ったらいいです。

V：愛だと思います。

AC：信頼と愛です。

AB：家族成員はお互いを信じて、愛して、尊重することが一番大事です。

AD：もちろん、第一は愛し合うべきです。第二は信頼するべきです。それこそ家族の魂です。重要なことはたくさんあります。魂はそれ(愛と信頼一筆者補)です。

AG：家族の中で一番重要なものは愛だと思います。私の夫は私をとっても愛しています。私も彼のことを愛しています。大切なものは愛です。

Y：一番重要なのは家です。そして愛です。そしてお金、財産。愛と言えば、(私には一筆者補)妻、弟、弟の彼女がいます(が、私は彼らを愛しています。一筆者補)。生活するために家があるべきです。もちろん、そうすれば(家があるというのは一筆者注)家族の成員がその中に含まれます。(家にはその家の一筆者補)財産も含まれています。三番目は仕事です。三番目は仕事です。

AE：安定した生活を送ることです。

T：大事なことはたくさんあります。子どもは大事だと思います。子どもの教育よりも家族と一緒に暮らすのが大事です。

U：子どもです。子どもを礼儀正しく、よく育てるのが一番大事なことです。

20代と30代の回答者は、家族にとって一番重要なこととして「理解し合う」、「気持ちよく行く」、「暖かい雰囲気」、「信頼」、「愛」などの情緒的な事柄と「安定した生活」、「子ども」、「家」など具体的な事柄が挙げられている。

以上からわかるのは、回答者の中の若者層は恋愛結婚が多くて、結婚する際に相手の「能力」、「愛」、「家系」は考慮したと証言した。また二人の間に子どもがいる、妊娠したため

結婚した回答者もいる。婚姻中の愛情が大事だと感じている回答者が一番多く 74.4%を占め、その次は生活の知恵を持つことは 65.8%の回答者が選んだ。

### 3. 結婚観

まず「結婚するつもりがなくても、男女が同棲するのはかまわない」に対する 20 代、30 代の考えを図 3-6 に示す。

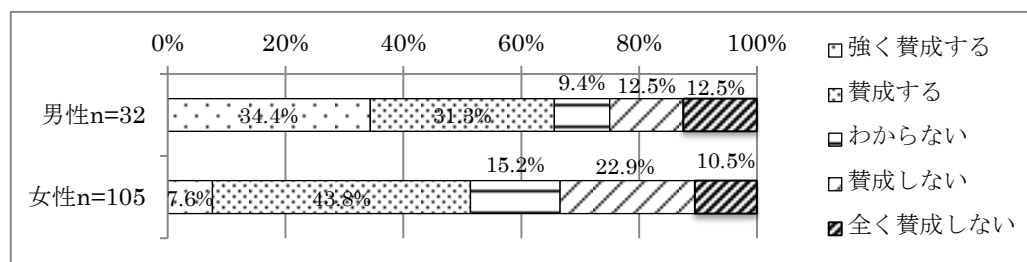


図 3-6 男女別「結婚するつもりがなくても、男女が同棲するのはかまわない」に対する賛否 (20~39 歳) n = 137

「強く賛成する」と答えた男性は 34.4%、「賛成」と答えたのは 31.3%、これを合わせた賛成派の男性は男性全体の 65.7%を占める。一方、「強く賛成する」と答えた女性は 7.6%、「賛成」と答えたのが 43.8%であり、賛成派女性は女性全体の 51.4%を占める。男性が女性より賛成する傾向にある。しかし、賛成しない人も少なくない、男性の 12.5%が「賛成しない」、12.5%が「全く賛成しない」と答えて、反対派男性は全男性の 25.0%を占める。女性の中の 22.9%が「賛成しない」、10.5%が「全く賛成しない」と答えて、合わせると 33.4%である。男性が女性より賛成者が多いのである。

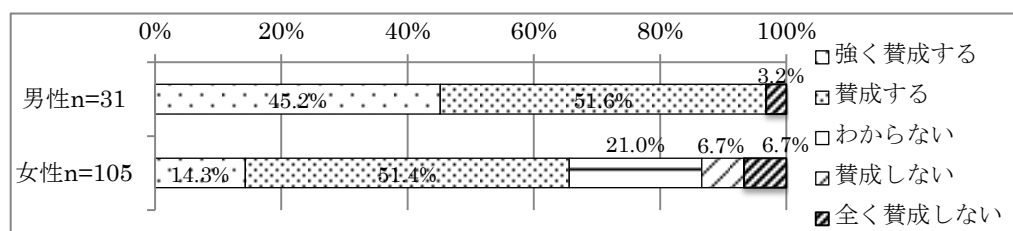


図 3-7 男女別「結婚前の男女でも愛情があるなら性交渉をもってよい」に対する賛否 (20~39 歳) n = 136

図 3-7 は「結婚前の男女でも愛情があるなら性交渉をもってよい」という考え方に対する賛否を表したものである。男性の答えを見ると 45.2%が「強く賛成する」、51.6%が「賛成する」と答えて、合わせて 96.8%の男性が賛成している。女性の答えを見ると 14.3%が「強く賛成する」、51.4%が「賛成する」と答えて、合わせると 65.7%の女性が賛成している。男

性の中の反対派は男性全体のわずか3.2%であるが、女性はその6.7%が「賛成しない」、6.7%が「全く賛成しない」と答えて、賛成しない人は女性全体の13.4%を占める。女性の21.0%は「わからない」と答え、態度を明確にしなかった。男女いずれも賛成者が反対者を上回っていて、婚前性交渉に賛成しない女性が男性より多い。

「結婚しなくても子どもを持っていい」という考えに対して、20~30代の回答者がどのようにみているかを見てみる(図3-8)。「強く賛成する」と答えた男性が53.3%、「賛成する」と答えた男性が20.0%いて、賛成派は合わせて73.3%を占める。一方の女性は9.6%が「強く賛成する」、52.9%が「賛成する」と答え、非嫡出子に賛成する意見は合わせて62.5%に達していて、賛成する女性は女性全体の過半数を占める。

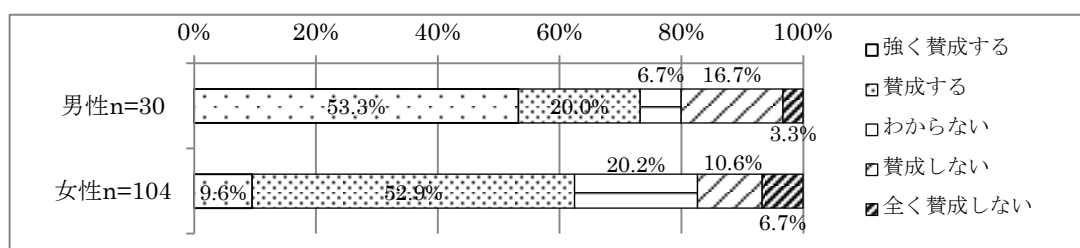


図3-8 男女別「結婚しなくても子どもを持っていい」に対する賛否 (20~39歳)

n = 135

「一旦結婚したら、相手に不満があっても離婚するべきではない」に対する意見を図3-9に示す。「強く賛成する」と答えた男性は12.9%、「賛成する」と答えた人は22.6%を占め、賛成派は合わせて35.5%を占める。女性は4.9%が「強く賛成する」、7.8%が「賛成する」と答え、賛成派は12.7%を占める。一方、賛成しない人を見ると男性の45.2%、女性の66.0%を占めている。つまり男女そろって離婚を肯定する考えが否定する考えを上回っている。ことに女性においては、離婚を肯定する者の割合(66.0%)は否定する者の割合(12.7%)を大きく上回っており、女性のほうが男性よりも離婚への抵抗感が薄いといえる。

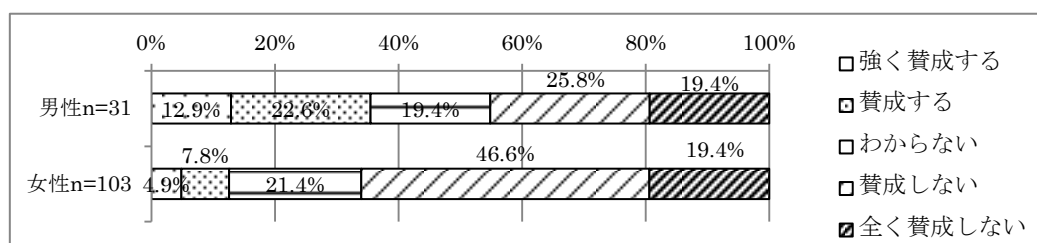


図3-9 男女別「一旦結婚したら、相手に不満があっても離婚するべきではない」に対する賛否 (20~39歳)

n = 134

「生涯を独身で過ごすということは、望ましい生き方ではない」（図3-10）という考え方について、男性回答者では41.0%が「強く賛成する」、29.5%が「賛成する」と答えた。女性回答者では51.6%が「強く賛成する」、12.9%が「賛成する」と答えた。男女ともに賛成派が反対派より多い。

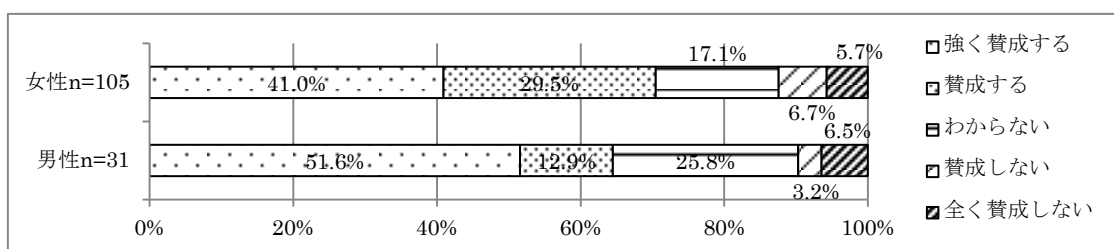


図3-10 「生涯を独身で過ごすということは、望ましい生き方ではない」に対する賛否

落合によると、戦後の日本の社会は再生産平等主義と呼ばれているように、みんなが適齢期に結婚して二、三人の子どもがいる家庭を作る社会だった（落合 2008：101）。これは日本に特有の20世紀近代家族の特徴の一部とされている。この特徴を結婚の動機の視点で注目すると、「みんなが結婚しているので私も結婚する」、「結婚して、みんなと同じように二、三人の子どもを産む」の二つに分けられる。ここでは、調査対象者の中の未婚者はどのような動機で結婚したいのかを調べてみる。

アンケート調査表では未婚者に「結婚を望むかどうか」と「結婚を望む理由」を尋ねた。

下の問題は未婚の方のみにお尋ねします。

あなたは結婚を望みますか

1. はい
2. いいえ

もし望むなら、結婚を望む理由を教えてください。

1. 精神的安定
2. 皆が結婚する
3. 経済的安定
4. 周りがうるさい
5. 社会的地位が安定する
6. 子どもがほしい
7. セックスのために
8. その他

49人の有効回答者の内、「結婚を望まない」人は20代の3人であり、全体の6.1%を占める。他の46人が結婚することを望んでいると答えた。これが全体の93.9%を占める。

表 3-6 未婚者に聞いた結婚を望むかどうかについて n=49

年齢（歳）	婚姻状態	結婚を望む		結婚を望まない		総計	
		度数	比率	度数	比率	度数	比率
20～29	未婚者	37	92.5%	3	7.5%	40	100.0%
	未婚同棲者	2	100.0%	0	0.0%	2	100.0%
30～39	未婚者	7	100.0%	0	0.0%	7	100.0%
総計		46	93.9%	3	6.1%	49	100.0%

さらに結婚を望む理由を聞くと次の結果が出た。

表 3-7 未婚者に聞いた結婚を望む理由 n=46

年齢	婚姻状態	精神的安定		皆が結婚する		経済的安定		社会的地位の安定		子どもがほしい		セックスが安定		その他		総計	
		度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率
20-29	未婚者	27	73.0%	11	29.7%	8	21.6%	11	29.7%	13	35.1%	7	18.9%	3	8.1%	37	100.0%
	未婚同棲者	2	100.0%	0	0.0%	1	50.0%	1	50.0%	2	100.0%	1	50.0%	0	0.0%	2	100.0%
30-39	未婚者	4	57.1%	2	28.6%	2	28.6%	3	42.9%	4	57.1%	4	57.1%	1	14.3%	7	100.0%
総計		33	71.7%	13	28.3%	11	23.9%	15	32.6%	19	41.3%	12	26.1%	4	8.7%	46	100.0%

表 3-7 をみると、結婚を望む一番大きな理由として、結婚を望んでいる 46 人の中の 33 人（71.7%）が「精神的な安定」を挙げた。次いで 41.3%（19 人）が「子どもがほしい」と答えた。そして「社会的地位が安定する」を 32.6%（15 人）が選択し、28.3%（13 人）は「皆が結婚する」から結婚を望むと答えた。上に近代家族の特徴として紹介した事柄に通じる「子どもがほしい」と「皆が結婚する」ということが 2 位と 4 位になっている、それぞれ 32.6%、28.3%の人が選択した。

#### 4. 本節のまとめ

民主主義時代には、家族法が改正され、非嫡出子が嫡出子と同様の権利と義務があると定められたことにより、非嫡出子と嫡出子が制度的に平等に扱われるようになった。

民主主義時代においては、既婚の回答者が結婚相手と知り合ったきっかけは、自分たちで知り合ったという回答者が多く、少数の人がだれかに紹介されて知り合った。回答者の多くは自らの恋愛を通じて結婚した者が多く、自らの気持ちと恋愛を通じてわかった相手の「能力」や「家系」などで結婚相手を決めたという人もいる、また二人の間に子どもがいる、あるいは妊娠したため結婚したという回答者もいる。結婚相手の家系を考慮することが重要だと考えて、誰かに紹介されて知り合って結婚した回答者もいる。

家族にとって一番大事なことについて、アンケート回答によれば、「愛情」との答えがもっとも多く、聞き取り調査の結果では、「理解し合う」、「暖かい雰囲気」、「信頼」と「愛」など情緒的な事柄と、「安定した生活」、「子ども」、「家」など具体的な事柄が挙げられた。

未婚の回答者の中には結婚を望む人が多く、その理由として最も多くの人が挙げるの

が「精神的に安定する」との答えであるところから、家族を安らぎの場として位置づけていることがわかった。また、日本に特有の 20 世紀近代家族の特徴である「子どもがほしい」、「皆が結婚する」を選んだ人は 41.3%と 28.3%しか占めていないことから、日本的近代家族の特徴とされた事柄はモンゴルの民主主義時代の未婚者に普遍的な考え方ではない。

結婚観について「結婚するつもりがなくても、男女が同棲するのはかまわない」に男性の 6 割、女性の 5 割が賛成しており、男女でも賛成者が反対者を上回る。「結婚前の男女でも愛情があるなら性交渉をもってよい」と考えている回答者の割合は男性では 9 割以上で、女性では 6 割を占めている。「結婚しなくても子どもをもっていい」と考えている人の割合は男女ともに 6 割を超えており、非嫡出子を受け入れる回答者が多いのである。「一旦結婚したら、相手に不満があっても離婚するべきではない」への反対者の割合は賛成者の割合を越え、女性のほうが男性より離婚への抵抗感が薄い。「生涯を独身で過ごすということは、望ましい生き方ではない」に対しては男性の 70.5%、女性の 64.5%が賛成し、結婚をするべきという考え方を持つ回答者が多いのである。アンケート調査では、20 代と 30 代の研究対象者は、結婚とつながらない同棲、婚前の性交渉、非嫡出子を受け入れる人が多く、生涯を独身で過ごすことに反対する人が多く、多くの回答者が離婚への抵抗感が薄いことがわかる。近代家族の規範意識に反する事柄とされている、結婚とつながらない同棲、結婚していない婚姻外の性、非嫡出子が不自然であると考えている回答者が少ない。近代家族の規範意識とされているのは、愛、性、生殖が結婚によって一体化することであるが、民主主義世代の 20 代、30 代は、愛、結婚、性と生殖が結びつかないこと、つまり、近代家族の規範意識に反することを受け入れているのである。

### 第三節 社会主義時代から民主主義時代への変容

#### 1. 結婚に関する法律の変容

第一節と第二節で検討した家族と関連する法律の変容をまとめると次の通りである。

モンゴルでは 1924 年に社会主義国家が建設され、1927 年に初めてモンゴル人民共和国民法が定められ、婚姻に関しては、夫婦になることは自分の意志で決められるが、父母の意見を聞くべきだと定められている。また夫婦のだれかが家を離れて一定の期間が経ったら、行政的な許可がなくても、他人と夫婦になれると定められていた。1956 年に施行された「モンゴル人民共和国の婚姻と家族、福祉法」から、行政機関に登録した婚姻のみを夫婦と認めることが始まった。1951 年 1 月 1 日以降に結婚した夫婦には結婚登録制度が適用され、行政機関に認められた婚姻関係のみが法律に保護されるようになった。1973 年の家族法からは、結婚を自ら決める、愛情を持って個人の意志で結婚することが定められた。

民主主義時代の 1999 年に家族法が改正された。そこでは、男女が自らの意志で結婚する、婚姻を国家の行政機関に登録すべきことを強調した。この民主主義時代の法律改正では、

非嫡出子は嫡出子と法律上同じ権利と義務があると定めて、法律上の差別をなくした。

## 2. 結婚の実態と結婚観の変化

### 2-1. 結婚の実態の変化

第一節と第二節の結婚の実態に関する分析をまとめると以下の通りである。

社会主義時代から民主主義時代にかけてのウランバートルにおいては、配偶者と知り合うきっかけは、多数の回答者が自ら知り合って結婚に至ったが、誰かに紹介されて結婚した人も少数ではあるが存在する。40歳以上の回答者のほうが、自ら知り合った割合がより高い。そして自らの恋愛を通じて、個人の意思を尊重して結婚することが多い。相手の家系、親の意見で結婚したという回答者もいる。社会主義時代からウランバートルで生活するようになった回答者が親元を離れて、両親の拘束を受けなくなり、都市で偶然に結びつく可能性が増したため、恋愛結婚が当時の若者層に広がったと考えられる。

そして、20代と30代の若者層にも恋愛を通じた結婚した人が多かったが、社会主義時代も民主主義時代にも家系を考慮し、誰かに紹介されて付き合い合って結婚した者もいる。

### 2-2. 結婚観の変化

第一節と第二節の結婚観に関する分析をまとめると以下の通りになる。

家族にとって最も大事なことについて、アンケート調査で「愛情」を選んだのは40代以上の回答者の53.8%（43人）、39歳以下の回答者の74.4%（87人）を占める。「生活の知恵を持つこと」を選んだのは40代以上の回答者の53.8%（43人）、39歳以下の回答者の65.8%（77人）を占める。「価値観が同じ」を選んだのが40代以上の回答者の36.3%（29人）、39歳以下の回答者の43.6%（51人）を占める。いずれの年代も「愛情」が一番大事なことだと見ている。聞き取り調査では、いずれの年代も「円満」、「暖かい雰囲気」、「友好的」、「理解し合う」、「信頼」など情緒的關係に属する事柄や「子ども」、「安定的な生活」を重視するが、異なるところは、40歳以上の回答者の中に「健康」を強調する人がいるのに対し、39歳以下の回答者の中には「愛」を強調する人が多いところである。

「結婚するつもりがなくても、男女が同棲するのはかまわない」に対し、40代以上の賛成者は男性の33.3%、女性の51.0%を占め、39歳以下の回答者の男性の65.7%、女性の51.4%が賛成すると答えた。女性の中の賛成する人の割合はほぼ変わっていないが、39歳以下の男性の賛成者の割合は40代以上の賛成者より32.4ポイント多い。結婚とつながらない同棲については、39歳以下の男性の中の賛成者の割合が多い。「結婚前の男女でも愛情があるなら性交渉を持ってよい」に対して40歳以上の回答者の男性の81.8%、女性の60.4%が賛成するのに対し、39歳以下では男性の96.8%、女性の65.7%が賛成しており、40歳以上の回答者の割合を上回っている。「結婚しなくても子どもをもっていい」に対する賛否をみると、40歳以上の男性の63.4%、女性の71.4%が賛成して、39歳以下の男性の73.3%、女性の62.5%が賛成している。

現地調査で筆者が住み込んだYの家族は4人家族で、Yの弟は当時26歳で、その彼女は

妊娠中だった。調査対象者 BA は Y の祖母である。BA にいつ孫を結婚させるのかとたずねたところ（孫の両親はすでに亡くなっていた）、「あの女の子がどこの人なのか、両親は何をする人かを全然知りません。この子（自分の孫—筆者注）がドロナト県で働いている時に鉦山で料理をしていた人だって聞きました。ウランバートルへ帰る時にこの子を連れてきました。住まいも用意しなければいけないので、結婚はまだかな」と答えてくれた。Y の弟は「愛情」で彼女と一緒に住むようになったが、祖母は Y の弟の彼女の素性がわからないことなどを理由に結婚は早いと考えている。兄の Y は第二節にも出ているように家系を重んじる者である。ここから、祖母世代は事実婚状態や非嫡出子の寛容な態度は持ちつつも、結婚そのものに対しては慎重であることが示されている。

社会主義時代には、結婚とセックス、子どもについての規範はどうなっていたのか。1976年の書物には「家族になる前にセックス生活に入ることを拒否するべきだ」(Dashdondov 1976:21) と記録されている。すなわち性交渉、性交渉と関連がある結婚前の同棲を否定する学者がいた。また別の書物には「1974年に新しく家族になった人は1964年から5.8倍増えた。しかし、首都ウランバートル市の人口はこの期間中に40倍ぐらい増えたが、新しく結婚した人が減った。このことは結婚して即刻登録しないことが多く存在していることを証明している」(Pürevdorj 1981:45) と書かれている。つまり社会主義時代でも事実婚が数多く存在していた。事実婚状態の夫婦がたくさん存在しても、「結婚者がもし登録しなかったら彼らの間にはこの法律に定めた権利と義務が生じない」(Bügd Nairamdah Mongol Ard Ulsyn Ger Büliin Huuli 1973:9) と定められていて、家族法の保護対象とすることを否定されていた。また非嫡出子について「1975年に行われた研究資料から見ると、たくさんの子どもを持ち、夫がいない母親は8000人ぐらいいる。その30.8%は3人までの子どもがいる。26.8%は4人の子どものいる。20.6%は5人の子どものいる。21.8%は6人以上の子どものいる母親たちである。夫がおらず子どもをたくさん持つ母の中には、夫と死別あるいは離別した人がいるが、結婚しないままで夫のいない者がその多数を占めている。婚外に子どもを産んだと非難することはよくない。社会主義的生活様式を宣伝して、それを実生活の上で実行するべきである」(Pürevdorj 1981:49) と1975年の非嫡出子の状況を述べている。非嫡出子出生の原因について「モンゴル人民共和国では、社会の古い風習により前の時代から非嫡出子を出産することが多かった。これは黄教<sup>31</sup>による影響が多い」(Pürevdorj 1981:49) と非嫡出子を旧時代の古い社会にあった悪い習慣と見て、非嫡出子に托児所、幼稚園、学校の寮などを提供するなどの手段を取ることは社会主義の優れたところが表されている

(Pürevdorj 1981:51)、と書いている。以上の記事は、非嫡出子に対してモンゴル国民は寛容な態度で接していたことが分かる。モンゴルの私生児については伊藤と辻も「ありがたいことには、母子の保護は私生児にも平等に及び、特典はもちろん、社会的差別が全くない。モンゴルの誇る近代病院である国立第二病院のツェレンナトミト副主任に『不幸な子』の人工妊娠中絶を聞くと、『とんでもない』と首を振られた。避妊具はデパートにも売ってい

31 モンゴルに伝来したチベット仏教黄帽派のことである。



ない。『結婚前に子どもを産むものは少ないです』と副主任は私に目でしかと念を押したうえ、『しかしもしあっても、それは一般の母子の場合とまったく同じように扱う。どの国にもおかしいのがあるが、母子は国家の手で守ります』と強調した。ノドから手が出るほど子どもがほしいこの社会主義国は『不義』に意外なほど寛大である(伊藤、辻 1970:168~169)と記録した。この文章から、社会主義時代には非嫡出子を産んだ母親を非難しない、非嫡出子に社会的な差別を与えずに嫡出子と同じように扱っていたことがわかるのである。

ウランバートル市の1989年から2012年までの非嫡出子出生率の趨勢(図3-11、縦棒は婚外子の出生数を、実線は婚外子とその年に生まれた新生児の中での割合を示す)を見ると、1990年の11.8%から2006年の29.1%までは上がる趨勢にあり、2007年からは下がり、2011年以降は再び上がった。2006年から2009年にかけて非嫡出子出生率が急激に下がった原因は、2006年から2009年までモンゴル国政府が実施した新婚夫婦への一時金として50万トグリクの補助金を与える政策<sup>32</sup>を実施したことによる影響だと考えられる。なお2012年現在では、ウランバートル市の新生児の中の4人の1人が非嫡出子である。

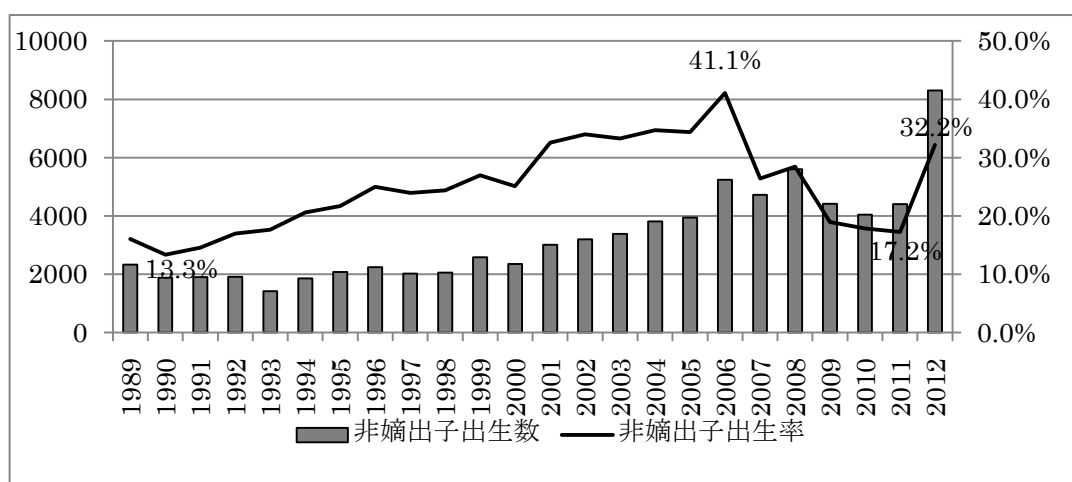


図 3-11 ウランバートル市の非嫡出子出生率(1989~2012年)

<sup>32</sup> 2006年6月2日「国会が新婚夫婦、新生児、18歳までの子どもなどへの補助金支給案を可決。」「7月1日新婚夫婦に50万トグリク、新生児に10万トグリクなどの補助金支給を開始。」(日本貿易振興機構アジア経済研究所ホームページアジア動向データベース「2006年モンゴル」)。「3月6日、2009年度補正予算の第2回審議が行われた。同審議では、児童手当として3カ月毎に支給されている2万5千トグログを1万トグログに、新婚家庭への補助金(注:一時金)50万トグログを30万トグログにそれぞれ縮小すること」(「モンゴル政務週間動向(2009.03.02-03.08)」)。「11月25日、人間開発基金に関する法律の成立に伴い、「児童手当、児童、母、新婚世帯への補助金に関する法」及び「手当及び補助金額の設定に関する第47号国家大会議決定」をそれぞれ無効とした。」(「モンゴル政務週間動向(2009.11.23-11.29)」)。

出所) モンゴル国家統計局統計ホームページのデータより筆者が作成した。

#### 第四節 本章のまとめ

家族の中での重視することについてたずねたアンケートへの回答によれば、40 歳以上の社会主義世代よりも 39 歳以下の民主主義世代が夫婦間の情緒的関係を求めている。聞き取り調査では、いずれの世代も、「円満」、「温かい雰囲気」、「理解しあう」、「愛」など情緒的事柄を重視していることが明らかになっている。

落合は夫婦の絆、すなわちロマンチック・ラブについて、「性と愛がともに夫婦間で充たされるものとなったのは、歴史的にはやはりそう古いことではない」(落合 2000: 8) と強調した。すでに本章の冒頭でも紹介したように、千田は近代家族の夫婦の絆の規範をロマンティックラブ・イデオロギーと呼んで、「ロマンティックラブ・イデオロギーは愛と性と生殖が結婚を媒介とすることによって一体化されたものである」(千田 2011: 17) と述べた。近代家族の夫婦の絆の規範についての考え方をみると、近代家族の規範意識に反する事柄とされている、結婚とつながらない同棲、婚前の性交渉、非嫡出子がいずれの年代でも認める回答者が多い。つまり、近代家族の特徴の一つである「家族成員間は強い情緒的な関係で結ばれている」に属する夫婦間の絆に含まれている性、愛、生殖が結婚を通じて一体化するということは社会主義世代でも民主主義世代でもモンゴル人の規範意識にならなかったのである。社会主義時代には、非嫡出子を産んだ母親を非難せず、非嫡出子を社会的に差別せず、嫡出子と同じように扱っていたのである。民主主義時代になって法律が改正されたことによって、非嫡出子と嫡出子の法律上の権利と義務の平等化が実現されて、非嫡出子の出産率も増加した。

以上から、モンゴルの都市家族は情緒的關係で結ばれてはいるが、愛と性と生殖が結婚を媒介に一体化されると考えることは、社会主義時代と民主主義時代いずれの時代にも求められていなかったことが明らかになったのである。

## 第四章 子ども中心主義であるのか

近代家族の特徴の一つは子ども中心主義である。本章ではモンゴルの社会主義時代と民主主義時代における子どもの位置づけについて、近代家族の特徴の一つである「子ども中心主義」にあてはまるかどうかを論証する。

歴史学者であるアリエスは『〈子ども〉の誕生』の中で、絵画、文学、回想録、書簡など多くの資料を用いて以下のようなことを明らかにした。すなわち、ヨーロッパ中世以前の貴族の子どもは親との間に愛情の関係がなく、乳母の下で育てられ、早い時点で大人の服を着て、小さな大人として奉公人に預けられていた（アリエス 2003 : 372）。子ども服は、16世紀までに大人たちのだれもが着ていたが、17世紀以降には子どもだけしか着用しないことになった（アリエス 2003 : 56）。17世紀まで上流階級では子どもは奉公人たちと一緒に住んでいたが、18世紀ごろから上流階級を中心に子どもは家族の中のかわいがられる対象となり、子どもの健康や教育の重要性が認識されるようになった（アリエス 2003 : 372~378）。ショーターは、近代家族の特徴の一つを「母性愛によって子どもの幸福が何ごとにもまして大切に考えられるようになったのである」（ショーター1987 : 5）と見て、これが伝統家族と区別される場所の一つとしている。前近代の家族では子どもを小さな大人として扱って、大人と同じ環境の中で、生活に必要な技と知識を身につけさせた。18世紀から子どもが子どもとして可愛がられて、親の子どもに対する愛情と関心が生まれて、学校で教育を受けさせるようになった（野々山 2009 : 186~187）。このように、家族の中で特別に重要な存在である「子ども」と親子間の愛情は太古の昔から変わらず当然視されていたわけではなく、歴史のある時点で強調されるようになったことが、主に西ヨーロッパやアメリカ大陸の家族についての歴史研究によって明らかにされてきた（野々山 2009 : 92）。

落合は、近代化するとともに子どもの価値が変わった、という。「農業社会では子どもは『生産財』でした。それがサラリーマン社会では『消費財』に変わった……現代、子どもは親にとって、何年かは楽しみに使える『耐久消費財』なのです」（落合 2008 : 60~61）。つまり子どもが親のかわいがる対象と教育する対象になったのである。「子どもが大切な存在になり、育てるコストが増大したからこそ、子どもは二、三人に制限されるようになったのです」（落合 2008 : 60~64）。

以上をまとめると、子ども中心主義の内容とは、子どもが子どもとして家族の中の中心的な存在として、教育される、可愛がれる対象となって、親の愛をたっぷりもらったことが近代になってからのことである。近代社会は、子どもが両親に小さな大人として扱っていた前近代社会と違って、親から子どもに対する愛情が生まれ、子どもをたっぷり愛するために子どもの数を制限するようになった。

モンゴル国における前近代社会において、子どもの家の中の位置付けを先行研究によって見てみる。

「一家が生計を立てていくためには、家族がそれぞれに仕事を分担して働かなければならない。子どもたちも5、6歳になると、母親の言いつけを守って近所で燃料とするアルガリ（家畜の排泄物）を拾い集め、男児であれば鞍の上に抱き上げられて騎馬の訓練がはじまり、羊の放牧を見習い、10歳位になるともう羊毛を刈取ることもできる。その年ごろには女兒は幼い弟妹の世話や羊や牛の搾乳を教えられ、父や母の助手として一人前にちかい働きができるようになる」（後藤 1970：99）。「近代以前の学校教育もない時代には、子どもたちはこのホト・アイルでの生活、労働を通して生活の知恵から社会規範までさまざまなものを学んでいったはずである」（鯉淵 2003：62）。社会主義時代以前、子どもは小さな労働力として存在していて、ホト・アイルは子どもの社会化の機能を果たしていた。

『モンゴルの二十世紀』では、ミンジュール氏（1914年生まれ。父親不詳。母親とは6歳の時に死別）が、以下のことを回想した。「母が亡くなったころから私は母が召使いをしていた富者たちのところに行って、仕えるようになりました。自分を必要とする人たちの子ヒツジを放牧し、家畜を放牧しては空腹を満たして生活をしていました。そのような子どもは私だけではありませんでした」（小長谷 2004：91～92）。「当時は学問を学びませんでした」（小長谷 2004：104）。「二十一歳で兵役を務めました。……三ヵ月後に私はモンゴル文字を読み、手紙を書けるまでになり、文学がわかるようになってきました」（小長谷 2004：107～108）と証言している。

1964年のアルハンガイ県での現地調査では「家族の中の子どもが重要な地位を占めるはずだ。子どもは家族成員の一人として、世帯、家族と社会において専門的な労働力として、小さいにもかかわらずたくさんのことを行っている。少年の労働参加は我々のさまざまな種類の建設労働に現れている。牧畜地域にいる子どもはとても大きな労働をする。トグルグ・ソムの4年生を卒業した12～16歳の子どもが牧畜業にたくさんのこと成し遂げている。ほかの3つのソムとあわせて見ると、4つのソムのなかの3つのソムには子どもが牧畜に直接かかわっている。ウブルハンガイのトグルグ・ソムのゴムボというラクダを放牧する人の120頭のラクダを14歳の息子が放牧する。成人の労働量と同じようにブリガード<sup>33</sup>と契約をしていることは、子どもがすべてのことをしていることを表している」（Tserenhand 2001：154）。

以上の証言から社会主義時代以前、子どもは幼いときから労働力となって、燃料の拾い集め、仔家畜の放牧、羊毛の刈取りなどの作業をして、学校教育を受けることがなかった。社会主義時代の地方においては、小学4年生卒業、つまり小学校を卒業した子どもは大人と同じような労働量をこなしていた。遊牧社会において、遊牧民の子どもは大人と同じように放牧に従事しており、小学校に入って知識を学んでも、少年時代から大人と同じように働いていたことが分かる。すなわち、遊牧社会では子どもは労働力として存在していた。また、ホト・アイルが子どもの社会化の役割を果たしていた

---

<sup>33</sup> 生産大隊。ネグデルの下位の行政単位である。

## 第一節 社会主義時代

### 1. 子どもの数、理想の子ども数

#### 1-1. 統計でみる出生率の変化

モンゴル人民共和国の1960年から1990年間の普通出生率と期間合計特殊出生率の変化を図4-1に示す。普通出生率は点線で、期間合計特殊出生率は実線で示す。普通出生率とは、人口1,000人に対する1年間の出生数（死産を除く）<sup>34</sup>を表すものである。期間合計特殊出生率とは、ある年における各年齢（15～49歳）の女性の出生率を合計したものである<sup>35</sup>。モンゴル人民共和国の1960年から1990年までの普通出生率を見ると、1964年まで上がる傾向にあったが、1964年から減少する傾向に推移し、期間合計特殊出生率は1962～1975年にかけて7以上の水準であったが、その後減少傾向に推移した。1990年には4人の水準を保っていた。

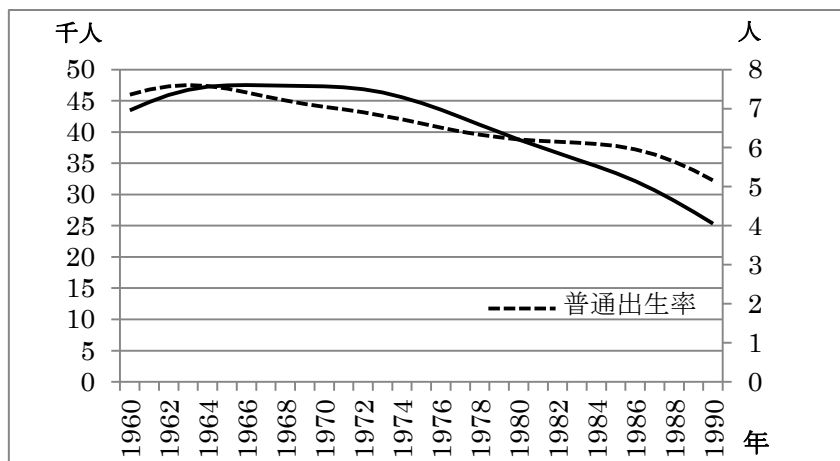


図4-1 モンゴル人民共和国 1960～1990年の普通出生率と合計特殊出生率

出所) 世界銀行公式ホームページのデータより筆者が作成した。

次は1960年からのウランバートル市の出生児童数と普通出生率の推移を図4-2で示す。左の縦軸は出生人数を示す。右の縦軸は普通出生率を示し、これを点線で表す。図からわかることは、ウランバートル市における出生人数は増加傾向にある一方、普通出生率、つまり1000人ごとの出生数は1960年にピークに達して以降は減少傾向であるということだ。序章で述べたウランバートル市の人口数の増加する趨勢を参照すると、ウランバートルの人口数の増加(図序2)とともに出生人数が増加しているが、普通出生率が増加していない

<sup>34</sup> 日本国総務省統計局。

<sup>35</sup> 日本国厚生労働省ホームページ統計月報白書人口動態調査、<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai11/sankou01.html>、2015年1月20日アクセス。

傾向が明らかである。

以上の統計データによれば、ウランバートルの出生数は増加する傾向にある。それは都市人口数の増加と関連している。ただし、モンゴル人民共和国の普通出生率とウランバートル市の普通出生率は1960年から1990年までともに減少する傾向にあったということである。

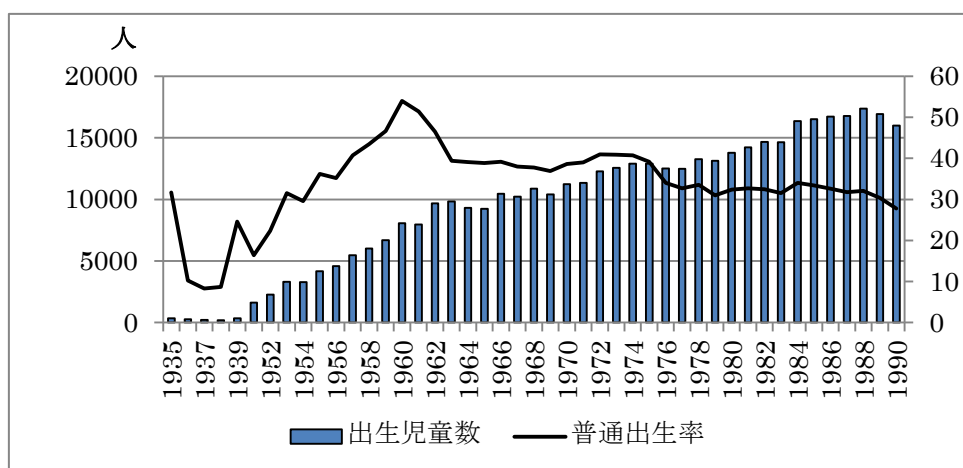


図 4-2 ウランバートル市の出生児童数と普通出生率の推移 (1960～1990)

出所) ウランバートル統計局公式ホームページのデータにより筆者が作成。

### 1-2. アンケート調査でみる子どもの数と理想とされる子どもの数

アンケート調査でも対象者の子どもの数を調べた。下の表4-1で調査対象者の子どもの数を親の世代別で分けてみる。

表 4-1 アンケート調査対象者の子どもの数 (40歳以上) n=83

子どもの数		1人	2人	3人	4人	5人	7人	10人	総計
40～49歳	人数	8	18	15	2	1	0	0	44
	比率	18.2%	40.9%	34.1%	4.5%	2.3%	0.0%	0.0%	100.0%
50～59歳	人数	3	6	6	8	2	1	0	26
	比率	11.5%	23.1%	23.1%	30.8%	7.7%	3.8%	0.0%	100.0%
60～75歳	人数	0	4	2	4	0	0	1	11
	比率	0.0%	36.4%	18.2%	36.4%	0.0%	0.0%	9.1%	100.0%
総計	人数	11	29	24	14	3	1	1	83
	比率	13.6%	34.5%	28.4%	17.3%	3.7%	1.3%	1.2%	100.0%

全体的にみると分析対象者の中には、2人の子どもがいる家族が最も多く、34.5% (29人) を占めている。年代別にみると40代の中では、2人の子どもがいる家族が最も多く、40.9%

(18人)を占める。50代では4人の子どもがいる家族が最も多く、30.8% (8人)を占めている。60代以上の11人の中では2人の子どもを持っている回答者が36.4% (4人)、4人の子どもを持っている回答者が36.4% (4人)いる。本節の分析対象者は社会主義世代の40代から70代の人々であるが、50代以上の人は社会主義時代にすでに出産を経験しており、40代の方は社会主義が崩壊する1990年ごろにはちょうど20代になっている。1989年に人口に関する政策が変わって、国民が人工妊娠中絶か生育かを自分で選択できるようになったので<sup>36</sup>、1990年ごろに20代以上になった社会主義世代の分析対象者たちは、子どもの数と子どもを産むかどうかを選択する際に政策の変化の影響を受けたと思われる。実際に持っている子どもの数とは別に、理想的には何人の子どもを持つのが最もよいと思うかについて、40歳以上の社会主義世代の分析対象にアンケートを取った結果を表4-2に示す。

表 4-2 アンケート調査回答者の理想の子ども数 (40歳以上) n=81

年齢		2人	3人	4人	5人	6人	総計
40～49歳	人数	5	9	27	1	4	46
	比率	10.9%	19.6%	58.7%	2.2%	8.7%	100.0%
50～59歳	人数	2	5	17	0	1	25
	比率	8.0%	20.0%	68.0%	0.0%	4.0%	100.0%
60～70代	人数	1	3	4	1	1	10
	比率	10.0%	30.0%	40.0%	10.0%	10.0%	100.0%
総計	人数	8	17	48	2	6	81
	比率	9.9%	21.0%	59.3%	2.5%	7.4%	100.0%

注：2～3人のような複数の数を出した回答は最小の数を取った。

これによると、理想的な子どもの数で一番多いのが4人である、全体的に4人と答えた人は59.3% (48人)を占めている。3人の子どもが理想であるとした人が21.0% (17人)である。4人と答えた人を年代別にみると、40代は58.7% (27人)、50代は68.0% (17人)、60歳以上は40.0% (4人)が4人と答えた。いずれの年代も理想の子ども数を4人と答えた人が一番多い。

### 1-3. 聞き取り調査でみる子どもの数、理想の子ども数

聞き取り調査において、今持っている子どもの数と理想としている子どもの数を聞いた。

**B:** 私には4人の子どもがいます。2人は男、2人は女です。(問：何人がいいと思いますか) 私は4人を産みました。

<sup>36</sup> 第四章第一節2のところで論じる。

- C : 私は5人の子どもがいます。(問:子どもが何人いれば一番いいですか。)5人がいいです。
- D : 3人の子どもがいます。(問:子どもが何人いればいいと思いますか。)2人から3人いれば一番いいと思います。最多で4人いればいいです。若い家族には1人か2人の子どもしかいません。(子どもが一筆者補)そんなにたくさんいません。前の(社会主義一筆者注)時代には子どもが多かったです。10人ぐらいいる家族もありました。彼らは幸せでしたよ。今は1人か2人を産んで、若者たちは自分の金を儲けることを考えているだけで、子どもを産もうと思わなくなってしまうました。
- E : 2人の子どもがいます。(問:理想的に何人の子どもがいればいいと思いますか。)多いほどいいですが、人間はそうは思えども、その家族に、その(夫婦一筆者補)二人にその可能性があるかどうかは、その二人が決められることではありません。原因はたくさんあります。子どもをたくさん産む生理的な可能性があるかどうかから始まるたくさん問題があります。たとえばお医者さんにあなたたちは子どもを持つことはできないと言われてたら、子どもができません。また子どもをどうやって養うか、住まいなどいろいろな問題があります。子どもは仏様の贈り物と言われるようにそれは運命です。そうですね。子どもがたくさんいればいいです。(問:皆4人と言っています。)数はそうかな。私は本心を言えば……子どもは多いほどいいです。なぜならたくさん子どもがいる家族をみると(私は一筆者補)嫉妬していましたから。
- G : 子どもは3人います。(問:何人いるのが一番いいと思いますか。)モンゴル人は「一人ならばそれをいない者と見て、2人を1人と見る」ということわざを言います。それは本当にその通りだと思います。4人が一番いいです。人生の中でいろいろなことに(子どもたちが一筆者補)一緒に向き合うことができます。2人なら重病になるなど、いろいろなことがあったら残った一人の生活が苦しくなります。いろいろなことを見てみると、幸せにせよ、苦しいにせよ、多いほどいいです。
- H : 今は4人の子どもがいます。今はちょうどいいと思います。
- I : 3人か4人がいいと思います。今は子どもが4人います。ちょうどいいと思います。
- N : 3人の子どもがいます。(問:子どもが何人いれば一番いいと思いますか。)子どもは多いほどいいです。でもわたしは今3人の子どもがいます。また1人を産もうと思っています。娘が2人、息子が2人いると一番いいです。私は2人の息子、1人の娘がいます。もし娘に妹がいれば、将来は伴になります。
- O : 子どもはまだいません。(問:何人子どもがいれば一番いいですか。)3人なら無難です(経済力を考えると3人なら養うことができます一筆者注)。でも、もし養えたら多いほどいいと思います。



P：今は子どもが2人いる4人家族です。（問：子どもが何人いれば一番いいと思いますか。）4人です。（子ども2人は一筆者補）お互いに伴になります。今2人の子どもがいます。……（自分は子どもが一筆者注）少ないと思います。

J：3人の子どもがいます。（問：何人子どもがいたら一番いいと思いますか。）2人から3人（がいい一筆者注）かな。

K：2人の子どもがいます。（問：何人の子どもがいたらいいと思いますか。）そもそも4人の子どもがいたらいいと思います。（問：なぜですか。）いろんな面で考えたら4人の子どもが要ると思います。

L：6人の子どもがいます。（問：何人の子どもがいたら一番いいと思いますか。）私は何人いればいいとかは思いません。子どもの少ない家族はよくないと思います。可能ならたくさん子どもを産んで、育てた方がいいです。子どもが大きくなったら巣を去って出ていきます。人がいない家はよくないです。たぶんわたしは子どもを最近産んだからそう思っているのかも知れません。他人の家族をみると、子どもに年の差があって、家に常に子どもがいます。我が家は一気に産んだので多いとは感じません。もっとたくさん子どもを産めばよかったと思います。当時生活はあまりよくなかったし、われわれは市場経済に入って、たくさん子どもがいると働くことができなくなるので、子どもを産みませんでした。

I：3人か4人がいいと思います。今は4人の子どもがいるが、ちょうどいいと思います。

M：5人家族です。（問：何人子どもがいたら一番いいですか。）4から5人です。

以上の回答者の証言をみると、実際に持っている子どもの数は「6人」が1人、「5人」は2人、「4人」は4人、「3人」は4人、「2人」は3人、「0人」は1人になる。理想的な子どもの数は「多いほどいい」が3人、「5人」が2人、「4人」が7人、「3~4」が1人、「3人」が2人、「2~3人」が1人である。聞き取り調査から判明したのは、実際に持つ子どもの数は「3人」と「4人」が一番多く、双方4人ずつである。一方、理想的な子どもの数は「4人」が一番多く、7人が「4人」と答えた。

理想の子どもの数が「4人」である理由として、「お互いに伴になります」との証言があった。また、「たくさん子どもがいる家族をみると（私は一筆者補）嫉妬していました」とか、子どもが大きく巣立ったのちに「人がいない家はよくないです」、または人生にいろいろな出来事が起こった時に「残った一人の生活が苦しくなります」など、回答者が自らの経験から、自分と子どもの間、子どもたちの相互の関係について考えたうえで4人が一番よいと考えているわけである。ウランバートル市では社会主義時代初期から死亡率が高かった（図4-3）ことも、社会主義時代を経験した回答者が子どもをたくさん持った方がいいという意識を持っていることと関係があろう。死亡率が高いため、万が一の場合に備え

るとの意識を持っているものと考えられる。なぜ「4人」であるかという質問に、男女2人ずつ産むのが一番理想的で、男の子の間、女の子の間で伴になることが理由とされている。ここには、親が子どもたちの将来的な相互の援助関係に配慮した考えを持っていることが示されている。また「4人」のもう一つの理由は、モンゴル人民共和国で実施していた産児奨励策であると思われる。モンゴル人民共和国では産児奨励政策を実施していた。産児奨励政策とは、「子どもが生まれるとミルク、衣料が特配されるほか、子どもが満8歳で小学校に上がるまで1人につき年に200トグリクが支給される。4人目の子どもを産むと、母親に『母親光栄二号勲章』と年に100トグリク、5人以上の子の母には『母親光栄一号勲章』と年に200トグリクがそれぞれ就学まで増額支給される。さらに8人目以上となると『母親英雄』の称号と年300トグリクが加算される」（伊藤、辻1970：168）という内容であった。つまり、社会主義時代には、4人以上の子どもを産めば子だくさんの家族として、政府から補助金をもらえたのである。これが人々に定着し、4人の子どもを持つことを一番適切だと思う人が多いのではなかろうか。J、Oは子どもを3人持つことを望んでいる。Jは42歳、Oは40歳であり、分析対象者の中では社会主義世代の中では比較的若い人である。Oの証言には、多いほどいいけれども、経済面を考慮したら3人なら養えるという考えが示されている。

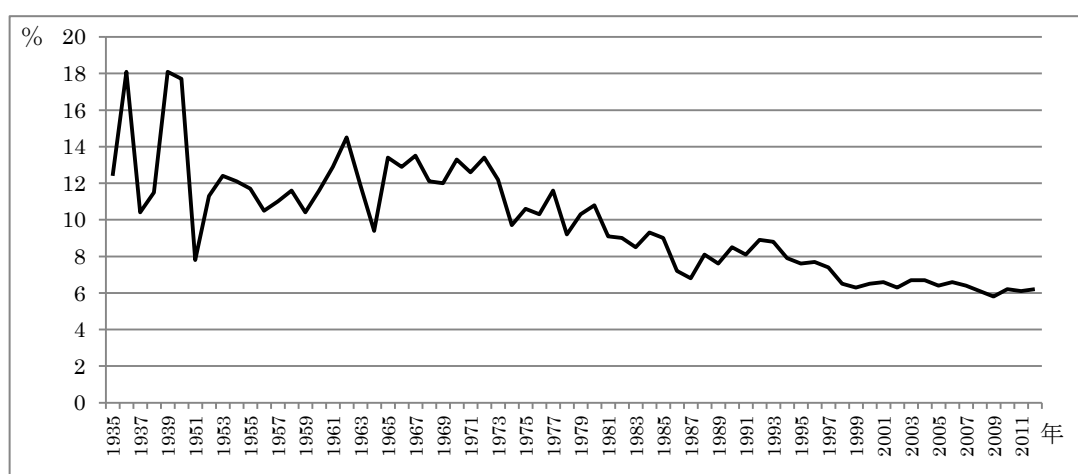


図 4-3 ウランバートル市普通死亡率の推移 (1935～2011年)

出所) モンゴル国統計局公式ホームページのデータより筆者が作成した。

回答者たちが、実際に持つ子どもの数が理想の子どもの数を下回る理由として挙げたのは「生理的な可能性」、「子どもは仏様の贈り物」、「経済的な理由」、「働くことができない」などであった。身体的理由、経済的理由、仕事をするなどの理由が挙げられている。

#### 1-4. 避妊や人工妊娠中絶について

モンゴル人民共和国時代には出産奨励政策によって避妊が制度的に抑制されて (オドン

トヤ 2014 : 166)<sup>37</sup>、人工妊娠中絶を厳しく禁止していた（鯉淵 2005 : 18、ロッサビ 2007 : 186）。その現状を知るために、2011 年の一回目の現地調査では社会主義時代の避妊、人工妊娠中絶についての実態を 70 代の回答者に聞いたところ、以下の証言をもらった。

BA : (私には一筆者補) 10 人の子どもがいます。(私は一筆者補) 子どもができれば産みます。当時は (私には一筆者補) 避妊とか人工妊娠中絶の意識がありませんでした。

BB : 当時は多産を奨励したけれど、もし希望しない子どもができれば隠れて病院ではなくて知人の医者さんのところに行って人工妊娠中絶していました。子どもを愛してないわけではなくて、全力を挙げて仕事をするためでした。

2012 年に行った聞き取り調査では社会主義時代に生まれ育てられた回答者に「望んでいない妊娠をしたらどうしますか」と聞いた。

B : たぶん人工妊娠中絶しません。

D : 私は 3 人の子どもを次々に産みました。人工妊娠中絶したことはありませんでした。

E : 人工妊娠中絶しました。今まで一番惜しいと思うことはそれです。当時、妻は大学を卒業して、私は大学生でした。当時は家族の状況が良くありませんでした。最初の子を産みました。二番目の子を人工妊娠中絶しました。後になって科学的には人工妊娠中絶はしてはいけないことがよくわかりました。それはかなり後で知りました。もし当時知っていたら、絶対に人工妊娠中絶しませんでした。今は惜しくてたまりません。そんなことがありました。

M : (望まない妊娠は一筆者補) ありませんでした。

N : 今はカレンダーで記録しています。今年、娘は 11 歳です。11 年前には私たちの住居が (なくて、一筆者補) 大変でした。家を借りて住んでいましたので、産むことができませんでした。そして私たちも子どもでした。22、23 歳で結婚して、最初の子どもを産みました。まだ望んでいなかったのに次の子を妊娠してしまいました。住居がないことや、仕事などの理由で 3 回人工妊娠中絶しました。その後、娘を産みました。娘を出産した後は (私は一筆者補) ずっとリングをつけていました。その後、私たちは家族で韓国に行きました。夫は留学して、私は 2 人の子どもを連れて 1 年間 (韓国に一筆者補) いました。一旦モンゴルに帰ったこともありましたが、再び (韓国に一筆者補) 行きました。当時、(私

---

<sup>37</sup>注 : オドントヤの研究によれば、社会主義時代には女性たちに避妊のための知識を与えなかったり、避妊具の流通を調整し、利用を制限したりするなどの非公表の規制や制限が実施されて、避妊の制度的な抑制が管理され、女性の妊娠、出産は国家によ手管理されていた (オドントヤ 2014 : 166)。

は一筆者補) リングを 5 年間つけ、そのあと取って、子どもがほしいので産みました。

L: 人工妊娠中絶したことがあります。

O: 話し合っただけです。子どもがほしいのですが、でもまだできていません。

P: 常に避妊しています。

以上の答えから、まず、50 歳以上の回答者の答えを見ると、田舎で育てられた BA とウランバートル出身の D には子どもができたなら産むという意識はあり、避妊や人工妊娠中絶をする意識はなかった。しかし、BB によると、社会主義時代でもウランバートルでは密かに人工妊娠中絶をする人がいたという。その原因は「全力を挙げて働く」ためであった。50 才未満の E、N、L、O、P は避妊や人工妊娠中絶など出産コントロールを行っていた。その理由は「当時は家族の状況が良く」なかった、「住居がな」かった、「仕事」をするなどが挙げられている。

以上の答えからわかるのは、社会主義時代のウランバートル市では出産をコントロールする意識がすでに存在しており、働くために人工妊娠中絶を選択する女性がいた。N、L は 40 代の人で、社会主義が崩壊するころに 20 代だったので、産むかどうかの選択権を持ち、選択できるようになったといえる。

## 2. 人口増加政策と育児支援政策

前節でも触れたように、モンゴル人民共和国は産児奨励政策を実施していた。モンゴル人民共和国は社会主義建設の際に「産児増進政策は経済目標要綱の第三次五カ年計画 (1961-1965) で定めた」(Neupert1994: 18)<sup>38</sup>。産児奨励政策について 1970 年の日本の新聞記者のモンゴル紀行によると「人口の少ないモンゴルでは女性は二重にその健闘が期待されている一産児と労働に。女性はどんどん子どもを産み、健康に育て、さらに家庭の外でも大いに働いてもらわなければならない」(伊藤、辻 1970: 166)。その結果「子たくさんである」(伊藤、辻 1970: 166) ことがモンゴル家族の特徴となった。モンゴルでは「20 歳前後でさっさと結婚してしまい。それに遅れるとオールドミスとして『半国賊』のような目で見られる」(伊藤、辻 1970: 168) と伝えられていた。社会主義時代は女性が早く結婚して、子どもがたくさんいるという特徴があることが当時の記録に残っている。

ロシアは「女性は早すぎる妊娠やその逆 (18 歳未満もしくは 40 歳以上) あるいは期間をおかずに次の子どもを身ごもることも多かった。女性にとって妊娠は各家族の選択というより国民の義務であるかのように強要され、望むより多くの子どもを出産することを求められた。高い出生率の一方で女性個人の健康への配慮はあまりなく、出産で命を落とす率も高かった」(ロシアビ 2007: 186) と述べ、人工妊娠中絶が違法とされたことによって

<sup>38</sup>Neupert.RF. "Fertility decline in Mongolia: trends, policies and explanations". *International Family Planning Perspective*. Mar.(1994),JSTOR ホームページ。

母体が危険にさらされていたことを批判した。

社会主義時代には産児奨励政策だけではなく、育児支援政策も実施されていた。育児支援について、1971年の新聞記事では「将来を背負う子どもたちへの投資が大きいことは、ウランバートルで托児所・幼稚園を見て強く感じた。こちらの施設に力をいれているのは、母親の労働力を確保する必要からでもある。新しい住宅団地の一角にある三階建三むねのその托児所・幼稚園は、生後45日から8歳までの子ども360人を預かり、これを12のグループにわけて、年齢に合った遊びや食事を与えていた」（「子どもたち\_駆けるモンゴル」『朝日新聞』1971年10月2日、朝刊。）と書かれている。「1976年は1960年と比べれば、保育施設が3.5倍、幼稚園が3.4倍、子ども向けの病院、女性相談所は4.7倍、助産婦の数を2.1倍増やした」（Purevdorj 1981: 72）。

表4-3はモンゴル国の幼稚園の数と入園児数の推移を示す。表から社会主義時代には全国の幼稚園数が急激に増加して、1960年は全国で9700人が幼稚園に入っていたが、1970年時点で31800人になって、1985年にはその倍の62500人の子どもが幼稚園に入ったことがわかる。ウランバートルの幼稚園の数は1985年に121ヶ所に達して、入園児童数は18900であった（BNMAU-yn uls ardyn aj ahui 65 jild. : 166）。

表 4-3 モンゴル人民共和国の幼稚園数と子ども数の推移

年	幼稚園数	入園児童数（1000人）
1940	6	0.14
1950	49	1.8
1960	160	9.7
1970	546	31.8
1980	617	49.8
1985	680	62.5

出所) BNMAU-yn uls ardyn aj ahui 65 jild. : 165。

表4-4は入園年齢の児童10000人の中の幼稚園入園状況を児童数と1950年を100.0として1970年、1980年、1985年が1950年の何倍であるかを表したものである。1950年に全国では49箇所の幼稚園が建てられ、10000人中211人が幼稚園に入っていたが、1985年に幼稚園に2031人が入園しており、1950年の9.626倍となった。

表 4-4 モンゴル人民共和国の入園年齢の児童10000人の中の幼稚園入園状況

年	児童数	1950=100
1950	211	100.0
1970	1589	753.1
1980	1814	859.7

1985	2031	962.6
------	------	-------

出所) *BNMAU-yn uls ardyn aj ahui 65 jild.* : 166。

注 : 1950 年を 100 とする。

表 4-5 は、モンゴル人民共和国における 1940 年、1960 年、1970 年、1980 年、1985 年の托児所<sup>39</sup>と入所児童数の数を示している。托児所数は 1960 年から 1970 年までの十年間で 99 から 320 まで増え、1985 年には 419 まで増加した。入所児童数は 1970 年には 14800 人で、1985 年には 19800 人まで増加した。

表 4-5 モンゴル人民共和国の托児所数と入所児童数の推移

年	托児所数	入所児童数 (1000 人)
1940	5	0.1
1960	99	4.7
1970	320	14.8
1980	392	18.7
1985	419	19.8

出所) *BNMAU-yn uls ardyn aj ahui 65 jild.*:177。

表 4-6 はモンゴル人民共和国の托児所入所年齢の児童 10000 人の中の托児所に入所した状況を児童数と 1950 年を 100.0 として 1965 年、1970 年、1980 年、1985 年が 1950 年の何倍であるかを表したものである。1950 年に全国では 10000 人の中の 137 人が托児所にいたが、1985 年に托児所に 1468 人が在所し、在所児童数は 1950 年の 10.7 倍となった。

表 4-6 モンゴル人民共和国托児所入所年齢の児童 10000 人の中の托児所在所状況

	托児所児童数	1950=100
1950	137	100.0
1965	1079	787.6
1970	1166	851.1
1980	1326	967.9
1985	1468	10.7 倍

出所) *BNMAU-yn uls ardyn aj ahui 65 jild.*:177。

注 : 1950 年を 100 とする。

このようにモンゴル人民共和国は子どもを国の未来として出産支援政策をとって、親の

<sup>39</sup> 託児所 : 0 歳から 3 歳までの子どもが預けられる公共施設。

負担を減らし、母親を安心して出産させ、安心して働かせるために、国は子どもを育てるために大きな投資をして、子育てを支援していた。

### 3. 子ども観

#### 3-1. アンケート調査で見る子ども観

当時、以上の政策の恩恵を受けた子どもたちはどのような感想を持っているのだろうかを次に分析する。

前項で示した新聞記事にも書かれていたように、女性に期待されている二つの役割の一つは「産児」である。「早婚」で「女性はどんどん子どもを産む」ことがモンゴルの家族の特徴として記録に残された。結婚したら子どもを持つべきであるという考え方は、社会主義時代の影響を受けた回答者たちにどのくらい浸透しているのだろうか。

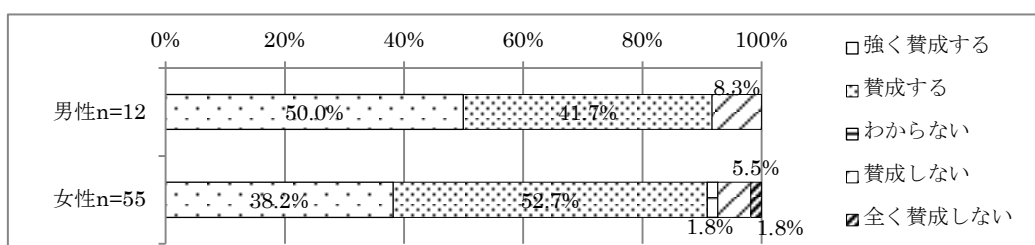


図 4-4 男女別「結婚したら子どもを産むべきである」に対する賛否 (40 歳以上) n = 67

図 4-4 は 40 代以上の回答者の「結婚したら子どもを産むべきである」という考えへの賛否を示している。男性の 50.0%、女性の 38.2%が「強く賛成する」、男性の 41.7%、女性の 52.7%は「賛成する」と答えた。賛成する人を合わせると男性の 91.7%、女性の 90.9%を占め、男女でも 9 割以上の回答者がこの考え方に賛成しており、反対の意見を持つ人は 1 割未満であり、40 代以上の回答者が、結婚したら子どもを持つべきだと考えている人が多いことが伺える。

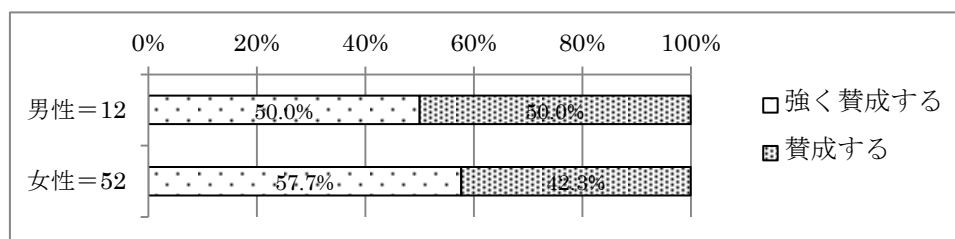


図 4-5 男女別「子どもには自分の生活を犠牲にしても親としてできる限りのことをやるのが当然だ」に対する賛否 n = 64

図 4-5 は、自分の生活より子どものことを優先すべきだという考えへの賛否を示している。男性では 50.0%が強く賛成し、50.0%が賛成している。女性では 57.7%が強く賛成し、

42.3%が賛成している。男女全員が賛成している。両親は子どものために愛情をいっぱいかけるべきと考えているのである。

### 3-2. 子ども中心主義であったかどうか

近代になってから、母親が子どもを愛するのは価値があることと認識されるようになった。女性の一番の価値は母親であることであり、母親はその子どもたちに精いっぱい愛情をかけ、他の生活を捨て、他に何の生きがいも持たずに子どもを生きがいにして世話をしているのである（落合 2008：66～70）。このような“母親が自分の子どもに対していただく強い愛着”が近代になって認識されたといわれる母性愛であるが、社会主義社会の母性愛について野々山は、社会主義社会が社会主義思想のもとで家族関係の民主化を実施して、男女平等を徹底化したと考えている。「家族関係の民主化」とは「あくまでも資本主義家族で家事・育児に専念した女性を解放することであったため、夫婦関係と同様に母子関係も資本主義家族と異なる形をとり、そこで資本主義近代家族の特性である『母性』自体は、強調されるものではなかった」（野々山 2009：93）。モンゴル人民共和国の家族に関する政策をみると、野々山の述べている通り、モンゴルでも家族法や社会主義的生活習慣によって男女の平等を徹底しようという政策があった。

モンゴル人民共和国では男女の平等を強調して、育児における男女の平等を提唱して、「母」よりも家族のほうに子どもを育てる義務があると定めた。モンゴル人民共和国の家族法の解説によると、「家族法の一つの目的は、成長期の子どもに正しく育てられる環境を提供することである。実践上、この目的を実現するために、家庭内の子育てを社会大衆の教育と密接に関連づけて、適切な原則で実行する。社会主義社会では、国家の子どもを教育するすべてのシステム、社会と家庭が力を合わせて子どもに正しい影響を与えることが基礎である」（*BNMAU-yn ger büliin huuliin delgerengüi tailbar*1988：5）とされる。この解説の中の「社会主義社会では、国家の子どもを教育するすべてのシステム、社会と家庭が力を合わせて」というのは、子どもを育てることは国と家庭の役割だと読み取れる。当時、家庭と国に育てられた E、R、V は自分の社会主義時代の経験について語った。

E：（問：社会主義の時代は国が子どもの成長を大事にしていたか。）社会主義時代は子どもを大事にしていたかといったら必ずしもそうではありません。社会主義時代は集団的にキャンプ式に育てられました。思惟を間違った方法で教育していました。モンゴル人は、子どもを教育する時にはモンゴル人の伝統に沿って教育すればいいのです。社会主義時代にはいいところがあるが、悪いところもあります。子どもを教育した方法は、間違った社会の間違った教育方法でした。（問：どのような教育方法でしたか。）キャンプ式で子どもを教育していました。（問：キャンプ式というは何ですか。）キャンプ式というのは、孤児のキャンプがあり、非孤児のキャンプもあります。つまり子どもを集団的に育て、



子どもの思惟に社会主義イデオロギーを与えました。今それを思い出してみると、イデオロギーを宣伝しすぎだったと思います。(社会主義政権は一筆者補) 子どものための施設をたくさん作ったけれど、(私は一筆者補) 今はそれにいい評価をしません。

R : (問 : 現在の家族は社会主義家族と違いますか。) 社会主義時代の家族は家父長制が強くて、秩序が厳しかったです。平等な生活がありませんでした。今の生活と全然違います。束縛され、抑圧されていました。両親がすべてを決めました。子どもは話す権利がありませんでした、両親のすべてのこと (言葉一筆者補) に従うだけです。モンゴルの家族は今のような状態が一番いいです。しかし、両親のいうことに従って何か間違えたことをしたことはないようです。

V : (問 : 現在の家族は社会主義家族と違いますか。) 社会が変わったので、今の家庭は昔よりいいと思います。当時はなぜかわかりませんが、全ての物が足りませんでした。パソコンがありません、携帯電話がありません。両親はほしいものを買ってくれません。当時両親は子どもとオープンではありませんでした。粗末な社会でした。今思い出すと悔しく思います。(問 : なぜ悔しいですか。) (悔しいと思うのは、一筆者補) すべてのことに欠点がありました。両親は子どもを理解しない、子どもも両親を理解できませんでした。疎遠でした。両親は子どもに食べ物、服装を与えることしかしませんでした。自分たちの思いが伝わらない変な社会でした。

ここに挙げた証言の中では、Eが国家による教育を批判している。Eの証言を解釈すると、前に述べたように幼稚園や托児所の数が増えたことを背景に、子育ての責任を社会に任せることによって、子どもが集団的に社会主義イデオロギーの下で育てられたのだという。RとVは、社会主義時代の自分の親の教育を批判した。家族の中では親の権力が強く、親が「食べ物」、「服装」という物質的な面で子どもの世話をしていたが、親子の交流が少なく、親と子の気持ちの間に溝が生じていた。

E、R、Vが当時の教育、子育てに不満を持つ原因は、社会主義イデオロギーで作られた家族関係を指導する家族政策にあるといえる。モンゴル人民共和国では、家族は将来の労働力の供給組織として位置づけられて、子どもは国家の将来の労働力として教育を受ける対象となった。「家族の担う最も貴重な役割は子どもを正しく育てることであり

(Dashdondov1976 : 33)、家庭と社会がともに子どもを「共産主義の原則で健康的に正しく育て、勤勉で誠実で学識のある国民に育てる義務」(BNMAU-yn ger büliin huulias (1973ond batlagdsan) 1980 : 74) を果たすために、または父母を安心して働かせるために、国家も子育ての役割を担い、その結果として親は仕事に専念することができたが、子どもは集団的に教育を受けることとなった。こうして親と子どもとの間の交流が少なくなり、子どもと家族の間の理解が阻害されるようになったため、今の39歳から49歳の回答者が今考えて

みると社会主義時代の教育の仕方に不満を持っていたのである。

#### 4. 本節のまとめ

以上の内容をまとめると、モンゴル人民共和国の出生率とウランバートル市の出生率は一旦上昇して、1960年代から低下し続けたが、社会主義が終わる時の合計特殊出生率は5以上であった。40歳以上の回答者は結婚したら子どもを産むべきだと思う人が男女ともに9割を占めている。回答者には4人の子どもを理想とする考えを持つ人が多く、その理由として、「2人ずつ伴になる」、「人生の中でいろいろなことに一緒に向き合う」など、子どもたちの相互互助関係に配慮していることが伺える。実際の子どもの数は理想的な子どもの数を下回り、その原因として「経済的な理由」、「働く」ことなどがあげられている。

社会主義時代には、国が子どもを育てることを家族の最も重要な役割とみて、政策の一環として出産奨励政策と育児支援政策を実施し、子どもをたくさん産むことを奨励して、避妊が制限され、人工妊娠中絶が禁止されていた。子どもを育てることが家族の重要な役割であるという理念に基づいて、親の社会進出を支援して育児の負担を減らす具体策として、托児所や幼稚園などを建設して、子どもを集団的に育てるようになった。

社会主義時代のイデオロギーを受けた40代以上の人々は出産をコントロールする意識を持っていた。出産をコントロールする理由とされているのは、仕事をするため、または物質的な条件が足りないことであった。調査では、親が子どものために自分のことを犠牲にすることに回答者の全員が賛成している。しかし、当時は父母を安心して働かせるために、子どもを育てることが、家族と国の共同の役割だと定められていた。このため子どもはキャンプに集められ集団的に教育を受け育てられ、この間、親は仕事に専念した。こうして親と子は引き離された状況に置かれていたのである。したがって親子の間の交流は十分ではなく、双方の間に気持ちの上での隙間が出てきたのであった。また、前の時代からの家父長的な家庭の在り方も残っていたので、家族の中では親がすべてを決めてしまっていた。これを親と子どもの間に不平等があったと感じ、親子の間の交流が良くなかったという評価をする回答者がいたのは、国による集団教育と家父長的家族制度のマイナス面があったためであった。

社会主義時代以前の世代と比べると、社会主義時代には子どもが小さな労働力ではなくなり、教育を受ける対象となった。家族と国が社会主義的な育児と教育の義務を負っていた。国は子どもを集団的に教育してその義務を果たしていた。家族は子どもに衣食住という基本的な需要を提供して、その育てる義務を果たしていた。しかし、子どもが集団的に教育されて、親が仕事に専念したため、親と子は引き離れて、子どもは親の愛情をたっぷりもらわなかった。モンゴル人民共和国では合計特殊出生率が5以上を保っていて、法律により子どもの数を制限するのが禁止されていた。社会主義世代には子どもの数を制限する意識もあるが、それは子どもの数を制限して数少ない子どもにたっぷり愛情を与えるためではなくて、経済的な理由や精一杯仕事をするためであった。

以上から、社会主義のモンゴル人民共和国においては、子ども中心主義は家族の特徴ではないのである。

## 第二節 民主主義時代

### 1. 子どもの数、理想の子ども数

#### 1-1. 統計でみる出生率の変化

図4-5は、モンゴル国とウランバートル市の1980年から2013年までの年間合計特殊出生率の推移を表している。点線はモンゴル国、実線はウランバートル市を示す。図から、モンゴル国とウランバートル市の年間合計出生率はともに低下する傾向にあり、ウランバートル市のほうがモンゴル国より低いことが分かる。1990年時点でのモンゴル人民共和国の合計特殊出生率は4.1であったが、2005年に1.9まで落ちたものの、その後は上昇する趨勢にあり、2013年現在は3.00となった。ウランバートル市は、全体的に見ると1980年から2000年にかけて低下する傾向にあり、特に1996年から2005年の間は2.0を下回って、2000年に最低の1.43まで下がった。その後2000年から2005年までは低い水準を維持していたが、2006年以降は徐々に上昇して2008年には2.54に達した。その後2009年、2010年は少し低下して2.20まで下がったものの、2011年に再び2.36まで上がって2013年現在は2.87となった。

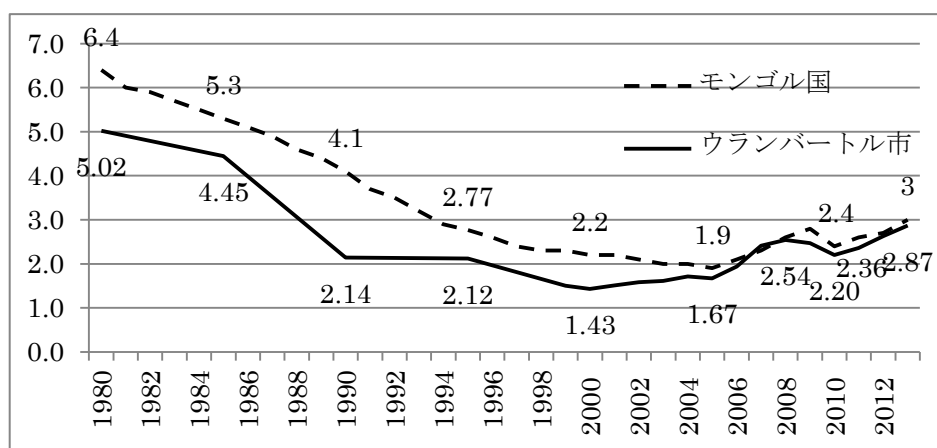


図 4-5 ウランバートル市 1980～2013 年合計特殊出生率の変化

出所) ウランバートル市のデータはウランバートル市統計局公式ホームページより筆者が作成 (ただし、1990年のデータはモンゴル国国家統計局のホームページのデータより筆者が算出した)。モンゴル国のデータはモンゴル国統計局ホームページのデータとワールドバンクホームの統計データに基づいて筆者が作成。

1-2. アンケート調査でみる子どもの数、理想の子ども数

表4-7は、アンケート調査によって判明した、民主主義世代の20代と30代の既婚者が2012年現在で実際に持っている子どもの数を示す。この表から、子どもがいない家族が全体の9.2%（8人）、1人の子どもを持つのが41.4%（36人）、2人の子どもを持つのが33.3%（29人）を占めていることが見えている。また、20代の調査対象者では、1人の子どもしかいない家族が最も多く64.7%（22人）を占めている。30代の調査対象者の中では、2人の子どもがいる家族が最も多く43.4%（23人）を占め、1人の子どもしかいない家族は26.4%（14人）、3人の子どもを持つのは22.6%（12人）を占めている。20～39歳は子どもができる年齢なので、これは生涯の子ども数を表すものではない。

表 4-7 アンケート調査回答者の子どもの数（20～39歳） n=87

子どもの数		いない	1人	2人	3人	4人	5人	総計
20～29歳	人数	6	22	6	0	0	0	34
	比率	17.6%	64.7%	17.6%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
30～39歳	人数	2	14	23	12	0	2	53
	比率	3.8%	26.4%	43.4%	22.6%	0.0%	3.8%	100.0%
総計	人数	8	36	29	12	0	2	87
	比率	9.2%	41.4%	33.3%	13.8%	0.0%	2.3%	100.0%

では、一生の間、何人の子どもを持つのが理想的であるかについて、20代と30代の既婚者の回答を表4-8に示す。

表 4-8 アンケート調査回答者の理想の子ども数（20～39歳） n=85

理想的子どもの数		1人	2人	3人	4人	5人	6人	総計
20～29歳	人数	0	3	17	14	0	0	34
	比率	0.0%	8.8%	50.0%	41.2%	0.0%	0.0%	100.0%
30～39歳	人数	1	6	10	30	3	1	51
	比率	2.0%	11.8%	19.6%	58.8%	5.9%	2.0%	100.0%
総計	人数	1	9	27	44	3	1	85
	比率	1.2%	10.6%	31.8%	51.8%	3.5%	1.2%	100.0%

注：2～3人のような複数の数を出した回答からは最小の数を取った。

総計を見ると、4人の子どもが理想的と思う回答者が全体の51.8%（44人）を占めて一番多く、次いで3人の子どもが理想的とする人が31.8%（27人）を占めていることがわかる。世代別にみると、30代では4人の子どもを理想的とする人が多く、58.8%（30人）に達し

ている。20代では3人の子どもを理想的とする人が最も多く、50.0%（17人）である。

上の表4-7からは実際に持っている子どもの数は1~2人が一番多いことがわかり、表4-8からは理想的な子どもの数を3~4人とする人が一番多いことが分かる。回答者の理想的子どもの数は実際に持っている子どもの数より多いのである。

### 1-3. 聞き取り調査でみる子どもの数、理想の子ども数

次は、聞き取り調査での実際に持っている子どもの数と理想的な子どもの数についての回答である。

R：4人世帯です。子どもが4人いればいいと思います。なぜかというとなんか2人ずつ伴になるからです。

Q：2人の子どもがいます。子ども数は最少3人、最多5人がいいです。子どもが多いほどいいです。少なくとも3人、それ以上何人でもいいと思います。でも、生活上のいろいろな原因で、今は2人以上の子どもを持つことができません。（私は一筆者補）仕事をしていますし、妻も仕事をしただがっています。（妻は一筆者補）、子どもを産んだら何もすることができなくなるとよく言うからです。

T：子どもは2人います。理想的な子どもの数は4人です。

U：子どもが3人います。子どもが3人か4人いるといいです。

V：2人の息子、夫と4人世帯です。4人の子どもが一番理想的です。

W：子どもが2人います。4人が一番いいと思います。（4人の子どもがいない一筆者補）主な原因はお金のことです。ビジネス（をしていること一筆者補）が原因で、（子どもを産むことが一筆者補）できません。でも（これからは一筆者補）少なくともまた一人を産みたいです。

X：今は4人世帯です。わたしはたくさんの人と一緒に育てられたので、子どもがたくさんいるほうがいいと思います。

Y：（今は子どもがいません。一筆者補）（問：理想的な子どもの数は何人ですか。）3から5人が一番いいと思います。なぜかというとなんかモンゴル人の伝統的な習慣で、子どもが多い家族は幸せだと考えます。一方、モンゴル国の人口はちょっと少ないです。モンゴル国の人口は600万人になったら（国の一筆者補）経済水準がちょっと違うと思うので、私は国が子ども（の数を増やすために採った一筆者補）政策<sup>40</sup>を支持しています。

Z：子どもは1人います。（問：子どもが何人いれば一番いいと思いますか。）私たちは4人の子どもがればいいと思います。（問：なぜ4人ですか。）2人は息子、2

---

<sup>40</sup> モンゴル国の人口開発についての政策では「家族の二人、三人とそれ以上の数の子どもを出生、健康的に育つことを奨励して、家計の増加を促進する方針を貫く」（Mongol ulsyn töröös hün amiin högjiliin talaar barimtlah bodolgo2004：5）としている。

人は娘ならいいと思います。これより多くなると駄目です。少なくともよくないと思います。

AA：今は1人がいますが、3人から4人が一番いいと思います。

AB：(問：何人の子どもがいればいいと思いますか。) たくさんは要りません。2人か3人いればいいです。もちろん仕事をしているので、子どもがたくさんいれば大変なことになります。都市で生活しているので大変です。

AD：今は子どもが2人います。(問：子どもは何人いれば一番いいと思いますか。) 4人は一番いいと思います。(問：皆4人と言うけど、本当に4人の子どもを持つ家族が少ないですね。なぜ4人は一番いいと思ますか。) なぜならば、子どもがたくさんいればお互いに助け合います。お互いを育てることにメリットがあります。2人の男の子、2人の女の子がいればいいです。今は1人の息子と一人の娘がいます。

AE：2人の子どもがいます。

AG：(子どもはいません。一筆者補) 私は3人いれば一番いいと思います。

S：子どもは3人います。(理想的な子どもの数は、一筆者補) 最少は2人、最多は4人です。

AC：子どもが1人います。(問：子どもが何人いれば一番いいと思いますか。) 1人いればいいと思います。それは、1人ならば(その子に一筆者補) あらゆるいい環境を提供できます。

回答者の答えを見ると、ABを除く既婚者13人の内、「2人」の子どもを持っている人が8人、子どもがいない人が3人、「3人」の子どもを持つ人が2人いる。理想的な子どもの数を見ると「4人」と答えた人が一番多く、7人いる。「3~4人」、「3~5人」の子どもがいと答えた人が2人ずつ、「3人」、「2~3人」、「2~4人」と答えた人が1人ずついる。また「1人」、「たくさん」と答えた人が1人ずついる。理想的な子どもの数は「4人」、または3人以上と答えた人が圧倒的に多いが、その理由として挙げられたのは、子どもたちの間の互助関係を重視するという意味で「2人ずつ伴になる」や「お互いを育てる」というものや、モンゴルの特徴から見た「モンゴル人の伝統的な習慣で、子どもが多ければ家族が幸せ」や「モンゴル国の人口がちょっと少ない」、そして、自らの経験から「たくさんの人と一緒に育てられた」ので子どもが多ければ家族が幸せだと思う、などである。そして理想的な子どもの数を産むことができないことと、3人以下の子どもを理想とする理由については、「都市で生活している」、「仕事をしたい」、経済的理由で子どもをたくさん持つことができないと証言している。

アンケート調査で1人と答えた27歳の男性ACにその理由を聞いた。子どもは一人のほうがいいと思う理由は、「子どもが一人いればすべてのいい環境を提供できます。たくさんの子どもの産んだらそのすべてを提供する事が出来なくなります」と答えた。彼は2011年

に 6 歳の子どもを私立学校に入学させた。民主主義時代に入って、子どもを育てるコストが高くなったため、子どもの数よりも子どもの教育の質をより重視するようになっていることが伺える。また、国の保育施設や学校が人々の需要に応じられなくなっている<sup>41</sup>一方で、私立幼稚園や私立学校などに入学させ通わせるために高い学費を払うことになるので、わが子をより優秀に育てるために子どもの数を減らすのが現実的な選択となっているのである。

以上をまとめると、民主主義世代には、2 人の子どもを持つ人が最も多いが、理想とする子どもの数は 4 人とする人が一番多い。4 人を理想としている理由は、兄弟間の互助関係、伝統的習慣、自らの経験などが挙げられた。実際の子どもの数が理想の子どもの数より少ない回答者は、その理由を、都市で生活している、仕事をしている、家計が許さないことを理由として挙げている。子どもはたくさんほしいが、実際には上の理由で産めないのである。一方で、限りのあるお金で子どもにより良い生活と教育の環境を提供しようと思う回答者の場合には、理想の子ども数を最少の 1 人と答えているのである。

#### 1-4. 避妊や人工妊娠中絶について

アンケート調査では、「あなた・あるいはあなたの妻が望まない妊娠をしたらどうしますか」と尋ねた。その結果を表 4-9 に示す。質問に回答した 76 人の中の 47 人 (61.8%) が出産する、20 人 (26.5%) が中絶すると答えた。「出産する」と答えた者は、20 代が 54.8% (17 人)、30 代が 66.7% (30 人) であり、「中絶する」と答えた者は、20 代が 29.0% (9 人)、30 代が 24.4% (11 人) である。20 代と 30 代の回答者は、望まない妊娠をした場合には人工妊娠中絶よりも出産するほうを選択する考えを持っていることが明らかである。

表 4-9 「あなた・あるいはあなたの妻が望まない妊娠をしたらどうしますか」に対する答え (20-39 歳) n=76

	出産する		人工妊娠中絶する		その他		総計	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率
<b>20~29 歳</b>	<b>17</b>	<b>54.8%</b>	<b>9</b>	<b>29.0%</b>	<b>5</b>	<b>16.1%</b>	<b>31</b>	<b>100.0%</b>
未婚	0	0.0%	1	50.0%	1	50.0%	2	100.0%
同棲	3	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	100.0%
初婚	14	56.0%	7	28.0%	4	16.0%	25	100.0%
再婚	0	0.0%	1	100.0%	0	0.0%	1	100.0%
<b>30~39 歳</b>	<b>30</b>	<b>66.7%</b>	<b>11</b>	<b>24.4%</b>	<b>4</b>	<b>8.9%</b>	<b>45</b>	<b>100.0%</b>
初婚	27	67.5%	9	22.5%	4	10.0%	40	100.0%

<sup>41</sup> 筆者が現地調査する時、ちょうど 9 月の入学シーズンで、幼稚園の前に保護者の行列を作ったことを目撃した。ニュースにも幼稚園に入れないことが社会問題になっていると伝えていた。

再婚	3	60.0%	2	40.0%	0	0.0%	5	100.0%
総計	47	61.8%	20	26.3%	9	11.8%	76	100.0%

聞き取り調査でも、20代と30代の既婚者に「希望しない妊娠をしたらどうしますか」と聞いた。答えは以下の通りである。

Q：私にはそんな（希望しなくて妊娠したこと一筆者補）ことはありませんでした。

T：私は人工妊娠中絶をするかな。

U：私は2、3回人工妊娠中絶しました。ここ（モンゴル国一筆者注）では皆がよく（人工妊娠中絶を一筆者補）しますよ。われわれのモンゴル国では、民主化の名のもとで秩序がなくなっています。私は少なくとも三回は中絶したことがあります。妊娠中毒、あるいは体調が悪いという理由で人工妊娠中絶をしました。

V：私は医学の方法で処置したことがあります。その後は怖くて（妊娠しないように一筆者補）避妊するようになりました。

W：私は二回人工妊娠中絶したことがあります。

R：人工妊娠中絶します。でも常に避妊しています。

Z：私はこの前、一回人工妊娠中絶したことがありました。自分が人工妊娠中絶したかったのでした。私は（すでに一筆者補）夫と話し合っ、今度もし妊娠したら産むと決めました。

Y：私たちはもちろん産みます。

AA：初産です。

AC：私たちにはそんなことはありませんでした。なぜかというと、私たちはあらゆる措置で防いで（避妊して一筆者注）います。もしそんなことがあったら当時の状況によって妻と話し合っ決めてます。

AF：私はたぶん人工妊娠中絶をしません。

AG：私は妊娠したことはありません。（問：もし妊娠したら産みますか。）私は産むだろうと思います。両親と話し合っ決めてます。（母親がそばから：お母さんは認めますよ。人が増えるのは家族にとって余分なものではありません。一筆者補）産みますよ。妊娠はいいことですよ。

以上の答えを見ると、30代のT、U、V、Wの家族では人工妊娠中絶した経験があり、Rは人工妊娠中絶をすると答えた。20代のZ、Y、AA、AC、AF、AGの家族の中で、Zの家族は人工妊娠中絶の経験者である。30代の回答者の中には、人工妊娠中絶を経験した人が多いことが分かる。人工妊娠中絶をする理由については、Uは民主化以降には「秩序がなくなって」、自由に人工妊娠中絶ができるようになったと答えている。今後さらに妊娠出産の可能性を持つ20代のZ、Y、AC、AF、AGの家族は、望まない妊娠をしても出産を



選択すると答えた。また、夫婦で話し合っで決めるとの回答は、子どもを産むかないかの選択肢が夫婦二人にあることを証明している。

## 2. 民主主義時代の人口政策

1996年からモンゴル国政府は、人口の安定的な増加を保つために、「モンゴル国政府による人口開発についての政策」を実施し、これを2004年に更新し(Mongol ulsyn töröös hün amiin högjiliin talaar barimtlah bodolgo2004 : 1)、さらに2014年には新たに「モンゴル国政府による人口開発についての政策」<sup>42</sup>を国会に提案した。

2004年の人口開発についての政策では「家族は子どもに生活の最初の環境を提供している。家族を社会の基礎単位とみて、その開発についての問題を人口政策の中心に置く」(Mongol ulsyn töröös hün amiin högjiliin talaar barimtlah bodolgo2004 : 5)とし、家族を社会の基礎単位と定義している。2014年の提案でも「家族は社会、人口再生産の基礎単位だと認める」(Mongol ulsyn töröös hün amiin högjiliin talaar barimtlah bodolgo2014 : 4)と記して、家族が社会の基礎単位として認識していることを改めて確認した。

この政策から、女性の出産に関する部分を取り上げると、「20～39歳の女性が2～3年の期間において出産することを勧める」(Mongol ulsyn töröös hün amiin högjiliin talaar barimtlah bodolgo2004 : 3)、「青年、壮年の女性たちに対して、彼女たちの選択によって妊娠、出産をコントロールすることを助ける」(Mongol ulsyn töröös hün amiin högjiliin talaar barimtlah bodolgo2004 : 3)、「希望しない妊娠、人工妊娠中絶とその増加することを引き下げる」(Mongol ulsyn töröös hün amiin högjiliin talaar barimtlah bodolgo2004 : 5)とある。このように、社会主義時代の避妊が制度的に抑制され、人工妊娠中絶が強制的に禁止されていた政策から、人々の意思を尊重して、国民を教育、指導、誘導する政策へと変わったのである。人々は、家族のニーズ、その時の家庭の状況によって計画して、自分たちの意思で出産を決定することができるようになった。

同じく2004年の政策では「家族が二人、三人とそれ以上の数の子どもを生み、健康的に育てることを奨励して、家計の増加を促進する方針を貫く」(Mongol ulsyn töröös hün amiin högjiliin talaar barimtlah bodolgo2004 : 5)としている。依然として、子どもをたくさん産むことを奨励していることがこれに表われている。2004年の総選挙の結果発足した政府及び国家大会議は、2006年以降は新婚への家庭給付金、児童手当、新生児に対する祝い金の支給等を決定した<sup>43</sup>。民主主義時代の人口政策は社会主義時代の政策より緩くなって、避妊を抑制して、人工妊娠中絶を強制的に禁止していた政策から、人口再生産についての教育を強化すると同時に、補助金制度を実施するようになった。

子どもに関する2004年の政策には、「子どもを大事にする原則に合わせて、彼らの権利

---

<sup>42</sup> Mongol ulsyn töröös hün amiin högjiliin talaar barimtlah bodolgo2014、モンゴル国大ホラルホームページ。

<sup>43</sup> 「最近のモンゴル経済 2011年8月」、在モンゴル日本国大使館ホームページ。

を守り、希望している教育、技術を学ぶ環境を整えて、彼らが家庭の中で、健康的に、良い生活を送れる環境を与えるべきである。」(Mongol ulsyn töröös hün amiin högjiliin talaar barimtlah bodolgo2004 : 6) と書かれてある。これをみると、政府は子どもを家庭環境で育てることを奨励していることがわかるのである。

### 3. 子ども観

#### 3-1. アンケート調査で見る子ども観

民主主義世代の20代と30代の回答者の、子どもについての考え方をみる。

図4-6は、「結婚したら子どもを産むべきである」という質問に対する20~39歳の回答者の賛否を表したものである。回答を見てみると、男性の中の「強く賛成する」人が35.5%、「賛成」が45.2%、合わせると80.7%が賛成している。女性の中の「強く賛成する」が32.4%、「賛成」が50.5%を占め、合わせて82.9%が賛成している。全体的にみると回答者の8割の人が結婚したら子どもを持つべきだと考えている。

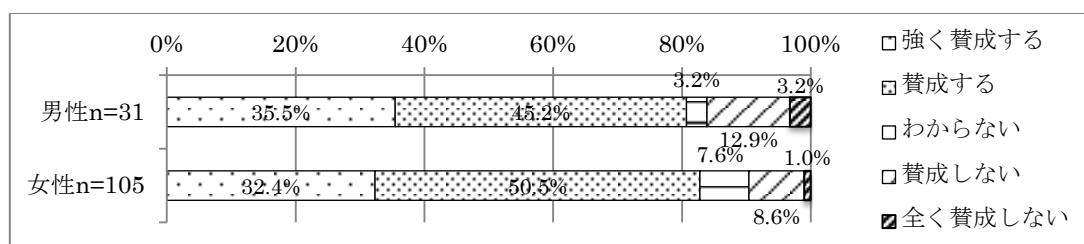


図4-6 「結婚したら子どもを産むべきである」についての賛否 (20-39歳)

n = 136

次は「親としてできる限り子どものために自分の生活を犠牲にするべきである」に対する答えを見てみる(図4-7)。図をみると子どもを自分のことより優先するべきだと思う人は男女でも9割近くを占め、男性の12.9%、女性の6.7%が反対した。多くの回答者は、子どものことを自分のことより大事にするべきとみて、子どものことを重視する考えが示されている。

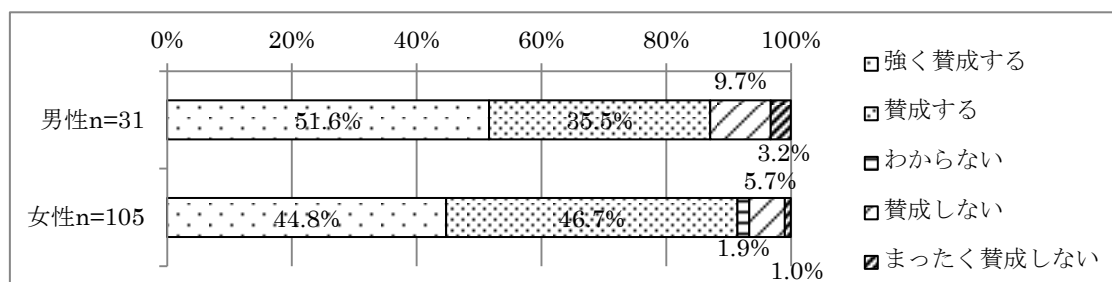


図4-7 「親としてできる限り子どものために自分の生活を犠牲にするべきである」に対する賛否 (20~39歳)

n = 136

### 3-2. 子ども中心主義であるかどうか

民主主義時代に子ども中心主義が存在するかどうかについて、次の例を見てみよう。

R：(問：現在の家族は社会主義家族と違いますか。) 社会主義時代の家族は家父長制が強くて、秩序が厳しかったです。平等な生活がありませんでした。今の生活と全然違います。束縛され、抑圧されていました。両親がすべてを決めました。子どもは話す権利がありませんでした、両親のすべてのこと（言葉—筆者補）に従うだけです。モンゴルの家族は今のような状態が一番いいです。しかし、両親のいうことに従って何か間違えたことをしたことはないようです。

V：(問：現在の家族は社会主義家族と違いますか。) 今の子どもは父母になんでも言ってくれます。父母も、何が必要ですか、どうですか、とよく聞きます。子どもの思ったものを実現するように頑張ります。今の両親たちは子どものために生きています。

R の証言は本章の第一節にも挙げられたが、R が今の家族について述べたところに注目すると、社会主義時代の家族生活は「今の生活と全然違」っていたことと、「モンゴルの家族は今のような状態が一番いいです」ということを述べており、社会主義時代の家族と違って、今の家族生活は平等的な生活だと感じている。V の語るところからは、現在のモンゴルの都市家庭では、親は子どものために生きている、といわれるほどに子どもを家族の中心とする意識が浸透しつつあることが分かる。

言うまでもなく、あらゆる家族がこのような子ども中心主義をとることは困難であろう。しかし、親が子どものために働くようになり、V が「今の子どもは父母になんでも言ってくれます。父母も、何が必要ですか、どうですか、とよく聞きます。」というところからは、社会主義時代の親子間に隙間を感じていたとの証言があるほどの社会主義時代に比べて、親子の絆がより深くなったことが察せられる。いわば、「子どもの言いなり」と言っても過言ではないレベルの子ども中心主義者が存在するようになっていることは確かである。

### 4. 本節のまとめ

モンゴル国とウランバートル市の合計特殊出生率は 1990 年から 2010 年までは低下する傾向にあり、ウランバートル市の合計特殊出生率はモンゴル国全体よりも低いのである。1996 年から 2005 年にかけて 2.0 を下回った。その後は上昇する傾向にあり、2013 年現在は 2.87 となった。

理想の子ども数は社会主義時代の回答者よりやや低く、30代は4人、20代は3人となった。民主主義時代でも社会主義時代と同じような人口増加政策を取っている。出産に対するコントロール（避妊、人工妊娠中絶）は民主主義時代に解禁され、分析対象者の中でも T、

U、V、W、Zが人工妊娠中絶を経験した。子どもを産むかどうかの選択権が国民に戻って、人々はより自分の意志で子どもの数を決められるようになった。

民主主義時代の人口政策は社会主義時代の政策より緩くなって、避妊が抑制されて、人工妊娠中絶を強制的に禁止していた政策から、人口再生産についての教育を強化すると同時に、補助金制度を実施するようになった。

民主主義世代は理想子どもの数は4人と考える回答者が一番多い。4人を理想とする理由は、兄弟姉妹間の互助関係を重視する、「モンゴル人の伝統的習慣」、自らの経験上子どもが多い家族が幸せだと思ふ、などが挙げられた。実際には2人の子どもを持つ人が最も多く理想の子ども数より少ないが、その理由として、都市で生活している、仕事をしている、家計が許さないことを理由として挙げている。一方で、限りのあるお金で子どもにより良い生活と教育の環境を提供しようと思う回答者の場合には、理想の子ども数を最少の1人と答えているのである。

民主主義時代では、社会主義時代に政府が担っていた子どもに対する教育を政府が手放したため、子どもの社会化の機能が家族に戻った。子どもが家族で育てられ、教育されるようになった。聞き取り調査で明らかになったように、親が子どもの成長をより重視し親と子どもとの間の絆が深くなって親が子どものために働くようになったという事例や、ごく少数ではあるが、子どもにより良い生活と教育の環境を提供するために子どもの数を減らすことを選択した事例があり、アンケート調査では、多くの回答者が子どものことを自分のことより大事にするべきとみていることが明らかになった。このようなことから、民主主義時代のモンゴルの都市家庭には子ども中心主義が広まっていることは間違いない。

以上から、民主主義時代においては、家族が子どもの社会化の機能を担い、親と子どもとの絆が深くなり、親が子どもに愛情をたっぷり与えるようになっているので、子ども中心主義が民主主義時代の家族の特徴の一つになっているといえるのである。

### 第三節 社会主義時代から民主主義時代にかけての出生率の変化

第一節と第二節では、統計データを通じて社会主義時代と民主主義時代の合計特殊出生率を見た。モンゴル人民共和国時代の1960年から2013年現在までの合計特殊出生率は全体的に低下する傾向にある。社会主義が終わる頃は合計特殊出生率が4以上であったが、民主主義時代には低下する趨勢を見せ、2005年には1.9まで落ちた。ただし、2006年以降はやや上昇する趨勢にあって2013年現在は3.00となった。

ウランバートル市の合計特殊出生率は、1980年から2000年にかけて低下する傾向にあり、特に1996年から2005年の間は2.0を下回って、2000年に最低の1.43まで下がり、2000年から2005年までは低い水準を維持していたが、2006年以降は徐々に上がり、2008年に2.54まで上昇した。その後の2009年から2010年はやや低下して2.20まで下がったが、2011年

に再び2.36まで上昇して2013年現在は2.87となった。

ウランバートル市の普通出生率を見る（図4-8）と、1960年まで上がる趨勢にあったが、1960年から1993年まで低下する傾向にあり、率は54.0‰から16.5‰まで下がった。特に著しいのは、1990年から1993年にかけて27.8‰から16.5‰まで急激に低下したことである。1994年からはやや上昇したが、2006年まで20%未満の状態にとどまっていた。2007年からは再び上昇趨勢となり、2007年の普通出生率22.6‰から2014年は29.2‰となった。

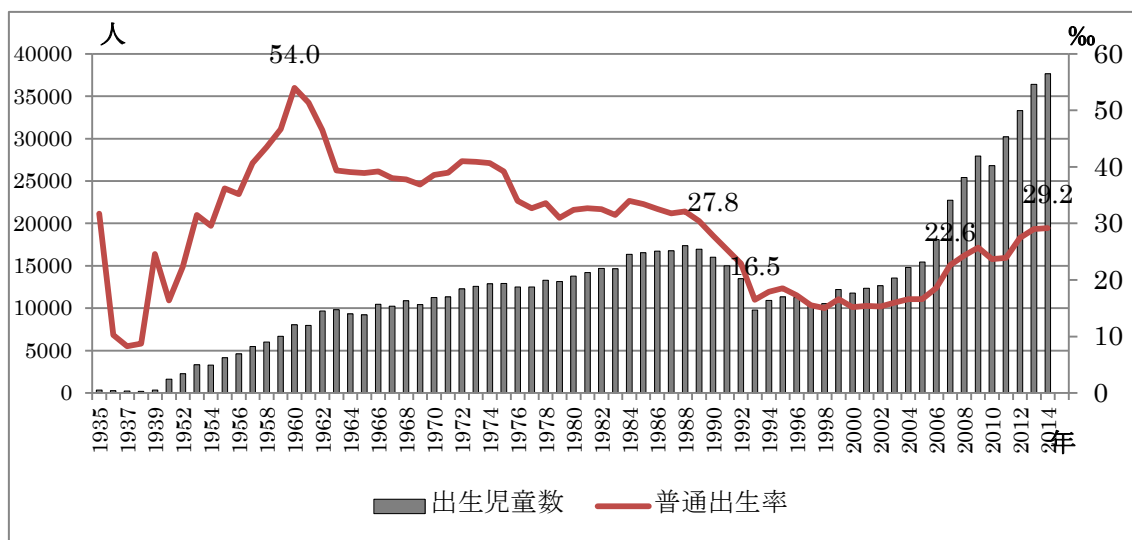


図 4-8 ウランバートル市の出生児童数と普通出生率の推移（1960～1990）

出所) ウランバートル統計局公式ホームページのデータにより筆者が作成。

1990年から1993年の急激な率の低下は、まさに政治体制移行期の最中のことであった。モンゴルの経済は、下の図4-9のGDPの下落状況を見てもわかるように、1990年から1994年にかけて落ち込んだ。食品さえ手に入らず、政府に与えられた食糧配給カードによる配給品をやっと手に入れる状態になった。Qは「私が幼いときには「カードの商品」はありませんでした。民主化が起こった1991年以降、2年間ぐらいカードで商品を買うようになりました。当時は辛かったです。私は大学生でした。わが家は一日1つのパンしか食べられませんでした。カードでパンを交換します。もらうものはパンとお酒だけでした。ちょっとしたお肉がありました。もちろん量は少なかったです。よくおなかを空かせていました。うちではお酒を飲まなかったので、お酒でパンを交換していました。（そのような状態は、一筆者補）1991年末か1992年までで終わりました」と当時の様子を語った<sup>44</sup>。このような経済状況が当該時期のモンゴル人の出生率にも影響したであろう。

44 「1990年の半ば以降、物が手に入るようになった。」（ロッサビ2007：88）

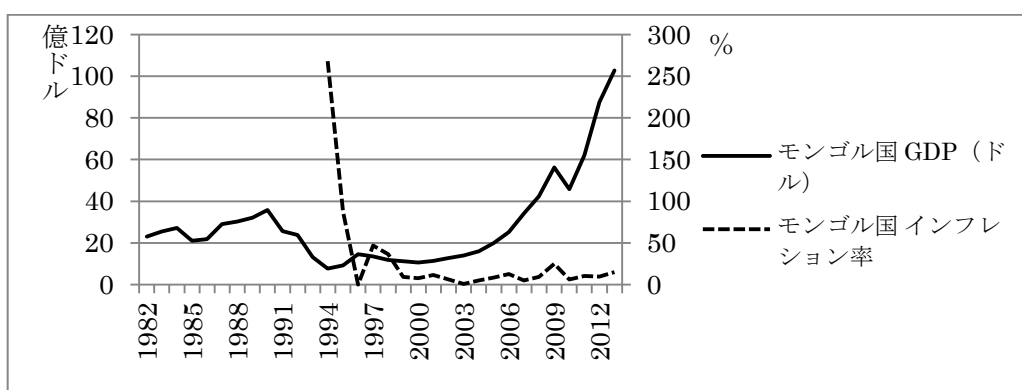


図 4-9 モンゴル国 GDP の推移 (1982~2012 年) とインフレーション率の推移 (1994 年~2012 年)

出所) 世界銀行公式ホームページのデータにより筆者作成。

普通出生率は一時期落ち込んだが、それは、5万人のロシア軍人とカザフ人が故郷に戻ったことと、長期にわたる経済的困難により若者家族が子どもを望む志向が下がったことによると見られている (Barkmann2008: 44~45)。また、1997年~1999年にかけて行った調査の結果から「学歴が高いほど、出産した子どもの数が少ない (学歴が低い母親に平均 3.37 人の子どもがいる、学歴が高い母親は平均 2.78 人の子どもがいる) といえる」 (Barkmann2007: 44)。2003年にモンゴル国家統計局が行った「モンゴル国人口再生産研究」の結果によれば、「出生率に影響を与える主な要因は、結婚年齢が遅れている、家計の状況により少人数世帯を望んでいる、哺乳期が伸びた、近代的避妊法が普及した、などである」 (Mongol Ulsyn Hün Amyn nöhön ürgjihüin erüül mendiin sudalгаа:2003: XX)。

社会主義世代にも民主主義世代にも人工妊娠中絶を受ける女性は存在した。その理由としては、仕事をしている (社会主義時代)、家族の状況がよくなかった (政治体制移行期頃)、住居がなかった (民主主義時代)、民主主義時代になって秩序がなくなった (民主主義時代)、という理由が聞かれた。

家族の子ども数が理想の子ども数より少ない原因について、社会主義世代の親は、経済的・金銭的理由と仕事をしなければならないことを挙げた。一方の民主主義世代は、都市生活の大変さ、経済的な困難、仕事をしていること、そして子どもにいい生活と教育環境を提供するという理由が挙げられた。このうち、社会主義世代の言う「経済的・金銭的理由」や民主主義世代の言う「都市生活の大変さ」や「経済的な困難」は何らかの明らかな指標に基づくものではなく、あくまで主観的な実感のレベルにとどまっている。ただし、社会主義時代のモンゴル人民共和国においては幼稚園・托児所から大学まで全てが無償であったのに対し、民主主義時代に入ってから義務教育までが無償で、それ以上の高等教育は有償化された。また、高価な学費を取る私立の進学校も登場して、子どもに良い教育を施すのにかなりの実費がかかるようになったことは事実である。こうした有償化と私立学校という民主主義時代に現れた教育の状況が、一人の子どもに充実した教育を与

えるまでに要する経済的な負担感を親に与えていることは推測に難くない。

実際に産む子どもの数が理想とする数を下回ることについて、民主主義世代の回答者たちは、経済的困難のせいで多くの子どもの育てるほどには家計の余裕がなく、しかも仕事をしなければいけないという経済的な負担感を表明する一方で、少数の子どもの愛情をたっぷり込めて、よりよい生活と教育の環境を与えるという前向きな親心を理由として示した1例が存在したことは注目に値する。多産多死の時代であった社会主義の時代、社会労働に邁進するために人工妊娠中絶を受けたという女性がいた。このような女性の場合、イデオロギーに強いられた結果として子どもの数を制限したのである。一方、民主主義時代の時代には、理想の数の子どもを持つにも自身の経済力がそれを許さないため、理想の数を下回る子どもを持つに甘んじている、いわば自身の経済力に強いられた結果として理想の数の子どもを持たない親の例が多くある。その一方で、わずか1例であったが、子どもにより良い生活を送らせ優れた教育を受けさせるため、あえて子どもを多く持たないことが理想であるという親がいた。このような極端な事例の背景にある理由は、社会主義時代から民主主義時代になっても続いている出産率低下の一般的な理由とすることは決してできない。しかし、いわば「多産多死の時代の社会主義建設のため」と「多産少死の高学歴時代の子どものため」という両極端な理由は、それぞれの時代の社会状況を見事に反映したものともいえよう。このような事例が少数であれ存在していることは、実際にはさらに多くの同様の体験を持つモンゴルの都市家族がいることを推測してよい。このような時代を極端に反映した産児の在り方が、各時代の出産率の推移の背景にあることは指摘しておくに値するだろう。

#### 第四節 本章のまとめ

本章の中心的考察課題である子ども中心主義には以下の内容が含まれている。近代社会は、子どもが両親に小さな大人として扱われていた前近代社会と違って、子どもとして家族中心的存在として、教育され可愛がられる対象となって、親の愛をたっぷりもらうようになった。可愛がって教育するには手間とお金がかかる。子どもが大切な存在になり、育てるコストが増大したので、子どもの数を制限するようになった（落合2008：64）。

子ども中心主義を検証するために、まず子どもの数を制限することについての分析を総括する。ウランバートルの普通出生率と合計特殊出生率は1960年から2013年現在まで減少する傾向にある。本研究では、その原因を家族の面から各時代の出生率の推移を背景として考察した。

社会主義世代にも民主主義世代にも人工妊娠中絶をした経験のある回答者がいた。つまり、時代とイデオロギーを問わず人工妊娠中絶した女性がいたのである。これがいずれの世代においても、子どもの数を制限し、実際の子どもの数を理想の子どもの数より少なく

している。

社会主義時代は人口増加政策を実施し人工妊娠中絶を禁止した時代だった。にもかかわらず子どもの数を制限した女性がいたのである。その原因は、男女平等のイデオロギーによって女性にも男性同様の労働が求められた一方で、国策に従い子どもをたくさん産むことも求められたからである。この双方の要求を満たすため、女性は一定数の子どもを産んだのちには労働の障害となる出産を回避し子どもの数を制限したのであった。一方、民主主義時代には、女性の出産・育児に対するイデオロギー的・国策的強制や干渉はなくなった。しかし今度は、実力があれば高いレベルに達することができる時代になった。しかしそれは、裏を返せば、実力が無ければそれ相応のレベルにとどまるということでもある。今のモンゴルは学歴社会であると言われる（バットオロシホ2005：160）。子どもに生活上の苦勞をさせず、将来の安定した生活を願って、親はより高いレベルの生活と教育の質を欲するようになった。しかし親の経済的実力が限定的である場合、子どもの数が多ければ、子ども1人あたりに振り当てる親の経済的実力は小さくなり、子どもの生活と教育レベルも頭打ちになる。このため、親は子どもの数を少なくし、その限りある経済力を集中させようとする。わずか1例であったが、子どもは1人が理想であると回答した親は、その理由をよりよい生活と教育の環境を子どもに与えるためと説明しているが、この親がまさに民主主義時代に到来した学歴社会を反映した好例である。事実この家庭は一人っ子家庭であり、子どもは名門の私立学校に入学している。このような前向きな親心は、民主主義時代に到来した高学歴社会に生きる親として、自分の子どものためにやむを得ず取った選択であるともいえる。社会が「優秀な子」を求めるので、親も自分の子が「優秀な子」であることを欲するようになっている。このように、民主主義時代のモンゴルでは、社会と教育と金が理由となって、理想とする子どもの数に達しない現実の子どもの数を生み出している。

前近代社会では、子どもは小さな労働力としての存在意義しか持たなかった。社会主義時代に入ると、子どもは教育を受け正しく育てられる対象となった。国家は子どもに充実した集団的社会的教育を施す義務を担い、家族は家庭内で子どもを正しく育てる義務を担った。この国家と家庭の分業の実態は、国家は子どもを親から引き離してキャンプに集めて集団的に社会的教育を施し、親は子どもの公教育を国家に任せて仕事に専念し、親は家庭において子どもの生活の面倒を見るというものであった。全ての子どもはほぼ平等に教育を受けることができていたが、親からは引き離されていたのであって、親の愛情をたっぷりもらわなかったのである。社会主義が崩壊したことにより、民主主義に移行した国家は、それまでの社会主義のもので担っていた子どもに対する教育を手放し、子どもの教育と社会化の機能を家族に戻した。こうして子どもにどのような教育を与えるか、どのような生活を送らせるかは親が決められるようになった。家庭に戻ってきた子どもは親との絆を深めることができるようになり、親は新しい時代における子どもの成長と発展をより重視して子どものために働くようになった。民主主義時代に入り、親は子どもに愛情をたっぷり与えることができるようになったのである。



以上から、社会主義時代には、子どもが親の愛情をたっぷりもらっていたとは言いがたく、子ども中心主義は出現しなかったといえる。一方、民主主義時代に入ってから約20年を経た現在、子どもに愛情をたっぷり注ぎ込んでいる親が現れてきている。このような現状から、現在の民主主義時代のモンゴルの都市家族には子ども中心主義の萌芽的状态にあるといえるであろう。

## 第五章 社会的ネットワーク

本章では、家族をめぐる社会的ネットワークの変容について検討して、近代家族の諸特徴の中の「非親族の排除」、「社交の衰退」、「核家族」がモンゴルの社会主義時代と民主主義時代に現れていたか、現れているかを検証する。

社会主義以前の時代と社会主義時代を経験した人の語った富裕層と召使いとの関係を分析し、「非親族の排除」であるかどうかを検証する。次に家族と親族との関係を考察して、社会主義時代と民主主義時代の都市家族が核家族であるかどうかを検証する。最後に、家族と親族、近隣とのコミュニケーションを考察して、家族が外部との交流が衰退したかどうかを検証する。

非親族の排除とは、家族が奉公人など非血縁者を排除して、血縁関係のある親族のみで構成される集団であることである（アリエス 2003：375）。

核家族とは家族が夫婦とその未婚の子どもからなる家族である（落合 2008：80）。「核家族が全普通世帯の中で占める割合、すなわち核家族率が高くなるということが『核家族化』の定義です」（落合 2008：82）。

社交の衰退というのは、家庭が家族以外の人びととの社交の場とならなくなっていくことを意味している（落合 2000：16）。

先行研究によれば、15世紀から17世紀の西ヨーロッパでは、富裕な家が本来言うところの家族のほかに、奉公人や使用人、書生、事務員、商店の小僧、徒弟、友人等々を保護していて、「大きな家」に住んでいた。各階にいくつもの部屋があり、通りや中庭ないしは庭園に面していくつかの窓が並んでいるものであった。その中だけで正真正銘の社会的グループが形成されていたのである。子ども期はこのような「大きな家族」に育てられる。これらの人がたくさん住んでいる「大きな家」の傍に「小さな家」があった。この種の都市住居は一部屋ないしは二部屋でできていたのである。田舎では簡素な家には部屋が一つ以上はなく、二つの部屋がある時には一つは家畜用であった。こうした貧しい小さな家は、何らの社会的機能も満たしていなかった。家族の団欒の場となることさえできなかった（アリエス 2003：368-369）。「18世紀以後、家族は社会とのあいだに距離を持ち始め、絶え間なく拡大していく個人生活の枠外に社会を押し出すようになる。家の構造も、世間に対する防衛という新たな配慮に応じるのである。それはすでに、各室の入り口を廊下に面して設けることで各室の独立性を確保する。また同時に一家団欒、プライバシー、孤立も生じたのである」（アリエス 2003：374）。

第一章でも引用したが、『モンゴルの二十世紀』でミンジュール氏は以下のように述べている。

こんなに広大な素晴らしい土地の上で数少ない私有財産を有する者たちが召使いを使って生活していたのです」(小長谷 2004 : 93)。移動の際は召使いもともに移動させます。一緒に連れて行きます。その過程の家族の人数によって一つのホト・アイル(宿営地集団)に含まれる家庭の数は異なります(中略)夏の盛りにはホト・アイルはサーハルト(近隣という意味のモンゴル語、筆者注)同士だけで宿営します。冬は多くの家庭が一緒になり、冬営地に宿営します。冬営地にはたくさんの家庭が宿営するのです。食事を作ってから、冬はよく遊びます(中略)または物語を聞きます。語り部を各家庭が交代で招待し、物語をしてもらい、家に泊まってもらいます(中略)他人の家で食事をします。自宅でも食べていましたが、他人の家に行ってその家の食事を食べることはしょっちゅうでした(小長谷 2004 : 103~104)。

上の証言によると、社会主義時代以前、富裕層には召使いがいたのである。当時は庶民がホト・アイルという血縁・地縁共同体で生活してきた。ホト・アイルは牧畜に関わる作業を行うだけでなく、育児や炊事も一緒にするなど、共同的に作業をすることが多かった。草原にあるゲルには庭がない。ホト・アイル同士や近隣同士の人間関係は流動的かつ開放的であった。これは遊牧生活の特徴から生じているものである。

この基本組織は社会主義の建設前まで存在していた。社会主義時代には、遊牧地域においては、ホト・アイルの代わりに「ソーリ」という地域共同体がホト・アイルと同じような機能を果たしていた。社会主義が崩壊した後、私有化によってホト・アイルが再編成され、こんにちの遊牧生活の単位となっている(島崎、長沢 1999 : 62~63)。

## 第一節 社会主義時代の社会的ネットワーク

### 1. 非親族の排除

『モンゴルの二十世紀』でミンジュールは

「私は父を知りません。父親のない子を『ボタチ(私生児)』と言います。母と二人でよその家に仕えて生活していました」(小長谷 2004 : 91)。

「家族に仕えるというのは私たちがその家庭のヒツジを、あるいはウシを放牧する、女性であれば、その乳を搾る、乳製品を作るといったことなのです。その家庭の全ての仕事をすることなのです。その際、給料はありません。食事や飲み物は彼らのところで無料で食べられます。そして彼らから冬季に 1~2 頭のヒツジを労賃としてもらいました。貧しい人にも家があります。そこで昼食、お茶をとります。ウシなどの大型家畜はもらえません。それから古く傷んだデール(民族服)を着させてくれます」(小長谷 2004 : 93)。

「こんなに広大な素晴らしい土地の上で数少ない私有財産を有する者たちが召使いを使って生活していたのです」(小長谷 2004 : 93)。

「移動の際は召使いもともに移動させます。一緒に連れて行きます。その過程の家族の人数によって一つのホト・アイル（宿营地集団）に含まれる家庭の数は異なります」（小長谷 2004 : 103）。

この証言によると、社会主義時代以前、富裕層には召使いがいた。召使いは放牧、乳製品加工、家事などその家庭の全ての仕事をしていて、召使い自身は自分の財産を持っておらず、移動する際には主人である富者と一緒に移動していたので、生業の面では独立していなかったが、ミンジュール自身が「貧しい人にも家があります」と話したように、自分の家をもっていたので、家族としては独立していた。

上に引用したように、アリエスは奉公人や使用人など家族以外の人は富裕者の「大きな家」に住んでいた。18 世紀以降は富裕者が住居の各室を独立させ、奉公人から独立性を確保するようになったと述べて、近代家族が非親族を排除していることを論じた。落合は「当時の中流家庭ではしばしば『女中』という名の家事使用人」が雇われていました」（落合 2008 : 45）と述べ、大正時代の住宅様式には「女中室」があることを引き合いに出している（落合 2008 : 46）。しかしモンゴル人の召使いはそれとは違って、家を持っていた。遊牧を営む人々の家はゲルである。図 2-1 に示したように、ゲルには区切りがない。上のミンジュールの証言によると召使いは独立したゲルに住んで、自分の上で昼食を食べていたという。

ミンジュールの証言から、社会主義時代以前のモンゴル人富裕者には召使いがいたことは確かであるが、彼らは主人である富裕者のゲルの中ではなく、それとは別の独立したゲルで生活していたことが明らかである。これを近代家族論の知見で分析すると、召使いは富裕者と同じ家族の者ではなかったと考えることができるので、社会主義時代以前のモンゴルの富裕者の家族には、召使いのような非親族は含まれていなかったということになる。つまり、社会主義時代以前のモンゴルの家族は非親族を排除していたのである。

## 2. 親族ネットワーク

### 2-1. 親子関係

まず、親族ネットワークの中の最も中心的な存在である親子関係を見よう。親子関係を把握するために、アンケート調査では、「親と同居しているか」、「もし一緒に住んでいなければどのぐらい離れているか」と親子の住居の距離と相互の往来の頻度を訪ねた。

#### 2-1-1. 親子間の住居距離と会う頻度

まず、都市間の往来の頻度を決める要因として、父母の住居との距離に着目する。表 5-1 は、アンケート調査に応じた 40 代以上で、親が健在な 69 人に「両親はどこで住んでいますか」を聞いた結果を示したものである。この中の 65.2%（45 人）の親はウランバートル市に住んでいると答えており、親がウランバートルにいる回答者のほうが多いことがわか

る。45人の中の8.7%（6人）は「同居」、10.1%（7人）は「同じ建物・同じハシヤー」、いわゆる近隣に住んでいる。14.5%（10人）は同じホローロール<sup>45</sup>に住んでいる。距離は同じホローロールより遠いが、同じくウランバートル市内に住んでいるのが31.9%（22人）である。4.3%（3人）はウランバートルから1日で行ける地方<sup>46</sup>に住んでいる。15.9%（11人）の両親は遠い地方に住んでいる。表5-1からは、分析対象者が社会主義世代の親と同居する比率が低いことも分かる。

表 5-1 回答者本人の住居と親の住居との距離（40～69歳） n=69

年齢	40～49		50～59		60～69		総計	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率
親との距離								
同居	4	9.5%	1	4.8%	1	16.7%	6	8.7%
近隣（同じ建物・同ハシヤー）	6	14.3%	1	4.8%	0	0.0%	7	10.1%
同じホローロール	8	19.0%	2	9.5%	0	0.0%	10	14.5%
ウランバートル市	11	26.2%	8	38.1%	3	50.0%	22	31.9%
1日で行ける地方	2	4.8%	1	4.8%	0	0.0%	3	4.3%
これより遠い地方	8	19.0%	3	14.3%	0	0.0%	11	15.9%
その他	3	7.1%	5	23.8%	2	33.3%	10	14.5%
総計	42	100.0%	21	100.0%	6	100.0%	69	100.0%

次の表5-2は、親と会う頻度を示している。親と「同居」と答えている13.0%（9人）を除く60人中の29人（42.0%）は週に一回以上会っていると答えた。毎月一回以上会うと答えたのは50.7%（35人）である。親と同居する人と毎月一回以上親と会う人を合わせると63.8%（44人）であり、上の表で親がウランバートルに住むと答えた人65.2%（45人）とほぼ一致している。両親と同じ都市にいる回答者は両親と毎月一回以上会っている。

45 ホローロール：日本に町ちょうにあたる行政単位。

46 地方というのはここでモンゴルの首都以外のところを指している。

表 5-2 親と会う頻度 (40～69 歳)

n=69

年齢	40～49		50～59		60～69		総計	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率
同居	7	16.7%	1	4.8%	1	16.7%	9	13.0%
週 6～7 回	3	7.1%	3	14.3%	1	16.7%	7	10.1%
週 3～5 回	5	11.9%	1	4.8%	0	0.0%	6	8.7%
週 1～2 回	10	23.8%	5	23.8%	1	16.7%	16	23.2%
月 1～3 回	4	9.5%	1	4.8%	1	16.7%	6	8.7%
季 1～2 回	4	9.5%	1	4.8%	0	0.0%	5	7.2%
年 1～3 回	4	9.5%	6	28.6%	0	0.0%	10	14.5%
全然行かない	3	7.1%	1	4.8%	0	0.0%	4	5.8%
行く条件がない	2	4.8%	2	9.5%	2	33.3%	6	8.7%
総計	42	100.0%	21	100.0%	6	100.0%	69	100.0%

聞き取り調査では、社会主義世代の人に、実の親か義理の親が健在であるかどうかを聞いて、親が健在な調査対象者に、2011 年現在で実の親あるいは義理の親の住居との距離、会う頻度について聞いた。

A：若い時には（親と一筆者補）一緒に住んでいました。今は家から離れました。

O：（親は一筆者補）近い（ところに住んでいます一筆者注）。（私の家は親の家と一筆者補）1km ぐらい離れています。

C：両親は後ろのハシャーに住んでいるので、よく会います。

D：いいえ。全く一緒に住んでいません。独立して生活しています。

I：母親は 5 キロ離れているところに住んでいます。暇があれば行きます。

E：親が 2 キロ離れているところに住んでいます。仕事が忙しい時には暇がありませんが、いろいろなことで行ったり来たりします。

N：母親は地方に（住んでいます一筆者補）。父親は私が 10 年生の時に亡くなりました。……義父母と一緒に暮らしたことは全然ありません。たまに行くぐらいです。今は（実の一筆者補）母親が（市中心から車で 20 分くらいにある一筆者補）ホローロールにいます。母親の家にはあまり行きません。時々行きます、祝日とかに。仕事の理由であまり行くことができません。義父母の所には（今年の一筆者補）旧正月の時に一回行きました。その後は全く行ったことがありません。400km 離れたところにいるので、わざわざ行かないとなりません。

P：150km 離れています。毎月に 2 回行きます。

L：(両親の家は一筆者補) 遠いです。(両親は一筆者補) セレンゲ・アイマグ<sup>47</sup>に住んでいます。(年に一筆者補) 一回 (行きます一筆者補)。正月の時に新年の挨拶をするために行きます。両親と電話で連絡します。

調査は 2011 年に行ったので、これらの回答に社会主義時代のことがそのまま反映していると見ることはできないが、社会主義時代のイデオロギーを受けた 40 代以上の世代の両親との関係を表していることは確かである。聞き取り調査対象者の中には、親と同居している人はいなかった。O、C、I、E は親の住む家から 5km 以内の近くに住んでいる。C は「親とよく会う」、I は暇があれば行く、E はいろんなことで行ったり来たりすると答えた。I、E、N の親はウランバートル市内に住んでおり、時間があれば会う旨を答えている。しかし親と遠く離れて住んでいる者の回答をみると、150km 離れている P は 2 週間に一回会うが、L の親はウランバートルから約 300km 離れているセレンゲ・アイマグにいるため年に一回程度である。N は 400km 離れている義理の両親のところ旧正月の時だけ行って会うと答えた。親と会う頻度は地理的条件により違うのである。

表 5-3 「親と住むことが望ましいですか」の答え (40～69 歳) n = 68

年齢	望ましい		望ましくない		総計	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率
40～49	17	43.6%	22	56.4%	39	100.0%
50～59	12	54.5%	10	45.5%	22	100.0%
60～69	4	57.1%	3	42.9%	7	100.0%
総計	33	48.5%	35	51.5%	68	100.0%

表 5-3 はアンケート調査で親と住むのが望ましいかどうかについて聞いた結果を表す。表を見ると「望ましい」と答えた人が 48.5% (33 人) を占めている。年代別でみると、40 代が 43.6% で一番少なく、50 代の 54.5%、60 代の 57.1% が「望ましい」と答えた。「望ましい」と思う 40 代は半数未満だが、50 代以上はこの比率が半分以上を越えているのが分かる。

聞き取り調査でも親と子どもと一緒に住むことを望ましいかどうかを聞いた。結果は以下の通りである。

B：(問：両親はどこにいますか。) 両親は亡くなりました。(問：夫の両親はいますか。) 夫の両親も亡くなりました。(問：若い時両親と一緒に暮らしていましたか。) 一緒に暮らしていましたよ。(問：同居するのがいいですか。) もちろん良かったですよ。父母の隣にいる時はよかったです。望まないわけがありません。

C：(両親と同居することを一筆者補) 望まないわけがないです。私の両親は亡くなり

<sup>47</sup> アイマグ：モンゴル国の行政単位。日本の県に相当する。

ました。年を取って亡くなりました。もし生きていたら（同居することを一筆者補）望みますよ。

J：（両親と同居することを一筆者補）望まないわけがないです。私は両親と一緒に生活したいです。（問：両親はどのぐらい離れていますか。）私の両親はいなくなりました。

D：いいえ。全然（望んでいません一筆者注）。

L：どう言ったらいいのかなあ。望んでいたけれど、今は望んでいません。今は自立しています。

N：いいえ。避けられない場合はいいけれど、独立して住む方が安心です。

O：親が年を取っているので各自暮らした方がいいと思っています。（親もとから一筆者補）独立して暮らしています。

I：親と住むのが望ましいが、結婚しているのでできません。

E：両親と住むことが望ましいです。でも（結婚した子どもの一筆者補）家族が両親と暮すと問題が起こることが多いです。自分たちが経済面での自由な状態、独立状態を求めるときには両親から離れて暮らした方がいいです。できれば若い家族は独立して、両親に圧力を与えない方がいいです。できるだけ彼ら（両親一筆者注）の援助を少なく受けて、圧力を与えないようにした方がいいと思います。両親が年を取って高齢者になった時に、介護する必要があるときには一緒にいた方がいいと思います。

D、Nは「いいえ」とはっきり望んでいないと答えた。Lは過去に望んでいたが、現在は望んでいないと答えた。Oは「各自暮らした方がいい」と答えた。I、Eは望ましいと答えたが、Iは結婚しているのでできない、Eは「離れて暮らした方がいい」と答えた。

親との同居を望んでいない理由は、Nは独立して住んだほうが「安心」、Oは「各自暮らした方がいい」、Iは「結婚している」、Eは親と一緒に住んだら親に経済的に頼りやすいので親と一緒に住まない方がよく、父母が健在なので一緒に住むと迷惑をかけるという意識を持っている。

親と一緒に住むのが望ましいと答えたB、C、J、I、Eの中、B、C、Jの三人は親を亡くした。I、Eは、親と一緒に住むのが望ましいけれど、結婚している、離れて住んだ方がいいと答えた。残りの人も、各自暮らした方がいい、自分が自立しているという理由をあげた。望ましいかどうかとは関係なく、回答者には、結婚したら親元から離れるべきという意識があり、各自の住居で親と離れて住む方がいいという意識を持っているとまとめられる。

次は、社会主義世代とその既婚の子どもの住居との距離を見てみる。下の表5-4は40歳以上の調査対象者の中で、子どもがすでに結婚して自分のもとを離れ別居している人に、その子どもの住居の所在地あるいは距離をたずねて得た回答である。



表 5-4 結婚して自立別居した子どもの住居との距離 n=39

	人数	比率
同居	6	15.4%
同じ建物・同じハシヤー	5	12.8%
同じ町（地区）	1	2.6%
ウランバートル	23	59.0%
車・バスで1日かかる地方	2	5.1%
車・バスで1日以上かかる地方	2	5.1%
総計	39	100.0%

アンケート調査対象者のうち、すでに結婚して自立し別居している子どもがいると答えた40歳以上の人は39人おり、そのうち35人（89.7%）の子どもはウランバートルに住んでいる。そのうち同居している人は6人（15.4%）、親と同じ建物・同じハシヤーに住むのが5人（12.8%）、残りの24人（62.6%）の人の子どもは同じウランバートル市に住んでいる。

結婚した子がいるBに子どもとの距離と会う頻度を聞いた。

B：4人の子どもは皆市内に住んでいます。皆仕事をしています。（皆一筆者補）近くに住んでいます。今、私は孫たちの面倒を見ています。（問：子どもたちはどの頻度で来ていますか。）よく来ています。

Bは4人の子どもを持っているが、今は一緒に住んでいる子どもはいない。

結婚した子と同居する意識を知るために、「あなたは結婚したお子さんに一緒に住んでほしいですか」と聞いた。

G：私たちは永遠にはいないものです。ある日この世を去って行って、土になります。だから早めに自分で暮らした方がいいです。

H：（同居して一筆者補）ほしいかどうかに関わらず、（子どもが一筆者補）結婚して別居して暮らします。別居して暮らした方がいいです、生活のことを理解できるようになります。

などと答えた。G、Hの答えからは、親としてわが子を一日も早く一人前にするために、子どもを独立させてあげるといふ強い意識を持っていることが伺える。

以上の分析から、40代以上の回答者は、親と同居する人が少なく、親が健在であれば別居で暮らした方がいいという意識を持っていることがわかった。また子どもが自立するた

めには親と同居しない方がいいという考えを持っている。

次の表 5-5 は、家族の機能に対する考え方を知らるためにアンケート調査で「あなたは家族を何であると思いますか」という問いを設定し、複数の回答を求めた結果を示したものである。ここでは家族の機能を「親を尊敬、世話をする場」と見るかどうか注目する。

表 5-5 「あなたは家族を何であると思いますか」に対する答え（40 歳以上、複数回答）

n = 85

	年齢	40～49	50～59	60～69	合計
		度数	30	19	6
家族成員団欒の場	比率	63.8%	73.1%	50.0%	64.7%
心の休息安らぎの場	度数	19	15	6	40
	比率	40.4%	57.7%	50.0%	47.1%
家族成員の絆を強める場	度数	15	8	3	26
	比率	31.9%	30.8%	25.0%	30.6%
夫婦の愛情の場	度数	15	11	5	31
	比率	31.9%	42.3%	41.7%	36.5%
親子一緒に生活の知恵を学ぶ場	度数	21	15	8	44
	比率	44.7%	57.7%	66.7%	51.8%
子どもを生育、教育する場	度数	13	13	5	31
	比率	27.7%	50.0%	41.7%	36.5%
家系を継ぐ、先輩から学ぶ場	度数	18	16	8	42
	比率	38.3%	61.5%	66.7%	49.4%
親を尊敬し、世話をする場	度数	7	11	5	23
	比率	14.9%	42.3%	41.7%	27.1%
その他	度数	1	1	0	2
	比率	2.1%	3.8%	0.0%	2.4%
合計	度数	47	26	12	85
	比率	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

この表から、「親を尊敬し、世話をする場」という意識を持つ社会主義世代の回答者は合わせて 27.1%（23 人）であり、親の世話をするのが家族の機能であると思う人は少ない。内訳を見てみると、50 代以上の人々の 42.3%（11 人）が親を世話する場と認識している一方で、40 代の人々の場合はわずか 14.9% しかない。同じ社会主義世代でも若い世代は、家族が親の世話をする場であるとの意識が薄い。

親子間の住居の距離、会う頻度と親子の同居意識についてまとめると、社会主義世代と

その子ども世代の間でも、社会主義世代とその親世代の間でも、結婚している子どもと親が同居している回答者の比率は少ない。結婚して親元を離れて別居している子とその親とが会う頻度は地理的な距離に左右されている。結婚している子とその親が同居することについては、親も子も、結婚したら離れて住んでほうが良いという意見を持っている者が多い。

## 2-1-2. 親子の援助関係

次は、別居している家族の親子間の援助関係をみしてみる。40歳以上の対象者には、結婚した子どもと親の両方がいるので、本節では、本人世代と親世代との援助関係について「過去一年間にあなたは親へ経済的な支援をどの程度しましたか」、「過去一年間にあなたは親へ家事や介護の支援をどの程度しましたか」、「過去一年間にあなたの親はあなたへ経済的な支援をどの程度しましたか」、「過去一年間にあなたの親はあなたへ家事や育児の支援をどの程度しましたか」を質問した。また、本人世代と子ども世代との援助関係については「過去一年間にあなたは最も近くに住んでいる子どもへ経済的な支援をどの程度しましたか」、「過去一年間にあなたは最も近くに住んでいる子どもへ家事や育児の支援をどの程度しましたか」、「過去一年間にあなたの最も近くに住んでいる子どもはあなたへ経済的な支援をどの程度しましたか」、「過去一年間にあなたの最も近くに住んでいる子どもはあなたへ家事や介護の支援をどの程度しましたか」を質問した。これらの質問を通じ、経済支援と家事、介護あるいは育児の支援の頻度を分析する。

まず表5-6によって、回答者本人世代と親世代間の援助関係を見る。回答者本人から親へ頻繁に経済的な援助を行う人が23.4%（15人）、時々援助するのが67.2%（43人）、頻繁に家事と介護の援助を行う人が30.6%（19人）、時々援助するのが66.1%（41人）である。本人から親へ経済的な支援をする人より家事や介護の援助を頻繁にする人が7.4%（4人）多い。親から回答者本人への援助を見ると、頻繁に経済的な援助を与えるのが24.1%（14人）、時々援助するのが55.2%（32人）、親から本人への家事と育児支援をよくする人が33.3%（21人）、時々する人が52.4%（33人）である。親から回答者本人への援助も経済的な支援を頻繁にする人より家事と育児の援助を頻繁にする人のほうが9.2%（7人）多いことがわかる。

続いて、本人から子どもへの支援関係を見る。本人が子どもへ経済的な援助を頻繁にするのが46.3%（25人）、時々援助するのが50.0%（27人）、家事と育児援助をする頻度は、頻繁に援助する人が28.5%（20人）、ときどき援助する人が55.8%（29人）である。本人から子どもへ経済的援助を頻繁に行っている人は家事と育児の援助を頻繁に行っている人より17.8%（5人）多い。親世代は子世代に対して、家事と育児を支援するよりも経済的な支援を頻繁にしていることがわかる。

別居の子どもが回答者へ経済的援助を頻繁にしているのが32.1%（17人）、時々するのが56.6%（30人）、家事や介護支援を頻繁に行うのが36.8%（25人）、時々するのが50.0%（34

人)である。本人と子どもとの間の援助関係をみると、子どもへ経済的支援を頻繁に行っている親が 46.3% (25 人) おり、子どもから親本人への経済的援助を頻繁に行っている人は 32.1% (17 人) いる。子どもが親へ家事や介護支援を頻繁にする人は経済的な援助を頻繁にする人より 14.2 ポイント高いのである。

表 5-6 40～70 代の回答者の親子援助関係

	頻繁に		ときどき		まったくない		当てはまる人はいない		全体	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率
過去一年間にあなたはご自身の両親へ、経済的な支援をどの程度しましたか										
総計	15	23.4%	43	67.2%	3	4.7%	3	4.7%	64	100.0%
過去一年間にあなたはご自身の両親へ、家事と介護の支援をどの程度しましたか										
総計	19	30.6%	41	66.1%	1	1.6%	1	1.6%	62	100.0%
過去一年間にあなたの親はあなたへ、経済面での支援をどの程度しましたか										
総計	14	24.1%	32	55.2%	8	13.8%	4	6.9%	58	100.0%
過去一年間にあなたの親はあなたへ、家事と育児の支援をどの程度しましたか										
総計	21	33.3%	33	52.4%	4	6.3%	5	7.9%	63	100.0%
過去一年間にあなたはご自身の子どもへ、経済的な支援をどの程度しましたか										
総計	25	46.3%	27	50.0%	1	1.9%	1	1.9%	54	100.0%
過去一年間にあなたは子どもへ、家事と育児の支援をどの程度しましたか										
総計	20	38.5%	29	55.8%	1	1.9%	2	3.8%	52	100.0%
過去一年間にあなたの子どもはあなたへ、経済面での支援をどの程度しましたか										
総計	17	32.1%	30	56.6%	5	9.4%	1	1.9%	53	100.0%
過去一年間にあなたの子どもはあなたへ、家事と介護の支援をどの程度しましたか										
総計	25	36.8%	34	50.0%	6	8.8%	3	4.4%	68	100.0%

本人と親世代との援助関係について、聞き取り調査で「両親に経済的な援助をどのぐらいしますか」と聞いた。

N：2人の両親には同じぐらいです。頻繁に援助することができません。ときどき援助します。……旧正月、祝日には助けます。お母さんは私がいないうちに（私の働いている一筆者補）市場に来て働きます。私は給料を払います。

E：必要なものを買って持っていきます。直接お金をあげることはしませんが、必要なものを買って持っていきます。

G：（問：両親に経済的な援助をしますか。）（お金を一筆者補）あげるために行きます。あげた分を返してもらうためにまた行きます。（あげることが一筆者補）できるときにあげて、生活が困っている時にもらいます。

P：(問：経済面で援助しますか。) 援助します。

M：助けられることがあったら助けます。(問：家事を援助しますか。) 機会があれば助けます。

以上の5例から子どもから親への援助をみると、Pは経済的な援助をすると答えた。Mは経済的な援助は助けられることがあったら助けると答えた。Eは必要なものを買ってあげる、Gは親とよくお金を貸したり返してもらったりすると答えた、Nは頻繁には援助できないと答えた。

次に、結婚した子どもがいる回答者に「子どもに援助してもらいますか」と聞いた。

I：よく援助してもらいます。家事もよく援助してもらいます。(私の一筆者補) 好きなものを持って来ます。

B：よく援助してもらいます。子どもを私に預けているので(私をよく援助します一筆者補)。

上の2例は、子ども世代から本人世代への援助の頻度を聞いたものである。Iは家事、または物を持ってくると答えたが、Bは子ども世代に育児の援助をして、子ども世代に援助してもらおうと答えた。

地理的な距離は親子間の相互援助頻度に影響する土台であると認識されている(岩井、保田編 2009:70)。分析からわかるのは、モンゴル国でも両親との地理的な距離は援助関係に影響する重要な要因であり、近くに住む親子はよく援助しあう関係にある。アンケート調査の結果でみると、社会主義世代と親との間は、本人から親へ経済的な支援をする人よりも家事や介護の援助を頻繁にする人が多い。親から回答者本人への援助も、経済的な支援を頻繁にする人よりも家事と育児の援助を頻繁にする人のほうが多い。つまり、社会主義世代と親との間は家事、介護、育児の援助のほうが経済的な援助より頻繁である。

社会主義世代の親と別居している既婚の子どもの間は、親から子どもへは家事と育児を支援するよりも経済的な支援を頻繁にする人が多い。別居している既婚の子どもが回答者へ家事や介護支援を頻繁にする人のほうが経済的な援助を頻繁にする人より多い。つまり、社会主義世代と子どもとの間は、社会主義世代の親が子どもへ経済的な支援をする人が多いが、子ども世代は社会主義世代へは家事や介護の支援を頻繁にする人が多いのである。

## 2-2. 親族関係

社会主義時代における親族関係については、聞き取り調査の結果で検証する。39歳のGが幼い時の思い出についてこのように語った。

Q：父母と一緒に生活していました。私たちはウランバートルにいたので、我が家にはずっと外の人(親と子どもからなる核家族以外の人一筆者注)が暮らしてしまし

た。いつも何人かが住んでいました。私は7人世帯だったけれど、7人だけで住んだことは全然ありませんでした。なぜかという、(外の人である一筆者補) 親戚が大学に合格して田舎からウランバートルに来たら、(そのような外の人である親戚一筆者補) すべての人が私たちの家で暮らしていました。もっとも多い時には20人ぐらい一緒に生活していました。少ない場合でも10人以上でした。(その中の一筆者補) 少なくとも一人は大学生でした。(ウランバートルにある一筆者補) 私の母親の家には今でも他の人(家族以外一筆者注) が住んでいます。人が住まないと(母が一筆者補) 寂しくなるので、住んだ方がいいと思います。父母には弟妹がたくさんいます。彼らは全員父母の家に住んでいました。彼らの子どもも父母の家に住んだことがあります。父母の家に三、四年間、(もしくは一筆者注) 二年間住んだ人は四、五十人ぐらいいます。つまり、私の親戚の中で父母より若い人は全員父母の家に住んでいたということです。

Qの証言によると、社会主義時代にはウランバートルにいた両親は、地方から来る親戚たちを援助していた。ウランバートルに来る親戚を自宅に同居させて助ける援助関係があった。

次に、73歳のBB、67歳のBDと42歳のLの回答を見てみる。

BB：田舎にいる親族と連絡していました。でも1995年から今(2011年一筆者補)まで故郷には戻りませんでした。今は一人のお姉さんしかいません。彼女とはよく連絡しています。去年はウランバートルに来ました。

BD：兄弟姉妹とよく連絡しています。彼らの子どもとはあまり親しくありませんが、彼らが私のところに来て、だれだれの子どもだと言ったらわかります。

L：1人のお兄さんと4人の弟と妹がいます。(その兄弟と妹のうち一筆者補) 近くで働いている人と毎日会うぐらいです。遠くにいる人とは電話で連絡します。

BBは社会主義時代には故郷によく戻って親戚たちと会っていたが、1995年以降は帰ったことがなかったという。また故郷にいるお姉さんとよく会うと証言している。BDは自分の世代の親族とよく連絡すると証言した。Lは兄弟姉妹のうち近くにいる者とはよく会い、遠くにいる者とはよく電話で連絡すると証言した。

社会主義世代の親族関係について聞き取り調査から判明したのは、社会主義世代が自分の同世代親族とよく連絡する関係にあるということである。社会主義時代にウランバートルにいた人には、地方から来る親戚たちを自宅に同居させて助ける援助関係があった。

### 3. 近隣ネットワーク

社会主義時代において、国民は都市に移入する前にソーリ<sup>48</sup>という近隣共同体の中で生活していた。社会主義世代の近隣との関係を社会主義世代が感じている親しさで見る。

表 5-8 アンケート調査対象者の近隣関係（40歳～69歳）

	年齢	40～49	50～59	60～69	総計
関係がよい	人数	24	20	6	50
	比率	51.1%	71.4%	60.0%	58.8%
関係が普通	人数	9	5	0	14
	比率	19.1%	17.9%	0.0%	16.5%
人によって違う	人数	2	0	0	2
	比率	4.3%	0.0%	0.0%	2.4%
あまりよくない	人数	1	0	0	1
	比率	2.1%	0.0%	0.0%	1.2%
あまり知らない	人数	8	1	2	11
	比率	17.0%	3.6%	20.0%	12.9%
まったく知らない	人数	1	1	0	2
	比率	2.1%	3.6%	0.0%	2.4%
総計	人数	47	28	10	85
	比率	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

アンケート調査では、現在の近隣との関係について聞いた。結果を世代別にみると、いずれの世代においても、「よく連絡する」と答えた人は58.8%（50人）であり、半分以上を占める。内訳は、40代の47人の中の51.1%（24人）、50代の28人の中の71.4%（20人）、60歳以上の10人の中の60.0%（6人）である。「普通の関係」と答えた人は14人であり、全体の16.5%を占める。その内訳は40代が19.1%（9人）、50代が17.9%（5人）、60代が0人である。「近隣の人をよく知らない」と答えた人は12.9%（11人）であり、そのうち40代は17.0%（8人）、50代は3.6%（1人）、60代は20.0%（1人）である。「あまり良くない」、「近隣の人をあまり知らない」、「近隣の人をまったく知らない」を選択した人を合わせてみると、40代の21.2%（10人）、50代の7.2%（2人）、60歳以上の20.0%（2人）が選択している。以上から、社会主義世代では、「よく連絡する」と答えた回答者が一番多く、年代でみると50代が最も多く「よく連絡する」と答えた。

聞き取り調査では、社会主義時代当時の近隣関係について聞いた。

<sup>48</sup> 社会主義体制下の生産の末端機構。ホト・アイルに相当するような集住集団である（島崎、長沢 1999：63）。

- BB：昔は近隣の間の仲はよかったです。ご飯を作ったら、近隣を呼んで一緒に食べていました。
- BD：昔は近隣との仲はよかったです。今は新しい団地に入って一年ぐらいになっているので誰も知りません。近隣には若者が多いです。
- C：近隣との関係はいいです。私の近隣の二つの家族と一緒にこの（集合一筆者補）住宅に入って30年になっています。ずっと一緒に付き合っている人々です。まるで兄弟あるいは父母のような人々ですよ。仲がとてもいいです。小さなものでも近隣の家を持って行きます。
- O：（近隣関係は一筆者補）昔のようではなくなりました。昔は仲がよかったです。今はそうではなくなりました。母親と一緒に暮らしていた時は結構よかったです。今は（近隣の人は一筆者補）知ってはいますが、仲がいいことはありません。挨拶だけです。
- J：昔は仲がとてもよかったです。今はそうではありません。今は挨拶するだけです。
- I：今は近隣とは言わなくなるぐらい仲がいいです。「同じアイルの人々の命は一つ」（モンゴルのことわざ一筆者注）です。あなたの家にはないものは我が家にある（というぐらい仲がいいです一筆者注）。
- F：近隣とはほぼ関係がありません。新しい（集合一筆者補）住宅に入ったので（近隣の人々とはほぼ関係がありません一筆者補）。
- M：親密です。
- N：わがモンゴル国にはこんな欠点があります。田舎の家は近隣との関係が結構いいのですが、集合住宅の家は隣の家を全然知りません。親戚や友人の間は関係が悪くなることはありません。……でも近隣の人を知りません。（近隣と一筆者補）知り合って仲よし状態を保てたらいいが、あの人は私と知り合いたくないし、私たちも家に帰ったらすぐにドアを閉めます。
- Q：昔、子どもの頃、一つの（同じ一筆者注）建物に住むすべての家族と知り合っていました。われわれは56世帯が住める建物に住んでいました。（私は一筆者補）56の世帯の人を全部知っていましたが、今は近隣では1つの家族しか知りません。もともと社会主義時代にはみんな仲がよかったです。

BB、BDはウランバートル出身ではないが、BBは1962年からウランバートルで働いており、BDは1968年からウランバートルで働いていた人物なので、この二人が話している「仲がいい」とは社会主義時代のウランバートルでのことである。C、Oはウランバートル出身であり、Cは同じ建物に30年間一緒に住んでいたため「仲がよかった」というのも社会主義時代からのことを指して言っている。Oもウランバートル出身で、彼が子どもの時は少なくとも今から20年前の社会主義時代だった。Qはドロナド・アイマクという地方生まれだが、生後2カ月後からウランバートルで生活していた。Qは39歳で民主主義世代に含



まれるが、自分が親と一緒にいる時のことを思い出して話してくれた。BB、BD、C、O と Q が答えている近隣の家族との仲のよさは社会主義時代のウランバートル市における近隣関係の実態であるを表しているといえる。J、I、F、M、N はウランバートル出身ではないので、ウランバートルの社会主義時代の実態であると言えない。

証言の中の「昔」についての話に注目すると、「仲はよかった」(BB、BD)、30年来「仲がとてもいい」(C)、「仲がよかった」(O、J)のように、回答者全員が昔は近隣の家庭と仲がよかったと評価している。具体的には、Qは56世帯を全て知っており、BBはご飯を「一緒に食べて」と証言した。一方、「あまり知らない」など近隣との関係の悪さを答えているのは、2011年現在の状況について述べたものであり、新しい団地に転居したのが主な原因になっている。

アンケート調査から、社会主義世代は回答者の半数以上になる全体の58.8% (50人)が近隣とよく連絡することが明らかであり、聞き取り調査の証言では、回答者たちが社会主義時代のウランバートル市では近隣関係がよかったと評価しているのである。

#### 4. 本節のまとめ

本節では、家族をめぐる社会的ネットワークを親族関係と近隣に分けて分析した。親族関係の中では、まず親子関係を取りあげた。アンケート調査の結果から、社会主義世代では親と同居する人は全体のわずか8.7% (6人)しかおらず、親と同居している者が少ないことがわかった。社会主義世代では、結婚した子どもと親はともに同居する意識が薄く、家族を「親を尊敬、世話をする場」と認識している者が少ない。社会主義世代の中で40代の回答者は、家族が親の世話をする場であるという意識が薄い。親子間の支援関係は、親子ともに市内に住む場合は相互の援助が頻繁であり、社会主義世代と親の間は家事、介護、育児の援助が経済的な援助より頻繁である人が多い。つまり、社会主義世代と子どもとの間では、社会主義世代が自分の子どもへ経済的な支援をする人が多いが、その子ども世代は親である社会主義世代へは家事や介護の支援を頻繁にする人が多いのである。

社会主義世代の親族関係について聞き取り調査から、社会主義世代が自分の同世代親族とよく連絡する関係にあることが判明した。社会主義時代にウランバートルにいた人には、地方から来る親戚たちを自宅に同居させて助ける援助関係があった。

近隣関係に関する聞き取り調査では、回答者たちは社会主義時代のウランバートル市では近隣関係がよかったと評価していることが分かった。アンケート調査からは社会主義世代は近隣とよく連絡するという人が全体回答者の半数以上に達することが分かった。

#### 5. 仮説の検証

本節では、社会主義以前の時代を経験した人の語った富裕層と召使いとの関係を分析して「非親族の排除」であったかどうかを検証する。次に、社会主義時代の親子の住居の距離、親子間の同居志向、親族との関係、家族観で「核家族」であったかどうかを検証する。

そして、社会主義世代の親子の援助関係、親族間の関係、社会主義時代における近隣との関係から、社会主義時代には「社交の衰退」があったかどうかを検証する。

まず「非親族の排除」について検証する。社会主義時代以前、富裕層に奉仕していた召使いは自分の財産を持たないが、貧しい人でも主人と別のゲルに住んで、移動する際に主人と一緒に移動していたので、近代家族論の知見で分析すると富裕層と同じ家族の者ではなかったと考えられる。つまり、召使いのような非親族は社会主義時代以前にも富裕層の家族から排除されていたのである。

次に「核家族」について検証する。社会主義世代の回答者の多くは、結婚した子どもは親と同居しないという意識を持つ人が多い。同居しない理由は、子どもは結婚したら独立するべきであり、親が子どもを独立させることは親の義務であるとの考えがある。実際、親と同居している回答者は少なかった。家族とは親を世話する場であるという意識を持つと答えた回答者も少なかった。したがって、社会主義世代には、子どもは結婚したら親と離れて核家族で住むという意識があるといえる。ここでは、社会主義世代の親にも子にも、結婚後には独立して核家族を作るという考えがあることは明らかとなったが、実際、核家族であったかどうかまでは明らかにはできない。これについては第三節の1で再び取りあげることにする。

最後に「社交の衰退」を検証する。親と子の間の会う頻度は地理的位置に左右されて、親子がともにウランバートル市に住む場合は会う頻度が高い。社会主義世代とその親との間では、経済的な援助より家事、介護、育児の援助を頻繁に行う人が多い。社会主義世代と子どもとの間では、社会主義世代が子どもへ経済的な支援をする人が多いが、子ども世代は親である社会主義世代に対して家事や介護の支援を頻繁にする人が多いのである。調査対象者の親族間の関係は親しく、本人と同じ世代の親戚とよく連絡を取り合っている。また親族間には助け合う関係があった。近隣の間については、社会主義時代は近隣との関係がよかったと回答者たちは評価している。総じて見ると、都市家族は社会主義時代以前のホト・アイルという血縁、地縁共同体から離れても、親子、親族、または近隣間に良好な信頼関係が保まれていた。したがって社会主義時代には「社交が衰退」しなかったといえるのである。

## 第二節 民主主義時代における社会ネットワーク

### 1. 親族ネットワーク

#### 1-1. 親子関係

##### 1-1-1. 親子間の住居距離と会う頻度

民主主義時代を考察する本節の分析対象者は39歳以下の人々であり、既婚の子どものいる人は少ない。よって、まずは子どもの立場から親世代との距離を見てみる。なお、ここ

では、既婚者を分析の対象としているので未婚者は集計から除いている。

表 5-9 両親との距離 (20 歳～39 歳)

n = 93

親との距離	20～29 歳		30～39 歳		総計	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率
ウランバートル市に住む人の合計	<b>13</b>	<b>34.2%</b>	<b>34</b>	<b>61.8%</b>	<b>47</b>	<b>50.6%</b>
同居	6	15.8%	5	9.1%	11	11.8%
同じ建物・同ハジャー	0	0.0%	6	10.9%	6	6.5%
同じ町 (ちょう)	1	2.6%	4	7.3%	5	5.4%
ウランバートル	6	15.8%	19	34.5%	25	26.9%
地方に住む人の合計	<b>24</b>	<b>63.2%</b>	<b>20</b>	<b>36.3%</b>	<b>44</b>	<b>47.3%</b>
片道 1 日で行ける地方	12	31.6%	12	21.8%	24	25.8%
片道 1 日以上かかる地方	12	31.6%	8	14.5%	20	21.5%
その他	<b>1</b>	<b>2.6%</b>	<b>1</b>	<b>1.8%</b>	<b>2</b>	<b>2.2%</b>
総計	38	100.0%	55	100.0%	93	100.0%

表 5-9 は回答者と両親の住居との間の距離を示している。親がウランバートル市に住む回答者は全体の 50.5% (47 人) を占める。その中で親と同居している人は 11.8% (11 人) を占める。このように親との同居率が低いことは社会主義時代と同じであり、別居している人のほうが多い。

別居の場合、両親と「同じ建物・同じハジャー」、つまりお互い近くに居住している回答者は 93 人の中の 6.5% (6 人) である。20 代の親子同居率が高く、38 人の中の 15.8% (6 人) が親と同居している。30 代は 9.1% (5 人) が親と同居している。親が地方に住む対象者は合わせて 44 人おり、全体の 47.3% を占めて、20 代の 24 人 (63.2%)、30 代の 20 人 (36.4%) を占める。両親がウランバートル市に住む対象者が 47 人いて、全体の 50.6% を占めている。

表 5-10 は、親と子どもの会う頻度を表している。週三回以上親と会う人が 91 人中 27 人 (29.8%)、毎月 1 回以上会う回答者が 21 人 (23.1%) いる。合わせると 48 人、全体の 52.9% を占める。年に 1 回から 3 回父母の家に行く人が少々多く、全体の 31.9% (29 人) を占めている。季節ごと、すなわち三か月に 1-2 回に 1 回親と会う人が全体の 9.9% (9 人) を占めている。

表 5-10 親と会う頻度とその比率 (20~39 歳)

n=91

年齢	20~29		30~39		総計	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率
同居	6	16.7%	8	14.5%	14	15.4%
週に 6-7 回	2	5.6%	3	5.5%	5	5.5%
週に 3-5 回	2	5.6%	6	10.9%	8	8.8%
週に 1-2 回	3	8.3%	6	10.9%	9	9.9%
月に 1-3 回	3	8.3%	9	16.4%	12	13.2%
季に 1-2 回	6	16.7%	3	5.5%	9	9.9%
年に 1-3 回	10	27.8%	19	34.5%	29	31.9%
行く条件がない	1	2.8%	0	0.0%	1	1.1%
その他	3	8.3%	1	1.8%	4	4.4%
総計	36	100.0%	55	100.0%	91	100.0%

聞き取り調査でも親と会う頻度をたずねた。

Q：(問：両親とよく会いますか。) 私たちはお母さんの家でよく会います。私は独立して(結婚して一筆者補)十五年になっています。でも私は母親の家に暮らしているようによく居ます。弟もよくお母さんの家に行きますし、次いでは姉がよく行くのです。(兄弟姉妹は一筆者補) 皆お互いの家にあまり行きません。お母さんの家に行って、そこで皆と会います。

W：(問：ご両親の家はどのぐらい離れていますか。) ハイラースト(ウランバートル市の中心部から車で15分のところ一筆者注)のゲル地区にいます。(問：よく会いに行きますか。) よくは行けません。ときどき行きます。暇がないです。自分で商売しているので時間がないのです。

V：(問：ご両親は遠いところに住んでいますか。) 遠いです。ガチョールト(ウランバートル市中心部から車なら30分で行ける近郊一筆者注)にいます。(問：よく会いますか。) よく行きます。またよく来ます。

Y：両親(義父母一筆者注)の家は460km離れています。でも(義理の父がしばらく住んでいる一筆者注) ツァイジャは遠くても5kmぐらい離れているでしょう。おばあさんの家にはよく行きます(家から5km離れたアモゴランにいる一筆者注)。

T：両親は近くに住んでいます。5kmぐらい離れています。(両親の家には一筆者補) よく行きます。

Z：今は同じハシャアに住んでいます。(私の家族は一筆者補) 11月に新居に入ります。

AA：(問：両親とよく会いますか。) いいえ。ドロナド(ウランバートルから車で一日行程のモンゴル最東端のアイマグ)にいます。たまに行きます。

AD：夫の両親はフブスゲル(ウランバートルの西北、車で二日間行程のアイマグ一筆者

注)にいます。私の両親はダルハン(ウランバートルから車で4時間の都市一筆者注)にいます。(ADの妻の両親はジャブハン・アイマグから一筆者補)ダルハンに移入しました。……(フブスゲルには一筆者補)頻繁には帰ることはできません。(ダルハンには一筆者補)1ヶ月か2ヶ月に1回帰ります。

AG:(問:両親と一緒に暮らしたいですか。)今は(実の親と義理の両親の一筆者補)二つの家に通っているのが楽しいです。

親と一緒に住んでいるのがAGである。AGはまだ大学生で、夫が兵役に就いたこともあり、固定した住居を持っていないので、実の親と義理の両親の家を行ったり来たりしている。Zは同じハシャー内に住んでいると答えたが、11月には新居に移るので親とは住まなくなる。両親の家が市内にあるQ、V、Tが親のところに頻繁に行く旨を答えた。頻繁には行けない旨を答えたのがW、AA、ADである。Wは時間がなく、AAとADの両親は遠くに住んでいるためである。

次は、親との同居意識についてみる。結婚している人に、親と一緒に暮らすのが望ましいかどうかについて尋ねた結果を表5-11に示した。97人の中の30.9%(30人)が親と同居するのが望ましいと考え、残りの69.1%(67人)は望ましくないと考えていることがわかる。

表5-11「親と一緒に暮らすのが望ましいですか」に対する答え(20~39歳) n=90

年齢	望ましい		望ましくない		総計	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率
20~29	12	28.6%	30	71.4%	42	100.0%
30~39	18	32.7%	37	7.3%	55	100.0%
総計	30	30.9%	67	69.1%	97	100.0%

表5-11で示すように、親と一緒に住むのが望ましいと答えた人は全体の30.9%(30人)を占めている。20代の中の28.6%(12人)、30代の中の32.7%(18人)が「望ましい」と答えた。20代は30代より親と住むのが望ましいという人が少ない。

親と一緒に住むのが望ましいか望ましくないか、その原因を知るために、聞き取り調査においても同じ質問をした。

Y:(義理の一筆者注)父母をこっち(私の家の近くに一筆者補)に連れてくるようにしています。シャルハド(Yの住んでいる市近郊地域一筆者注)にハシャーバイシン(ゲル地区の個人固定住宅一筆者注)を探しています。できれば家に近いところに住ませたいです。

AG:(問:両親と一緒に暮らしたいですか。)今は(実の親と義理の両親の一筆者補)

二つの家に通っているのが楽しいです。(問：義父母の家はどこにありますか。) サンサルです。近いです。(問：よく行きますか。) 実家に帰らなければ、そこに帰ります。

R：いいえ。

T：いいえ、独立したほうがいいです。.....望ましくないです。義父母と会いたくないです。義父母はうるさい人々です。

W：(頭を横に振ったのみ一筆者注)

Z：いいえ。各自で暮らした方がいいです。今は同じハシャーに住んでいます。(私の家族は一筆者補) 11月に新居に入ります。(問：一緒に暮したら生活面でお互いに助けになりますか。) わかりません。各自生活することを望んでいます。父母に会いにときどき行くけれど、生活するなら家族ごとに住んだ方がいいです。

V：いいえ。(問：なぜですか。) 人生の中で一番重要なものは家族です。よその人(核家族以外の人一筆者注)が入ったらいろいろな矛盾が出てくるので、家族のいい雰囲気を保ちたかったら家族成員(親を排除した核家族のこと一筆者注)でいればいいと思います。.....(問：両親と一緒に暮らしていますか。) いいえ、別々に住んでいます。両親は二人で暮らしています。別々に住んだ方がいいです。もし両親が年を取って、体が悪くなったら、誰か(子どもの中の一人一筆者注)と一緒に住むかもしれないですが、今はまだ若いので、2人で生活できるとおもいます。

AA：(問：両親と一緒に生活するのは望ましいことですか。) 両親に面倒をかけるから望みません。(問：なぜですか。) すでに結婚して、自立したので彼らに面倒をかけたくないです。

AC：望んでいません。今は(遠くに単身赴任していて一筆者補)自分の住居がないので、休みの時には義父母、たまに(実の一筆者補)両親のところに住みます。このようにしていると問題が起こります。家族が堅固となるために家族成員(親を排除した核家族のこと一筆者注)で生活したら一番いいことです。

AD：いいえ、望ましくないです。両方の両親から離れて、自らの力で暮らすのがいいです。なぜなら両親や親戚は家族(両親や親戚を排除した核家族のこと一筆者注)にある程度影響を与えて、問題を起こします。だから、夫の両親はフブスゲルにいます。私の両親はダルハンにいます。両方の両親から独立したいのでウランバートルに住んでいます。

上の回答を分析しよう。AGが親との同居が望ましいと答え、Yは義理の親を自分の家の近くに住ませたいと答えた。AGは結婚したばかりの大学生で、夫が兵役に行ったため、当時は固定的な住居がなかった。

望ましくないと答えた者の回答をみると、AD、V、ACが両親や親戚などよその人と一緒

に住むと問題が起きる恐れがある旨を答え、T は義理の「両親がうるさい」、AA は「両親に負担をかける」という理由が挙げられている。これらから、核家族で住みたいと思う回答者が多く、家族が堅固であるために、核家族以外の人を排除したいと思っていることが伺える。

次に、家族の機能に関して「あなたは家族を何であると思いますか」との問いを設定し、複数回答を求めた。その結果を表 5-12 の中で示した。「親を尊敬、世話をする場」という答えに注目する。20 代と 30 代で「親を尊敬、世話をする場」を選択した人を見ると、20 代は 85 人中のわずか 2 人、30 代も 62 人中の 37.1% (23 人) にとどまっている。民主主義世代の両年代とも、家族とは親を尊敬し世話をする場であるとの認識を持つ者が少ないことがわかる。

表 5-12 「あなたは家族を何であると思いますか」に対する答え (20~39 歳) n=147

	20-29		30-39		合計	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率
家族成員団欒の場	61	71.8%	45	72.6%	106	72.1%
心の休息安らぎの場	39	45.9%	31	50.0%	70	47.6%
家族成員の絆を強める場	38	44.7%	28	45.2%	66	44.9%
夫婦愛情の場	46	54.1%	29	46.8%	75	51.0%
親子一緒に生活知恵を学ぶ場	36	42.4%	39	62.9%	75	51.0%
子どもを生育、教育する場	37	43.5%	27	43.5%	64	43.5%
家系を続ける、先輩から学ぶ場	19	22.4%	32	51.6%	51	34.7%
親を尊敬、世話をする場	2	2.4%	23	37.1%	25	17.0%
その他	0	0.0%	3	4.8%	3	2.0%
合計	85	100.0%	62	100.0%	147	100.0%

#### 1-1-2. 親子間の援助関係

ここでは既婚の回答者と親との援助関係を考察する。親に対する経済的支援ならびに家事・介護の支援の頻度、親から受ける経済的支援ならびに家事・育児の支援の頻度を聞いた。なお、民主主義世代の分析対象者には既婚の子どもを持つ者が 1 人もいなかった。

表 5-13 をみると、「過去の一年間、あなたはご自身の親へ経済的な支援をどの程度しましたか」という質問に、頻繁に援助すると答えたのが 13.6% (11 人)、ときどき援助すると答えたのが 74.1% (60 人) いることがわかる。また、「過去の一年間、あなたはご自身の親へ家事や介護の支援をどの程度しましたか」という質問に、頻繁に援助すると答えた人が 21 人 (26.9%)、ときどき援助すると答えたのが 59.0% (46 人) である。親を経済的に支援するより、家事や介護の面で支援する者が 13.3% (10 人) 多いのである。



続いて、民主主義世代の既婚者が親より受ける援助をみる。「過去の一年間にあなたの親はあなたへ経済的な支援をどの程度しましたか」という質問に対して、48.8% (39人) が「頻繁に」、33.8% (27人) が「ときどき」を選択した。一方、親から民主主義世代の子どもへの家事・育児支援をみると、「過去の一年間にあなたの親はあなたへ家事と育児の支援をどの程度しましたか」という質問に、32.1% (25人) が頻繁に支援を受け、62.8% (49人) がときどき支援を受けていると答えた。親から経済的な援助を頻繁に受ける人が家事や育児の支援を頻繁に受ける人より16.7% (14人) 多いのである。

民主主義世代で、親から経済的支援を頻繁に受けている人は48.8% (39人) であり、親に経済的な支援を頻繁に与える人は13.6% (11人) である。親から頻繁に経済的援助を受ける者が親に経済的支援を頻繁に与える者よりも35.2% (28人) 多い。一方、民主主義世代で、親から頻繁に家事・育児の支援を受ける人は32.1% (25人)、頻繁に親に家事・介護の支援をしてあげる人は26.9% (21人) である。親から家事や育児の支援を頻繁に受ける人は、頻繁に親に家事や介護の支援をしてあげる人より6.2% (4人) 多い。民主主義世代の者は、結婚して親元から離れても親から経済と家事の支援を頻繁に受けているのである。

表 5-13 20~39歳の回答者と親の間の援助関係

	頻繁に		ときどき		まったくない		当てはまる人がいない		全体	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率
過去の一年間にあなたはご自身の両親へ経済的な支援をどの程度しましたか										
総計	11	13.6%	60	74.1%	8	9.9%	2	2.5%	81	100.0%
過去の一年間にあなたはご自身の両親へ家事と介護の支援をどの程度しましたか										
総計	21	26.9%	46	59.0%	5	6.4%	6	7.7%	78	100.0%
過去の一年間にあなたの親はあなたへ経済的な支援をどの程度しましたか										
総計	39	48.8%	27	33.8%	6	7.5%	8	10.0%	80	100.0%
過去の一年間にあなたの親はあなたへ家事と育児の支援をどの程度しましたか										
総計	25	32.1%	49	62.8%	4	5.1%	0	0.0%	78	100.0%

聞き取り調査で、「両親の家によく帰り、援助を行いますか」との質問に対して、次のような回答を得た。

- Q：(問：あなたは母親によく経済的援助をしますか。) よく援助します。  
 V：援助します。何かが必要だと言われたら、それを買ってあげます。(問：義父母を助けますか。) 助けます。同じです(同じく助けます—筆者補)。健康の面でよく助けます。(たとえば—筆者補) 通院費用を払うなどです。  
 Y：(両親は亡くなりましたので、—筆者補) おばあさんの家にはよく行きます。行って

料理を作ったり、家事をしてあげたりします。(問:義理の両親にお金をあげますか。) お金をあげるよりは物を買ってあげます。小麦粉、米、お肉、飴などいろいろなものをあげます。

T: (問:両親に経済的な援助を与えますか。) いいえ、援助しません。今、両親は働いていますし、また年金をもらっているのです、私たちに頼りません。(両親は一筆者補) 体調がいいので、(私が両親の一筆者補) 家に行って掃除することはありません。旧正月の時にボーズ(肉饅頭一筆者注)を作りに行くぐらいです。両親は比較的若い人だから(経済的な援助をしません一筆者注)。

AD: 経済的には援助することができません。お金の余裕がないので、頻繁に援助することはできません。近年、両親は田舎にいますので、必要なものを買ってあげます。

AB: 両親(の住んでいるところは一筆者補)は(ウランバートルから一筆者補)1400km 離れています。(両親は一筆者補)ソムの中心地から離れた田舎に住んでいます。山岳地域に住んでいるので携帯電話の電波も届きません。彼らはソムの中心地に来るか、山の上に登って電話をします。遠いので二、三年に一回帰ります。……経済的な援助はあまりしません。小さい時から親と離れ離れで生活していたので、親とはあまり親しくないし、援助する意識もありません。

W: いいえ。あまり援助しません。なぜかと言うと、彼ら(義理の両親一筆者注)はすぐ腕だと思えます。でも欲望が強い人々だと思えます。

AA: いいえ。

回答をみると、援助すると答えた人はQ、V、Yであり、お金を援助するよりも、物や家事の援助をすることが多い。Yは親を亡くしたので、おばあさんを援助すると答えた。頻繁には援助しないと答えたADと援助しないと答えたTは、それでもたまたま物や家事で支援してあげている。ADが頻繁には援助しない理由はお金の余裕がないからであるという。TとWとABが親に援助しない理由は、Tは親が年金をもらっているためと答え、Wは義理の両親と親しくないためであり、ABは親と親しくないためである。

親世代とその既婚の子世代の援助関係は、回答者本人世代と親世代、回答者本人世代と子ども世代との援助関係ともに極めて緊密であるが、親世代から子世代への援助のほうが子世代から親世代への援助よりも多い。子世代から親世代へはお金の援助より家事・介護、または物を渡す支援のほうが多い。子世代が親世代より受ける援助は経済的な援助が多い。親からの経済的支援を頻繁に受けている人は家事・育児の支援を頻繁に受ける人より多い。民主主義世代の既婚者は、結婚して親元から離れても、親から経済と家事の支援を頻繁に受けているのである。

## 1-2. 親族関係

親族間で会う頻度を調べるために、聞き取り調査では、「親族たちと会いますか」と聞いた。

AG：兄弟は4人います。みんなウランバートルにいます。弟と妹たちと年に二回会います。(弟と妹たちの中には一筆者補) 頻繁に会う人もいます。

AD：兄弟姉妹は6人です。皆よく連絡しています。年下の2人は都市(ウランバートル—筆者補)にいます。ほかの姉兄はダルハン市にいます。

Q：(問：親族とよく会いますか。) そうです。私は兄弟5人、妻は兄弟3人います。皆とは頻繁に会います。会わない週は一週もないぐらいです。私たちはお母さんの家でよく会います。私は独立して(結婚して一筆者注)15年になっています。でも私は母親の家に暮らしているようによく居ます。弟もよくお母さんの家に行きますし、次いでは姉がよく行くのです。(兄弟姉妹は一筆者補) 皆お互いの家にあまり行きません。お母さんの家に行って、そこで皆と会います。……今思うと、当時の親戚間の関係は今とはちょっと違います。私の時代以降は変わってきました。私の世代より若い人は家によその人(夫婦と子ども以外の人一筆者注)を入れたくないようになっていきます。つまり、社会主義時代の考え方が私の世代から失われたということです。(親戚たちが長期間住むと、私たちがその親戚たちを一筆者補) ちょっと嫌がります。私たちは家族成員だけで生活するのが好きです。(家族以外の人が一筆者補) 私の家にしばらく住むのは構いませんが、1年間住むなら(私たちが一筆者補) 嫌がります。このように変化しています。

AF：(私は一筆者補) 母親の親族と親しく、頻繁に連絡します。父親の親族とはあまり連絡しません。父親が早く亡くなりましたので。

AB：私は5人の弟と妹がいます。今は一人の弟が両親と一緒にいます。(弟は一筆者補) 中学校を卒業して学校をやめました。2人の妹はゴビアルタイ・アイマグの医学学校で勉強しています。……彼女たちとはよく電話で話します。

W：あまり連絡しない。……振り返って見たら、暇がありません。仕事がありますし、子どもがいるので、時間がなかなか取れないです。

家族以外の親戚たちと会う頻度をみると、Wは仕事と育児が忙しいため頻繁には会えない、あまり連絡もしない。Qは「よく会います」、ADとAFは「よく連絡します」、ABは「よく電話します」と答えた。特にQの兄弟たちは毎週会う、ADとABの場合は電話で連絡する、AFは母側の親戚とは頻繁に連絡するが父親が亡くなったので父方の親族とはあまり連絡していない。

Qの回答をみると、自分の世代と上の世代との大きな差は、家族以外の親族を受け入れるかどうかにあることがわかる。親の家族は親戚たちが来て一緒に住むのが好きだったが、本人世代は家族以外の人を住み込むのを嫌がるようになった。すなわち、核家族で住むのを好むようになったのである。

次は、親族援助の一例として子育ての支援を見てみる。

表 5-14 子育てにおける援助 (20~39 歳) n=80

年齢		20~29	30~39	合計
自分 (子どもの 父母)	度数	17	26	43
	比率	56.7%	52.0%	53.8%
両親 (子どもの 祖父母)	度数	10	21	31
	比率	33.3%	42.0%	38.8%
子どもの兄、姉	度数	4	4	8
	比率	13.3%	8.0%	10.0%
義父母 (子ども の祖父母)	度数	15	8	23
	比率	50.0%	16.0%	28.8%
配偶者の兄、姉	度数	0	1	1
	比率	0.0%	2.0%	1.3%
近隣	度数	1	0	1
	比率	3.3%	0.0%	1.3%
親戚	度数	5	18	23
	比率	16.7%	36.0%	28.8%
幼稚園	度数	0	1	1
	比率	0.0%	2.0%	1.3%
合計	度数	30	50	80
	比率	100.0%	100.0%	100.0%

表 5-14 は「あなたの子どもが入学前の平日の世話は誰がしたか。子育てを支援しているのが誰であるか」を表している。表から明らかなのは、子育てには、自分の両親の援助を多く受けていることである。20 代の対象者のうち 33.3% (10 人) が実の両親の援助を、50.0% (15 人) が義理の両親の援助を受けており、30 代の人でも 42.0% (21 人) が実の両親に、16.0% (8 人) が義理の両親に援助してもらっている。一方、ここで注目している親戚には子育てを援助してもらっているかを見てみると、20 代では 16.7% (5 人)、30 代では 36.0% (18 人) が親戚の援助を受けている。都市家族において親族関係は、人間形成に重要な意味を持つ子育てにも義理の父母同様の程度に支援していることがわかる。これは、実の父母や義理の父母が地方に居住していてウランバートルにいない場合、子育てへの支援を頼れるのは都市に住む親族しかいないという状況があるためかと思われる。

以上、親族間の会う・集まる関係と育児支援の関係に着目して親族間関係を考察した。その結果、①民主主義世代はウランバートルに住む親族と直接に頻繁に会い、遠い所に住む親族たちとも何らかの方法で連絡を保っている、②育児支援における親族の関与は顕著で、義父母と同レベルである、という特徴が明らかとなった。

## 2. 近隣ネットワーク

ここではまず、民主主義世代が近所の家族とどの程度のつながりを持っているかを知るために、近隣関係の状況をアンケートで尋ねた結果を表 5-15 に示す。

表 5-15 年代別近隣関係 (20~39 歳) n=134

	年齢	20~29	30~-39	合計
関係がよい	人数	19	21	40
	比率	26.0%	34.4%	29.9%
関係が普通	人数	17	13	30
	比率	23.3%	21.3%	22.4%
人によって違う	人数	7	8	15
	比率	9.6%	13.1%	11.2%
あまりよくない	人数	1	0	1
	比率	1.4%	0.0%	0.7%
あまり知らない	人数	23	15	38
	比率	31.5%	24.6%	28.4%
まったく知らない	人数	6	4	10
	比率	8.2%	6.6%	7.5%
総計	人数	73	61	134
	比率	100.0%	100.0%	100.0%

結果を見ると、「関係はよい」と感じている人は30代の21人(34.4%)、20代の19人(26.0%)である。「関係が普通」と答えたのは20代の17人(23.3%)、30代の15人(24.6%)である。一方で、近隣の人を「あまり知らない」人は30代の15人(24.6%)、20代の23人(31.5%)に達している。

聞き取り調査では近隣関係について「近隣との関係はどうか」の質問に対して以下の回答を得た。

AD：私たちは貸家に住んでいます。ハジャーの中に2人のおばあさんがいます。またその人々の子どももいます。近隣の人とは往来があります。

Q：(問：今は集合住宅に住んでいらっしゃるんですが、近隣関係はどうですか。)(近隣の者を一筆者補)全然知りません。上の階の家とは知り合いました。(問：どうして知り合ったのですか。)(上の家の水が漏れたので、私は喧嘩をしに行きました。そのきっかけで知り合いました。今、集合住宅に住んでいる方は全部こんな風になってしまいました。)

T：(近隣の人とは一筆者補) 仲がとてもよくて、親戚のようです。私の住んでいる階には四つの家族が住んでいます。一つは新しく入った若い家族で、あまり知りません。一つは年寄りの家族です。もう一つの家族は両親と同じ世代の家族です。年上の人とは心開けて仲がいいです。よく出たり入ったりします。正月は挨拶に行きます。「最近あなたたちは見えないよ、どうしましたか」とか、「私たちは夕食を作ったので来て食べてね」とか。このように親戚みたいに(親しい一筆者補)です。

R：近隣とは仲がいいです。出入りしています。

U：私はおしゃべり屋だからこうなっているのでしょうか(近隣と仲良くなっていることを指している一筆者注)。昔、ゲル地区にいた時は同じ通りの人とよく話し合っていました、集合住宅では(話し合える人が一筆者補)限られています。お互い知らないようになっていきます。でも私は近隣の人と知り合い、話し合っています。集合住宅に住んでいるたくさんの人はお互いを知らないと言っています。ゲルに住んでいる人はお互いをよく知って、出たり入ったりして、仲がいいです。

AF：仲がとてもいいです。親しいです。まるで親戚のようです。

Z：(近隣の人との仲は一筆者補) まあまあいいです。

V：(近隣の人とは一筆者補) あまり往来がありません。

AA：(近隣の人のことは一筆者補) なんとなく知っています。

W：今は近隣とあまり連絡しません。

Y：(ハシャー内で一筆者補) 7つの家族が1つのようになっています。

AB：われわれのハシャーには三つのゲルがあります。普通の関係です。親戚の家ではありません。

ゲル地区に住むADが「往来がある」、Yが「7つの家族が1つのようになっています」と答えた。集合住宅に住むTが「親戚のよう」、Rが「出入りします」、Uが「よく話し合っています」、AFが「仲がとてもいい」と証言した。ゲル地区に住むZは「まあまあいい」、Vは「あまり往来がありません」、集合住宅に住むQは「全然知りません」、Wは「あまり連絡しません」などと証言している。

民主主義世代の証言を見ると、集合住宅に住む家族の中でも、ゲル地区に住む家族の中でも、近隣と親しい関係と普通な関係を持つ人々がいる。集合住宅に住む家族でも、ゲル地区の家族でも、近隣と往来の少ない人々がいる。集合住宅では近隣を全く知らないと答えた人々がいるのである。

#### 4. 本節のまとめ

民主主義世代における都市家族が「核家族」であるかどうか、「社交の衰退」は見られるかどうかを検証する。

はじめに、「核家族」であるかどうかを検証する。民主主義世代の者が社会主義世代の親

と同居する率は低く、別居している人が多いことが明らかである。その理由として「家族に問題が起こる」、「負担をかける」などを理由として親とは別居するのが望ましいとの答えが多かった。社会主義時代と比べると、親族でも家族成員に受け入れられなくなり、親戚を家族から排除している。民主主義時代のモンゴルの都市家族においては、社会主義時代よりも核家族への志向が強まったといえる。

次に「社交の衰退」について検証しよう。親子が会う頻度は双方の住居の間の距離に影響され、距離の近い親子の会う頻度が高い。しかし仕事が忙しいとの理由でお互い近くに住んでいても頻繁には会わないという回答者もいた。親世代とその既婚の子世代の間の援助関係は、本人世代と親世代・子ども世代との援助関係は極めて緊密であり、親世代から子世代への援助が子世代から親世代への援助より多い。援助する際は子世代から親世代へはお金の援助より家事・介護、または物を支援するほうが多い。子世代が親世代から受ける援助は経済的な援助が多いのである。このような、親から経済的支援を頻繁に受けている民主主義世代の人は、家事・育児の支援を頻繁に受ける人よりも多い。このことから民主主義世代は、結婚して親元から離れても親から経済と家事の支援を頻繁に受けていることがわかる。また、民主主義世代の者は、親戚とよく連絡し、お互い助け合って暮らしている人が多い。ゲル地区に設けた一つのハシャー内に複数の親戚と一緒に住んでいる家族がいることから、先行してゲル地区のハシャーの住人になった人は都市へ移入する親戚の受け皿となっていることが明らかなので、このような親族援助が都市の人間関係に重要な役割を果たし、生活するための頼りになっていると見なしてよいだろう。一方では民主主義時代に入ってから近隣関係が無くなりつつある現象が看取された。これは、それまでのゲル地区からアパートに入る、あるいは旧アパートから新築アパートに入るなどによって従来の近隣関係から離れてしまい、加えて上述したような核家族化志向の強まりも重なって、新たな近隣関係が作られない、あるいは作られにくい状況が生じたためである。これとは対照的に、親子・親戚間の盛んな援助関係までなくなっておらず、「社交の衰退」が起こっているのは近隣関係においてのみであることを忘れてはならない。つまり「社交の衰退」は民主主義時代家族の特徴ではないのである。

### 第三節 社会ネットワークの変容

#### 1. 親と同居する意識

すでに第一節と第二節で、社会主義世代には、子どもは結婚後には独立して親元を離れるべき、言い方を替えると、親は子どもが結婚したら独立させるべきという考え、つまり、結婚後には独立して核家族を作るべきという考えがあることを明らかにした。また、民主主義世代は社会主義世代よりも、核家族を作るという意識が強いことも明らかにした。モンゴル人の核家族を作る意識は、下記のようなモンゴル人の相続制度から由来したと考え

ている。

モンゴル人の相続制度について、モンゴルの家族学者ナムジラは、家族の世帯主である父親は全財産の持ち主であり、その生前のうちに、子どもたちが独立する際に財産の一部を与えて相続させ、子どもたちはそれをもって独立し、末子が最後まで親元に残ってかまどを守るが<sup>49</sup>、子どもたちが独立していないうちに親が亡くなった場合は、長男がその家族と父親の財産を相続する主な人になると述べている (Namjil2007 : 165)。独立とは親元から離れて夫婦で生活する事を指すが、モンゴルの相続行為は親元から独立する時、つまり現在の言葉で言うと、結婚するときを生じるものである。

父親が結婚する子どもに財産を与えて独立させ、最後に残った末子が「かまどを守る」、つまり父親の家督と財産を継承する「末子相続」に関して、斉穎賢は、モンゴルの家族制度は小家族制度<sup>50</sup>であり、「モンゴルの『末子相続』慣行は、明らかにモンゴルの『小家族が単位』であることと関連しており、上の兄弟たちが、次々と独立していった結果、末子が親の扶養をすることになる。……小家族は、遊牧的経済だけが要因ではなく、モンゴル人は、子どもを結婚させて『独立』させることを親の基本的な『義務の達成』とし、それを子どもの『1人前の成人』であると見る観念と、「親族間の軋轢」を避けるという観念と緊密に関連している」と述べている (斉 2011 : 116)。上に挙げたモンゴル人のいくつかの証言は、この斉の述べたところと合致している。すでに見たように、社会主義時代の経験者が持っていた「結婚したら親元から離れて独立するべき」という意識は、まさに斉の指摘した遊牧生活由来から生まれた考え方と同じである。また、親といえども子どもの家庭からは排除されるべきであるとの考えの根底にある、よその人が同じ家庭にいると起こるであろう問題を回避するためという理由は、斉の述べる「親族間の軋轢」を避けるという観念に他ならない。

このような、モンゴルの遊牧生活由来の核家族志向が社会主義世代でも民主主義世代でも絶えることなく継続していることは、モンゴルにおける核家族と伝統的な遊牧生活とを切り離して考えることができないことを意味している。

## 2. 親族関係

ここで、社会主義時代から民主主義時代にわたって続いているゲル地区の親族関係の事例を見てみよう。

筆者が観察調査で間借りした Y の家はゲル地区にある。Y は自分の弟と一緒に暮らしている。同じハシャーに住んでいるのは、みんな親戚で、亡くなったお母さんの兄弟である。日曜日に一緒に別の所に住んでいる親戚も来て、みんな Y の家で雑談していた。また、あ

---

<sup>49</sup> 「かまど」(モンゴル語 golomt) は家督の象徴であり、「かまどを守る」というのは家督を守る、言い換えれば家を継ぐという意味を表す。

<sup>50</sup> 小家族とは、家族員数の小さな夫婦家族、あるいは夫婦家族と親が同居する家族をいう (斉 2011 : 110)。



る日の夜、筆者が聞き取り調査を終えてその家に戻ってみると、その親戚が全員集まっていた。理由をたずねると、シャマンである Y の叔母に先祖のオンゴン（神霊）が降霊したので、親戚のみんなが叔母の住む Y のハシャー内の家に集まって、先祖のオンゴンの話を聞いていたこともあった。7月11日のナーダム<sup>51</sup>の時、ウランバートル近郊の空気がいい所で親戚のみんなでラーゲリ（郊外にある別荘）を借りて集まったこともあった。Y の親戚たちは、このように、日常的に、あるいは特別な行事の機会をとらえて頻りに集まり顔を合わせるだけでなく、生活の諸局面や就職のときにもお互いを助けあっている様子が見えていた。

グループ聞き取り調査の時に筆者の親戚に関する質問に対する回答からいくつかを紹介しよう。筆者は「ハシャーの中のみんなが親戚ですか」とたずねた。これに対し H は「親戚もいます」、G は「たとえば田舎から来て、あなたのハシャーに入っているんですかと聞かれたら、入って入ってと言ってお知らせします」と回答した。また皆が口を揃えて「親戚だからお金も何ももらわない」という。S は、自分の住むハシャーには「親戚がきます。親戚の子どもが入学する時には住む寮がないので、ここに住まわせてもらえるかと聞かれれば、いいよ、いいよといひます。彼らからお金などはもらいません」、X は「お金をもらうかどうかは親戚の関係にもよります」と回答した。

Y のハシャーの事情をみると、Y は 2001 年に進学するため父と弟とともにウランバートルに移入してきて、シャルハドというところにゲルとハシャーを建てて住んだのが初めてであった。その後、父が死に、2004 年から祖母が地方から上京、それに続いておじ、おばが故郷から続々と来て、2012 年には 6 世帯が一つのハシャーに住むようになった。

Y の事例から見えるのは以下のことである。先行して都市に入った Y が、地方から親戚たちが来る際に、親戚をハシャーに受け入れて近隣として住まわせている。父母が死去した後、社会主義世代である親戚が彼の父母のような役割を果たしている。社会主義世代と民主主義世代の親戚たちの間の世代を越えた往来とコミュニケーションが盛んである。

このようなハシャーという都市空間における都市家族の形成は、その根底にホト・アイルの編成を想定できる部分がある。繰り返しになるが、ホト・アイルとは遊牧民における血縁地縁共同体であり、共同で牧畜を営む組織である。牧畜生活の必要に応じ、血縁地縁が紐帯となって一つの所に遊牧キャンプを作る。その必要がなくなれば、そのホト・アイルは解散することもある。生活上の必要に応じて血縁地縁を頼りに地方から都市へと移動してハシャーという一つの所に集まり住んで生活を送る。そして別の所に新居を設けるなど同一ハシャー内で生活する必要がなくなればハシャーを出て行く。

このようにモンゴルの都市家族の暮らしの中では、遊牧生活に由来する親族間ネットワーク形成方法による集住が重要な役割を担う部分がある。これを可能にしているのは、社会主義世代か民主主義世代かを問わず地方から来る親戚を、ゲル地区のハシャーに住む親戚

---

<sup>51</sup> モンゴル人の民族祭典。ここで言うナーダムは、ウランバートルで毎年革命記念日である 7月11日から13日の3日間にわたって開催される国レベルの民族祭典のことである。

たちが自らのハジャーに入れるという相互支援行為なのである。

一方の集合住宅地区に住む家族の親族関係の事例として Q の証言を再び見てみよう。

Q：父母と一緒に生活していました。私たちはウランバートルにいたので、我が家にはずっと外の人（親と子どもからなる核家族以外の人—筆者注）が暮らしていました。いつも何人かが住んでいました。私は 7 人世帯だったけれど、7 人だけで住んだことは全然ありませんでした。なぜかというと、（外の人である—筆者補）親戚が大学に合格して田舎からウランバートルに来たら、（そのような外の人である親戚—筆者補）すべての人が私たちの家で暮らしていました。もっとも多い時には 20 人ぐらい一緒に生活していました。少ない場合でも 10 人以上でした。（その中の—筆者補）少なくとも一人は大学生でした。（ウランバートルにある—筆者補）私の母親の家には今でも他の人（家族以外—筆者注）が住んでいます。人が住まないと（母が—筆者補）寂しくなるので、住んだ方がいいと思います。父母には弟妹がたくさんいます。彼らは全員父母の家に住んでいました。彼らの子どもも父母の家に住んだことがあります。父母の家に三、四年間、（もしくは—筆者注）二年間住んだ人は四、五十人ぐらいいます。つまり、私の親戚の中で父母より若い人は全員父母の家に住んでいたということです。……今思うと、当時の親戚間の関係は今とはちょっと違います。私の時代以降は変わってきました。私の世代より若い人は家によその人（夫婦と子ども以外の人—筆者注）を入れたくないようになっていきます。つまり、社会主義時代の考え方が私の世代から失われたということです。（親戚たちが長期間住むと、私たちがその親戚たちを—筆者補）ちょっと嫌がります。私たちは家族成員だけで生活するのが好きです。（家族以外の人—筆者補）私の家にしばらく住むのは構いませんが、1 年間住むなら（私たちが—筆者補）嫌がります。このように変化しています。

Q の回答をみると、民主主義世代と社会主義世代との大きな差は、親族を受け入れるかどうかにある。社会主義時代には Q の親も集合住宅に住み、ウランバートルに来る親戚を自宅に同居させて助ける援助関係が存在していたことが語られている。親は現在でも親戚をと住んでいるという。したがって、集合住宅に住む社会主義世代には、ゲル地区のハジャーの場合と同じようなホト・アイルに由来する援助関係を機能させていたことがわかる。

しかし、Q は親と違って、家族以外の人に住み込むのを嫌がるようになった。すなわち、Q 自身が「社会主義時代の考え方が私の世代から失われたということです」と語ったように、民主主義世代の中には、ウランバートルに来る親戚を自宅に同居させて助ける援助関係を失ってしまった者がいるのである。

このように、モンゴルの都市家族にも引き継がれてきた、遊牧生活に由来する親族間の支援の意識は、集合住宅に暮らす民主主義世代家族において弱まる趨勢にあるといえる。

### 3. 近隣ネットワークの変容の原因

モンゴルにおける家族をめぐるネットワークは、前近代のホト・アイルという生業を共にする血縁地縁共同体から、社会主義時代には集合住宅とゲルに住む住民による近隣共同体に変容していった。

近隣関係について、第一節では、社会主義世代が社会主義時代のウランバートル市における近隣関係がよかったと評価していることを示した。アンケート調査からは、社会主義世代は近隣とよく往来するという人が全体回答者の半数以上に達している。

一方の民主主義世代では、集合住宅に住む家族の中にも、ゲル地区に住む家族の中にも、近隣と親しい関係を持てている人々と単なる普通の間接関係を持つに過ぎない人々がいる。集合住宅の家族でもゲル地区の家族でも近隣との往来が少ない人がおり、集合住宅では近隣を全く知らないと答えた人がいる。

ここでは、アンケート調査で近隣関係の状況をたずねた問いに対する答えの中の「あまり知らない」と答えた人を取り上げて表 5-8 で比較してみよう。近隣をよく知らないと答えた社会主義世代は、40 代の 17.0% (8 人)、50 代の 3.6% (1 人)、60 代の 20.0% (2 人) である。民主主義世代で、近隣をよく知らないと答えたのは、30 代は 24.6% (15 人) で、20 代は 31.5% (23 人) である。民主主義世代の総計 134 人の内 28.4% (38 人)、社会主義世代総計 85 人の内の 12.9% (11 人) である。このことから、民主主義世代において近隣関係の希薄化が進んでいることが分かる。

表 5-16 近隣との関係で「よく知らない」と答えた人数の比較 (世代、年齢層別)

n = 219

	人数	比率	人数	比率
<b>民主主義世代</b>	<b>38</b>	<b>28.4%</b>	<b>134</b>	<b>100.0%</b>
20~29	23	31.5%	73	100.0%
30~39	15	24.6%	61	100.0%
<b>社会主義世代</b>	<b>11</b>	<b>12.9%</b>	<b>85</b>	<b>100.0%</b>
40~49	8	17.0%	47	100.0%
50~59	1	3.6%	28	100.0%
60~69	2	20.0%	10	100.0%
<b>総計</b>	<b>50</b>	<b>22.8%</b>	<b>219</b>	<b>100.0%</b>

このような結果が出た原因として以下の二点が考えられる。

①遊牧生活との深いかかわり。モンゴルの牧民は、冬の雪害や夏の干ばつなど自然災害が起きる時、誰かの家が家畜を屠殺する時、乳製品を加工する時、客をもてなすときなど、ある程度の人数を要する作業にあたる場合、社会主義時代であればソーリ、前近代のホト・

アイル<sup>52</sup>の構成員がお互いに助け合って生活を成り立たせてきた。また、モンゴルの牧民は二種類以上の家畜を飼うことが多いので、夫婦二人だけでは管理できない。このため、ホト・アイルの仲間とお互いを信頼しあって共同で管理した。このような「助け合う人間関係」を作ることは、草原の牧畜生活では不可欠であった。調査の結果からみると、地方から都市へ移動した人々はこの信頼関係を都市生活まで持ち込んで、親戚、集合住宅の近隣、同じハシャーの家族と生活上の互助関係を保っていた。

②経済的な基盤。社会主義時代のウランバートル市民の互信互助関係が形成された原因について、BB は社会主義時代を回顧して次のように語った。

みんなが同じぐらい働いて利益を平等に分配する方針を取っていました。だから貧乏な人もいなければ、お金持ちもいませんでした。町で乞食をする人もいませんでした。みんなに食糧と仕事がありました。収入分配にも差がないので、貧富の差は大きくはありませんでした。だから人々の間は信頼しやすかったのです。

つまり、互助関係と相互信頼関係の形成には経済的な基盤の影響が大きかったということである。モンゴル人にとってももとの経済的な基盤は家畜である。社会主義公有制の下ではすべてのものが集団に属していた。都市ではすべての国民が労働者であった。こうして社会は安定し、お互い嫉妬することもなく、信頼関係を築くことができたというのである。

民主主義時代に入り、市場経済政策によって人々の所得に格差ができた。Q は近隣の人間のことを全く知らなかった。知っているのは水漏れが原因であった上の家族だけであった。Q に近隣と知り合っていない理由を聞くと、以下のように述べた。

今は貧富の差が出てきました。市場経済に入った後、お金持ちが尊大な態度で、他人を警戒して疑うようになりました。あるいは、お互いに『この人は私と同じ水準にはない（下の水準の者と見ている一筆者注）』と思います。あるいは私は盗みに遭うと思うなど。そのような時、人間関係は次第に遠ざかっていました。これらが（近隣の人のことを全く知らない一筆者補）原因になったかな、と思います。昔（社会主義時代一筆者補）、家の扉は一重でしたが、今は二重または鉄扉へと変わりました。これは市場経済化に関わっています。生活に困っている人が増えて、泥棒などの悪いことをする人が多くなってきました。それで住宅に泥棒が多くでるようになったので、できるだけ知らない人に扉を開かないようになりました。近隣の人が扉を叩くと信じられなくて、『うそつかないでください』と言ってドアをあけてあげませんでした。今はこんな風になってきました。大変ですよ。

---

<sup>52</sup> 社会主義崩壊後、旧来のホト・アイルが復活している。

と語った。

つまり、相互信頼関係の基盤であった平等さが市場経済化によって生じた経済格差によって崩れ、人が人を信用しなくなった、と Q は語っているのである。民主主義時代に入っても集合住宅は空間的には外部から分離した状態を保っていることに変わりはない。しかし経済格差が拡大したことが原因で、信頼関係が弱まり相互不信が増し、来訪した近隣の者に対して部屋の扉を開けてあげないほどに内部に閉じこもり、外部からの分離が強まり、近隣ネットワークが弱まった。ゲル地区には比較的貧しい人が多く住んでいるため経済格差が小さいのである。ことに、ハシヤーの中には生活の場の一部になっており、ハシヤー内の人々の関係はお互いをハシヤーに受け入れられる関係にあるので、少なくともハシヤーの内部では相互信頼関係がある。ハシヤー内に限っては近隣ネットワークが保たれているのである。

### 3. 本節のまとめ

まず、親子は同居せず核家族で住むという意識がありながら親子に援助関係がある原因を先行研究により考察した。その原因はモンゴル人に古くからあった相続制度にある。モンゴル人は末子相続制で、相続関係は子どもが結婚・独立する際に発生する。親は末子以外の結婚した子どもを独立させるという義務を持ち、子どもが独立させたら親としての義務を達成することになる。子どももまた、親元から独立するという意識を持ち、親から離れて住むのは、家族成員以外の者との同居がもたらすであろう軋轢を避けると認識している。この遊牧生活由来の意識が社会主義世代と民主主義世代に影響しているため、結婚したら親とは一緒に住まない核家族の志向が存在するといえる。

次に、親族ネットワークについて考察した。遊牧生活に由来する親族ネットワークはゲル地区の親族間の互助関係の形成に重要な意味を持つ。遊牧生活に由来する親族ネットワークは、先行して都市に入った移入者が後から来る人の受け皿になり、その人々のウランバートルで形成する親戚間の互助支援関係を盛んにする。集合住宅に住む社会主義世代と民主主義世代は親族援助関係で大きな違いがあり、社会主義世代はゲル地区住民と同じような援助関係を持つが、民主主義世代には親族間の支援意識が弱まっていく趨勢にある。

最後に、近隣ネットワークの変容について分析した。第一節と第二節での考察から、近隣ネットワークが弱まりつつあるという結果を導き出した。近隣ネットワークは、前近代社会では生業を共にする相互互助・相互信頼のホト・アイル同士の関係であった。調査より得た知見に基づけば、社会主義時代にはこのような互助関係はウランバートルでも保たれていた。社会主義時代はみなが同じぐらい働き、利益を平等に分配していた。しかし、民主主義時代になって市場経済に移行した事により、収入は平等分配ではなく競争によって獲得するようになり、家族間の経済格差が大きくなった。このような経済的基盤の変化によってそれまでの互助関係が崩れ、近隣ネットワークを弱めたのである。

#### 第四節 本章のまとめ

本章ではまず、「非親族の排除」を議論した。社会主義時代以前、富裕層に召使いがいた。召使いは自分の財産を持たず、生業の面では富裕層に依存していたが、富裕層と同じゲル内には住まず、自分のゲルに住んでいた。これを近代家族論の知見で分析すると、召使いはその主人である富裕者と同じ家族の者ではないことになり、富裕層の家族には召使いという非親族は含まれていなかったことになる。つまり、社会主義時代以前のモンゴルの家族は非親族を排除していたのである。社会主義時代に入っても、本章第一節で、最多で 20 人ぐらい、少ない場合でも 10 人以上が暮らしていた家族があったことを見た。この大集団は非親族を受け入れたものではなく、全員が親族であった。つまり、「非親族の排除」は社会主義以前からモンゴルの家族の特徴であり、社会主義時代に入ってもモンゴルの家族の特徴の一つであるといえる。

続いて、「核家族」であるか／あったかどうかを検討した。社会主義世代には、結婚したら親元を離れて独立すべきであるとの考えを持つ者が多かった。先行研究によれば、モンゴルの家族制度は小家族制度であり、年長の子どもから結婚時に親から財産を分与されて親元を離れて独立し、最後に残る末子が親の家督と財産を継ぐという末子相続制であったので、末子以外は親世帯から離れて独立して住むことになっていたのである。社会主義時代を経験した人々は、依然としてこのような遊牧生活由来の独立意識を持っていたので、家族とは親を尊敬し世話する機能があるものと考える人が少なく、親や子どもと同居するという意識も薄い。しかし、親族間は互いに助け合うという習慣があるため、都市に住んでいる者が地方から移入してきた親族を世帯に加えていた。このような厚い互助関係の影響で家族成員以外の親族を受け入れることもあったが、上述した独立意識からは旺盛な核家族志向が生み出された都市住民に浸透した。民主主義時代に入ると、親とは別居し、家族以外の親族を世帯から排除するようになった。このような民主主義時代のモンゴルの都市家族においては、社会主義時代よりも核家族の志向が強まったといえる。

最後に「社交の衰退」について考察した。社会主義世代でも民主主義世代でも、親子間の会う頻度は地理的位置に左右されるので、親子がともにウランバートル市に住む場合は会う頻度が高くなる。社会主義世代の者とその親との間では、経済的な援助より家事・介護・育児の援助が頻繁であり、社会主義世代の者と子どもとの間では、社会主義世代の親が子どもに経済的な支援をする場合が多く、子ども世代は社会主義世代の親へ家事や介護の支援を頻繁にする。社会主義世代の親と民主主義世代の子どもとの援助関係は極めて緊密である。親世代から子世代への援助は子世代から親世代への援助より多く、子世代から親世代への援助の多くは家事・介護支援または物を与える場合が多く、子世代が親世代より受ける援助の多くは経済的なものである。民主主義世代の子どもは結婚して親元から離れても親から経済と家事の支援、特に経済的支援を受ける者が多い。親族の間には厚い互

助関係があるため、とりわけ本人と同じ世代の親戚との連絡は盛んである。ホト・アイルという血縁地縁牧畜共同体を基礎とする近隣ネットワークは、社会主義時代には良好であったが、民主主義時代には社会主義時代の平等主義が崩れて、貧富の差が激しくなったため、近隣ネットワークが弱まりつつある。総じて見ると、都市家族では近隣との「社交が衰退」しているが、親子間・親戚間の互助関係は保たれている。つまり、社会主義に比べると社交は衰退しているが、それは近隣ネットワークの崩壊がもたらしたものである。「社交の衰退」は社会主義時代には現れなかった。民主主義時代には「近隣」との社交は衰退したが親族との「社交」は衰退していないので、「社交の衰退」が民主主義時代の家族の特徴と言えないのである。

## 第六章 家族の集団性は強いのか

本章では近代家族の特徴の一つである「家族の集団性の強化」を考察する。「家族の集団性の強化」について、落合によれば、「家族が社交 (sociabilité) のネットワークを切り捨てて公共領域から引きこもることは、家族の側から見れば、その集団性の強化を意味する」という (落合 2000 : 19)。

第一章では次のような結論に至った。社会主義時代の都市家族では家庭と職場の分離が始まった。社会主義工業化によって近代化建設が始まるとともに、生産が集団化されて、男女ともに社会の労働者の一員となった。都市化につれて、都市の家族には集合住宅、ハシヤーによって囲まれたゲル、周囲の山腹に散在しているゲルという三つの住居形態が現れ、集合住宅における世帯は空間的に外部から引きこもったが、ゲル地区は市街地における家族はハシヤーで外部から区切られ、市街地の周辺に散在したゲルは外部との区切りがなかった。しかし、国家と政党の管理は家族の内部まで浸透し、家内領域の一部の機能が社会福祉により公共領域に属すものとなっていた。よって公共領域と家内領域の分離は社会主義時代にはあられなかった、という結論に至った。また第五章では、社会主義時代の家族が非親族を排除する集団であり、親子間・親族間には助け合う関係があつて、近隣間にも良好な信頼関係が保持されていたと論じた。

この章では、以上の環境のもと、家族内部の集団性が強化されているかどうかを検証する。家族の集団性の強化を検証するため、家族についての考え方、家族行動と夫婦間のコミュニケーションを分析する。家族行動は家族成員間の質的な行動であり、夫婦間のコミュニケーションは情緒的なサポートである。

### 第一節 社会主義時代の家族の集団性

#### 1. 家族に対する考え

家族の集団性、つまり家族内部の絆に注目する前に、まずは社会主義世代の人々が家族をどの程度大切に考えているか、家族と個人、どちらを優先的に考えるかの意識を見てみる。

家族の大切さを、「豊かでも貧しいでも自分の家族が一番大切な宝物である」に対する賛否を調べた。図 6-1 に示すように、家族を人生の中の一番の宝物であるについて男性は「強く賛成する」が 50.0%、「賛成する」が 50.0%である。女性では「強く賛成する」が 54.5%、「賛成する」40.0%である。社会主義世代の回答者が、家族を人生の一番の宝物だと考えている人が多いことが伺える。



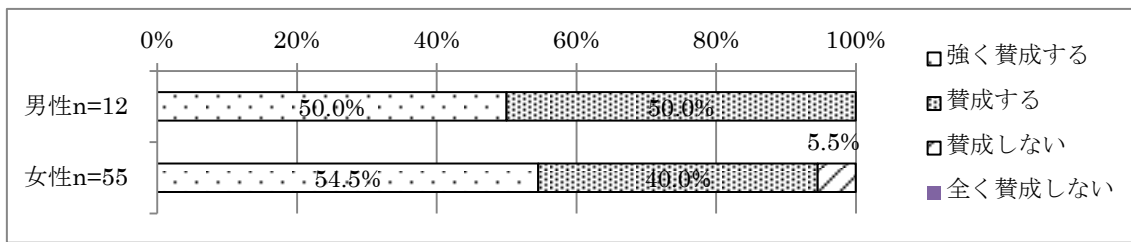


図 6-1「豊かにせよ貧しいにせよ家族は私の人生の中の一番の宝物である」に対する賛否 (40歳以上) n = 67

次の図 6-2 は、「結婚したら家族のために生活の半分を犠牲にすべきである」という考え  
方への賛否を示している。これに強く賛成する男性回答者が 41.7%、賛成する男性が 41.7%、  
両方を合わせた賛成派が 82.4%を占める。女性回答者の中で強く賛成する人は 32.7%、賛  
成する人は 61.8%、両方を合わせた賛成派が 94.5%を占める。賛成派が男性の 8 割、女性  
の 9 割を占めている。

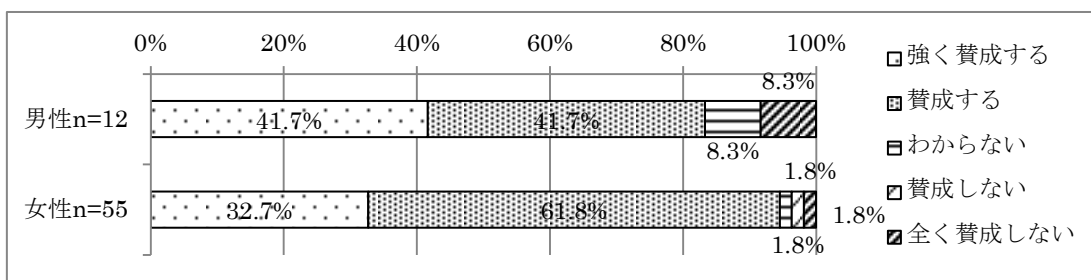


図 6-2「結婚したら家族のために生活の半分を犠牲するのが当たり前のことである」に対する賛否 (40歳以上) n = 67

次は、家族と個人の生きがいに対する考え方を通じて、家族と個人の利益との関係を明  
らかにしよう。図 6-3 をみると、「結婚しても自分だけの人生の目標があるべきだ」という  
考え方に対し、男性回答者の中の 27.3%が強く賛成し、「賛成する」と答えた人は 72.7%、  
である。女性では「強く賛成する」回答者が 32.7%、「賛成する」回答者が 63.6%である。

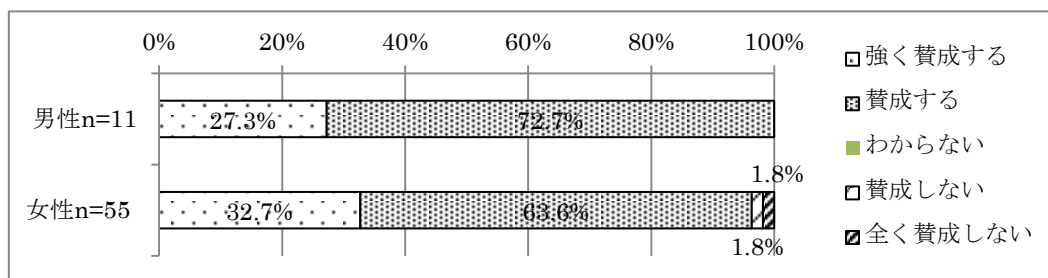


図 6-3「結婚しても自分だけの人生の目標があるべきだ」に対する賛否 (40歳以上)

n = 66

次は、社会主義世代の対象者に家族の持つ意味についての考えを複数回答から選んでもらった結果である。その結果を表 6-1 で示す。全調査対象者の家族に対する考えを見ると、総計では、家族とは「家族成員の団欒の場」と思う人が一番多く、回答者 85 人中の 55 人（64.7%）を占めている。次いで「両親と子どもと一緒に生活の知恵を学ぶ場」51.8%（44 人）、「心の休息安らぎの場」47.1%（40 人）と認識していることがわかる。

表 6-1 家族の持つ意味についての考え（複数回答、40 歳以上） n=85

	年齢	40～49	50～60	60 以 上	総計
家族成員の団欒の場	人数	30	19	6	55
	比率	63.8%	73.1%	50.0%	64.7%
心の休息安らぎの場	人数	19	15	6	40
	比率	40.4%	57.7%	50.0%	47.1%
家族成員の愛情を深める場	人数	15	8	3	26
	比率	31.9%	30.8%	25.0%	30.6%
夫婦の愛情をもとに形成した場	人数	15	11	5	31
	比率	31.9%	42.3%	41.7%	36.5%
両親と子どもと一緒に生活の知恵を学ぶ場	人数	21	15	8	44
	比率	44.7%	57.7%	66.7%	51.8%
子どもを生育、教育する場	人数	13	13	5	31
	比率	27.7%	50.0%	41.7%	36.5%
家系を継続、先輩から学ぶ場	人数	18	16	8	42
	比率	38.3%	61.5%	66.7%	49.4%
先輩を尊敬、世話をする場	人数	7	11	5	23
	比率	14.9%	42.3%	41.7%	27.1%
その他	人数	1	1	0	2
	比率	2.1%	3.8%	0.0%	2.4%
わからない	人数	0	1	0	1
	比率	0.0%	3.8%	0.0%	1.2%
総計	人数	47	26	12	85
	比率	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

聞き取り調査では「あなたは家族を何であると思いますか」と聞き、以下の回答を得た。

- O：家族は非常に貴重なものだと思います。私は、家族とは青春以降の人生だと思います。自分で作った人生です。小さい時は父母と一緒に暮らして、家族というのはこんないいものだとよく知りませんでした。(今は一筆者補)妻がいるので、貴重なものだと思っています。
- N：家族はわれわれの幸せです。家族があつて私たちが継続されます。私たちは幸せの基を作ります。私たちはどんな人間を育てるのか、その人間は家系を継いでいきます。私たちはこの家族をどうやって建てたのか、私たちの教育に従って、子どもたちは私たちのような人になっていきます。だから私たちは模範になって、どんな人間になる(べき一筆者補)かを見せます。子どもたちは私たちの思った通り幸せに暮らしたら、私たちは子どもを産んだ役割を達成します。子どもたちが幸せになったら、私たちに恩返しして、私たちも子どもたちから恩をもらいます。
- E：家族は人生の起点ですが、終点はありません。家族が良ければ人口も増えてきます。家族成員皆の最も何と云えばいいか。親しいと云えば不十分です。これより美しい言葉があるはずです。人生の意味と言いたいです。
- P：家族があるからこそ、子ども、幸せ、すべてができます。人生の基です。
- A：家族は幸せだと思います。
- J：家族は私の人生です。
- L：家族がいなければ国家も建てられません。家族円満は私にとっていいことです。円満な家族がないのは私にとってよくないことです。
- D：人々の幸せだと思います。

以上の答えをみると、回答者は家族について、「家族」が「貴重なもの」(O)、「人生」(O、J)、「人生の起点」と「人生の意味」(E)、「人生の基」(P)、「幸せ」(A、D)だと評価している。これら以外には、Nは家系のつながりの基、EとLは「国家」と関連付けて考えている。アンケート調査と聞き取り調査の結果から、多くの回答者が家族を人生と関連つけて、人生の中の掛け替えのない貴重なものだとみていると言える。

以上、家族を優先する考え方「豊かでも貧しいでも自分の家族が一番大切な宝物である」と「一旦結婚したら家族のために自分の生活の半分を犠牲にするのが当然なことである」、家族の中の個人を優先する「結婚しても自分だけの人生の目標を持つべきだ」について調べた結果を合わせてみると、どの考え方に対しても賛成派が9割ぐらゐを占めている。ほとんどの回答者は、家族が個人の人生の中で一番貴重なもので、結婚したら家族のために自分の生活の半分を犠牲するのも当たり前なことだと認識している。しかし、結婚しても個人の人生の目標があるべき、つまり結婚しても社会で一人の個人として存在して、個人の人生の目標があるべきだと思う人が多いといえる。

## 2. 家族行動

ここでは、家族の団欒の場という考え方の具体的な活動である一家で夕食を食べる頻度と余暇活動と一緒に行動する頻度について調べる。夕食を家族の者と一緒に食べることは世帯成員と過ごして、交流を深める機会である。余暇活動と一緒に行動するのが家族の一つの重要な機能であり、家族の一体感を示す指標でもある。

表 6-2 は家族でどのくらいの頻度で家族の者と一緒に夕食を食べているかを示している。いずれの世代でも、家族でほぼ毎日夕食を食べる人が多いが、年齢別にみると、60代の人々はほぼ毎日一緒に食べている人が85.7%（6人）に達しているが、40代と50代の回答者の中ではほぼ毎日一緒に夕食を食べているのは64.3%（27人）と63.0%（17人）である。一週間に3日間以上一緒に夕食を食べる家族は40代と50代の回答者の9割以上を占めている。

表 6-2 家族成員と一緒に夕食を食べる頻度（40歳以上）

n = 76

年齢	週に 6~7 回		週に 3~5 回		週に 1~2 回		月に 1~3 回		その他		総計	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
40~49	27	64.3%	13	31.0%	1	2.4%	1	2.4%	0	0.0%	42	100.0%
50~59	17	63.0%	8	29.6%	2	7.4%	0	0.0%	0	0.0%	27	100.0%
60 以上	6	85.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	14.3%	7	100.0%
総計	50	65.8%	21	27.6%	3	3.9%	1	1.3%	1	1.3%	76	100.0%

聞き取り調査においては、「ご家族で常に夕食と一緒に食べますか」と聞いた。回答者の答えは、

A：常に家族と一緒に食べます。

B：常に家族と一緒に食べます。

C：常に一緒に食べません。ときどき遅く帰るので、たまに一緒に食べます。さまざまです。

D：一緒に食べる人が多いです。

E：若い時は一緒に食べていました。今は健康面を考えて、夕食が体によくないというわけで食べなくなりました。健康を考えたら昼に食べたほうがいいです。（問：お昼は一緒に食べますか。）お昼は一緒に食べたいけれど、誰がはいたりいなくなったりすることがあります。人の作った料理を探して食べることもあります。（昼食が一緒に食べられないので、一人は作って先に食べて、ご飯を残して、後で来る人は自分で作らないで、残っているご飯を食べるとのこと一筆者注）。週末は一緒に食べられます。

F：常に（一緒に食べます一筆者注）。

J：常に一緒に食べます。

L：そうです。

M：一緒に食べます。

O：たまに（一緒に食べます―筆者補）。

N：一緒に食べたいです。でも私が商売をしているので、夜十時に帰宅します。子どもは先に食べてしまいます。一緒に食べる時もあります。

P：常に家族で食べます。

40代以上の回答者12人のうち、夕食を家族成員と毎日一緒に食べると答えた人が9人いる。C、O、Nが家族と一緒に食べない理由は、商売をしているため帰宅時間が遅くなるからである。Eは健康面を考えて夕食を食べず、昼食は在宅時間によって一緒に食べられないが、週末には一緒に食べると答えた。以上からみると、ほとんどの回答者はほぼ毎日一緒に夕食を食べているが、在宅時間や健康によい食生活を考えて一部の人は一緒に夕食を食べない時もある。

表6-3は家族で一緒にどのくらいの頻度でレジャー活動を行っているかを尋ねた結果を示している。モンゴル国でレジャー活動といえば映画、喜劇ショー、コンサートを指す場合が多いが、その頻度を見てみると全体的には「年に1～3回」行う人が一番多く、全体の39.0%（30人）である。年齢別にみると、40代の中では年に1～3回レジャー活動を行う人が一番多く44.2%（19人）であり、50代では三カ月に1～2回行うとされる人が一番多く36.0%（9人）、月に1～2回行う回答者が32.0%（8人）である。60代は年に1～3回行う人が多いのである。

表 6-3 家族で一緒にレジャー活動を行う頻度（40歳以上）

n = 77

年齢	週 1～2 回		月 1～2 回		三か月 1～2 回		年 1～3 回		年に一回もない		その他		合計	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率
40～49	3	7.0%	11	25.6%	7	16.3%	19	44.2%	3	7.0%	0	0.0%	43	100.0%
50～59	0	0.0%	8	32.0%	9	36.0%	7	28.0%	1	4.0%	0	0.0%	25	100.0%
60～69	0	0.0%	0	0.0%	4	44.4%	4	44.4%	0	0.0%	1	11.1%	9	100.0%
総計	3	3.9%	19	24.7%	20	26.0%	30	39.0%	4	5.2%	1	1.3%	77	100.0%

レジャー活動について聞き取り調査で聞いた結果は以下の通りである。ウランバートル市内ではレジャー活動の種類が少なく、映画、喜劇ショー、コンサートを指す場合が多いので、「見る」と答えた人が多くなった。

A：映画などは最近になって少なくなりました。見るのが好きです。

B：映画などはたまに見ます。

C：稀です。ここ（職場―筆者注）からの帰りが遅くなりますので。

D：たまに見ます。

E：たまに見ます。年に一回ぐらいです。よく見ると言ってもいいぐらいです。我が家

はたぶんモンゴルで唯一、家庭映画館がある家です。3D 映画を皆一緒に見ます。家庭で見られるものなら映画館に行く必要がなくなります。たまに友達から誘われます。チケットがあるので見る人を探していますから見ませんかと聞く人がいるし、また地方公演に寄付を金いただけませんか、その公演を見ませんかと誘われることもあります。自分で積極的に見たいものは稀です。

F：映画などはたまに、休みの日に見ます。

I：(レジャー活動を一筆者補) します。

J：見ますよ。祝日の時に見ます。

M：たまに見ます。

N：見ますよ。バレエや映画などを見ます。

O：たまに見ます。今週の月曜日に映画を見ました。喜劇ショーを見るのが好きです。

P：映画を見ます。

12 人の回答者の回答をみると「たまに」と答えたのが B、D、E、F、M、O の 6 人である。C は「稀」、A は「少ない」、そのほか I、J、N、P がレジャー活動をする答えた。行く頻度について具体的な表現がなかったが、「祝日」、「年に一回ぐらい」、「休日」との答えがあった。

筆者の現地調査時の体験によれば、夏になるとウランバートルには人が少なくなり、7 月のナーダムから 8 月末までたくさんの市民がウランバートル市を離れて草原に行く。聞き取り調査では、家族と一緒に旅行に行くかどうかとたずねて、一家のまとまりの強さを見ることにした。家族で旅行することも家族の集団としての活動の尺度となる。聞き取り調査では「家族でよく旅行に行きますか」と尋ねた。

A：夏は旅行します。今年も旅行しました。

B：旅行は夏になると子どもたちと一緒に (ウランバートルから一筆者補) 近いところに行きます。

C：旅行します。最近も行ってきました。夏になると行きます。夏になると必ず一回行きます。

D：昔、子どもが小さい時にはあまり旅行しませんでした。今は旅行しますよ。

E：旅行します。草原に行く機会があれば行きます。

F：旅行は年に 1~2 回です。

I：旅行します。今年はチョインジンボルダグ (ウランバートルに近い観光地一筆者注) に行きました。

J：そんなによく旅行しません。行く時は行きます。誰かと一緒に行きます。暇があったら行きます。

M：よく行きます。

N：行きますよ。私たちは去年韓国に行って旅行しました。子どもたちを連れていきました。韓国に6年間暮らしました。韓国にいる時にはレジャー活動で、よく旅行をしました。モンゴルにはナーダムがあるでしょう。ナーダムの三日間は（完全に仕事を休んで一筆者補）朝に家を出て夜に帰宅します。私たちの主な目標は働く時は熱心に働いて、休む時に仕事を忘れ、時間を全部家族にあげます。あらゆる祝日の朝から夜までを全部家族にあげます。

O：毎年夏になるとアルハンガイの温泉に行きます。あそこの温泉は妻の皮膚病に合うからです。

P：旅行が好きです。われわれは旅行が好きな家族です。

以上の回答者11人の中ではJがあまり行かないと答えたのみで、残りの10人は「行く」と答えた。よく行くという答えを見ると、「夏になると」行く、「機会があれば」行く、「年に1~2回」行くなどと答えている。たまに行くJは「暇があったら」行くと答えた。

これらの答えから見ると、家族で旅行に行くのは毎年の行事になりつつあるといえる。また、モンゴル滞在中に、知人の家族でウランバートルから100km離れた草原に行ったが、その時には直系親族と傍系親族の三世代が同道し二泊三日で行ってきた。

### 3. 夫婦の情緒的サポート

家族の集団性の強さを決めるもう一つの尺度は夫婦間の精神的な支えである。「安らぎの場」として、家族は家庭内外の悩みを解決するが、配偶者は情緒的サポーター、相談する相手として期待される。

夫婦間の情緒的サポートについては、「あなたの配偶者は、あなたの悩みを聞きますか」、「あなたの配偶者はあなたに悩みを打ち明けてくれますか」という2つの質問を作成し、よくある、たまにある、あまりない、全くないから選んでもらった。集計は男性と女性に分けて整理した。

表 6-4 年代、悩みを聞いてくれる程度 (40～60 代) n=54

年齢 (性別)	よく聞きます		聞きます		あまり聞か ない		まったく聞か ない		総計	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率
40～49	15	40.5%	22	59.5%	0	0.0%	0	0.0%	37	100.0%
男性	3	60.0%	2	40.0%	0	0.0%	0	0.0%	5	100.0%
女性	12	37.5%	20	62.5%	0	0.0%	0	0.0%	32	100.0%
50～59	7	33.3%	13	61.9%	1	4.8%	0	0.0%	21	100.0%
男性	4	57.1%	3	42.9%	0	0.0%	0	0.0%	7	100.0%
女性	3	21.4%	10	71.4%	1	7.1%	0	0.0%	14	100.0%
60～69	4	40.0%	5	50.0%	0	0.0%	1	10.0%	10	100.0%
男性	1	50.0%	1	50.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	100.0%
女性	3	37.5%	4	50.0%	0	0.0%	1	12.5%	8	100.0%
総計	26	38.2%	40	58.8%	1	1.5%	1	1.5%	68	100.0%
男性	8	57.1%	6	42.9%	0	0.0%	0	0	14	100.0%
女性	18	33.3%	34	63.0%	1	1.9%	1	1.9%	54	100.0%

表 6-4 は、配偶者が悩みを聞いてくれる程度を示したものである。悩みを全く聞いてくれないとはっきり感じている人は 60 代の女性 1 人、あまり聞いてくれないという回答者は 50 代の女性 1 人である。これら以外はほとんどの配偶者が悩みを聞いてくれているようである。程度の違いを男女別の総計でみると、男性の 57.1% (8 人) が「よく聞いてくれる」、42.9% (6 人) がたまにあると答え、女性の 33.3% (18 人) が「よく聞いてくれる」、63.0% (34 人) が「たまに聞いてくれる」と答えた。「よく聞いてくれる」の総計の数値を男女で比較すると、夫のほうが高く、妻のほうは低い。これに対して「たまに聞いてくれる」の数値は、妻の数値のほうが夫よりも高い。これは、夫は自分の妻がよく悩みを聞いてくれると思うのに対して、妻は夫が自分の悩みをそれほどには聞いてくれていないと示している。

次は、相手に信頼されているかどうかを調べるため、配偶者は自分に悩みを打ち明けるかどうかを尋ねた。表 6-8 は「あなたの配偶者はあなたに悩みを打ち明けてくれますか」という質問に対する答えの集計である。全体的にみると、上の表 6-4 の「悩みをよく聞いてくれる」総計が 38.2% であるのに対し、下の表 6-5 の「よく打ち明ける」総計は 77.9% であるので、回答者の多くが、悩みを打ち明けているとの実感を持っていることが分かる。全く打ち明けないと答えたのは 60 代の女性 1 人だけである。「よく打ち明ける」人の性別による違いを見ると、男性は 85.7% (12 人)、女性は 75.9% (41 人) である。40 代と 50 代の女性は男性より打ち明けていると答えた人が少ない。年齢による違いに注目すると、若い年代ほどよく打ち明けているようである。上の表 6-4、表 6-5 を比べてみるとわかるのは、配



偶者が自分に「よく打ち明ける」と思っている人は総計が 77.9%で、「よく聞いてくれる」の総計 38.2%よりも多い。夫婦とも、全体的には、打ち明けはするが聞いてはもらえていないという思いを持っているといえよう。

表 6-5 年代、性別にみた配偶者が悩みを打ち明ける程度についての答え (40~60代)

n = 68

年齢 (性別)	よく打ち明ける		たまに打ち明ける		全く打ち明けない		合計	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率
40~49	30	81.1%	7	18.9%	0	0.0%	37	100.0%
男性	5	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	5	100.0%
女性	25	78.1%	7	21.9%	0	0.0%	32	100.0%
50~59	16	76.2%	5	23.8%	0	0.0%	21	100.0%
男性	6	85.7%	1	14.3%	0	0.0%	7	100.0%
女性	10	71.4%	4	28.6%	0	0.0%	14	100.0%
60~69	7	70.0%	2	20.0%	1	10.0%	10	100.0%
男性	1	50.0%	1	50.0%	0	0.0%	2	100.0%
女性	6	75.0%	1	12.5%	1	12.5%	8	100.0%
総計	53	77.9%	14	20.6%	1	1.5%	68	100.0%
男性	12	85.7%	2	14.3%	0	0.0%	14	100.0%
女性	41	75.9%	12	22.2%	1	1.9%	54	100.0%

聞き取り調査では夫妻間でよく話し合うかどうかを尋ねた。

- A : (問 : すべての問題をめぐってお互いに話し合いますか。) 話し合います。
- B : (問 : 夫はあなたの悩みなどを聞きますか。) よく聞きますよ。人生のうれしいこと  
悲しいことを全部分担します。(問、あなたもよく言いますか。) よく言いますよ。
- D : (問 : 夫はあなたのすべてを聞きますか。) 聞きますよ。私も聞きます。(問、あなたも言いますか。) 言いますよ。隠すことはありません。
- E : (問 : 妻はよくあなたのすべてを聞きますか。) 聞きますよ。特に私をよく批判する  
人は妻だけです。妻以外に私を批判する人がほぼいません。(問、あなたもよく言  
いますか。) よく言います。
- I : (問 : よく話し合いますか。) 話し合います。話し合いによってストレスを解消でき  
ます。
- J : (問 : お互いによく話し合いますか。) よく話し合って、(生活のことを一筆者補) 調  
整します。
- M : (問 : お互いによく話し合いますか。) 話し合います。

N：(問：あなたの夫はあなたのすべてを聞きますか。)よく話し合います。友達みたいです。何かを決める時には絶対にお互いの意見を聞きます。たとえば、私はデパートに行って服装を買う時、(夫は一筆者補)一緒に行きます。私の好みのものを夫が気に入るなら買います。私が買う時に夫が好まないものなら買いません。夫が好きなものを買います。2人の意見はよく合います。お互いに隠すことはありません。

以上から、回答者たちは、夫婦間で良く話し合っていると評価している人が多い。話し合うことにより、「人生の中でうれしいこと悲しいことを分担します」、「良く批判します」、「ストレスを解消できます」、意見を聞いて生活のことを決めるなどと答えている。

#### 4. 本節のまとめ

以上、家族一緒に夕食を食べる、レジャー活動を行う、そして旅行するという三つの項目で、家族は団欒の場という認識の具体的な行動を見てみた。その結果、アンケート調査では毎日夕食を食べる人が多い。聞き取り調査でも、家族成員でよく一緒に夕食を食べるとした回答者が多く、一緒に食べないと答えた回答者は帰宅時間が遅い、または健康管理で夕食を食べなくなったという理由を挙げた。アンケート調査の結果では、レジャー活動は「年1~3回」行う回答者が多い。聞き取り調査では「たま」に行くとの回答が多く、具体的には「祝日」、「休日」に行くと答えている。夏に家族で旅行に行く回答者が多い。「行かない」と答えた回答者も、時間があったら行くという意識は持っている。

家族の集団的な行動を全体的にみると、家族を人生の中の一番大切なものとみていることや、家族成員間の実際行動と情緒的なサポートからみると、社会主義世代家族の集団性は強いといえる。

以上、社会主義世代の家族に対する考えと実際行動、情緒的サポートなどの分析を通じて、以下の知見を得た。社会主義世代の人々は、家族を人生の一番大事なものと見ており、家族は団欒の場であると考えている人が多い。家族と一緒に夕食をとり、一年に一回ぐらいは家族旅行に行く回答者が多い。しかし、仕事が忙しいため、家族と夕食を一緒に食べない人もいる。家族のことを優先しながら、個人の生きがいを重視すべきであるとの考えを持つ社会主義世代が多いのである。

## 第二節 民主主義時代の家族の集団性

### 1. 家族に対する考え方

第二節においても、家族を優先する考えと、個人を優先し個人を尊重する考えの比較から分析を進める。

まず、図6-4で「豊かでも貧しいでも自分の家族が一番大切な宝物である」に対する賛否の結果を示す。民主主義世代が家族を一番大事なものに見ているかどうかを調べたものである。表に示しているように、男性回答者の67.7%が「強く賛成する」、32.3%が「賛成する」と答えた。女性回答者の中で「強く賛成する」を選んだのが62.5%、「賛成する」を選んだのが34.6%である。男女とも家族を人生の中の一番大事なものであるとの考えに強く賛成している人は6割以上に達している。

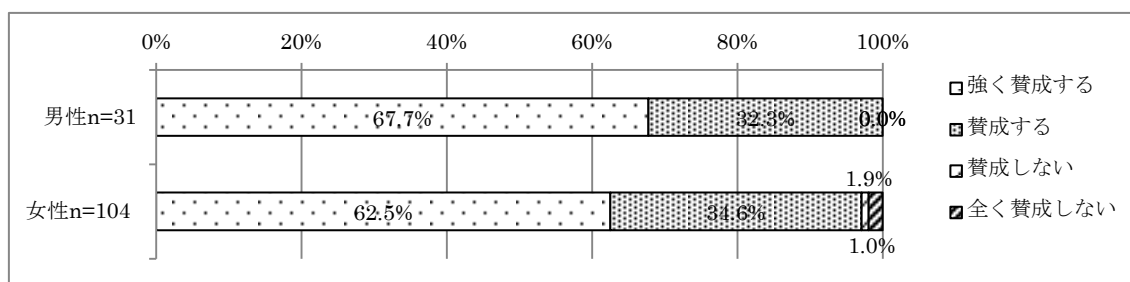


図 6-4 「豊かでも貧しいでも自分の家族が一番大切な宝物である」に対する賛否 (20~39 歳) n = 135

図6-5は「結婚したら家族のために自分の生活の半分を犠牲するのは当然のことである」という考え方に対する調査の結果を示している。家族のために犠牲することに対し、男性の60.0%が「強く賛成する」、33.3%が「賛成する」と回答しており、合計で93.3%が賛成している。女性は24.8%が「強く賛成する」、63.8%が「賛成する」と答え、合計88.6%が賛意を表明している。多くの回答者が結婚したら家族のために個人の生活の半分を犠牲にすべきであると思っているが、男性の方が女性より「強く賛成する」人の割合が高い。

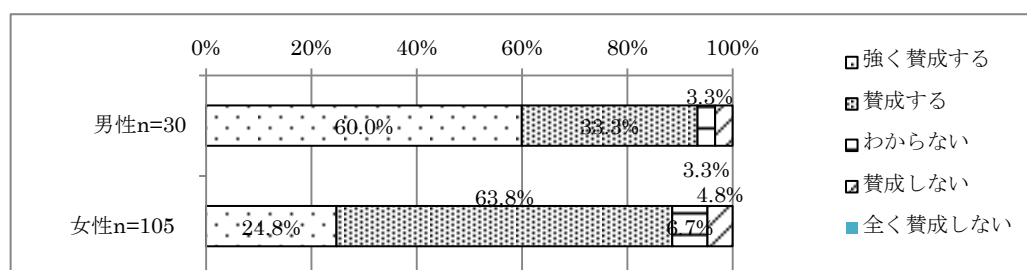


図 6-5 「結婚したら家族のために人生の半分を犠牲にすべきである」という考えに対する賛否 (20~39 歳) n = 135

次に「結婚しても自分だけの人生の目標があるべきである」に対する賛否を尋ねた結果を見る。結婚することと個人の生きがいに対する考えをみると図6-6に示すように、男性の65.5%が強く賛成、34.5%が賛成すると答えた。女性は57.5%が強く賛成し、39.6%が賛成すると答えた。「強く賛成する」と「賛成する」を合わせるといずれも9割以上を占める。

図 6-5 に示されている「結婚したら家族のために自分の生活の半分を犠牲するのは当然のことである」に「強く賛成する」と答えた率（男性の 60.0%、女性の 24.8）より、「結婚しても自分だけの人生の目標があるべきだ」に「強く賛成する」（男性の 66.5%、女性の 57.5）と答えた率が高い。つまり、家族も大事にするが、自分のことも大事だと強く考えている人が多いのである。

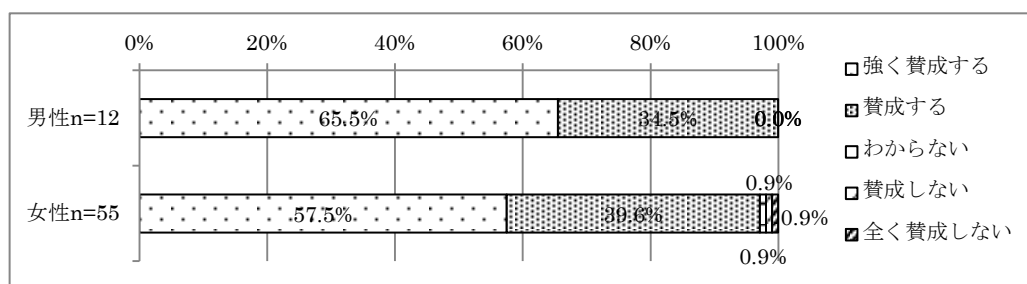


図 6-6 「結婚しても自分だけの人生の目標があるべきだ」という考えに対する賛否 (20~39 歳) n = 135

20 代、30 代の回答者が家族の持つ意味についてどのように考えているかを次の表 6-6 で見てみる。

表 6-6 家族の持つ意味についての考え (複数回答、20~39 歳)

n=147

	年齢	20~29	30~39	総計
家族成員の団欒の場	度数	61	45	106
	比率	71.8%	72.6%	72.1%
心の休息安らぎの場	度数	39	31	70
	比率	45.9%	50.0%	47.6%
家族成員の愛情を深める場	度数	39	28	67
	比率	45.9%	45.2%	45.6%
夫婦の愛情をもとに形成した場	度数	38	29	67
	比率	44.7%	46.8%	45.6%
両親と子どもと一緒に生活の知恵を学ぶ場	度数	46	39	85
	比率	54.1%	62.9%	57.8%
子どもを生育、教育する場	度数	36	27	63
	比率	42.4%	43.5%	42.9%
家系を継続、先輩から学ぶ場	度数	37	32	69
	比率	43.5%	51.6%	46.9%
先輩を尊敬、世話をする場	度数	19	23	42
	比率	22.4%	37.1%	28.6%

その他	度数	2	2	4
	比率	2.4%	3.2%	2.7%
わからない	度数	1	1	2
	比率	1.2%	1.6%	1.4%
総計	度数	85	62	147
	比率	100.0%	100.0%	100.0%

家族に対する考えの中で、「家族成員の団欒の場」を選んだ回答者は72.1%（106人）で、最も多い。次いで「両親と子どもと一緒に生活の知恵を学ぶ場」であり、57.8%（85人）である。家族に求めている機能として、家族成員の団欒を求めている回答者が一番多い。聞き取り調査では「家族は何とっていますか」と質問し、以下の答えを得た。

Q：人生です。生活は常に継続しているべきです。人類は生存する為に一定の生活を必要とします。人は生活するために誰かと一緒に住む必要があります。

R：貴重な絆です。

V：家族は愛だと思えます。生活の核心、世界の核心だと思えます。

Z：私の人生の意味だと思えます。

AA：一言で言えば愛だと思えます。

AD：家族とか結婚するということは家族の5人、あるいは少数の人々のことです。しかし、最後の最後、将来は人類と社会の為に必要なものを作ることです。

U：家族とは人生の中で一番貴重なものだと思います。すべての幸せなことと悲しいことは家族にあります。家族はかけがえのないものです。もっとも貴重ですばらしいものです。子育ては大変だと思うけれど、子どもを見た瞬間にそれを全部忘れてしまいます。（子どもは一筆者補）小さい時はかわいいです。10代になるとお互いに交流して、またすばらしいです。成年になるとまたすばらしいのか、そこまではまだ知りません。

W：家族というものはお互いを信頼して、生活を共にすることです。（人が一筆者補）頼りにするものです。そうしないと、一人ならちょっと寂しいです。

AB：家族はもちろんとっても重要なものです。家族あればこそ人生がよくなります。家族の中で夫婦はお互いを愛して、信じて、助け合うべきです。（家族が一筆者補）しっかりしているならば家族は存在できます。幸せではない家族はよいものではありません。

Y：家族は人生の意味です。すべての人生です。人間は子どもの為に家族を作っています。人は自分では分かってはいないのですが、人生の最後の目的は同じなのです。子ども、子孫を残すという一つの目的で家族を作っています。社会の問題が入ってくると、家族はたくさんの意味を持つようになります。家計、財産などが

くさんの問題があります。つまり家族は人生の一番重要な目的だと思います。

AC：生涯のパートナーを見つけたと思います。人生の中での一番重要な部分です。

AG：何とさえいいいでしょう。信頼と言いたいです。または愛です。私の心の中の一つ重要なものは愛です。今後は子どもを愛します。母、父を愛します。でもとても愛しているのはやはり私の夫です。

家族についての考えを聞き取った結果、Qは「人生」、ADは人類と社会の為に必要なものを作ると考えている。V、AA、AGは「愛」、Rは「貴重な絆」、Wは「信頼」と考えている。Uは「人生の中で一番貴重なもの」、Yは「人生の意味」、ABは「とても重要なもの」、ACは「人生の中での一番重要な部分」と答えた。これらの答えの多くには、家族を人生と関連づける考えが看取される。またUは、家族を子育てと関連づけて考えている。Qは人類の生存、AB、AC、AGは夫婦愛、YとADは子孫を残すことと関連づけている。以上からみると、民主主義世代の回答者は、家族の中での関係には愛、絆や信頼が大事と見ていて、人生の中で一番重要なもの、さらに大きくは人間社会の生存の上で必要なものという考えを持っていることがわかる。

## 2. 家族行動

民主主義世代が、毎日の夕食を家族の者と食べる頻度と、家族でレジャー活動を一緒に行う頻度を調べ、家族成員のコミュニケーションの頻度を明らかにして、家族のつながりの程度を把握する。

ここではまず調査対象者の家族成員間のつながりの現状を明らかにする。表6-7に示すように、家族成員とどのぐらいの頻度で夕食を食べているかを尋ねたところ、60.8%（59人）が「週に6~7回」、25.8%（25人）が「週に3~5回」を選んだ。両方合わせて86.6%の人は週に3回以上は家族と一緒に家族のコミュニケーションをする時間を持っていることがわかる。20代と30代それぞれ59.5%（25人）と61.8%（34人）の人が「週に6~7回」と回答し、「週に3~5回」を回答した人はそれぞれ26.2%（11人）、25.5%（14人）を占める。しかし約割の人が「週に1~2回」、またはそれよりも少なく、家族と夕食を一緒に食べる時間が少ない人も存在している。

表 6-7 家族と一緒に夕食を食べる頻度 (20-39歳) n=97

頻度	週に6~7回		週に3~5回		週に1~2回		月に1~3回		三か月に1~2回		年に1~3回		まったくなし		総計	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
年齢																
20~29	25	59.5%	11	26.2%	3	7.1%	0	0.0%	2	4.8%	0	0.0%	1	2.4%	42	100.0%
30~39	34	61.8%	14	25.5%	4	7.3%	1	1.8%	1	1.8%	1	1.8%	0	0.0%	55	100.0%
総計	59	60.8%	25	25.8%	7	7.2%	1	1.0%	3	3.1%	1	1.0%	1	1.0%	97	100.0%

聞き取り調査においては「ご家族で常に夕食を一緒に食べますか」と質問した。以下はそれへの回答である。

Q：(問：よく家族成員と夕食は食べますか) そうです。

T：(私は家族と一筆者補) 一緒に食べます。

U：(私は家族と一筆者補) 一緒にいる時は一緒に食べます。モンゴル人は夜になると皆一緒に食べます。

V：夕食はよく一緒に食べられません。(よく一緒に食べることが一筆者補) できません。2人の息子は早く食べてしまいます。私たちは(家に一筆者補) 次々に帰ってきます。夫は(夕食を一筆者補) 食べますが、私はあまり食べません。太ると思っているから(食べません一筆者補)。朝起きたら、皆にご飯を作ってあげて家を出ます。

W：いまはそうではありません。夜遅く帰るとご飯を食べません。朝は食べます。

Y：(私は家族と一筆者補) 一緒に食べるようにしています。

Z：(私は家族と一筆者補) 常に一緒に食べます。

AA：(私は家族と一筆者補) 常に一緒に食べます。

AG：(私は家族と一筆者補) 一緒に食べます。(私は家族と一筆者補) 常に一緒に食べます。たまにお兄さんたちがいない時はできません<sup>53</sup>。

R：常に一緒に食べます。

AC：私たち3人(夫婦と息子一筆者補) がそろう時は少ないですが、もし一緒にいれば一緒に食べます。

AD：(私は家族と一筆者補) 一緒に食べることが多いです。夫はたまに遅く帰ってくるので、(食事に一筆者補) 間に合わない時もあります。

以上の証言をみると、Q、T、U、Y、Z、AA、AG、R、ADは一緒に食べるが多い、または一緒に食べる意識を持っている。V、W、ACはよく一緒に食べられないと答えた。その原因として、帰宅時間が遅い、太ると思うなど二つの理由が挙げられている。

家族と一緒にレジャー活動で、遊びや映画などに出かける頻度を表6-8に示した。家族成員と一緒に夕食を食べる家族が多いのに対し、家族でレジャー活動を行う家族は「三カ月に1~2回」と答えた回答者が一番多く、全体の30.2% (29人) を占める。毎月一回以上出かける家族は全体の36.5% (36人) を占め、世代別にみると20代の半数に近い47.6% (20人) の家族、30代回答者の27.8% (15人) の家族が月に1、2回以上の頻度で出かけている様子が伺える。

---

<sup>53</sup> AGの夫は兵役に就いている。この時AGは夫の実家におり、ここに言われている「お兄さんたち」とは夫の兄の意味である。





表 6-8 家族と一緒にレジャー活動をする比率 n=96

年齢	週に1~2回		月に1~2回		三か月に1~2回		年に1~3回		まったくなし		総計	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
20~29	5	11.9%	15	35.7%	10	23.8%	10	23.8%	2	4.8%	42	100.0%
30~39	2	3.7%	13	24.1%	19	35.2%	18	33.3%	2	3.7%	54	100.0%
総計	7	7.3%	28	29.2%	29	30.2%	28	29.2%	4	4.2%	96	100.0%

聞き取り調査では「16家族でレジャー活動をよくしますか」と尋ねた。

Q：少ないです。昔は（映画を一筆者補）見ていましたが最近は見ることが全然ありません。レジャーと言えばウランバートルには映画しかありません。

T：頻繁には行きません。（家族成員が一筆者補）別々に行きます。たまには家族で映画、喜劇ショー、劇をみます。

U：あまりないです。祝日に見るぐらいです。月に一回ぐらいならよいことといえます。夫は一か月間働いて、15日間休むパターンなので、一緒にいる時間が少ないです。

R：時間があまりないです。

V：休みの日にいきます。祭日に行きます。

W：たまに行きます。たとえば子どもの日など、祝日には必ず行きます。

Y：私たちふたり（YとYの妻一筆者補）は映画を結構見ました。喜劇ショーもみます。できれば行ってみたいです。

Z：時間があれば2人で映画などを見ます。

AA：レジャー活動します。

AC：よく（映画を一筆者補）見ます。

AG：そうですね。よく（映画を一筆者補）一緒に見ます。

以上の回答をみると、Q、T、U、Rなど三十代後半の回答者たちはレジャー活動を頻繁には行わないようである。その原因は「時間」がないためである。VとWは祝日に行くと答えた。Y、Z、AA、AC、AGなどの20代は家族でよく映画、喜劇ショーをみると答えている。家族と一緒に旅行に行くことの有無を尋ね、以下の回答を得た。

Q：あまり旅行しません。たまに妻と子どもとザイサン（ウランバートル南の丘一筆者注）、テレルジ（ウランバートルに近い観光地一筆者注）などに行きます。

R：たまに（旅行に一筆者補）行きます。今年はまだ行っていません。

T：家族と旅行しません。……正直言って、そんな時間がないです。

U：夏になると川沿いに行くか、兄弟たちと一緒に別荘に行きます。

V：行きます。最近はフブスゲルに行ってきました。夏はよく行きます。

W：来年行くつもりです。フブスゲルなどに行ってみたいです。

Y：旅行します。今年もウブルハンガイに行きました。最近はボグド山のウブルザイサンに行き、妻は（そこで一筆者補）一週間休んで、私は仕事をしました。できればそのように旅行に行きたいです。

Z：旅行にはまだ行っていません。仕事が忙しいからです。

AA：旅行します。

AC：旅行します。去年北京に行きました。

AD：今まで旅行したことがないです。でも今は計画しています。モンゴルのきれいなところに行きます。三世代一緒に二、三台の車で一緒に旅行しようと思っています。

AG：旅行します。父、母、妹とよく一緒に旅行します。

Y、AA、ACは「旅行します」、QとRは「たまに」行く、Tは「旅行しません」、UとVは夏に行くかと答えた。Wは「来年行くつもり」、ZとADは旅行したことがない、AGは結婚したばかりの夫が兵役に行ったので義理の父母と妹の家族とよく旅行すると答えた。TとZが旅行していない理由は、それぞれ「時間がない」、「仕事が忙しい」ことである。

以上、家族で一緒に夕食、レジャー活動、旅行をする頻度を尋ねた結果をまとめよう。アンケート調査では、20代と30代が家族のコミュニケーションの場である夕食をほぼ毎日一緒に食べる家族は全体の6割を占め、週3日以上は全体の8割以上を占める。聞き取り調査では、家族一緒に夕食を食べる人が多いが、帰宅時間が遅いことや「太る」からという理由で一緒に食べないと答えた回答者もいる。レジャー活動の頻度を問うたアンケート調査では、月に一回以上の回答者が3割以上を占め、三カ月に1~2回行く回答者も3割、年に1~3回も3割を占めていることがわかった。聞き取り調査では、20代には「時間があれば」、30代後半の回答者に忙しいためレジャー活動を行わないとした回答者が目立った。旅行の頻度を聞いたところ、家族によって頻度がまちまちであったが、あまり行けない理由は「時間がない」というものであった。

### 3. 夫婦の情緒的サポート

家族では、夫婦がお互いの情緒的なサポートをして支え合い、お互いの悩みを聞いて助言をしていく関係が望まれる。夫婦がコミュニケーションを通じて精神的なつながりをどのくらい維持しているかについて、悩みを聞き打ち明ける頻度により分析する。

表6-9は、配偶者が悩みを聞いてくれる程度を調べた結果である。夫婦の関係なので、集計は男性と女性に分けて整理した。未婚、離別、死別など配偶者がいない人々は集計から取り除いた。

表 6-9 男女別、年齢別「あなたの配偶者は、あなたの悩みを聞いてくれますか」の頻度

n = 86

年齢・性別	よく聞いてくれる		たま聞いてくれる		あまり聞いてくれない		全然聞いてくれない		合計	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率
20-29	11	31.4%	19	54.3%	2	5.7%	1	2.9%	35	100.0%
男性	3	27.3%	5	45.5%	1	9.1%	1	9.1%	11	100.0%
女性	8	33.3%	14	58.3%	1	4.2%	0	0.0%	24	100.0%
30-39	22	43.1%	29	56.9%	0	0.0%	0	0.0%	51	100.0%
男性	5	55.6%	4	44.4%	0	0.0%	0	0.0%	9	100.0%
女性	17	40.5%	25	59.5%	0	0.0%	0	0.0%	42	100.0%
全体	33	38.4%	50	58.1%	2	2.3%	1	1.2%	86	100.0%
男性	8	40.0%	9	45.0%	1	5.0%	1	5.0%	20	100.0%
女性	25	37.9%	39	59.1%	1	1.5%	0	0.0%	66	100.0%

配偶者が自分の悩みを聞いてくれないと感じている人は非常に少数であり、20代 35 人の中の 3 人がこのように感じている。どの年齢層の人も 9 割以上の方が配偶者に悩みをきいてもらっており、夫婦間の精神的にはつながっていると感じている。悩みをよく聞いてくれると答えた人が全体の 38.4%を占め、58.1%の人はたまに聞いてくれると感じている。年齢別にみると、相手がよく自分の悩みを聞いてくれていると感じている 30 代の人数は 20 代より多いことがわかる。

表 6-10 男女別、年齢別「配偶者は、あなたに悩みを打ち明けてくれますか」の頻度

n=83

年齢・性別	よく打ち明ける		たまにある打ち明ける		あまり打ち明けない		まったく打ち明けない		合計	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率
20-29	21	65.6%	10	31.3%	1	3.1%	0	0.0%	32	100.0%
男性	5	55.6%	4	44.4%	0	0.0%	0	0.0%	9	100.0%
女性	16	69.6%	6	26.1%	1	4.3%	0	0.0%	23	100.0%
30-39	32	62.7%	18	35.3%	1	2.0%	0	0.0%	51	100.0%
男性	2	22.2%	7	77.8%	0	0.0%	0	0.0%	9	100.0%
女性	30	71.4%	11	26.2%	1	2.4%	0	0.0%	42	100.0%
全体	53	63.9%	28	33.7%	2	2.4%	0	0.0%	83	100.0%
男性	7	38.9%	11	61.1%	0	0.0%	0	0.0%	18	100.0%
女性	46	70.8%	17	26.2%	2	3.1%	0	0.0%	65	100.0%

表 6-10 は、逆の視点で配偶者が悩みを打ち明けてくれるかどうかを調べた結果を年代別、男女別に整理したものである。上の質問と同じように 9 割以上の人は配偶者が悩みを打ち明けてくれていると感じており、相手に頼りにされていると感じている。全体の 63.5%が「よくある」と答え、「たまにある」という人が 33.7%を占めている。表 6-9、表 6-10 を比べてみると悩みをよく打ち明ける人がよく聞いてくれる人より多いことがわかる。

聞き取り調査では「夫婦でよく話し合いますか」と質問し、以下のような答えを得た。

Q：よく話し合います。妻はよくいろんなことを言います。面倒くさい、言いすぎと思うぐらい言います。

T：よく話し合います。夫はよく話します。おしゃべり屋です。上司はこうやったとか。私が「後で話してね」と頼むぐらい（言いますー筆者補）。

U：（問：夫はあなたにすべてを言いますか。）言います。でも隠すものもあるかな。（問：あなたもよく話しますか。）私はすべてを話しますよ。

V：お互いに言いますし、聞きます。

W：（問：夫はよくあなたの話を聞きますか。）どうでしょうか。思い出したら聞くことは聞いています。（問：あなたもよく言いますか。）今考えてみたら、あまり言いません。

Y：そうです。父親をどこに定住させるとか、いろんな問題をよく話し合っています。父親はお酒を飲んでいるとか、ほかの仕事をしたらいいかなとか（話しますー筆者補）。

AA：そうです。

AC：私たちはすべての問題を話し合って検討します。

AD：怒っている、悩んでいることを話します。これをわたしたちは問題だとは思いません。言うべきことを言います。家でいい雰囲気を作るためです。

AG：そうです。よく話し合います。一緒にいる時はよく話し合います。

回答者 Q、T、U、V、Y、AA、AC、AD、AE は「よく話し合います」と答えた。また、QとTは配偶者がよく話す人と評価している。Y、AC、ADの語ったところには、家族で話し合って問題を解決するという意味が含まれている。Uは夫が隠すこともあると感じている。Wは夫がよく聞いてくれるが自分からはよく打ち明けないと話している。

以上の答えをみると、夫婦間ではよく話し合うと答えた回答者がいるが、自分から打ち明けない、相手は打ち明けないこともあると感じている回答者もいる。

#### 4. 本節のまとめ

以上、民主主義世代である 20~30 代回答者の家族に対する考えと家族成員間の集団性の強さを示す実際行動、情緒的サポートに注目して分析した。

家族を大切に考える意識の強さを調べた。いずれの年代の回答者も家族を人生の中での一番大事なものと見ている人が 9 割以上を占めており、強くそのように見ている回答者も全体の 6 割を占めた。民主主義世代の多くは、家族を人生の最も大事なものと見ている。結婚してからの個人の生きがいに関する考えをみると、個人だけの人生の目標があるべきだと強く感じている人が男性の 6 割を占め、男性の方が女性より個人の生きがいを強く重視する人が多い。民主主義世代は、個人より家族を優先する意識を持っているといえる。結婚してからも個人だけの人生の目標があるべきだと強く感じている人は全体の 6 割を占め、個人だけの人生目標を強く重視する人は家族のために自分の半分以上を犠牲にすると考えている人よりも多いことがわかった。家族に対する考えをみると、家族を家族成員の団欒の場と考える回答者が一番多く、聞き取り調査においては、家族は多くの人にとって人生の中で一番重要なものとされていることが看取された。家族で行う活動の中で、毎日の夕食を家族で一緒にとる頻度は高く、ほぼ毎日食べるのが回答者の 6 割を占めた。聞き取り調査でも一緒に食べると答えた人が多かったが、帰宅時間が遅いため毎夕家族と一緒に食事を取れないとの声もあった。家族でのレジャー活動を頻繁に行う人は全体的には少なく、聞き取り調査からは、頻繁に行えない理由に挙げられたのが「忙しい」ことや「時間がない」ことであることが判明した。家族で頻繁に旅行に出かけない理由も「時間がない」ことがあげられた。以上からみると民主主義世代の 20 代と 30 代の者にとっての家族とは、かけがえのないものであり、そこは自分の人生の目標を持ち続けるべき所でもある。家族で毎日の夕食をとり、時間の許す限りレジャーや行楽をともにしている。

このことから、民主主義世代の家族の集団性は強いといえるが、忙しさや時間不足が家族の集団行動を阻害しはじめている状況も看取された。

### 第三節 家族の集団性と集団性のゆらぎについての議論

以上、本章の第一節と第二節では、社会主義世代と民主主義世代の回答者について家族の集団性の強さの目安となる家族に対する考え、家族で夕食を取る頻度とレジャーを行う頻度をそれぞれ分析し、家族の集団性の強化は社会主義時代でも民主主義時代でもモンゴルの家族の特徴であるとの見解に達した。

本章での結果をみると、まず家族に対する考えである「豊かでも貧しいでも自分の家族が一番大切な宝物である」は、いずれの世代でもほとんどの人に認められている。聞き取り調査の証言からみると、「家族」とは、社会主義世代の 40 代以上の回答者に言わせれば、「非常に貴重なもの」であり、幸福感が生まれる場所であり、「人生の意味」・「人生の基」・「人生」そのもの・国の基などであるという。民主主義世代の 20 代と 30 代の回答者は、家族のことを「人生」・「絆」・「愛」・「人生の中での一番貴重なもの」・「一緒に生活をする（場—筆者補）」・「人生の意味」・「すべての人生」・「信頼」であり、「家族があればこそ人生がよくなる」という。いずれの世代でも、家族は「人生」と関連づけられ、人生でかけ

がえのないものとして認識されている。このように、家族を至上のものでこの上なく大切なものとする考え方を、千田は「家族の集団性の規範」、または「家庭イデオロギー」と呼んで近代家族の規範としている（千田 2011：16）。

家族の持つ意味については、いずれの世代の多くのものに「家族成員の団欒の場」と認識されており、家族団欒が家庭に期待される大きな役割であるといえる。

では団欒に加わるべき「家族成員」にはだれが含まれているか。これについてグループ聞き取り調査でたずねた。

問：家族を何と理解していますか。同じゲルに住んでいる人ですか、あるいは同じハシヤーに住んでいる人ですか。

X：一緒に住んでいる人々です。一つのゲルにいる人は一つの家族です。

問：両親が子どもと一緒に住んでいたら一つの家族ですか。

S：一つのバイシン<sup>54</sup>に住んでいたら一つの家族です。

AF：各自暮らしていたら二つの家族です。

X：たとえば一つのハシヤーに両親が自らのバイシンを持っているとすれば、二つの家族です。一つのゲルに皆がいると一つの家族です。

H：そうです。一つの家族です。

問：それなら、結婚前は兄弟と一緒に一つの家族、（結婚した一筆者補）今は違う家族と理解してもいいですか。

X：そうです。独立した家族です。

AF：（一つのハシヤーの中でお父さんが私とは別に、自分の住居に住む場合、それは一筆者補）お父さんの家族と言います。それ（お父さんの家族一筆者注）は別の家族になります。

G：戸の男性で名称を付けます。たとえばドルジの（家一筆者補）、ゴンチグの家と言います。

X：姉の夫の、兄の、など（と、名を付けます一筆者補）。（全部一筆者補）別々の家族です。

C：私は義父と一緒に住んでいます。私の夫は末っ子です。かまど（家、家督の意味一筆者注）を継いでいます。お父さんがいるので、お父さんの名前で家族の名前を付けて、誰の家族かと聞かれたら、お父さんの名前で答えます。お父さんが亡くなったら夫の名前で名称を付けます。今はお父さんの家族と別な家族ではありません。お父さんのかまどから分離すると独立した家族になります。

---

<sup>54</sup> バイシンとは煉瓦製の固定家屋のこと。ここでは住居という意味で使っている。モンゴルの主な住宅様式はゲル、バイシンと集合住宅である。

話によると、モンゴル人の理解では、同じ住居に住んでいる人々が一つの家族である。同じハシャーに住んでいても、二つの住居に住んだら二つの家族となる。第五章で取りあげた親子の同居意識に関するアンケート調査の分析結果によると、全体的に親と同居する意識が弱く、民主主義世代の回答者は社会主義世代の回答者より親との同居意識が弱い。

家族団欒の具体的な行動として、一緒に夕食を食べる、レジャー活動を行う、一緒に旅行に行く頻度をみた。その結果、社会主義世代のレジャー活動をする頻度が低い、ほぼ毎日家族で夕食を取る者が全体の 6 割を占めている。夏になると家族と一緒に旅行にも行っている。民主主義世代はほぼ毎日家族で夕食を食べており、年に数回程度レジャー活動を行っている。一緒に夕食を取ることができない、レジャー活動をしない最も大きな理由は時間がないことであり、一緒に旅行に行けない主な理由も時間がないことである。つまり、時間があるならば、家族成員が家族と一緒に行動するのを実現できるのであろう。夫婦間はコミュニケーションを通じて、相互に情緒的なサポートし合うのが望ましいことである。回答者たちの情緒的サポートの実際は、いずれの年代でも「よく聞いてくれる」より「よく打ち明ける」を選択した人のほうが多い。

家族の今後について、研究者たちは「迷走」、「崩壊」、「個人化」などと表現している。森岡と望月は、「家族とは、夫婦・親子・きょうだいなど少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い感情的かかわりあいでは結ばれた、幸福追求の集団である」(森岡・望月 1997 : 6) と定義し、家族を集団であるとしている。しかし、「ところが今日、個人化が進み、家族の集団性がゆらいでいる。個人化とは、家族の集団生活の内外に家族員個々の活動領域が形成され、そこでの活動が家族役割の遂行に必要な程度を超えて拡大し、個人の自己実現が求められる傾向をさす」(森岡・望月 1997 : 6) と述べ、家族が揺らぐ趨勢にあることを指摘した。制度としての家族が社会の基礎単位から変わって、個人が社会の基礎単位となる傾向にある。山田によると個人化は 2 つの質的に異なった家族の個人化 (2004b : 341) があり、一つは家族の枠内における個人化、もう一つは個人を前提とした選択可能な関係を作ろうとする「家族の本質的個人化」である (山田 2004b : 344)。

本研究では「結婚したら家族のために自分の生活の半分を犠牲にするのが当然のことである」という家族を中心に考える生き方と「結婚しても自分だけの人生の目標を持つべきである」という個人を重視する生き方両方について調べた。下の二つの表に示したように、「結婚したら家族のために自分の生活の半分を犠牲にするのが当然のことである」という考えに対しては、いずれの世代の回答者もその 9 割が賛成している。本研究で結婚したら家族のために自分の生活の半分を犠牲にするのが当然のことである」という家族を中心に考える生き方と「結婚しても自分だけの人生の目標を持つべきである」という個人を重視する生き方を尋ねたそれぞれの結果を、年齢別に示したのが表 6-11 と表 6-12 である。ここで「強く賛成する」回答者をみると、「強く賛成する」を選んだ回答者の差は大きくはない。40 代は 1 人で 50 代が 1 人の合計 2.5% であり、20 代と 30 代の若年層では、個人の生

き方を重視する考えを持つ者のほうが家族を重視する考えを持つ者より 25.7%多く、20代では33.1%、30代では22.5%多い。

表 6-11 「結婚したら家族のために自分の生活の半分を犠牲にするのが当然のことである」に対する賛否 n=198

年齢	強く賛成する		賛成する		賛成しない		まったく賛成しない		わからない		総計	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率
20～29	21	27.6%	50	65.8%	5	6.6%	0	0.0%	0	0.0%	76	100.0%
30～39	23	41.8%	27	49.1%	3	5.5%	0	0.0%	2	3.6%	55	100.0%
40～49	11	32.4%	21	61.8%	1	2.9%	1	2.9%	0	0.0%	34	100.0%
50～59	6	25.0%	16	66.7%	0	0.0%	1	4.2%	1	4.2%	24	100.0%
60以上	6	66.7%	2	22.2%	1	11.1%	0	0.0%	0	0.0%	9	100.0%
総計	67	33.8%	116	58.6%	10	5.1%	2	1.0%	3	1.5%	198	100.0%

表 6-12 「結婚しても自分だけの人生の目標があるべきだ」に対する賛否

n=201

年齢	強く賛成する		賛成する		賛成しない		まったく賛成しない		わからない		総計	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率
20～29	44	55.7%	33	41.8%	1	1.3%	1	1.3%	0	0.0%	79	100.0%
30～39	36	64.3%	19	33.9%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.8%	56	100.0%
40～49	10	28.6%	25	71.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	35	100.0%
50～59	5	22.7%	15	68.2%	1	4.5%	0	0.0%	1	4.5%	22	100.0%
60以上	6	66.7%	3	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	9	100.0%
総計	101	50.3%	95	47.3%	2	1.0%	1	0.5%	2	1.0%	201	100.0%

このことから、個人の生きがいを重視する志向が強まっていると考えられる。しかし、上述のように、いずれの年代の対象者も、家族を大切なことと思う「家庭イデオロギー」を持っている。したがって、個人の生きがいを重視することとは、あくまでも家族を大事にすることを前提としているのである。



## 第七章 社会主義時代と民主主義時代の家族の特徴および今後の行方

本章では、社会主義時代と民主主義時代の都市家族の特徴を明らかにする。そして近代家族、個人化に関する理論を再検討し、モンゴルの家族は近代家族であるかどうか、個人化へ進むかどうかを検証して、当初設定したリサーチクエスチョンに答える。最後に、民主主義時代の家族の生成要因からモンゴルの家族の今後の行方を明らかにする。

### 第一節 社会主義時代家族の特徴

#### 1. 仮説検証

##### 1-1. 家内領域と公共領域は分離したのか

第一章第一節で論じたように、モンゴルの社会主義時代の指導者は、ゲルを「汚らしい」、「非衛生的」とみて、住民を近代的な住宅に住ませるようにアパートの建築を促進した。その結果、1960年代に集合住宅が建設されると、一部の都市住民が都市の中心部に建設されたアパートに住むようになり、入居後は空間的に外部から分離された。集合住宅はプライベートなところとして作られている。都市中心部におけるゲルに住む家族は、木造の板の囲い（ハシャー）で路地から分離されたが、水道が未整備であることなどによって外部からの完全な分離はできなかった。第一章第一節に述べたように、都市周辺から周囲の山腹までゲルが散在して、周囲と切り離す囲いがなかった。社会主義時代のウランバートルではこのような状況にあった。

社会主義的工業化と集団化を導入し、生産手段の国有化を進めた社会主義時代においては、全国民が労働者であり、社会主義工業化が進められた時には、男女の区別なく社会主義国家のために職場で労働して、家は休憩の場として存在した。このように、生活の場である家と働く場である職場が形成されていた。

社会主義時代には、家族に対する管理や支援なども積極的に行われていた。人民革命党と職場による国民に対する管理、たとえば「社会主義的生活様式」の提起、家事に対する役割分担を家族法第5条第2項で定めるなど、国家の管理が家族内部まで浸透していたことに他ならない。または、政府が家内領域における家事や炊事などを社会福祉サービスに吸収して提供することにより、「公」と「私」の関係は「私」が「公」に含まれる状態にあった。

生活の場と働く場は分離したが、家事や炊事などの福祉サービスが発達した過程で「私」が「公」に含まれていくようになった社会主義時代には、都市住宅地区の中に遊牧生活由来のゲルが混在する状況があり、それは民主主義時代まで残っている。以上の三点で、家内領域と公共領域の完全な分離は、社会主義時代のモンゴルの都市部の家族には定着しなかったといえよう。

## 1-2. 夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業であるかどうか

遊牧地域における家族では、性別により役割が分けられていた。

第一章では、家内領域と公共領域との分離について論じたが、そこでは、社会主義建設により職場と生活の場が分離したことを明らかにした。第二次世界大戦後に本格的に始まった社会主義的工業化と集団化を契機に、家族は自給自足の遊牧家族から労働者家族になり、夫婦ともに賃金労働者となったため、日本のような資本主義近代化に見えたような、夫は公共領域で妻は家内領域という役割分業は形成されなかった。社会主義イデオロギーにより平等家族を提唱していた社会主義国モンゴル人民共和国では、男女の政治・社会・経済・文化などあらゆる方面の平等が提唱され、男女が等しく働き休みを取る権利を法律により保障した。また家族関係についても「家族法」により家事労働と育児における平等を規範として定めた。国が共働きを推進するために、国家の福祉政策により家事と育児などにおける女性の負担を減らそうとする一方、男性の家事・育児参加をも呼びかけ続けていた。これは社会主義国家の共通のことであり、野々山は、ハンガリーの現実に基づいて、社会主義近代化の「資本主義近代化と異なる最も明確な側面は、男女平等を主要なイデオロギーとする社会主義思想の基で、女性は男性と同様に働かざるを得ないということ」（野々山 2009:93）であると述べている。

筆者は、モンゴルの都市家族の家内領域における夫婦の役割分業の在り方を、次の5つのパターンに分類したい。

- ① 夫は公共領域を担い、妻は家内領域を担いつつ、公共領域に進出する。
- ② 夫も妻も公共領域と家内領域を担う。夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業意識を持つ。
- ③ 夫も妻も公共領域と家内領域を担う。夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業意識をもたない。
- ④ は公共領域と家内領域を担い、妻は公共領域を担う。夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業意識を持たない。
- ⑤ 夫も妻も公共領域を担う。夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業意識を持たない。

これらは遊牧生活由来の性別役割分業（①と②）、社会主義型性別役割分業（③、④、⑤）に分類される。育児における夫婦の役割分業は

- ①妻は主に育児を担当する。
- ②夫婦二人で育児をする。

①は遊牧生活由来の性別役割分業であり、②は社会主義型性別役割分業である。

社会主義時代のモンゴルでは、国家が夫婦の共働きを強制的に押しつけ、家内領域における平等を提唱していた。しかし、夫婦の役割分業の実態は遊牧生活由来の役割分業と社会主義型性別役割分業がある。遊牧生活の影響で夫は公共領域、妻は家内領域の家事・炊事・育児の担い手になるが、男性と平等に働くべきため、公共領域にも進出していた。よって、夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業は形成されなかった。

### 1-3. 家族成員間は強い情緒的關係で結ばれているのか

前近代社会では、親が決める縁談、誘拐掠奪婚の形式で結婚が成り立っていた。モンゴル人民共和国時代の初期の法律では、前近代の掠奪婚をやめさせ、結婚する人が自ら結婚を決めると同時に親の意識を重視することが定められた。近代的な法制度が社会主義時代の1956年に始まり、『モンゴル人民共和国の結婚と家族、福祉法』により結婚を行政的に登録する制度が実施され、結婚は法律により正当化され、家族における権利と義務は法律婚のみに適用されるようになった。1973年の家族法では、自分たちの意志で愛情をもって結婚することを定めた (Bügd nairamdah mongol ard ulsiin ger büliin huuli 1973:9)。この中の婚姻関係を規定した箇所では、愛情を持つ個人の選択を尊重することが定められた。第三章第一節の2-1で論じたように、実際のところ、社会主義時代においては、恋愛結婚と個人の意志による結婚は都市部において普遍的になって、第三章第一節の2-3で明らかにしたように、夫婦間の愛情を大事にすることが都市家族に定着した。

モンゴル人民共和国では婚姻に関わる近代的法制度によって家族を規範化していた。第二章第一節の3で論じたように、1956年からは婚姻届を提出しない場合には夫婦として認めないことになったが、社会主義世代である40歳以上の調査対象者が結婚につながらない同棲、婚前性交渉、非嫡出子に寛容な態度を持つことから、恋愛、結婚、性、生殖を一体的なものとして捉える概念は社会主義時代のモンゴルでは認められなかったといえる。

以上を総括すると、社会主義時代には結婚登録制度が普及し、都市家族に恋愛結婚が広まった。しかし、恋愛、結婚、性、生殖を一体的なものとして捉える概念は社会主義時代のモンゴルには認められず、家族成員間が強い情緒的關係で結ばれることも社会主義時代のモンゴルには認められなかった。ただし、家族が愛情によって結ばれることは社会主義時代に定着した。

### 1-4. 子ども中心主義であるのか

社会主義時代、モンゴルとウランバートル市の出生率は共に減少する傾向にあったが、合計特殊出生率が5以上だった。第三章第一節の3で述べたように、モンゴル人民共和国では子どもを持つことが必ずしも結婚してからのことではなかったが、結婚したら子どもを持つべきだと思い人が多いことを第四章第一節の3で明らかにした。子どもを4人持つ

ことを理想とし、子どもたちが将来お互いを助け合って生きていくことを期待している。第四章第一節 1-3 に指摘したように、その背景には社会主義時代のモンゴルでは死亡率が高かったので、万が一に備えるという意識が存在する。第四章第一節の 1-3 で考察したように、彼らが理想的とする子どもの数が実際に持つ子どもの数より多いことから、彼らが出産をコントロールしていることがわかるが、その理由とされているのは、仕事をするため、または物質的な条件が足りないことである。

第四章第一節の 1-4 に紹介したように、モンゴルの社会主義時代において、国家は子どもを国の未来と見なし、人口増加政策を実行した。そして、夫婦共働きを支えるため、国は子育て支援政策をも実施し、子どもが集団的に育てられた。その結果、社会主義の将来の労働者として位置づけられた子どもは、国家と社会による教育を受ける身となった。第三章第一節の 2 に実証したように、家族にとって大事な事柄に子どもがあったが、実際には国が家族の子育ての役割の一部を担って子どもを引き取りキャンプ式に教育し、子どもは「国家の子ども」とされていた。国家の福祉事業によって子どもが育てられるので、子どもを育てるコストは少なく、働くための時間も確保できた。しかしそれが原因で親子の間に気持ちの溝ができてしまった。このような実態からすると、社会主義時代には子ども中心主義があったとはいえない。第四章第一節に記したように、都市における母親は、国が人工妊娠中絶を禁止するにもかかわらず、働くために密かに中絶を行っていた。これは女性の働く意思が強いことを示している。第四章第二節に指摘したように、「子どもには自分の生活を犠牲にしてでも親としてできる限りのことをやるのが当然だ」ということにほとんどの人は賛成し、子どもを大切に考えてはいるが、親は親として為すべき教育の責任の一部を国が建てた子育て支援の福祉施設に任せて社会労働に専念していたため、子どもとの間に距離がおかれたのである。母性愛についてみると、社会主義時代には母性が強調されないものとされ（野々山 2009 : 93）、母親は子どもを大事に思っても、社会主義労働者として働く意志もまた強いので、第四章第一節で述べたように、実際に子どもとの間には隙間が存在していて、資本主義社会における現象ある子どもを生きがいにして生活することはなかった。

以上から、モンゴル人民共和国において子どもが家族の中心ではなく、国の家族政策の中心であったといえる。母親自身が子どもに愛情を持っているが、子育ての機能を社会に任せることによって、子どもに愛情をたっぷり注ぐことはできなかった。つまり仮説の「子ども中心主義」は社会主義時代には形成されなかった。子どもが大切な存在であるが、家族の中心的な存在ではなかった。

#### 1-5. 非親族を排除したのか

社会主義以前の時代と社会主義時代を経験したモンゴル人の証言によると、社会主義時代以前の富裕層には召使いがいた。召使いは自分の財産を持たず、生業の面では富裕層に依存していて、遊牧で移動する際にも奉仕している主人と一緒に移動していた。しかし、

召使いは自らのゲルを持ち、富裕層の家族とは別の住居に住んでいた。つまり召使いは富裕層と同じ家族の者ではないと考えられる。

社会主義時代には、都市で暮らしている家族にも大人数の家族があった。通常は2〜3軒しかない集合住宅の家に、少ない場合でも10人が一緒に暮らしていた。証言によれば、この家族の受け入れたのは全員親戚であった。

まとめると、社会主義以前からモンゴルの家族の特徴であった非親族の排除は、社会主義時代に入っても変わらなかった。「非親族の排除」はモンゴルの社会主義時代の都市家族の特徴の一つである。

つまり、社会主義時代のモンゴルの家族には「非親族の排除」があったといえるのである。

#### 1-6. 社交が衰退し、プライバシーが成立したのか

第五章冒頭で述べたように、社会主義時代前のモンゴル人はホト・アイルという親族、非親族で構成する組織で遊牧生業を営んでいた。この組織に加わり、お互いに助け合って生業を共にし、家族の間にはっきりした境が見えず、いずれの間にも互助関係があった。しかし、都市に移入した家族においては、生計が家族から離れ、厳しい自然に対応する必要性もなくなったが、社会主義公有制のもと、家族間の貧富の格差がなかったため、親族や近隣の良好な関係が残されて、家族をめぐる親族ネットワーク、近隣ネットワークは盛んであったことを第五章第三節で述べた。第一章第一節の2で紹介したように、社会福祉サービスが家族の需要を満たしており、コミュニケーションが家族の外にある幼稚園や公共食堂などの福祉施設により満たされてもいたため、社交が盛んであったともいえる(p33)。このような考察を通じ、筆者は、社会主義時代の家族に社交の衰退は現れなかったと考えている。

第一章第一節の1で考察した通り、ウランバートルにはインフラ設備が不十分なゲル地区が存在していて、ウランバートル周囲の山腹に散在していた家族の住むゲルには周りから遮断する囲い(ハシャー)もなかったため、ゲルはプライベートなところとは言い難い。第一章第一節の2に示したとおり、国家の管理が家族の内部まで浸透し、現在は家庭の中で行われている家事や炊事などは、社会主義政府の社会福祉政策として国家と社会が提供していた(p32, 33)。子どもの社会化の役割を国家と社会が担うことによって子育てが社会化されたとの考えを筆者は第四章第一節2で明らかにした。第三章第一節の2で紹介したように、結婚と離婚も政府と党によって管理されていた。以上から、社会主義時代のウランバートルにはプライバシーが成立していないといえる。

#### 1-7. 家族の集団性が強化されたのか

社会主義時代のイデオロギーを受けているとされる40代以上の対象者は、家族の集団的な行為としてレジャー活動を行うことは少ないが、毎日の団欒の場として夕食を家族と共

にし、夏には家族と旅行することが多い。夫婦間のコミュニケーションもよく行われており、夫婦の一体感が強いことが示されている。

ほとんどの回答者は、家族とは個人の人生の中で一番貴重なものであり、結婚したら家族のために人生の半分を犠牲することも当たり前なことであると考えている。家族に対して「家族は家族成員の団欒の場」という考えを持っている人が一番多い。

都市に住んでいるため、地方から親族たちが来ると世帯に入らせるという回答者もいた。このように家族に家族成員以外の親族たちを住まわせることに、親族たちとのコミュニケーションが良好で、家族成員以外の人を受け入れる彼らの考えが示されている。

社会主義時代の家族には集団性があることが認められるが、コミュニケーションを活発に行い合っている家族成員以外の親族に対しては、門戸を閉ざしていないといえる。

#### 1-8. 核家族であるかどうか

繰り返し述べているように、モンゴル人は昔ホト・アイルを組んで生業を営んでいた。しかし、第六章第三節に指摘したように、モンゴル人は近くに住んでいても、独立した住居に住むなら、それを一つの家族と見るので、同じハシャーの中に住んだとしても、2つの住居に住むのなら二つの家族とみる。

社会主義世代である40代以上の分析対象者の多くが、自分の親と、または結婚している子どもとは離れて住んだほうが良いと考えている。先行研究によれば、モンゴルの家族制度は小家族制度であり、モンゴル人の相続制度は結婚するときに相続が成立して、末子以外は親世帯から離れて独立して住むのである。したがって、社会主義時代を経験した人々は、「結婚したら一人前の成人になり親元から離れて独立すべき」という遊牧生活由来の意識を持っていると考えられることを第五章第三節で明らかにした。

このような独立志向とあわせて、家族には親を尊敬し世話する機能があると考えの人が少なく、親や子どもと同居しようという意識が薄いことも指摘した。しかし、上にも指摘したように、地方から親族たちが来ると世帯に入らせる都市住民がいる。これは親族間にお互い助け合う習慣があるからである。

親族とのネットワークが発達していて、家族成員以外の親族と世帯を組むこともあったが、子どもは結婚したら独立すべきであり、結婚したら親から離れるべきという独立志向から核家族志向への展開があるのである。

以上の検証の結果をまとめると

- ① 家内領域と公共領域の分離は形成されていない。
- ② 夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業が形成されていない。
- ③ 家族成員間は強い情緒的關係で結ばれていない。
- ④ 子ども中心主義ではない。
- ⑤ 非親族が排除されている。

- ⑥ 社交が衰退していない。プライバシーが成立していない。
- ⑦ 家族の集団性が強い。
- ⑧ 核家族。

## 2. 社会主義時代家族の特徴

検証の結果から、社会主義時代の家族の特徴は以下の通りであるといえる。

- I. 生活の場である家と働く場である職場が形成された。
- II. 夫婦はともに公共領域に進出した。
- III. 婚姻は愛情により結ばれていた。
- IV. 子どもが大切にされているが、家族の中心的な存在ではなかった。
- V. 非親族を家族から排除した。
- VI. 家族をめぐる近隣ネットワークが発達していた。
- VII. 家族の集団性が強かった。
- VIII. 核家族の志向がある。

## 第二節 民主主義時代における家族の特徴

### 1. 仮説検証

#### 1-1. 家内領域と公共領域は分離したのか

社会主義時代には、都市化と社会主義工業化により、公共領域と家内領域分かれたが完全な分離は実現できなかった。民主主義時代になってから、社会主義工業化によって作られた工場は私有化されたが、生業は家内領域から分離された状態が保たれた。

住居空間を見てみると、民主主義時代になってからのウランバートル市の一つの著しい特徴は、人々の移動が自由になったため、ウランバートルの人口増加傾向が著しいことがあり、それにつれてアパート地区とゲル地区がともに拡大、アパートとゲルの軒数と居住人口がともに増加している。アパート地区に住む家族は、社会主義時代と同様に外部の空間から分離している状態にある。一方のゲル地区の住居の単位はハシャーであり、このハシャーの内部は煉瓦あるいは木で造られた固定家屋とゲルに住む数世帯により構成されており、このハシャーの内部は板囲いによって外部から切り離れている状態にあることを、第一章第二節の1で指摘した。

社会主義から民主主義へ移行する際、社会主義時代の国家が運営する公共食堂や育児支援のキャンプ、学生寮などの福祉機能が切り捨てられた。その結果として、第一章第二節の1で述べたように、家事・炊事・育児などが家族に戻って、「私」が「公」に含まれていた状態から、公共領域と家内領域の分離が実現された。

このようにして、社会主義時代には完全には分離していなかったが、職住の分離、空間

的な分離、「私」が「公」から分離するという三つの面で、民主主義時代に入ってから家内領域と公共領域が分離した。

#### 1-2. 夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業であるかどうか

社会主義時代には、男女平等のイデオロギーが提唱され、男女ともに労働者として位置づけられていて、男女ともに公共領域に位置付けられていた。

民主主義時代に入ってから、社会主義時代の家族内部の役割分業まで規範化されることはなくなって、男女平等の法制化が崩れてしまった。聞き取り調査で確認した役割分業の内容により夫婦の役割分業は次の5パターンに分けることができる。

- ① 夫は公共領域を担い、妻は家内領域を担いつつ公共領域に進出する。夫は公共領域、妻は家内領域と言う性別役割分業意識を持つ。
- ② 夫も妻も公共領域と家内領域を担う。夫は公共領域、妻は家内領域と言う性別役割分業意識を持つ。
- ③ 夫も妻も公共領域と家内領域を担う。夫は公共領域、妻は家内領域と言う性別役割分業意識を持たない。
- ④ 夫は公共領域と家内領域を担い、妻は家内領域を担う。夫は公共領域、妻は家内領域と言う性別役割分業意識を持たない。
- ⑤ 夫は公共領域、妻は家内領域を担う。夫は公共領域、妻は家内領域と言う性別役割分業意識を持つ。

育児における役割分業は、

- ① 妻は主に育児を担当する。
- ② 夫婦二人で育児する。
- ③ 妻は専業主婦として育児を専念する。

以上の3パターンに分けられる。この中で、家事におけるパターン①と②、育児におけるパターン①は遊牧生活に由来する役割分業観と結び付けて考えられる。家事におけるパターン③と④、育児におけるパターン②は社会主義時代の影響を受けたものであると考えている。そして家事の役割分業のパターン⑤と育児における役割分業のパターン③が脱社会主義型性別役割分業である。現在のモンゴル国における夫婦の役割分業は、遊牧生活ならびに社会主義時代の歴史的な生活と経験から抜け出していない部分があり、夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業は、モンゴルの民主主義国家・市場経済期の都市家族のうち、専業主婦の登場を許すほど裕福な家族と、裕福ではないにも関わらず子育てを優先する家族に現れたのである。



民主主義時代には、社会主義時代に存在した夫婦の労働に対する強制的な手段、即ち法律とイデオロギーによるコントロールがなくなった。しかしながら、民主主義時代においては移行期の経済の低迷が原因となって、女性は働かざるを得ない状態にある。にもかかわらず、女性は家事や育児を担うべきであると女性自身が多く思っており、実際に女性が社会進出と同時に家事労働分担において夫より多く分担している。分担の範囲については、家庭各々の生活様式や在宅時間などにより夫との間で調整している。

夫が公共領域で妻が家内領域という性別役割分担は民主主義時代の一部都市家族には現れたが、普遍的な現象ではない。すなわち、夫が公共領域で妻が家内領域という性別役割分業は民主主義時代の特徴ではない。

### 1-3. 家族成員間は強い情緒的關係でむすばれているのか

第三章第二節の1で紹介したように、社会主義時代と同様に、民主主義時代も国家機関に登録した婚姻のみを認めている。第三章第二節2-2で明らかにしたように、結婚相手と知り合うきっかけは、自ら知り合うことが多く、恋愛結婚が普遍的であり、情緒的要素が結婚の第一条件になったのである。第三章第二節2-3に示したように、未婚者が結婚を望む理由を見ると、「みんな結婚する」、「子どもがほしい」という近代家族的理念<sup>55</sup>を持つ未婚者が多い。

20代30代の回答者は、生活の知恵を持つ人生のパートナーと結婚してお互いを愛することが家族の中の大事なことだと考えていて、愛情を婚姻における重要な事柄の最高位置に置いている。第三章第二節にあげた聞き取り調査の結果では、家族の中で重要な事柄として強調されているのは「理解し合う、気持がしっくり合う」、「暖かい雰囲気」、「信頼」、「愛」などの情緒的な事柄と「安定的な生活」、「子ども」、「家」など具体的な事柄がある。第六章では、家族とは何かという質問に家族とは「愛」、「信頼」、「絆」など情緒的感情を表す言葉が挙げられたのである。家族の中で情緒的な事柄が大事にされているということである。

しかし、第三章第二節の2-3で明らかにしたように、社会主義時代にも確認された未婚同棲、婚前性交渉、非嫡出子などを認める意識は近代家族の規範と異なるものであるが、これらは民主主義時代に入っても社会に認められている。情緒的な結び付きが盛んになり、依然として多くの回答者が結婚を目指し欲していることを第三章第二節の2-3で明らかにした。民主主義時代に入り、事実婚と非嫡出子出生が増えている状態にある。第三章第二節1に示した統計資料から見ると、婚外出生率が全出生数の四分の一を占める状態にある。民主主義時代の家族法に非嫡出子に関する規定が改正され、非嫡出子と嫡出子の権利と義

---

<sup>55</sup> 落合は「みんなが結婚して二、三人の子どもがいる家庭を作る社会」(落合 2008:74~76)を「再生産平等主義」と称し、主婦化、再生産平等主義と人口学的移行期世代が担い手である三つの特徴は家族の戦後体制の特徴であり、日本の近代家族の特徴でもあると実証した。

務の差異が縮まったためであろう。

家族内部の情緒的な関係の「母性愛」についてしてみると、子どもを教育する機能が家族に戻ったため、親が自ら子どもを育てることとなり、子どもへの関心が高まり、子どもの成長を重視するようになっている。

以上をまとめると、前近代とは異なり、夫婦は恋愛によって結婚して、家族は強い情緒的關係により結ばれ、結婚してから肉体的に結合し、子どもを産むことは、いずれの時代のモンゴルにあったが、結婚につながらない性交渉、結婚外で生まれる非嫡出子もいずれの時代においても不自然なことではなかった。よって、民主主義時代には、近代家族論で言われる夫婦間、母子間の情緒的關係が成立しているが、結婚してから性交渉を持ち子どもを出産するという概念的結びつきの存在は認められない。

#### 1-4. 子ども中心主義であるのか

モンゴル国の合計特殊出生率は、1990年から2006年にかけて2.08の人口置換水準を下回っていて、その後は緩やかに上昇する傾向がみえる。理想とされる子どもの数は社会主義時代の回答者よりやや低く、30代は4人、20代は3人となった。民主主義時代でも社会主義時代と同じような人口増加政策を取っている。出産に対するコントロール（避妊、人工妊娠中絶）は社会主義時代にも密かに存在していたが、民主主義に解禁され普遍化して、子どもを産むかどうかの選択権が国民に戻り、人々はより自分の意志で子どもの数を決めることができるようになった。

社会主義時代に政府が担っていた子どもに対する教育を政府が手放したため、民主主義時代に子どもの社会化の機能が家族に戻った。第四章第二節で検証したように、子育てのコストが高くなり、家族が子どもの教育を重視するようになり、親の意識も変わり、子どもの「質」を重視して、わが子を優秀な子どもに育てるために、子どもの数を減らして、限られたお金で子どもがさらに良い教育を受けさせる傾向にある。そして、子どもは「国家の子ども」から「家庭の子ども」に変化し、親は子どもの成長をより重視するようになって、子どもに愛情をたっぷり注ぎ込んでいる親が現れてきている。現在の民主主義時代モンゴルの都市家族には子ども中心主義の萌芽的状态にある。

民主主義時代に理想の子ども数が減少した原因は、子育てにかかるコストが上昇し、親は子どもの数より質を重視する傾向が出てきたためである。これが社会主義時代との根本的な差異である。

子育てに関して、民主主義時代において、家族の理想的な子どもの数が減少しているが、その原因は、充実した子育てのためのコストが高くつくため、親は子どもの数を増やすより、限られたお金でより充実した教育を子どもに与えることを選択するようになったからである。この選択には、子どもに家系の継承者としての役割を期待するよりも、子どもの成長とその教育を重視している傾向が見える。このような親の考え方が、民主主義期モンゴルの都市家庭の一部に子ども中心主義を広めていることは間違いない。

つまり、「子ども中心主義」が民主主義時代に形成された。しかし、現在「子ども中心主義」まだモンゴル国都市家族の普遍的な特徴になっていないのである。

#### 1-5. 非親族を排除したのか

社会主義時代を継ぐ民主主義時代では、社会主義世代と違って、民主主義世代は親族を家族から排除するようになった。社会主義時代よりも核家族の傾向が強くなっていることは非親族を排除する事でもある。

#### 1-6. 社交が衰退し、プライバシーが成立したのか

民主主義時代に入って近隣ネットワークが崩壊しつつある。ゲル地区からアパートに入る、あるいは旧アパートから新築アパートに入ると従来の近隣ネットワークが壊れ、公共領域と家内領域の完全な分離、または貧富の差により新しい近隣ネットワークの再構築が難しくなる。つまり家族は非親族を排除する上で、近隣ネットワークから離脱するようになっており、社交が衰退しているといえる。

ウランバートルの住宅の事情をみると、ゲル地区はハシャーを単位に周囲から隔離されている。社会主義時代が崩壊する時、政府がいち早く福祉機能を捨てた。それによって、本来家族に属される家事、炊事、育児などが家族に戻ったことを第一章第二節の2で明らかにした。政府から家族への強いイデオロギーの影響も弱まった。それによって、ゲル地区の家庭がプライベートなところとなっているのである。

#### 1-7. 家族の集団性が強化されたのか

第六章第二節の1で明らかにしたように、ほとんどの回答者は、家族は個人の人生の中で一番貴重なものであり、結婚したら家族のために人生の半分を犠牲することも当たり前であると考えている。20代と30代のアンケート調査回答者の9割以上が、「豊かにせよ貧しいにせよ家族を人生の中の一番の宝物である」という質問に賛成している。これは、家族を掛け替えのないものとして位置づけていることのあらわれである。また、家族とは家族成員の団欒の場であるという考え方が最も多くの回答者に認められた。家族を人生の中の一番大事なものと考え、人間社会では欠かせないものと思う回答者が多い。

20代と30代の家族は、家族の集団的な行為であるレジャー活動を、40歳以上の家族より頻繁的に行っている、毎日の団欒の場として夕食を一緒に食べて、夏に家族で旅行することも多い。夫婦間のコミュニケーションもよく行っており、夫婦の一体感が強いことが示されている

以上から、民主主義時代には社会主義時代よりも家族の集団性が一層強化されたと考えてよい。

#### 1-8. 核家族であるかどうか

第五章第二節で親族ネットワークを分析した結果をみると、親と同居する回答者の比率が低く別居する人が多いことがわかった。その理由として「家族に問題が起こる」とか「負担をかける」などがあって、別居するのが望ましいと答えた人も多い。社会主義時代に比べて、家族以外の親族でも世帯に受け入れなくなり、世帯から排除している。民主主義時代のモンゴルの都市家族に核家族への志向が強まっているといえる。

以上の検証の結果をまとめると、次の通りとなる。

- ① 公共領域と家内領域が分離した。
- ② 夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業が形成されていない。
- ③ 家族成員間は強い情緒的關係で結ばれていない。
- ④ 子ども中心主義ではない。
- ⑤ 非親族が排除されている。
- ⑥ 社交が衰退しつつあり、プライバシーが成立しつつある。
- ⑦ 家族の集団性が強化されている。
- ⑧ 核家族。

## 2. 民主主義時代家族の特徴

上の検証の結果から、民主主義時代の家族の特徴は以下の通りである

- I. 家内領域と公共領域は分離された。
- II. 夫婦ともに公共領域に進出している。
- III. 婚姻は愛情により結ばれている。
- IV. 子ども中心主義が形成している。
- V. 非親族を家族から排除した。
- VI. 社交が衰退しつつある。プライバシーが成立しつつある。
- VII. 家族の集団性が一層の強化されている。
- VIII. 核家族の志向がある。

## 第三節 理論的再検討

### 1. モンゴルの都市家族は近代家族である

#### 1-1. 仮説検証の結果

以上、社会主義時代と民主主義時代の家族の特徴を検証した結果を表 7-1 に示す。

	近代家族	社会主義時代	民主主義時代
I	家内領域と公共領域との分離	家内領域と公共領域の分離は形成されていない。	家内領域と公共領域は分離された。
II	夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業	夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業が形成されていない。	夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業が形成されていない。
III	家族構成員相互の強い情緒的関係	家族構成員間は強い情緒的関係で結ばれていない。	家族構成員間は強い情緒的関係で結ばれていない。
IV	子ども中心主義	子ども中心主義ではない。	子ども中心主義ではない。
V	非親族の排除	非親族が排除されている。	非親族が排除されている。
VI	社交の衰退とプライバシーの成立	社交が衰退していない。プライバシーが成立していない。	社交が衰退しつつある。プライバシーが成立しつつある。
VII	家族の集団性の強化	家族の集団性が強い。	家族の集団性が強化されている。
VIII	核家族	核家族。	核家族。

社会主義時代の家族から民主主義時代の家族への変容からわかるのは、I、IV、VI、VIIIは変化がある特徴であり、II、III、V、VIIは一貫した特徴である。二つの時代の家族の特徴を、本研究での仮説とした「近代家族」の特徴で検証してみた結果、民主主義時代の家族の特徴は仮説としての「近代家族」の特徴と似ている点が多いことがわかる。

では、社会主義時代と民主主義時代の家族を、仮説の「近代家族」と考えることができるだろうか。「近代家族」の性質をもつといえるだろうか。結論からいうと、それはいえない。社会主義時代には、職場と生活の場が分離して、家族が愛情により結合しても、料理・育児、またはコミュニケーションは家族以外の集団である幼稚園や公共食堂などの福祉施設、または近隣ネットワークにより満足されている。子どもは社会の将来の労働力として大切にされているが、家族の中心的な存在として、母親の愛情をたっぷり受けることが社会主義時代にはなかった。したがって「近代家族」が形成されたとは言えないのである。

一方の民主主義時代の家族は、完全な性別役割分業が成り立っていないため「近代家族」の特徴が一部備わっていない。したがって、仮説とされている「近代家族」の特徴がモンゴルの都市家族に完全に形成されているとは言えない。

本論文で議論している社会主義時代の家族と民主主義時代の家族は本論文の仮説である資本主義近代社会で形成された「近代家族」論とは、産業化のパターン・文化・伝統・歴史が異なっているため、従来の「近代家族論」は、モンゴルのような社会主義国によって政治的・制度的に作られ、体制移行を経験した国家の家族を論じるための理論とはなり得ない。

### 1-2. 社会主義時代、民主主義時代に形成した家族の特徴

筆者のまとめた社会主義時代と民主主義時代の近代に形成した家族をまとめると、表 7-2 の通りである。

表 7-2 社会主義時代、民主主義時代に形成した家族のそれぞれの特徴

	社会主義時代に形成された家族の特徴	民主主義時代に形成された家族の特徴
I	生活の場である家と働く場である職場が形成された。	家内領域と公共領域が分離した。
II	夫婦はともに公共領域に進出した。	夫婦ともに公共領域に進出している。
III	婚姻は愛情により結ばれていた。	婚姻は愛情により結ばれている。
IV	子どもが大切にされているが、家族の中心的な存在ではない。	子ども中心主義が形成している。
V	非親族を家族から排除した。	非親族を家族から排除した。
VI	社交が衰退していない。プライバシーが成立していない。	社交が衰退しつつある。プライバシーが成立しつつある。
VII	家族の集団性が強い。	家族の集団性が一層の強化されている。
VIII	核家族の志向がある。	核家族の志向がある。

表 7-2 に挙げている特徴を見ると、社会主義時代に形成した都市家族が政治体制移行前後で変化を遂げていることが明確である。

### 1-3. モンゴルの都市家族は近代家族である。

本研究の前提として、すでに「モンゴルの近代化は社会主義化と同義で進められた」（小長谷 2004：14～18）、「ロシアと中国の間に挟まれたモンゴルは社会主義を選んで近代化の道を歩きました」（小長谷 2005：20）などと、モンゴルの社会主義時代を近代化とみなしている見解が存在することを序論で紹介した。また野々山は、ハンガリーが社会主義近代化を経験した国と認識していた（野々山 2009：93）。ここでは社会主義近代化を経験したモンゴルの社会主義時代の家族を社会主義的近代家族と定義する。ここで述べている近代家族は社会主義近代における家族という意味での家族を指している。

これと同様に、民主主義時代における家族を民主主義的近代家族と定義する。民主主義的近代家族は民主主義へ転換してから現れる家族の在り方を指していると定める。つまり 1992 年に民主主義憲法が定められてから始まった民主主義時代の家族をいう。

近代家族を検証したうえで、この二つの時代の家族を定義するのは、社会主義的近代家族と民主主義的近代家族は仮説モデルの近代家族という意味を含めておらず、単に、社会主義時代と民主主義時代に成立した家族のことを言っていることを明らかにするために他

ならない。

そして、ここで定義されている「社会主義的近代家族」と「民主主義的近代家族」は都市家族にのみ成立する。モンゴルの都市家族と遊牧地域の家族は、家族様式によって家族の在り方に差が大きいので、モンゴル国全般で成立すると言えない。

## 2. モンゴル国の都市家族の今後の行方は個人化へ進まない

家族の行方が「個人化」へ向かうことについて序章で述べたように、日本における「個人化」の議論は目黒の『個人化する家族』をもって嚆矢とした。目黒は、家族が個人のニーズにより作られ、個人の生き方を支援する個人化へ進むと述べている。その理由として、家族は女性の生き方の妨げになる要因から支援する要因になることを挙げている。目黒の言う家族が個人化する家族が成り立つための条件は、以下の通りである。

①性が経済的に自立すること。女性の自立必要な条件は核家族化、女性の脱親期の出現、男女平等原理の法制化、教育レベルの向上、女性雇用労働者の増加、夫婦の役割についてのイデオロギーの変化（目黒 1988：124～141）。

②家族の機能が縮小して、社会的支援サービスが充実すること。それを支えるのは技術の革新の動向と家事産業の発達と家内領域である家族に対して国家が家族を支援する政策を打ち出すことである（目黒 1988：102～103）。

落合『21世紀家族へ』では、21世紀の家族は個人の選択の自由であり、社会は今の家族を単位するものではなく、個人を単位とする社会になると論じて、その変化の要因は、女性の脱主婦化、離婚、同棲、非嫡出子出生、出生率などの人口学的変化である第二次人口転換であると見ている（落合 2008: 230、256）。

山田は、家族としての拘束性の低い家族の枠内での個人化と、それがさらに進化してからの家族が、選択可能で解消可能な本質的個人化へ進むと論じている（山田 2004b：345）。それに対し望月は、湯沢のソ連の家族についての研究を事例にして、1910年代にソ連は家族という制度が消滅させて、維持しないようにした試みが失敗に終わり、家族制度を社会的に維持することが不可欠であると検証して、日本の家族も社会の機能を分担するのに不可欠な制度であり、その機能に対する信頼が崩壊しない限り制度としての家族は解消しないと論じた（望月・森岡 1999：181～182）。そして家族の行方は、

- ①産業化の進行に伴い、家族の機能と他の社会機関との相互依存が拡大して、多様化する。
- ②女性の経済的自立が高くなり、生活のために結婚して離婚できない女性が少なくなり、情緒的な結合の重要性が高まること。
- ③個人化が深まる。女性の労働力率の上昇、自立を求める女性が増加し、男性は女性の

個人化の支援をする。その過程で家族の情緒的な結合がふかまる。

との見通しを立てた（望月・森岡 1999：180～185）。

上の個人化理論の中の、目黒の言う家族が個人化する家族が成り立つための条件は、女性が経済的に自立することである。女性の自立に必要な条件は核家族化、女性の脱親期の出現、男女平等原理の法制化、教育レベルの向上、女性雇用労働者の増加、夫婦の役割についてのイデオロギーの変化（目黒 1988：124～141）などが必要となる。これをモンゴルの社会主義時代から民主主義時代への変化に照らしてみると、モンゴルは社会主義時代には男女の平等な労働が強制的に実現されており<sup>56</sup>、第二章第一節の 2-1 に証明しているように、女性の公共領域への進出は実現され、労働力率が上昇する趨勢にあった。社会主義時代の男女の平等性は社会主義の法律とイデオロギーにより強制的に完成したものである。

第二章の冒頭にも論じたように、モンゴルの社会主義以前の家族には、男女の性別役割分業があった。その後の社会主義時代になってから、憲法で男女の社会労働生活における平等を、家族法で家族の内部の家事と育児に従事する平等をそれぞれ定めた。日本の今後の家族の行方となる脱主婦化と女性の自立化は、モンゴルではすでに社会主義時代に実現されたことになる。ただし、これも社会主義の法律とイデオロギーをもって強制的に実現されたものである。

夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業が崩壊して、家内領域にいるはずの女性が社会進出し続けることは、家内領域が閉じた空間ではなくなり、家内領域と公共領域の分離とつながる。すでに述べた目黒の論じている個人化する家族が成立する条件とは、産業化が発展し、技術が革新され、社会福祉が充実されることにより、家事、介護、育児、炊事などが公共分野に入るにつれて、近代家族の家にいるべき女性が社会に進出し、「私」が「公」に含まれるようになることである。つまり、近代家族論者の論じている未来の公共領域と家内領域との関係は、モンゴルの社会主義時代に現れたところとよく似ているということである。モンゴルの社会主義時代は、福祉が充実していた時代であったが、その後の民主主義ならびに市場経済への移行により、政府が福祉機能を放棄して、社会主義時代の家族内部まで浸透した管理を止めた。この結果、①「私」が「公」から離れ、②子どもを社会化する機能が家族に戻った。この過程は、日本から見れば日本の近代家族の形成プロセスとは異なっており、むしろ逆戻りになる。

上に述べたように望月と森岡は、資本主義社会における女性の労働力率が上昇し、自立を求める女性が増えると予測して、昔は女性が家族内の存在として男性の個人化を支えていたが、「役割分担の弾力化を担うことにより女性の個人化を支援する立場に、男性が立つ

---

<sup>56</sup> 「憲法第 84 条、モンゴル人民共和国の婦人は、政治・経済・社会・行政管理・文化の全部門において男子と同一の権利を享有する。すなわち、この権利は、婦人に労働・休憩・社会保険・教育の条件を男子と平等に与え、母子の利益を国家が守り、多数の子を持つ母に援助を与えて且つ産院・托児所・幼稚園を拡張することによって保障される」（モンゴル人民共和国新憲法（下）1961：26）



ている。個人化の中で家族としての共同性を実現するために、男性が女性とともに責任を負おうと努力することによって、夫婦の情緒的結合は一層確かなものとなることだろう」と述べた（望月・森岡 1999：185）。ここで述べられている女性の自立のモンゴルにおける現状は、すでに述べたように、この段階の最中にある。モンゴル人は、女性が男性を支えるべきであるという考え方をもっていると同時に、社会主義から民主主義時代にかけて役割分担を在宅にいる時間と生活の様式により調整している。これはモンゴルの都市家族が、社会主義時代から民主主義時代まで経験していることである。

夫婦関係の面からみると、夫婦間の情緒的な関係は、すでに社会主義時代に都市家族に成立していた。人民革命党の干渉が家内領域にまで浸透したために離婚は困難だったが、未婚出産、または婚前性交渉、出産と未婚出産に対して寛容な態度を持っていて、所謂「個人化」の特徴が表れている。民主主義時代には、市民は婚前性交渉、未婚出産に対して依然として寛容な態度を持っている。社会主義時代には離婚すると評価が下がるので安易に離婚できなかったが、民主主義時代に入ると、家族内部の諸事情に対する政府と人民革命党の制限がなくなり、離婚率と未婚出生率がともに増加した。これを落合のいう「個人化」へ進行する証拠とすると、モンゴルはすでに社会主義時代から個人化へ進行していたが、民主主義時代の現在、家族内部の諸事情に対する政府と人民革命党の干渉や制限がなくなり、個人を単位とする社会への進行が加速していることになる。

また、第六章第三節で議論した通り、民主主義世代である 20 代と 30 代は、社会主義世代である 40 歳以上の回答者よりも個人の生きがいを重視する強い志向を持っているが、いずれの年代も家族を大切に思う家族イデオロギーを持っている。個人の生きがいを重視する前提は家族を大事にすることである。

以上の議論を個人化理論にそって整理すると、

- ①性別役割分業からの離脱、女性の経済的な自立は、男女の労働力率が高いモンゴルでは社会主義近代化以来成立していた。
- ②家族の機能が社会の他の機能により補足されることは、「私」が「公」に含まれることである。それは、モンゴルでは社会主義時代に制度的に作られたことであり、民主主義時代になって政府が「公」に含まれていた「私」を切り捨てたことである。仮説と対照すれば、それは所謂「個人化する家族」から「近代家族」への逆戻りである。
- ③情緒的面から見ると、夫婦が愛情により結びつくことは社会主義時代からのことであり、婚前性交渉と未婚出産に対する寛容な態度も社会主義時代から存在する価値観である。
- ④個人の生きがいを重視しているが、家族を大事にすることがその前提である。

したがって、「近代家族」とそれにつづくことされる「個人化する家族」という推移はモンゴルでは成立していないことがわかる。これは、モンゴルが社会主義時代と民主主義への

移行を経験したことに起因しているのである。

### 3. 民主主義時代におけるモンゴル国の都市家族の生成要因と家族の今後の行方

民主主義近代家族の持つ特徴の生成要因とその今後を明らかにする際、本研究の仮説として用いた近代家族の諸特徴、つまり、①家内領域と公共領域の分離、②家族成員相互の強い情緒的關係、③子ども中心主義、④男は公共領域・女は家内領域という性別分業、⑤家族の集団性の強化、⑥社交の衰退とプライバシーの成立、⑦非親族の排除、⑧核家族のそれぞれが、いつ成立したかで分類して論述する。

#### 3-1. 社会主義時代でも民主主義時代でも成立した特徴および今後の行方

「核家族の志向がある」と「非親族を家族から排除した」は、社会主義時代でも民主主義時代でも成立した特徴である。

社会主義時代になる前から、モンゴル人の家族は「核家族」で生活する志向がある。遊牧生活をするモンゴル人の相続制度は、結婚する時に相続が成立し、末子以外の子どもは親世帯から離れて独立するのである。社会主義の経験者である40歳以上の回答者たちには、結婚したら核家族で住む志向がある。社会主義時代には親族間の助け合う意識が強いので、都市に来る親戚を受け入れることもあるが、結婚した子どもは独立するべきであり、結婚したら親元から離れるべきであるという意識を強く持っている。

一つのゲルに住むのが一つの家族と見るモンゴル人の家族観で見る核家族は、社会主義時代の都市化過程を経験する前と経験した後では大きく異なっている。遊牧生活を営んでいる人々にとって、生業をする単位、育児・家事の単位はホト・アイルであり、核家族は居住形態だけだった。社会主義工業化と都市化につれて、生産生業が家族から離れ、自らの意志で運命と出会いと結婚して、核家族を作るようになった。核家族は育児、家事の単位となった。民主主義時代において、家族の集団性が強化され、社交が衰退するにつれて、家族が家族以外の親族を受け入れることができなくなり、核家族で住む意識が強まったのである。

したがって、住居形態は同じ核家族であっても、核家族の機能は社会主義近代においてモンゴルの家族に定着し始めたものである。

社会主義時代以前、富裕層に召使いがいた。召使いは自分の財産を持たず、生業の面では富裕層に依存していた。召使いが移動する際に主人と一緒に移動するが、自らのゲルに住んでいた。これを近代家族論の知見で分析すると、召使いはその主人である富裕者と同じ家族の者ではないことになり、富裕層の家族には召使いという非親族は含まれていなかったことになる。本章第一節で、最多で20人ぐらい、少ない場合でも10人以上が暮らしていた家族があったことを見た。この大集団は非親族を受け入れたものではなく、全員が親族であった。民主主義時代では、親族を家族から排除するようになった。社会主義時代よりも核家族の傾向が強くなっている。そのため、非親族の排除も民主主義時代の家族の

特徴となった。今後の核家族の志向の強まることが非親族を家族から排除することでもある。

### 3-2. 民主主義時代のみ仮説が成立した諸特徴の生成要因および今後の行方

「家内領域と公共領域が分離した」、「子ども中心主義が形成している」、「社交が衰退しつつある、プライバシーが成立しつつある」は民主主義時代に入ってから形成された特徴である。これらが形成された一番の要因は、家族が担っていた家事や育児などが、福祉機能に替えられて社会化されたことと、国家の管理が社会主義イデオロギーにより家族の内部まで浸透していたことである。社会主義の崩壊により一党統制体制が崩壊して、市場経済への移行期に国家が財政困難に陥ったため、政府が福祉機能を切り捨てたことにより、一旦は社会化された機能が再家族化されたのである。

社会主義時代には政府が担っていた子どもの社会化の機能が、政府の機能の縮小により家族に返還されて、国家の子どもから家庭の子どもに変わった。子どもの数を夫婦が選択できるようになり、親は子どもの数を重視する考えから子どもの質を重視する考えを持つようになり、限られたお金でより良い教育を受けさせるように変わった。今後は子ども中心主義が民主主義時代のモンゴルに定着するといえる。

再家族化された機能が、技術の革新などを通じての家事や食事の市場化による機能の補足を、社会主義時代のように行政的手段によって国家の意志として家族に強く押し付けない限り、社会主義時代のような状態には戻らない。したがって、これらの特徴はこれからも続くと考えられる。

「社交が衰退しつつある、プライバシーが成立しつつある」が民主主義的近代家族に成立した原因は、家内領域が公共領域から完全に分離していることを背景として、近隣との関係が弱まっている、または市場経済時代に私有化が進み社会主義時代の平等社会から格差社会に変わり、人々の互助の前提である信頼がなくなったためである。市場経済が進むと同時に貧富の差も大きくなりつつあるので、家族と近隣ネットワークとの関係は弱まりつつある。家族の居住状況と社会主義イデオロギーによって管理されていた家内領域の諸事情が、社会主義の崩壊によって手放された。よって、家族にはプライバシーが成立しつつあるといえる。

### 3-3. 社会主義的近代家族より強まった民主主義的近代家族の特徴の生成要因および今後の行方

「家族の集団化が一層の強化されている」と「婚姻は愛情により結ばれている」は民主主義時代のほうが社会主義時代より強まった特徴である。

民主主義時代には「家族の集団性が一層強化した」。その要因は、まず、公共領域と家内領域の完全な分離が家族の集団性を強化したこと、また、非親族の排除も家族の集団性を強化した。筆者が導き出した、公共領域と家内領域はこれからも分離し、非親族を家族か

ら排除する状態が保たれるとの検証結果に基づけば、家族の集団性も強化されている状態を保つのではないかと考えられる。

「婚姻は愛情により結ばれている」は民主主義時代のほうが社会主義時代より増していると主張する理由は以下のとおりである。筆者は、社会主義時代の家族の特徴をまとめた際に、「家族成員間はずよい情緒的關係で結ばれている」ことを検証した結果を、「婚姻は愛情により結ばれる」と総括した。つまり恋愛結婚は社会主義以前とは異なる特徴である。しかし、女性の社会進出と集団的育児によって母親と子どもの間に溝ができたため、母性愛が社会主義時代に形成されたとは言えない。民主主義時代には、恋愛結婚は依然として普遍的であり、子育て機能の再家族化により母親が子育て役割を担うようになったため、母性愛の規範が民主主義時代に成立した。結婚してから性交渉を持ち子どもを出産するという「近代家族」の特徴である「家族成員間の情緒的な関係」の内容は、社会主義にも民主主義時代にかけても認められない。今後も個人の恋愛感情が重視され、非嫡出子を排除する法律がなくなったために結婚出生率が減少し離婚率が上昇することから、人々が婚姻を選択する時にはさらに一層情緒的な選択がなされるのではないかと推定する。

#### 3-4. いずれの時代の近代家族においても仮説が成り立たない項目の生成要因および今後の行方

仮説としての「近代家族」の特徴の一つ「夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業」はいずれの時代のモンゴルにおいても看取されない。もともとモンゴル人には性別役割分業があった。日本ではこれからのこととされる女性の自立化や労働力率の上昇は社会主義時代のモンゴルではすでに強制的に実現されていたのである。民主主義時代には国家による強制的な男女共働きはなくなったが、民主主義と市場経済への移行期にモンゴル国は経済困難に陥り、このことが女性を市場に押し出した。第二章第三節で明らかにしたように、民主主義時代には専業主婦が出現したことに注意しなければならない。この、民主主義時代の専業主婦出現は、モンゴルの都市においてはいまだに普遍的な現象ではない。確かに1992年を底とする移行期の経済的困難に直面したモンゴルでは、都市家族の女性が労働市場に押し出された。しかし、1994年にプラス成長に転じて以降、2009年にマイナス成長を経験した以外は、順調な発展を継続して<sup>57</sup>、かつての経済的困難を脱したのであって、移行期の経済的困難がもたらした貧困を理由として労働市場に出て行った女性が家庭に回帰することは十分に想定される。遊牧生活が生んだ性別役割分業意識が根強く存在している、または子どもを中心に位置づける家族観の高まりと相まって、今後のモンゴルの都市部では男女役割分業が形成されるのではないかと予測する。

#### 4. モンゴルの21世紀家族の特徴

以上の議論の結果をまとめると、来たるべきモンゴル国の21世紀家族は次のような特徴

<sup>57</sup> 日本国外務省ホームページモンゴル基礎データ、

を表していると思われる。

- I. 家内領域と公共領域は完全に分離する。
- II. 夫は公共領域・妻は家内領域という性別分業が形成される。
- III. 家族成員は愛情で結ばれる。
- IV. 子ども中心主義になる。
- V. 非親族を排除する。
- IV. 家族の集団性が強化される。
- VII. 社交の衰退とプライバシーの成立が進む。
- VIII. 核家族である。

ただし、「V. 家族成員は愛情で結ばれる」には、落合の「近代家族論」における愛情、結婚、性交渉、子どもの一体化は含まれていない。「個人化を単位とする社会」へ進む要因とされている「第二次の人口転換」の内容である未婚出生率、離婚率の増加はモンゴルの21世紀家族も経験することであろう。

以上のようなモンゴルの21世紀家族の特徴がまとめたが、社会主義から民主主義への体制移行を経験した国家の、民主主義的21世紀家族は、従来の近代家族論が明らかにしてきた「近代家族」の特徴を備えるが、それは落合の「近代家族論」でいう「21世紀」という一時的、歴史的に表れる特徴ではなく、社会主義時代と民主主義時代の歴史の各段階で徐々に形成され、21世紀に入って「近代家族」の特徴を表すものであると考えるものである。

## 結論

モンゴルの社会主義時代の都市家族、そして民主主義時代の都市家族は、仮説として設定した「近代家族」ではない。それは、モンゴル国の歴史と文化を色濃く反映した近代家族の姿である。従来から知られた近代家族論が依拠していた国や地域、政治・経済体制とは異なる土台の上に成り立ってきている家族である以上、従来の近代家族論が示してきた「近代家族」とは異なる総括的議論が求められる。

モンゴル国は、性別役割分業と核家族居住を内包する遊牧文化を伝統として基底に持っている。20世紀初頭には、それまでの封建主義を脱して社会主義に移行し、人民革命党の単一支配と指導の下で社会主義的近代化に邁進してきた。その社会主義が20世紀末に崩壊し、民主主義・市場経済へ移行した。それまでの国家指導理論であり、国民・家庭に深く干渉してきた社会主義的イデオロギーを否定し、民主主義と市場経済に基づいて社会主義的近代国家の民主主義的再構築、社会主義的近代化の民主主義的再構築に取り組んできている。したがって、モンゴルの今後の家族の在り方は仮説の「近代家族」が持つ特徴を備える方向へ向かうものと予測される。しかしそれは、本論文で仮説として設定している従来から説かれてきた「近代家族」とは同じである考えることはできない。また、モンゴルに限っていえば、「近代」という一時代に限定的に存在した家族のあり方として考えることも不可能である。なぜならば、仮説の「近代家族」はモンゴルの21世紀家族のあり方を指し示す部分があるからである。

もう一つ、従来の近代家族論が家族の将来を「個人化する家族」に求めていることも、モンゴルの例に則して考えると、批判的に受け止める必要がある。社会主義時代のモンゴルの都市家族には、「個人化する家族」の要素が多く含まれていた。民主主義時代には「個人化する家族」の一部の要素と仮説の「近代家族」の特徴の一部が含まれていた。そして、今後の21世紀家族の行方が仮説の「近代家族」へ変容すると考えられるこの一連のプロセスは、従来から展開されてきた近代家族に関する研究結果と正反対の結果となるのである。

最後に、本論文の序章に設定していた本論文のリサーチクエスチョンに答えると、まず社会主義的近代家族の特徴は、

- I. 生活の場である家と働く場である職場が形成された。
- II. 夫婦はともに公共領域に進出した。
- III. 婚姻は愛情により結ばれていた。
- IV. 子どもが大切にされているが、家族の中心的な存在ではなかった。
- V. 非親族を家族から排除した。

- VI. 家族をめぐる近隣ネットワークが発達していた。
- VII. 家族の集団性が強かった。
- VIII. 核家族の志向があった。

かつて遊牧社会の中で作られて、社会主義的近代化を経験した民主主義的近代家族の特徴は以下の通りである。

- I. 家内領域と公共領域は分離された。
- II. 夫婦ともに公共領域に進出していた。
- III. 婚姻は愛情により結ばれている。
- IV. 子ども中心主義が形成している。
- V. 非親族を家族から排除した。
- VI. 社交が衰退しつつある。プライバシーが成立しつつある。
- VII. 家族の集団性が一層強化されている。
- VIII. 核家族の志向がある。

以上の特徴のうち、「VIII 核家族の志向」は、モンゴル人の遊牧生活由来の特徴である。遊牧モンゴル人は、核家族を構成し、血縁や地縁でホト・アイルを組んだ。育児、家事、生業などの機能はこのホト・アイルにあったが、社会主義時代からは核家族が育児、家事の単位となり始めた。

社会主義的近代家族に成立した特徴は、「II 夫婦ともに公共領域に進出していた」、「V 非親族を家族から排除した」である。社会主義成立とともに階級と男女の地位の不平等を撲滅する時に憲法に定められたことによって成立したものである。

民主主義的近代家族に成立した特徴は、「I 家内領域と公共領域の分離」、「IV 子ども中心主義が形成している」、「VI 社交が衰退しつつあるとプライバシーが成立しつつある」である。

社会主義的近代家族に成立して民主主義的近代家族で一層強化された特徴は、「III 婚姻は愛情により結ばれている」と「VII 家族の集団性が一層強化されている」である。

そして、資本主義・民主主義を迎えての「21世紀家族」の行方は以下である。

- I. 家内領域と公共領域は完全に分離する。
- II. 夫は公共領域・妻は家内領域という性別分業が形成される。
- III. 家族成員は愛情で結ばれる。
- IV. 子ども中心主義である。
- V. 非親族を排除する。

- IV. 家族の集団性が強化される。
- VII. 社交の衰退とプライバシーの成立が進む。
- VIII. 核家族である。

日本ではこれからのこととされる女性の自立化や労働力率の上昇が、モンゴルでは社会主義時代にすでに強制的に実現されたのである。今後も高度経済成長が期待されるモンゴルでは、男女平等意識をつくりだした社会主義が崩壊し、遊牧生活が生んだ性別役割分業意識が根強く存在しているため、21世紀のモンゴルの都市家族では、性別役割分業が形成されるのではないかと予測する。

北東アジアにおける家族変動の一端、即ち社会主義近代化と都市化、脱社会主義化を経験した牧民社会における都市家族の変動理論とは、社会主義的近代家族、民主主義的近代家族、そして将来の21世紀家族は「個人化する家族」の一部の特徴を含みつつ、それらが漸進的に強化されながら、徐々に本論文の仮説である近代家族の特徴を表す家族へ変容する。この一連のプロセスは、繰り返しになるが、従来展開されてきた近代家族に関する研究結果と正反対の結果となるのである。

モンゴルの現在の都市社会に現れた、以上の諸特徴を含んだ家族は歴史的なもので、時代とともに変容しつつある。家族は崩壊するのではない。社会主義的近代家族は社会主義時代のイデオロギーによって作られたものである。そのように強制的に作られた家族が民主主義時代になって変容し、遊牧生活で生まれたモンゴル人の根強い意識が再び復活して、新しい形態を作り続ける。



УЛААНБААТАР ХОТЫН ИРГЭДИЙН  
ГЭР БҮЛИЙН АСУУЛГА СУДАЛГАА

*Сайн байна уу? Танд энэ өдрийн мэнд хүргэе. Намайг Урлаг гэдэг. Япон улсын Шиманэ их сургуульд Нийгмийн ухааны докторантурт суралцдаг. Өөрийн судалгааны ажлаа Монгол улс дахь 1990-ээд оны ардчилсан хувьсгалын дараа гэр бүлийн тухай ойлголтонд гарсан өөрчлөлтийг үнэлэх зорилгоор явуулж байна. Таныг энэхүү судалгааг үнэн зөвөөр хариулан бидний ажилд туслана гэдэгт итгэлтэй байна.*

*Дараах асуултуудад өөртөө тохирох хариултыг сонгон бичнэ үү.*

№1. Таны хүйс \_\_\_\_\_ 1. Эрэгтэй  
2. Эмэгтэй

№2 -1. Таны нас \_\_\_\_\_

2-2. Таны эхнэр/нөхрийн нас \_\_\_\_\_

№3-1. Таны төрсөн нутаг хаана вэ? \_\_\_\_\_

3-2. Хэрэв Улаанбаатар биш бол хэзээ Улаанбаатарт нүүж ирсэн бэ?  
\_\_\_\_\_ он

№4. Таны оршин суугаа дүүрэг \_\_\_\_\_ дүүрэг

№5-1. Таны амьдардаг орон гэр нь 【       】

- |           |              |
|-----------|--------------|
| 1. Гэр    | 3. орон сууц |
| 2. байшин | 4. хаус      |

5-2. Тэр нь таны 【       】

- |                          |                             |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1. Өөрийн эзэмшлийн      | 4. Ах, дүү төрөл төрөгсдийн |
| 2. Эцэг, эхийн эзэмшлийн | 5. Бусад _____              |
| 3. Түрээсэлсэн           |                             |

№6-1. Таны боловсролын түвшин 【       】

- |                   |                               |
|-------------------|-------------------------------|
| 1. Боловсрол гүй  | 5. Тусгай мэргэжлийн сургууль |
| 2. Бага боловсрол | 6. Дээд(Бакалавр)             |
| 3. Бүрэн бус дунд | 7. Дээд(Магистар)             |
| 4. Бүрэн дунд     | 8. Дээд(Доктор)               |

6-2. Таны эхнэр/нөхөрийн боловсролын түвшин. ( гэрэлсэн хүмүүс хариулаарай) 【       】

- |                   |                               |
|-------------------|-------------------------------|
| 1. Боловсрол гүй  | 5. Тусгай мэргэжлийн сургууль |
| 2. Бага боловсрол | 6. Дээд (Бакалавр)            |
| 3. Бүрэн бус дунд | 7. Дээд (Магистр)             |
| 4. Бүрэн дунд     | 8. Дээд (Доктор)              |

№7. Таны гэр бүлийн байдал 【       】

- |                            |                             |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1. Гэрлээгүй               | 4. Гэрлэсэн(Дахин гэрлэлт)  |
| 2. Хамтран амьдардаг       | 5. Цуцалсан                 |
| 3. Гэрлэсэн(Анхны гэрлэлт) | 6. Өрх толгойлсон(бэлэвсэн) |

№8. Та хэдэн настайдаа анх гэрлэсэн вэ? \_\_\_\_\_ нас

№9-1. Та гэртээ хэдүүлээ амьдардаг вэ? \_\_\_\_\_ хүн

9-2. Та хэн хэнтэйгээ байнга хамт амьдардаг бэ? Доорхи хариултаас хамтран амьдардаг хүмүүсээ сонгоно уу.

- |                                     |                        |
|-------------------------------------|------------------------|
| 1. Нөхөр/ эхнэр                     | 10. Өөрийн эмээ        |
| 2. Гэрлээгүй хүүхэд ( _____ хүүхэд) | 11. Хадам аав          |
| 3. Гэрлэсэн хүү ( _____ хүү)        | 12. Хадам ээж          |
| 4. Гэрлэсэн охин ( _____ охин)      | 13. Хадам өвөө         |
| 5. Хүүхдийн нөхөр/эхнэр             | 14. Хадам эмээ         |
| 6. Ач/зээ                           | 15. Өөрийн ах /дүү     |
| 7. Өөрийн аав                       | 16. Хадам ах /дүү      |
| 8. Өөрийн ээж                       | 17. Үүнээс бусад _____ |
| 9. Өөрийн өвөө                      |                        |

№10-1. Таны одоогоор эрхэлж буй ажил. 【           】

- |                               |                           |
|-------------------------------|---------------------------|
| 1. Хувиараа ажилдаг           | 6. Төрийн бус байгууллага |
| 2. Төрийн албан хаагч         | 7. Цагийн ажилтан         |
| 3. Компанийн ажилтан, ажилчин | 8. Тэтгэвэрт гарсан       |
| 4. Малчин                     | 9. Ажилгүй                |
| 5. Оюутан                     | 10. Бусад _____           |

10-2. Таны эхнэр/нөхрийн одоогоор эрхэлж буй ажил. (гэрлэсэн хүмүүс хариулаарай) 【           】

- |                               |                  |
|-------------------------------|------------------|
| 1. Хувиараа ажилдаг           | Цагийн ажилтан   |
| 2. Төрийн албан хаагч         | Тэтгэвэрт гарсан |
| 3. Компанийн ажилтан, ажилчин | Ажилгүй          |
| 4. Малчин                     | Бусад _____      |

Оюутан

Төрийн бус байгууллага

№11. Таны төрж өссөн гэрт та хэн хэнтэйгээ амьдардаг байсан вэ? 【           】

1. Аав ээж ба хүүхдүүд
2. Аав ээж хүүхэдүүд ба эмээ өвөө
3. Аав ээж хүүхэдүүд эмээ өвөө ба авга нагацнар
4. Бусад \_\_\_\_\_

№12. Та хэдэн хүүхэдтэй вэ? хүүхэдгүй бол 0 гэж бичээрэй.

\_\_\_\_\_ хүүхэд

№13. Та хэдэн хүүхэдтэй байвал хамгийн тохиромжтой гэж боддог вэ?

\_\_\_\_\_ хүүхэд

Доорхи 8 асуултанд гэрлэсэн хүмүүс хариулаарай. (№14~№22)

№14. Та хэрхэн гэрлэсэн вэ? 【           】

- |                      |                               |
|----------------------|-------------------------------|
| 1. Өөрсдөө танилцсан | 3. Танилцуулах албаар дамжсан |
| 2. Хүн танилцуулсан  | 4. Бусад _____                |

№15. Та гэрийн ажилд хэрхэн оролцдог вэ?

15-1. Гэрээ цэвэрлэх ба хувцас угаах 【           】

- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 1. 7 хоногт 6-7 удаа | 5. Улиралд 1-2 удаа |
| 2. 7 хоногт 3-5 удаа | 6. Жилд 1-3 удаа    |
| 3. 7 хоногт 1-2 удаа | 7. Ерөөсөө үгүй     |
| 4. Сард 1-3 удаа     | 8. Бусад _____      |

15-2. Оройн хоол хийх 【           】

- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 1. 7 хоногт 6-7 удаа | 5. Улиралд 1-2 удаа |
| 2. 7 хоногт 3-5 удаа | 6. Жилд 1-3 удаа    |
| 3. 7 хоногт 1-2 удаа | 7. Ерөөсөө үгүй     |
| 4. Сард 1-3 удаа     | 8. Бусад _____      |

№16. Та/таны эхнэр хүсээгүй жирэмслэсэвэл яах \ яаж байсан\ вэ? 【           】

1. Хүүхдээ төрүүлнэ
2. Хүүхдээ авахуулна
3. Бусад \_\_\_\_\_

№17. Танай гэр бүлд шийдвэр гаргахад хэн нь голлодог вэ?

17-1 Орон сууц, байр, машин худалдаж авах үед 【           】

- 1/Нөхөр 2/Эхнэр 3/Хамт 4/Бусад \_\_\_\_\_

17-2 Хэрэгцээний хүнсний бүтээгдэхүүн авахад 【           】

- 1/Нөхөр 2/Эхнэр 3/Хамт 4/Бусад \_\_\_\_\_

17-3 Амралтын Өдрийн Төлөвлөгөө 【           】

- 1/Нөхөр 2/Эхнэр 3/Хамт 4/Бусад \_\_\_\_\_

17-4 Хүүхдийн Хүмүүжил, Боловсролд 【           】

- 1/Нөхөр 2/Эхнэр 3/Хамт 4/Бусад \_\_\_\_\_

№18. Та аав ээжтэйгээ хамт амьдрахыг хүсдэг үү? 【           】

1. Тийм
2. Үгүй

№19. Танай гэр бүлийн гишүүд оройн хоолоо хамтдаа 【           】 иддэг.

- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 1. 7 хоногт 6-7 удаа | 5. Улиралд 1-2 удаа |
| 2. 7 хоногт 3-5 удаа | 6. Жилд 1-3 удаа    |
| 3. 7 хоногт 1-2 удаа | 7. Ерөөсөө үгүй     |
| 4. Сард 1-3 удаа     | 8. Бусад _____      |

№20. Таны гэр бүл хамтдаа үзвэр үйлчилгээ 【           】 үздэг.

- |                      |                  |
|----------------------|------------------|
| 1. 7 хоногт 1-2 удаа | 4. Жилд 1-3 удаа |
| 2. Сард 1-2 удаа     | 5. Ерөөсөө үгүй  |
| 3. Улиралд 1-2 удаа  | 6. Бусад _____   |

№21. Хөрштэйгээ хэр харьцаатай вэ? 【           】

- |   |                      |
|---|----------------------|
| 1. Сайн харьцаатай                      | 4. Тааруу харьцаатай |
| 2. Дунд зэргийн харьцаатай              | 5. Сайн танихгүй     |
| 3. Заримтай нь сайн, заримтай нь тааруу | 6. Огт танихгүй      |

№22. Таны аав ээжийн гэр хэр хол вэ? 【           】

- |  |   |
|--|---|
| 1. Хамт                                | 5. Машин, автобусаар нэг өдрийн дотор \хөдөө\ |
| 2. Нэг орон сууц, нэг хашаа, зэргэлдээ | 6. Үүнээс хол \хөдөө\                         |
| 3. Нэг хороололд                       | 7. Бусад _____                                |
| 4. Нэг хотод \Улаанбаатарт\            |   |

8. Очих боломжгүй

№23. Та аав ээжийн гэртээ хэр очдог вэ? 【       】

- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 1. Хамт амьдрадаг    | 6. Улиралд 1-2 удаа |
| 2. 7 хоногт 6-7 удаа | 7. Жилд 1-3 удаа    |
| 3. 7 хоногт 3-5 удаа | 8. Огт очдоггүй     |
| 4. 7 хоногт 1-2 удаа | 9. Очих боломжгүй   |
| 5. Сард 1-3 удаа     | 10. Бусад _____     |

Доорхи 3 асуултыг хүүхэдтэй хүмүүс хариулаарай. (№24~№26)

№24. Хүүхдээ хүмүүжүүлэхэд хэн нь голлодог вэ? Нэгээс илүүг сонгож болно.

- |            |                |
|------------|----------------|
| 1. Аав     | 4. Өвөө, эмээ  |
| 2. Ээж     | 5. Багш        |
| 3. Ах, эгч | 6. Бусад _____ |

№25. Таны хүүхдийг сургуульд орохоос өмнө хэн харж ханддаг байсан вэ? Нэгээс илүүг сонгож болно.

- |                                |                     |
|--------------------------------|---------------------|
| 1. Өөрсдөө \аав, ээж\          | 5. Хадам ах, эгч    |
| 2. Өөрийн аав ээж \өвөө, эмээ\ | 6. Саахалт хөрш     |
| 3. Ах, эгч нь                  | 7. Бусад садантөрөл |
| 4. Хадам аав, ээж              | 8. Цэцэрлэг         |

№ 26-1. Гэрлээд тусдаа гарсан хүүхэд байгаа юу? 【       】

- |         |         |
|---------|---------|
| 1. Тийм | 2. Үгүй |
|---------|---------|

26-2. Хэрэв байгаа бол хаана амьдардаг вэ? 【       】

- |  |   |
|--|---|
| 1. Хамт                                | 5. Машин, автобусаар нэг өдрийн дотор \хөдөө\ |
| 2. Нэг орон сууц, нэг хашаа, зэргэлдээ | 6. Үүнээс хол \хөдөө\                         |
| 3. Нэг хороололд                       | 7. Бусад _____                                |
| 4. Нэг хотод \Улаанбаатарт\            |   |

№27. Гэр бүлийн хувьд хамгийн чухал зүйл нь юу гэж боддог вэ? Нэгээс дээш сонгож болно.

- |                        |                  |
|------------------------|------------------|
| 1. Үзэл бодол ижил     | 6. Удам угсаа    |
| 2. Дур сонирхол ижил   | 7. Амьдрах ухаан |
| 3. Аав ээжийн санал    | 8. Боловсрол     |
| 4. Хайр сэтгэлтэй байх | 9. Бусад _____   |
| 5. Мөнгөтэй байх       |                  |

№28. Таны эхнэр /нөхөр/ ямагт таны аливаа асуудлыг сонсдог уу? 【       】

- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| 1. Байнга сонсдог | 3. Бараг сонсдоггүй |
| 2. Сонсдог        | 4. Огт сонсдоггүй   |

№29. Та эхнэр /нөхөртэйгээ/ аливаа асуудлыг ярилцдаг уу? 【       】

- |                   |                    |
|-------------------|--------------------|
| 1. Байнга ярьдаг  | 3. Бараг ярьдаггүй |
| 2. Хааяа ярилцдаг | 4. Огт ярьдаггүй   |

№30. Хүн юуны учир хүүхэд төрүүлдэг гэж боддог вэ? (зөв гэж бодсон бүгдийг сонгоорой)

1. Удам угсаагаа залгамжлах
2. Айл гэрийн амьдралд тус, дэм болдог
3. Хүүхэд аз жаргал, баяр цэнгэл авчирдаг
4. Гэр бүл тогтвортой болдог
5. Жам ёсны дагуу бүн хүн хүүхэдтэй болдог
6. Бусад \_\_\_\_\_

Доорхи асуултыг гэрлээгүй хүмүүс хариулаарай.

№31-1. Та гэрлэхийг хүсдэг үү? 【       】

1. Тийм

2. Үгүй

31-2. Хэрэв гэрлэхийг хүсдэг бол яагаад вэ?( зөв гэж бодсон бүгдийг сонгоорой)  
【       】

1. Сэтгэл тайван аж төрөх
2. Хүн бүхэн гэрлэдэг болохоор
3. Санхүүгийн тогтвортой байдал
4. Хүмүүсийн шахалтаар
5. Нийгмийн байр суурийн тогтвор байдал
6. Хүүхэдтэй болохыг хүсдэг
7. Тогтвортой бэлгийн харьцаа хүсдэг
8. Бусад \_\_\_\_\_

Доорхи асуултуудыг бүх хүмүүс хариулаарай. (№32~№35)

№32. Та гэр бүлийн тухай доорхи хүснэгтийг өөрийн бодлоор бөглөнө үү.

	Шууд зөвшөөрнө	Зөвшөө рнө	Зөвшөөрөх гүй	Огт зөвшөөрөхг үй	Мэдэхгү й
Эр нөхөр нь ахуйн ажлаа хариуцаж, эхнэр нь гэрийн ажлаа хариуцах ёстой					
Эрэгтэй хүн ч чадах чинээгээрээ гэрийн ажил хийх ёстой					
Гэр бүлийн дотор ч гэсэн хувь хүний нууцыг хүндэтгэх ёстой					
гэрлэх төлөвлөгөөгүй ч гэсэн хоёр хүн хамтдаа амьдарч болно					
Аав ээж нь хүүхдийнхээ төлөө өөрийгөө зориулах ёстой					
Баян ядуу хамаагүй гэр бүл бол миний амьдралын хамаг үнэт зүйл					
Удам угсаагаа залгамжлахын төлөө нэг ч гэсэн хүүтэй байх хэрэгтэй					
Гэрлээгүй эрэгтэй эмэгтэй хайр сэтгэлтэй бол бэлгийн харьцаанд орж болно					
Насаараа ганц бие амьдрах бол хүсээд байх амьдрал биш					
Гэрлэсний дараа гэр бүлийн төлөө өөрийн амьдралынхаа хагасыг зориулах нь зүй					

ёсны хэрэг					
Гэрлэсний дараа нөгөө этгээддээ дургүй байсан ч салж болохгүй					
Гэрлэсэн ч өөрийн амьдралын зорилттой байх ёстой					
Гэрлэсэн бол хүүхэд төрөх ёстой					
Гэрлээгүй ч хүүхэдтэй байж болно					
Эхнэр нь ажиллах явдал эр хүнд ичгүүр					

№33. Таны хувьд гэр бүлийн дотоод харилцаа хэр үнэ цэнэтэй бэ? (бүгд хариулах)

	Туйлын чухал	Өөр хүнийг бодвол чухал	Бусад хүнтэй адилхан	Тийм хүн байхгүй
Эхнэр нөхөр				
Хүүхэд				
Өөрийн аав ээж				
Хадам аав ээж				
Эгч дүү				
Хадам эгч дүү				
Авга нагац нар				
Өөрийн өвөө эмээ				
Хадам өвөө эмээ				
Ач				
Зээ				

№34. Дараах асуулт нь өнгөрсөн нэг жилийн хугацаан дахь таны гэр бүл болон ойр дотныхондоо тусалж дэмжсэн байдлыг үнэлэх зорилготой юм.

34-1. Хэрэв та гэрлэсэн бол доорхи асуултыг хариулаарай.

	Байнга	Заримдаа	Огт гүй	Боломжгүй
Та аав ээждээ санхүүгийн тал дээр хэр тусалсан вэ				
Та аав ээждээ гэрийн ажил, халамжаар хэр тусалсан вэ				

Таны аав ээж таньд санхүүгийн тал дээр хэр тусалсан вэ				
Таны аав ээж таньд гэрийн ажил болон хүүхэд харахад хэр тусалсан вэ				

34-2 . Хэрэв та гэрлэсэн хүүхэдтэй бол доорхи асуултыг хариулаарай.

	Байнга	Заримдаа	Огт гүй	Боломж гүй
Та хамгийн ойр амьдардаг хүүхэддээ санхүүгийн тал дээр хэр тусладаг вэ				
Та хамгийн ойр амьдардаг хүүхэддээ гэрийн ажил болон хүүхэд харахад хэр тусалсан вэ				
Таны хамгийн ойр амьдардаг хүүхэд таньд санхүүгийн тал дээр хэр тусласан вэ				
Таны хамгийн ойр амьдардаг хүүхэд таньд гэрийн ажил халамжаар хэр тусласан вэ				

№35. Гэр бүлийг та юу гэж боддог вэ? (зөв гэж бодсон бүгдийг сонгоорой.)

1. Гэр бүлийн гишүүдийн аз жаргалын ордон
2. Сэтгэл тайвшран амрах газар
3. Гэр бүлийн гишүүдийн хайр сэтгэлээ баталгаажуулах газар
4. Эр, эм хоёрын хайр сэтгэл дээр тогтдог газар
5. Аав, ээж хүүхэд хамтдаа амьдралын ухаанд суралцах газар
6. Хүүхэд төрүүлж өсгөн, сурган хүмүүжүүлэх газар
7. Удам угсаа залгамжлан, өвөг дээдсээс суралцах
8. Ахмадаа хүндлэн, асрах газар
9. Бусад \_\_\_\_\_
10. Мэдэхгүй

*Цаг гаргаж бидний бэлдсэн энэхүү асуулганд оролцсон таньд чин сэтгэлээсээ баярлалаа. Энэхүү судалгааны талаар санал хүсэлт байвал доорхи зайнд бичнэ үү. Хэрвээ та хүсвэл харилцах утас хаягаа үлдээнэ үү. Миний харилцах и мэйл хаяг: [urlag.m@gmail.com](mailto:urlag.m@gmail.com)*

---



---



---



---



---





- ⑤ 離婚
- ⑥ 死別
8. 初婚年齢をお教えてください。 \_\_\_\_\_歳
- 9-1 あなたは何人暮らしですか。 \_\_\_\_\_人
- 9-2 あなたは誰と一緒に暮らしていますか。
- ① 配偶者
- ② 未婚子ども ( \_\_\_\_\_人)
- ③ 結婚した子
- ④ 結婚した娘
- ⑤ 子どもの配偶者
- ⑥ 孫
- ⑦ 自分の父親
- ⑧ 自分の母親
- ⑨ 自分のお爺さん
- ⑩ 自分のおばあさん
- ⑪ 義父
- ⑫ 義母
- ⑬ 義理のお爺さん
- ⑭ 義理のおばあさん
- ⑮ 自分の兄弟
- ⑯ 義理の兄弟
- ⑰ その他\_\_\_\_\_

10-1 あなたの現在のご職業について尋ねています。複数ある方は、主な収入源となっている仕事をお答えください。

- ① 自営業
- ② 公務員
- ③ 会社社員
- ④ 牧民
- ⑤ 学生
- ⑥ 非政府組織
- ⑦ パートタイム
- ⑧ 退職
- ⑨ 無職
- ⑩ その他\_\_\_\_\_

10-2 あなたの配偶者の現在のご職業について尋ねています。複数ある方は、主な収入源となっている仕事をお答えください。

- ① 自営業
- ② 公務員
- ③ 会社社員
- ④ 牧民
- ⑤ 学生
- ⑥ 非政府組織
- ⑦ パートタイム
- ⑧ 退職
- ⑨ 無職
- ⑩ その他\_\_\_\_\_

11.あなたの生まれ育った家族は、どのような家族構成でしたか、以下の中から当てはまるものに○を付けてください。

- ① 両親（または片親）と子どもだけ
- ② 両親（または片親）と子どもと祖父母
- ③ 両親（または片親）と子どもと祖父母とおじさん、または、おばさん
- ④ その他\_\_\_\_\_

12.あなたには全部で何人のお子様がいらっしゃいますか、 \_\_\_\_\_人

13.あなたの理想的子ども数をお教えてください。 \_\_\_\_\_人

■次の7問は既婚の方へのみお尋ねします。





27. 家族にとって一番大事なのは何と思いますか

- ① 価値観が同じ
- ② 興味が同じ
- ③ 両親の意見
- ④ 愛情
- ⑤ お金を持つこと
- ⑥ 家系、
- ⑦ 生活の知恵を持つ
- ⑧ 学歴
- ⑨ その他

28. あなたの配偶者は、あなたの悩みを聞いてくれますか。

- ① よく聞きます
- ② 聞きます
- ③ あまり聞かない
- ④ 全然聞かない

29. あなたの配偶者は、あなたに悩みを打ち明けてくれますか。

- ① よく打ち明けます
- ② 打ち明けます
- ③ あまり打ち明けない
- ④ 全然打ち明けない

30. 人間はなぜ子どもを生んでいると思っている。

- ① 家系を続く
- ② 生活に役に立つ
- ③ 幸い、楽しいをもたらす
- ④ 家庭が安定する
- ⑤ 皆が生むから産む
- ⑥ その他

■ 下の問題は未婚の方のみお尋ねします

31-1 あなたは結婚を望みますか。

- ① はい
- ② いいえ

31-2 もし望んだら、結婚を望む理由を教えてください

- ① 精神的安定
- ② 皆が結婚するから
- ③ 経済的安定
- ④ 周りがうるさい
- ⑤ 社会的地位が安定する
- ⑥ 子どもがほしい
- ⑦ セックスのために
- ⑧ その他

32 あなたは、家族について述べられた以下の文章について、どうお考えですか。

	強く賛成します	賛成します	賛成しない	全く賛成しない	わからない
夫は仕事を担って、妻は家事を担うべきである。					
男性もできるだけ家事をするべきである。					
家族の中でも個人のプライバシーは尊重されるべきである。					
結婚するつもりがなくても、男女が同棲するのはかまわない。					

子供には自分の生活を犠牲にしても親としてできる限りのことをやるのが当然だ。					
豊かでも、貧しいでも自分の家族が一番大切な宝物である。					
家系を存続するためには、息子を少なくとも1人は持つべきと思う。					
結婚前の男女でも愛情があるなら性交渉を持っていい。					
生涯を独身で過ごすということは、望ましい生き方ではありません。					
結婚したら、家族のためには自分の生活を半分犠牲にするのは当然なことである。					
一旦結婚したら、相手に不満があっても離婚するべきではない。					
結婚しても自分だけの人生の目標を持つべきである。					
結婚したら子どもを持つべきである。					
結婚しなくても子どもを持ってもいい。					
妻が働くことは夫にとって恥ずかしいことである。					

33. あなたにとって家族との人間関係はどれくらい大切なものですか。以下はそれぞれについて当てはまるものを一つ選んでください。対象になる方が既になくなっているばあいも生前の関係でお答えください。

	非常に大切な関係	他人よりは大切	他人と変わらない	当てはまる人はいない
配偶者（妻や夫）				
子ども				
自分の親				
配偶者の親				
自分の兄弟姉妹				
配偶者の兄弟姉妹				
自分の親の兄弟姉妹（おじ、おば）				
配偶者の親の兄弟姉妹（おじ、おば）				
自分の祖父母				
配偶者の祖父母				
息子の子ども（孫）				
娘の子ども（孫）				

34. 次は過去の一年間の親子間の援助について窺っています。当てはまることを一つ選んでください。

34-1 もしあなたは既婚したら、下の質問項目から当てはまることをお選びください。

	頻繁に	時々	まったくない	当てはまる人はいない
過去の一年間にあなたはご自身の両親へ、経済的な支援をどの程度しましたか。				
過去の一年間にあなたはご自身の両親へ、家事と介護の支援をどの程度しましたか。				
過去の一年間にあなたの両親はあなたへ、経済面での支援をどの程度しましたか				
過去の一年間にあなたの両親はあなたへ、家事と育児の支援をどの程度しましたか。				

34-2 もしあなたは既婚の子どもがいれば、下の質問項目から当てはまることをお選びくだ

さい。

	頻繁に	時々	まった くない	当てはまる人 はいない
過去の一年間にあなたは最もよく接している子どもへ、経済的な支援をどの程度しましたか				
過去の一年間にあなたは最もよく接している子どもへ、家事と育児の援助をどの程度しましたか				
過去の一年間にあなたが最もよく接している子どもはあなたへ、経済的な支援をどの程度しましたか				
過去の一年間にあなたが最も接している子どもはあなたへ、家事や介護の支援をどの程度しましたか。				

◆あなたは家族の持つ意味を何であると思っていますか、いくつ選んでください（複数選択）

- ① 家族成員団欒の場
- ② 心の休息安らぎの場
- ③ 家族成員の愛情を深める場
- ④ 夫婦の愛情のもとに形成した場
- ⑤ 両親と子どもと一緒に生活知恵を学ぶ場
- ⑥ 子どもを生育、教育する場
- ⑦ 家系を継続、先輩から学ぶ場
- ⑧ 親を尊敬、世話をする場
- ⑨ その他\_\_\_\_\_
- ⑩ わからない

これで質問はおわりです。長い間、面倒な質問にお答えいただき、誠にありがとうございました。皆さんからいただいたお答えは、貴重な資料として活用させていただきます。

なお、この調査について、ご意見や感想などがあれば、以下に記入いただければ幸いです。[私の連絡アドレスは urlag.m@gmail.com](mailto:urlag.m@gmail.com) です。

---



---



---

### 添付資料3 聞き取り調査の質問項目の翻訳

#### I 2011年聞き取り調査

1. あなたはいつウランバートルに来ましたか。
2. 若い時に何をしていましたか。民主化で仕事に変化がありましたか。
3. あなたは父母、祖父母に家族について聞いたことがありました。
4. 自分の家族は子ども世代の家族と何が違いますか。
5. 社会主義時代にマルクス主義の影響はどのぐらいありましたか。それがご家族に影響しましたか。
6. ご結婚は自分たちで知り合いましたか、それとも紹介されましたか。
7. あなたは結婚した後どのぐらい休暇取れましたか。
8. 子ども手当はどのぐらいありましたか。
9. 社会主義時代に人工妊娠中絶をしたことがありますか。
10. 親族とよく連絡しますか。相互に援助をしますか。
11. 社会主義時代に近隣との関係はどうでしたか。今はどうですか。

#### II 2012年の聞き取り調査

1. お名前は何かですか。
2. 今年はいくつですか。
3. 出身地はどこですか。
4. 最終学歴は何かですか。
5. 妻の最終学歴は何かですか。
6. 集合住宅に住んでいますか、それともゲル地区に住めますか。
7. どのようなきっかけで結婚しましたか。
8. 前の時代の結婚は今の時代の結婚と違うところがありますか。
9. なぜこの人と結婚すると決めたか
10. 家族の中での役割分担はどうなっていますか。
11. 家事は妻がしますか、それともあなたがしますか。
12. 誰が家計の管理をしていますか。
13. 物事を誰が決めますか。
14. 子どもの教育は誰が主に担っていますか。
15. よく外食をしますか
16. ご家族で常に夕食を一緒に食べますか。
17. 家族でレジャー活動をよくしますか。
18. 家族でよく旅行に行きますか。
19. 夫婦でよく話し合いますか

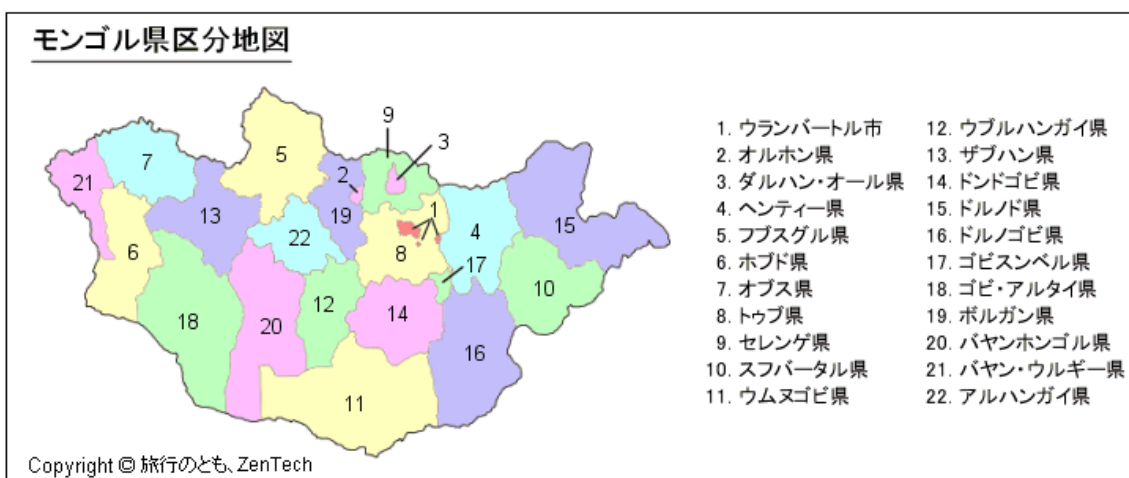


20. あなたの夫がよくあなたの悩みを聞きますか。
21. あなたも自分の悩みをよくいいますか。
22. 両親の家はどのくらい離れていますか。
23. よく両親の家にありますか。
24. 両親と同居したいですか。なぜですか。
25. 両親に経済的な援助をどのくらいしますか。
26. 親に経済的な支援をしますか。
27. 兄弟姉妹は何人いますか。
28. 兄弟姉妹とよく会いますか。
29. 兄弟姉妹の内、誰がかまどを継いでいますか。
30. 子どもが何人いますか。
31. 何人の子どもがいれば一番いいと思いますか。なぜですか。
32. 子どもは幼稚園に行きましたか。
33. 結婚した子どもがいますか。
34. あなたは結婚したお子さんに一緒に住んでほしいですか。
35. 結婚した子どもとどのくらい離れていますか。
36. 子どもと同居したらいいですか。それとも別居がいいですか。なぜですか。
37. 子どもに援助してもらいますか。
38. 親族たちと会います
39. 近隣との関係はどうですか。
40. 家族にとって最も大事なことはなんですか
41. 今の生活に満足していますか。
42. あなたは家族を何であると思いますか。
43. 社会主義時代と民主主義時代、家族生活に何が一番変わりましたか。
44. 社会主義時代に学校を卒業して、何をしていましたか。
45. 体制移行期は生活が大変でしたか。
46. 民主化後の生活は変わりましたか。
47. 現在の家族は社会主義時代の家族と違いますか。

### Ⅲ 2014年の聞き取り調査

1. 家族の中で、妻と夫の役割はなんですか。
2. 家事はだれがになっていますか。
3. 夫は公共領域、妻は家内領域という性別役割分業に支持しますか。

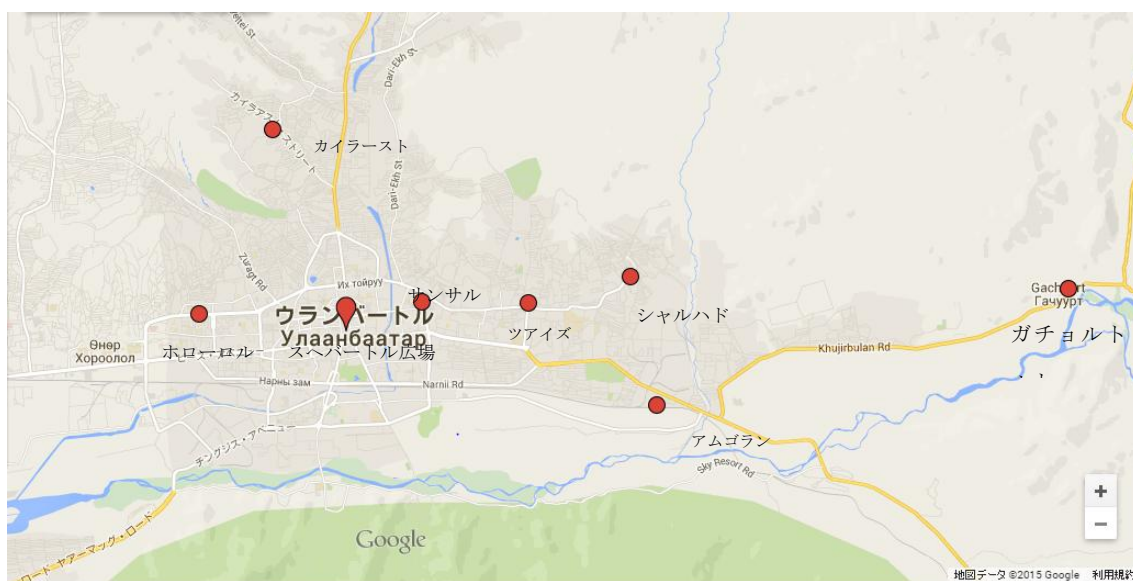
添付資料 4 地図



添付図 1 モンゴル行政区分地図

出所)

[http://www2m.biglobe.ne.jp/ZenTech/world/map/Mongolia/Provinces\\_Map\\_of\\_Mongolia.htm](http://www2m.biglobe.ne.jp/ZenTech/world/map/Mongolia/Provinces_Map_of_Mongolia.htm)。



添付図 2 ウランバートル市地図

出所) グーグル地図により筆者作成。

注 1) ○マークは本論文に出た地名である。

注 2) スヘバートル広場はウランバートルの中心である。

## 参考文献リスト

日本語文献：

アリエス・フィリップ著、杉山光信、杉山恵美子訳『<子ども>の誕生：アンシャン・レジーム期の子どもと家族生活』（原題:L'enfant Et La Vie Familiale Sous L'ancien Regime）みすず書房、2003年（1980年）。

ベック・ウルリヒ著、東廉、伊藤美登里訳『危険社会：新しい近代への道』（原題: Risikogesellschaft Auf Dem Weg In Eine Andere Moderne、1986）、法政大学出版局、1998年。

後藤富男『騎馬遊牧民』近藤出版社、1970年。

岩井紀子、保田時男編『データでみる東アジアの家族観：東アジア社会調査による日韓中台の比較』ナカニシヤ出版、2009年。

伊藤喜久蔵、辻通男『モンゴルの旅』潮新書、1970年。

カルピニ・ルブルク著、護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記：遊牧民族の実情の記録』光風社、1989年。

北村達『近代家族』（戦後家族社会学文献選集）、日本図書センター、2008年（大明堂、1955年）。

小長谷有紀『モンゴルの二十世紀—社会主義を生きた人びとの証言』中央公論新社、2004年。

小長谷有紀、後藤正憲編著『社会主義的近代化の経験—幸せの実現と疎外』明石書店、2011年。

目黒依子『個人化する家族』勁草書房、1987年。

森岡清美、望月嵩『新しい家族社会学』、培風館、1999年。

モンゴル科学アカデミー歴史研究所編、二木博史訳『モンゴル史（1）』恒文社、1988(a)年。

モンゴル科学アカデミー歴史研究所編、二木博史訳『モンゴル史（2）』恒文社、1988(b)年。

西川祐子『近代国家と家族モデル』吉川弘文館、2000年。

野々山久也、清水浩昭編著『家族社会学の分析視角—社会学的アプローチの応用と課題』ミネルヴァ書房、2001年。

野々山久也編『論点ハンドブック』、世界思想社、2009年。

オドントヤ・トゥルムシフ『社会主義社会の経験—モンゴル人女性たちの語りから』、東北大学出版会、2014年。

大島清『庫倫出張報告書』、東京外国大学図書館所蔵、1920年。

落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房、2000年。

- 落合恵美子『21世紀家族へ』有斐閣、2008年。
- 落合恵美子『近代家族の曲がり角』角川叢書、2000年。
- 落合恵美子、山根真理、宮坂靖子編『アジアの家族とジェンダー』勁草書房、2007年。
- 落合恵美子『21世紀家族へ』勁草書房、2008年。
- ロッサビ・モリス(Morris Rossabi)著、小長谷有紀訳『現代モンゴルー迷走するグローバル  
リゼーション』(原題: *Modern Mongolia: From Khans To Commissars To Capitalists*)、  
明石書店、2007年。
- 坂本是忠『モンゴルから中央アジアへ：ジンギスカンとチムールの後裔をたずねて』地  
人書館、1961年。
- 坂本是忠『モンゴルの政治と経済』アジア経済研究所、1969年。
- 千田有紀『日本型近代家族』勁草書房、2011年。
- 瀬地山 角『東アジアの家父長制——ジェンダーの比較社会学』勁草書房、1996年。
- ショーター・エドワード著、田中俊宏、岩橋誠一、見崎恵子、作道潤訳『近代家族の形  
成』(原題: *The Making Of The Modern Family*, Basic Books, 1975)、昭和堂、1987年。
- 島崎美代子、長沢孝司『モンゴルの家族とコミュニティ開発』日本経済評論社、1999年。
- 富永健一『近代化の理論』講談社、2003年。
- リャザノフスキー・ウェー著、青木富太郎訳『蒙古法の基本原理』ユーラシア叢書、1975  
年。
- ウラヂミルツォフ・ボレス・ヤコウレウィチ著、外務省調査部訳『蒙古社会制度史』(原  
題: *общественный строй монголов-монгольский кочевой феодализм*  
*obshchestvennyĭ stroĭ moigolov-mongol'skiĭ kochevoi feodalizm*)、原書房、1980年。
- 山田昌弘『近代家族のゆくえ：家族と愛情のパラドックス』、新曜社、1994a年。
- 山田昌弘『結婚の社会学—未婚化・晩婚化はつづくのか』、丸善ライブラリー、1996年。
- 山田昌弘『迷走する家族』有斐閣、2007年。
- ユムジャーギン・ツェデンバル著、新井進之訳『社会主義モンゴル発展の歴史』、1978  
年。
- バットオロシホ・ナフチャー「モンゴルにおけるアイデンティティ研究の現状と課題—  
モンゴル版自我同一性尺度の作成を通して」、『東京大学大学院教育学研究科紀要』  
第45巻、2005年、159~170。
- 鯉淵信一「モンゴル社会における家族関係の変容」『現代社会における家族の変容Ⅰ：東  
アジアを中心に』亜細亜大学アジア研究所、51~72、2003年。
- 鯉淵信一「モンゴルの社会主義下における伝統的家族の変容」『現代社会における家族の  
変容Ⅱ：東アジアを中心に』亜細亜大学アジア研究所、37~60、2005年。
- 鯉淵信一「現代モンゴルの家族関係とその諸問題」『現代社会における家族の変容Ⅲ：東  
アジアを中心に』亜細亜大学アジア研究所、5~30、2007年。

- 小長谷有紀「モンゴル遊牧民における伝統のグローバリゼーション」、『立命館言語文化研究』立命館大学国際言語文化研究所、16 (3)、19～26、2005年。
- 村井研治「ソ連の社会体制と家族」、『共産主義と国際政治』、日本国際問題研究所 1981年6月、14-35。
- 長沢孝司「モンゴル都市民の家族生活史」、『日本福祉大学研究紀要—現代と文化』、第102号、2000年、1～35。
- 鳴海邦碩「ウランバートル 遊牧から定住化へ—変わる都市周辺」、『家とまちなみ』、2011年、22～25。
- 西川祐子「近代国家と家族モデル」、『ユスティティア』第二号、ムネルヴァ書房、1991年、113～125。
- 落合恵美子「近代家族の曲がり角」、『日本研究』第12集、国際日本文化研究センター、1995年、89～100。
- 落合恵美子「個人化と家族主義—東アジア、ヨーロッパ、そして日本」、ウルリッヒ・ベック、鈴木宗徳、伊藤美登里編『リスク化する日本社会—ウルリッヒ・ベックとの対話』岩波書店、2011年、103～126。
- 斉穎賢「モンゴル社会における小家族と末子相続」『専修人間科学論集、社会学編』、2011年、107～117。
- 瀬地山角「東アジア家父長制」、『社会情報』、札幌学院大学社会情報学部、1996年、79～92。
- 山田昌弘「家族の個人化」『社会学評論』54 (4) 2004 (b) 年、341～354。  
「モンゴル人民共和国の新憲法 (下)」『アジア経済旬報』(476) 1961年、21～28。
- 「ゲルからアパートへ—文明開化のモンゴル」『朝日新聞』朝刊、1969年5月19日。  
「初めての社会主義国—深海流」『朝日新聞』夕刊、1989年9月27日。  
「首都は急速に近代化—変容するモンゴル (上)」『朝日新聞』朝刊、1962年8月8日。  
「モンゴル共和国にはいる 草原中の近代都市」『朝日新聞』朝刊、1962年7月12日。

## モンゴル語文献

- Ayosh.Ts,1979ond Omnogovi Aimagt Ajillasan Ugsaatnii Zuin Heeriin Sudalgaanii Tailan ,Eh Hereglegdehüün, *Mongol Ugsaatanii Züin Heeriin Sudalgaanii Eh Hereglegdehüün(1979-1981)[V]*. Ulaanbaatar.2011.
- Barkmann.B. Shiljiltiin Üyiin Mongol Ger Bül,*Ger Bül Setgüül*.Ulaanbaatar, 2008,39~57.
- BNMAU-yn *Uls Ardiin Aj Ahui 65jild*. Ulaanbaatar.1986.
- BNMAU-yn *Ger Büliin Huuli* .Ulaanbaatar,1973.
- BNMAU-yn ger büliin huulias (1973ond batlagdsan) .*Ger Büliin talaarhi huuli togtoomjiin*

- sistemchilsen emhetgel* .1980.
- BNMAU-yn Ger Büliin Huuliin Delgerengüi Tailbar*.Ulaanbaatar,1988.
- Bor, B. *Gerlelt Ger Büliin Tuhai Zaluuchudad Ügüülel Ni*. Ulaanbaatar, 1988.
- Bügd Nairamdah Mongol Ard Ulsiin Gerleh Ba Ger Büil Asramj Tetgemjiin Huuli*.Suhbaatar Neremjit Hevleh Uildver.1956.
- Dashdonrov.Ts.Hair Setgel Ger Büil.Ulaanbaatar.1976.
- Dondog, Ts. Ger Büil Soyol Irgenshil. Ulaanbaatar, 1977.
- G.Tserenhand. 1964ond Argangai Aimagiin Chuluut,Tariatsumdad Ajillasan Ugsaatan Zuiin Heeriin Sudalgaanii Tailan .Eh Hereglegdehuun ,Eh Hereglegdehuun, *Mongol Ugsaatanii Züin Heeriin Sudalgaanii Eh Hereglegdehüin(1960-1971)[I]*.Ulaanbaatar,2001.
- G.Tserenhand 1966ond Hovd Aimagiin Darvi,Manhan,Sumadad Ajillacan Ugsaatanii Züin Heeriin Sudalgaanii Tailan ,Eh Hereglegdehuun ,Eh Hereglegdehuun, *Mongol Ugsaatanii Züin Heeriin Sudalgaanii Eh Hereglegdehüin(1960-1971)[I]*,2001.
- Ger Büliin Talaarhi Huuli Togtoomjiin Sistemchilsen Emhetgel* .Ulaanbaatar,1980.
- Hün Am Oron Suutsiin 2010onii Ulsiin Toollogo – Orh Ger Büliin Baidal .Ulsiin Statistikiin Gazar*.2011.
- Mongol Ediin Zasag Niigem 1992 Ond : Statistician Emhetgel* .Ulaanbaatar ,1993.。
- Mongol Ulsiin Huuliud*. Ulaanbaatar 1999.
- Mongol Ulsiin Irgenii Huuli Togtoomj. (Tuuhen Emhetgel 1206-2012)*. Ulaanbaatar,2012.
- Mongol Ulsiin Shinjileh Uhaanii Akademi. *Mongol Ulsiin Tüüh( V)* .Ulaanbaatar,2004.
- Namjil. T. *Mongol ba züin hoit aaziin ger büil*. Ulaanbaatar,2000.
- Namjil. T.*mongol örkh ger büliin tüüh*. Ulaanbaatar.2007.
- Namjil. T.*Mongol ger büil –orchin üye*. Ulaanbaatar,2008.
- Namjil. T.*Mongol ger büil sudlalyn onol arga zui*.Ulaanbaatar,2009.
- Purevdorj.L. *BNMAU-yn Ger Büliin Harilchaan-Y Zarim Asuudal*.Ulaanbaatar.1981.
- Sotsialist Aj Toroh Yos Ba Ahui Soyol*.Ulaanbaatar,1980.
- Tunglag.D.*Ger Büliin Yos Surtguun*.Ulaanbaatar,2011.
- Tunglag.D.*Ger büliin yos surtahuuny ünlemj,öörchlölm,huvisal*.Ulaanbaatar,2010.
- Ulaanaa.G.*Sotsakist Aj Toroh Yos Ba Ahui Soyol*. Ulaanbaatar, 1980.

## インターネット利用

Bolovsroliin uilchilgee. ウランバートル市統計局ホームページ、

[http://ubstat.mn/Upload/Reports/bolovsroliin\\_uilchilgee\\_2012\\_ulaanbaatar\\_2013-09.pdf](http://ubstat.mn/Upload/Reports/bolovsroliin_uilchilgee_2012_ulaanbaatar_2013-09.pdf)、  
2015年7月1日アクセス。

エンクバヤル. Ts.(2010)「モンゴルにおけるコミュニティ主導のゲル地区向上過程の開発」

- 環日本海経済研究所ホームページ、参照先: erina:  
<https://www.erina.or.jp/jp/appear/opinion/index.htm>、2014年7月20日アクセス。  
「ゲル地区」に住む人々の生活改善を目指して」、国際連合人間居住計画ホームページ、  
<http://www.fukuoka.unhabitat.org/projects/voices/mongolia/detail01.html>、2015年7月  
1日アクセス。
- グーグルマップ、<https://www.google.co.jp/maps/place/ウランバートル/>。2014年4月29日ア  
クセス。
- グーグルマップ、  
<https://www.google.co.jp/maps/place/%E3%83%A2%E3%83%B3%E3%82%B4%E3%83%AB+%E3%82%A6%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%90%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%AB/@47.9059211,106.8400733,11z/data=!4m2!3m1!1s0x5d96925be2b18aab:0xe606927864a1847f>、2015年7月22日アクセス。
- Hün Amyn Nöhön Ürjihüin Erüül Mendiin Sudalgaa2003. Undesnii statistikiin horoo.モンゴル  
国家統計局ホームページ <http://web.nso.mn/nadamn/index.php/catalog/47>。2015年6月  
29日アクセス。
- Hun amiin too aimag ,niislel, bairshlaar (ony etsesiin hun amiin too)、モンゴル国統計局サービ  
スシステムホームページ、<http://www.1212.mn/statHtml/statHtml.do>、2015年7月23  
日アクセス。
- Hun amiin oron suutsnii khangamj、ウランバートル市統計局ホームページ、  
[ubstat.mn/Upload/Reports/niisllleliin\\_khun\\_amiin\\_oron\\_suutsnii\\_khangamj\\_2012\\_ulaanba  
atar\\_2013-04.pdf](http://ubstat.mn/Upload/Reports/niisllleliin_khun_amiin_oron_suutsnii_khangamj_2012_ulaanbaatar_2013-04.pdf)、2014年10月25日アクセス。
- Hun aminn amidarch bui orchin nukhtsul、  
[www.ubstat.mn/Upload/Reports/khun\\_amiin\\_amidarch\\_bui\\_orchin\\_nukhtsul\\_2014\\_ulaanba  
atar\\_2015-06.pdf](http://www.ubstat.mn/Upload/Reports/khun_amiin_amidarch_bui_orchin_nukhtsul_2014_ulaanbaatar_2015-06.pdf)、2015年7月2日アクセス。
- 石井徹弥、鈴木サヤカ (2011)「モンゴル国第三次初等教育施設整備計画」  
[「http://www2.jica.go.jp/ja/evaluation/pdf/2011\\_0704200\\_4\\_f.pdf](http://www2.jica.go.jp/ja/evaluation/pdf/2011_0704200_4_f.pdf)、2015年7月7日ア  
クセス。
- 「家族観についての意識調査」  
[http://srdq.hus.osaka-u.ac.jp/metadata.cgi?sid=18&lang=jp&page=q\\_list&number\\_per\\_on  
ce=20&start=41](http://srdq.hus.osaka-u.ac.jp/metadata.cgi?sid=18&lang=jp&page=q_list&number_per_once=20&start=41)、2015年7月7日アクセス。
- 国際労働機関 Internet Labor Office のホームページ、laborsta internet. <http://laborsta.ilo.org>、  
2013年12月5日アクセス。
- 国連開発計画 UNDP labour force participation rate(female-male ratio).  
<http://hdr.undp.org/en/content/labour-force-participation-rate-female-male-ratio>。 2014年9月  
6日アクセス。
- 「国別ジェンダー情報整備調査モンゴル国報告書 2003」独立法人国際協力機構  
<http://gwwweb.jica.go.jp/km/FSubject1501.nsf/cfe2928f2c56e150492571c7002a982c/74875>

bed7d20467349257b010026a259/\$FILE/ATTLTRH.pdf/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E%E7%89%88%202013.pdf、2014年12月2日アクセス。

Mongol ulsyn töröös hün amiin högjiliin talaar barimtlah bodolgo2004 .erh züiin medeeleliin nigdsen sistem. <http://www.legalinfo.mn/annex/details/3160?lawid=6278>. 2015年6月29日アクセス。

Mongol Ulsiin Ger Büliin Tuhai Huuli1999.6.モンゴル国法律サービスサイト、<http://www.legalinfo.mn/law/shouprint/226>、2014年4月20日アクセス。

Mongol ulsyn töröös hün amiin högjiliin talaar barimtlah bodolgo2014、モンゴル国大ホラルホームページ [www.parliament.mn/laws/projects/453](http://www.parliament.mn/laws/projects/453) .2015年5月8日アクセス。

Mongol Ulsiin Huuli Ger Buliin Tuhai Huuli 1999.6.11.[www.legalinfo.mn/law/showPrint/226](http://www.legalinfo.mn/law/showPrint/226)、(2014年4月20日アクセス)

モンゴル教育文化科学省ホームページ、

<http://www.meds.gov.mn/%D0%9D%D0%B8%D0%B9%D1%81%D0%BB%D1%8D%D0%BB%D0%B8%D0%B9%D0%BD%20%D1%85%D1%8D%D0%BC%D0%B6%D1%8D%D1%8D%D0%BD%D0%B4%20%D1%82%D3%A9%D1%80%D0%B8%D0%B9%D0%BD%20%D3%A9%D0%BC%D1%87%D0%B8%D0%B9%D0%BD%20%D1%86%D1%8D%D1%86%D1%8D%D1%80%D0%BB%D1%8D%D0%B3%D1%82%2050825%20%D1%85%D2%AF%D2%AF%D1%85%D1%8D%D0%B4%20%D1%85%D0%B0%D0%BC%D1%80%D0%B0%D0%B3%D0%B4%D0%B0%D0%BD%D0%B0>、2015年7月1日アクセス。

「モンゴル政務週間動向(2009.11.23-11.29)」) 在モンゴル日本大使館ホームページ

<http://www.mn.emb-japan.go.jp/news/jpc236.html>、2014年12月27日アクセス。

「モンゴル政務週間動向(2009.11.23-11.29)」) 在モンゴル日本大使館ホームページ。

<http://www.mn.emb-japan.go.jp/news/jpc236.html>、2014年12月27日アクセス。

Neupert.RF. “Fertility decline in Mongolia: trends, policies and explanations”. *International Family Planning Perspective*. Mar.1994:20(1):18-22.JSTOR ホームページ

<http://www.jstor.org/discover/2133333?sid=21105592390273&uid=70&uid=3738328&uid=363756311&uid=363339261&uid=2134&uid=2&uid=3&uid=67&uid=363339241&uid=62>、2015年1月9日アクセス。

日本貿易振興機構アジア経済研究所ホームページアジア動向データベース「2006年モンゴル」、<http://d-arch.ide.go.jp/browse/html/2006/103/2006103DIA.html> (2014年12月27日)

日本の将来推計人口、日本国立社会保障・人口問題研究所ホームページ

[http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/suikei07/P\\_HP\\_H1812\\_A/2-1-1.html](http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/suikei07/P_HP_H1812_A/2-1-1.html)、2015年7月16日。

日本国外務省ホームページ、モンゴル基礎データ

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/data/html>、2014年9月3日アクセス。



日本国外務省ホームページ、諸外国・地域の学校状況

[http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world\\_school/01asia/sch1200000104.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/01asia/sch1200000104.html)、2015年7月1日アクセス。

日本国厚生労働省ホームページ統計月報白書人口動態調査、

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai11/sankou01.html>、2015年1月20日アクセス。

日本国総務省統計局ホームページ <http://www.stat.go.jp/data/sekai/0116.htm>、2015年2月10日アクセス。

Niisleliin Hun Am Oron Suutsnii Khangamj

2012 .[http://ubstat.mn/Upload/Reports/niisleliin\\_khun\\_amiin\\_oron\\_suutsnii\\_khangamj\\_2012\\_ulaanbaatar\\_2013-04.pdf](http://ubstat.mn/Upload/Reports/niisleliin_khun_amiin_oron_suutsnii_khangamj_2012_ulaanbaatar_2013-04.pdf) hun amiin amidach bui orchin nuhtsol .2015年6月29日アクセス。

「世界の学校をみてみよう」(2014)、外務省ホームページ、

[http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/mongolia\\_2014.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/mongolia_2014.html)、2015年7月7日アクセス。

世界銀行公式ホームページ国別データ . [data.worldbank.org/country/mongolia](http://data.worldbank.org/country/mongolia).

ウランバートル市統計局ホームページ

[http://ubstat.mn/Upload/Reports/bolovsroliin\\_uilchilgee\\_2012\\_ulaanbaatar\\_2013-09.pdf](http://ubstat.mn/Upload/Reports/bolovsroliin_uilchilgee_2012_ulaanbaatar_2013-09.pdf), 2015年7月1日アクセス。

ウェブサイト谷中自然史博物館、<http://nozawa.site.ne.jp/mongol/gel/kumitate/kumi.html>、2014年7月19日アクセス。

ワールドバンクホームの統計データに基づいて筆者が作成したものである。

<http://jp.knoema.com/WBWDIGDF2014Sep/world-development-indicators-wdi-september-2014>。2014年1月10日アクセス。

「ウランバートル市上下水セクター開発計画策定調査」(2014)、日本国国際協力機構ホームページ、

<http://gwweb.jica.go.jp/km/ProjectView.nsf/VIEWALL/EC1ACC4D3D584BB0492579A00079EC7C?OpenDocument>、2015年7月1日アクセス。

Ulsiin deed shuuhiin togtool BNMAU-in ger buliin huuli zarim zaaltig shuuh taslah ajillagaand heregleh tuhai 1973oni 12dugaar sariin 29nii odor,

<http://www.legalinfo.mn/law/showPrint/142>。(2014年4月9日にアクセス)。

Ulsiin Deed Shuuhiin Togtool BNMAU-In Ger Buliin Huuli Zarim Zaaltig Shuuh Taslah Ajillagaand Heregleh Tuhai 1973oni 12dugaar Sariin 29nii Odor, <http://www.legalinfo.mn/law/showPrint/142>、2014年4月9日にアクセス。

[http://www.2m.biglobe.ne.jp/ZenTech/world/map/Mongolia/Provinces\\_Map\\_of\\_Mongolia.htm](http://www.2m.biglobe.ne.jp/ZenTech/world/map/Mongolia/Provinces_Map_of_Mongolia.htm)、2015年7月22日アクセス。

在モンゴル日本国大使館、「最近のモンゴル経済 2011年8月」、

<http://www.mn.emb-japan.go.jp/news/EconomyofMongolia2011Aug.pdf>、2015年5月7日アクセス。